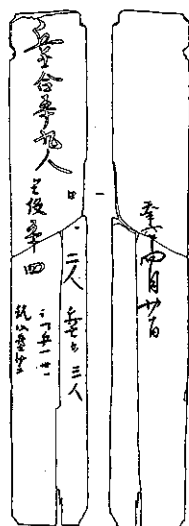


大宰府政庁周辺官衙跡Ⅲ

— 不丁地区 遺構編 —



2012

九州歴史資料館

大宰府政庁周辺官衙跡Ⅲ

— 不丁地区 遺構編 —

2012

九州歴史資料館



大宰府政庁周辺官衙跡 不丁地区調査遠景 (84次 南から)



(1) 不丁地区84次調査区 (北東から)



(2) 不丁地区85次調査区 (東から)



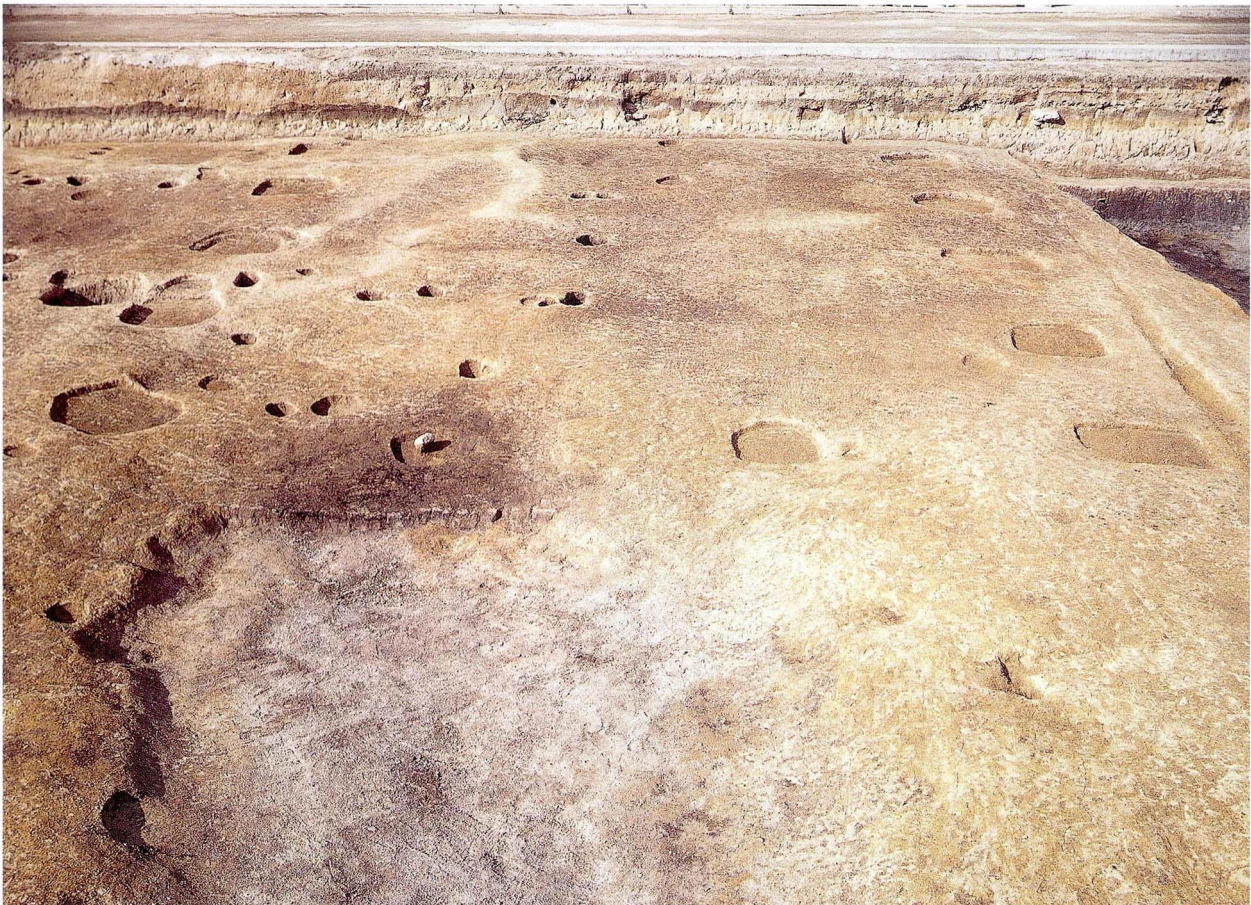
(1) 礎石建物S B 370 (17次 北から)



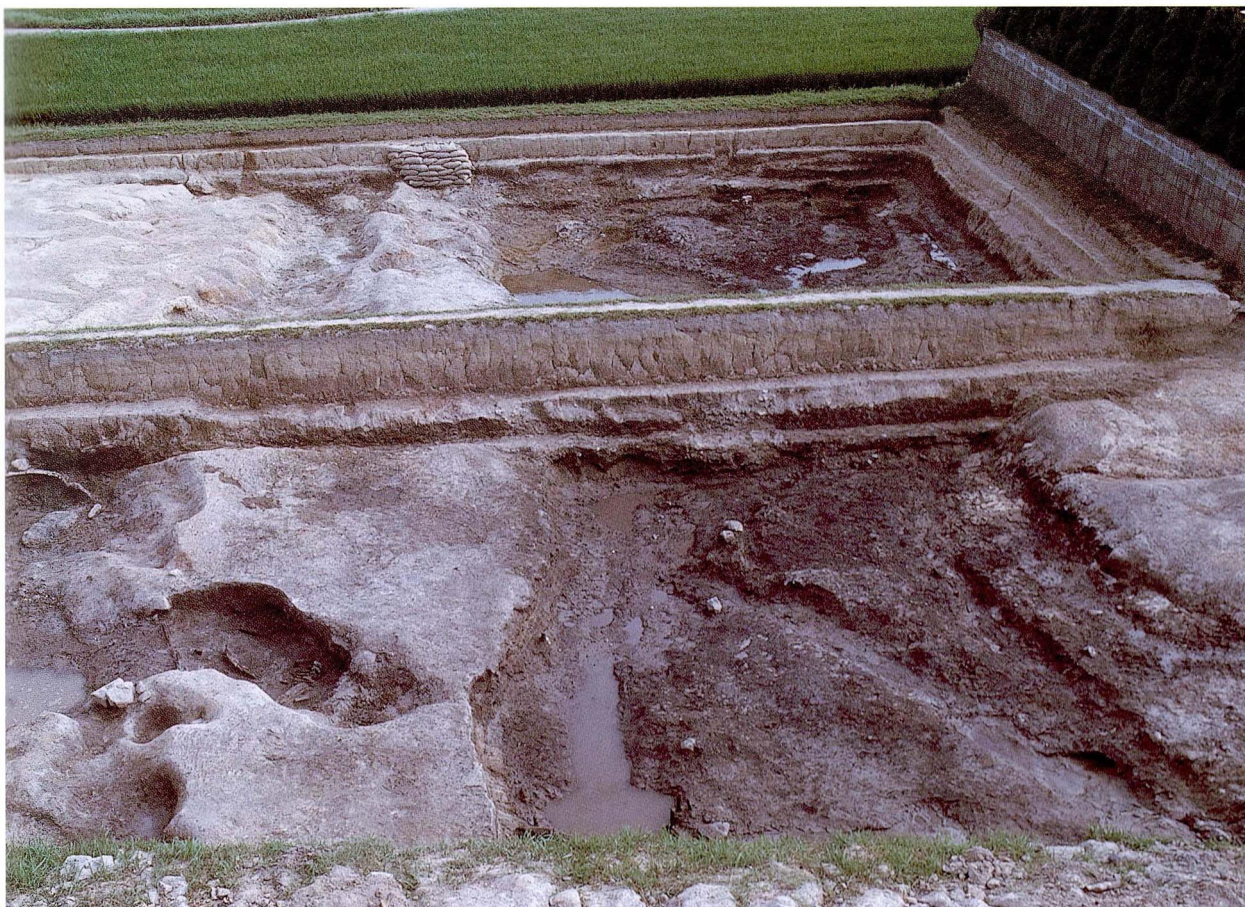
(2) 掘立柱建物S B 2365 (83次 西から)



(1) 掘立柱建物S B2380 (84次 西から)



(2) 掘立柱建物S B2900 (98次 南から)



(1) 溝SD320 (76次 北から)



(2) 溝SD2340 (85次 南西から)



(1) 石組溝 S D2335
(83次 南から)



(2) 溝 S D2340, 流路 S X2480
(98次 東から)

序

当館では、平成14年3月に、大宰府政庁跡の正式報告書を刊行して以来、観世音寺・水城跡と、大宰府史跡の発掘調査の正式報告書を刊行し、昨年度は、『大宰府政庁周辺官衙跡II』として、日吉地区の報告書を発刊いたしましたが、今年度はその続編として、不丁地区の報告書（遺構編）を刊行する運びとなりました。

不丁地区は、政庁周辺官衙跡の中でも政庁正面広場の西側に位置し、発掘調査の結果、8～9世紀代を中心とする大型掘立柱建物群が検出されています。政庁正面広場東側の日吉地区等と共に、政庁周辺の主要官衙群の一つを構成していたと見られ、大宰府の主要な官司が置かれていたと推測される重要な地点と考えられます。本書の発刊により、当該地区の歴史的重要性が、地域住民や研究者に対して、さらに広く知っていただくこととなれば、望外の喜びでございます。

さて、当館は去る平成23年11月21日、筑後小郡の地にリニューアルオープンし、1周年を無事に迎えました。開館1周年記念特別展の意味を込めて、「発掘された日本列島2011」の速報展と、同じく記念企画展「北部九州の霊山と経塚」を開催し、新たな地での着実な歩みを続けることができました。長く慣れ親しんだ大宰府の地を離れましたが、久留米市との共催による企画展「筑後国府展」のテーマにもありますように、調査研究の軸足は大宰府に置きつつも、九州西海道というさらに広い視野を持って、新たに邁進していく所存でございます。

最後になりましたが、大宰府政庁周辺官衙跡の発掘調査に際しましては、日頃より大宰府史跡調査研究指導委員会をはじめ、文化庁・大宰府市教育委員会や地元の関係者各位から、多大の御指導と御協力をいただいております。ここに記して、深く感謝申し上げます。

さらに今後とも、大宰府史跡の保存・整備活用に関しましては、関係者の皆さまと連携を密に計りながら万全を期したいと存じております。

平成24年3月31日

九州歴史資料館長 西谷 正

例 言

- 1 本書は、昭和46年度（1971）から福岡県が国庫補助を受け、福岡県教育委員会及び九州歴史資料館が発掘調査を実施した、大宰府政庁周辺官衙跡・不丁地区遺構編の正式報告書であり、大宰府政庁周辺官衙跡発掘調査報告書の第3集にあたる。
- 2 本書には、大宰府政庁周辺官衙跡の解明及び整備にかかる資料を得ることを目的として発掘調査を実施した大宰府史跡第14次・17次・76次・83次・84次・85次・87次・90次・98次・104次・110次・124次・129次・147次・187次・192次調査の成果を掲載した。
- 3 発掘調査は、大宰府史跡調査研究指導委員会の指導と承認のもとに実施した。検出遺構及び出土遺物については、各指導委員の御指導と御教示を得た。
- 4 本書掲載の遺構実測図は、各次調査担当者もしくは補助員が実測したものである。
- 5 本書掲載の写真は、当館元参事石丸洋及び各次調査担当者が撮影したものである。
- 6 出土遺物の整理・復元は、調査概要報告時の調査員及び補助員、並びにⅠ章の調査組織の中に記した人員で行っており、次年度に遺物編として報告する予定である。
- 7 図面の浄書は、小田和利・杉原敏之・下原幸裕・小嶋篤・高田いく子が行った。
- 8 目次と要旨の英訳は、西谷彰氏にお願いした。
- 9 本書の執筆分担は、以下のとおりである。

第Ⅰ章	小田
第Ⅱ章（1）	下原・小嶋
（2）	杉原
第Ⅲ章（1）・（2）	小田
（3）・（4）・（6）	杉原
（5）	下原
第Ⅳ章	小田
- 10 本書の編集は、杉原が行った。

目 次

	頁
第I章 緒 言	1
(1) 特別史跡大宰府跡	1
(2) 調査の経過	2
(3) 調査組織	5
第II章 調査の概要	9
(1) 調査の概要	9
(2) 基本層序	19
第III章 検出遺構	25
(1) 建 物	25
(2) 柵	66
(3) 溝	72
(4) 井 戸	93
(5) 土 坑	97
(6) その他の遺構	111
1) 礫敷遺構	111
2) 暗 渠	113
3) 護岸遺構	116
4) 筏状遺構	116
5) 鑄造関連遺構	117
6) 瓦組遺構	117
7) 瓦敷遺構	117
8) 土壇状遺構	118
9) 粘土採掘遺構	118
10) 流路・溜まり・落ち込み	125
11) ピット・その他	129
第IV章 総 括	130
英文目次・要旨	133

Fig. 目次

	頁
Fig. 1 大宰府政庁周辺官衙跡調査地一覽図 (1/6,000)	2
Fig. 2 大宰府史跡地域小字図 (1/7,500)	8
Fig. 3 大宰府政庁跡及び周辺官衙跡検出遺構配置図 (1/3,000)	折込
Fig. 4 大宰府政庁跡及び周辺官衙跡地区割図 (1/7,500)	9
Fig. 5 不丁地区調査地配置図 (1/1,500)	10
Fig. 6 第14次調査区 (1/600)	10
Fig. 7 第17次調査区 (1/600)	11
Fig. 8 第76次調査区 (1/600)	11
Fig. 9 第83・84次調査区 (1/600)	12
Fig.10 第85・192次調査区 (1/600)	13
Fig.11 第87・90次調査区 (1/600)	14
Fig.12 第98次調査区 (1/600)	15
Fig.13 第104次調査区 (1/600)	15
Fig.14 第110次調査区 (1/600)	16
Fig.15 第124次調査区 (1/600)	16
Fig.16 第129次調査区 (1/600)	17
Fig.17 第147次調査区 (1/600)	17
Fig.18 第187次調査区 (1/600)	18
Fig.19 不丁地区基本土層図作成箇所 (1/1,500)	19
Fig.20 不丁地区 (17・83次) 基本土層図 (1) (1/60)	20
Fig.21 不丁地区 (84・85次) 基本土層図 (2) (1/60)	22
Fig.22 不丁地区 (98次) 基本土層図 (3) (1/60)	23
Fig.23 不丁地区建物・柵配置図 (1/1,000)	24
Fig.24 礎石建物 S B 370実測図 (1/120)	26
Fig.25 掘立柱建物 S B 381・386実測図 (1/80)	27
Fig.26 掘立柱建物 S B 2005・2018実測図 (1/80)	28
Fig.27 掘立柱建物 S B 2355実測図 (1/120)	29
Fig.28 掘立柱建物 S B 2360・2366実測図 (1/80)	31
Fig.29 掘立柱建物 S B 2365実測図 (1/80)	32
Fig.30 掘立柱建物 S B 2370実測図 (1/80)	33
Fig.31 掘立柱建物 S B 2380A B実測図 (1/80)	34
Fig.32 掘立柱建物 S B 2383・2385・2388実測図 (1/80)	36
Fig.33 掘立柱建物 S B 2390・2405実測図 (1/80)	37
Fig.34 掘立柱建物 S B 2395・2400実測図 (1/80)	38
Fig.35 掘立柱建物 S B 2410・2415実測図 (1/80)	40

Fig.36	掘立柱建物 S B2420実測図 (1/80)	41
Fig.37	掘立柱建物 S B2425・2430実測図 (1/80)	42
Fig.38	掘立柱建物 S B2435, 柵 S A4034・4053実測図 (1/80)	44
Fig.39	掘立柱建物 S B2445実測図 (1/80)	45
Fig.40	掘立柱建物 S B2460 A B実測図 (1/80)	46
Fig.41	掘立柱建物 S B2461・2486・2880, 柵 S A2895実測図 (1/80)	47
Fig.42	掘立柱建物 S B2515実測図 (1/80)	48
Fig.43	掘立柱建物 S B2520, 柵 S A2522実測図 (1/80)	49
Fig.44	掘立柱建物 S B2525・2530, 柵 S A2513実測図 (1/120)	50
Fig.45	掘立柱建物 S B2535 A B・2540実測図 (1/80)	52
Fig.46	掘立柱建物 S B2855・2902実測図 (1/80)	53
Fig.47	掘立柱建物 S B2900実測図 (1/80)	54
Fig.48	掘立柱建物 S B3815実測図 (1/80)	55
Fig.49	掘立柱建物 S B3820・3822・3824実測図 (1/80)	56
Fig.50	掘立柱建物 S B3828・3832, 柵 S A3816実測図 (1/80)	57
Fig.51	掘立柱建物 S B4030・4040・4070実測図 (1/80)	59
Fig.52	掘立柱建物 S B4035 A B実測図 (1/80)	60
Fig.53	掘立柱建物 S B4046・4047・4048実測図 (1/80)	61
Fig.54	掘立柱建物 S B4560, 柵 S A4578実測図 (1/80)	62
Fig.55	掘立柱建物 S B4561・4563実測図 (1/80)	63
Fig.56	掘立柱建物 S B4562・4564・4575実測図 (1/80)	64
Fig.57	掘立柱建物 S B4577実測図 (1/80)	65
Fig.58	柵 S A318・2505実測図 (1/80)	66
Fig.59	柵 S A2354・2367・2894実測図 (1/80)	67
Fig.60	柵 S A2381・2382・2384・2386・2408・2444実測図 (1/80)	68
Fig.61	掘立柱建物 S B2450, 柵 SA2451・2452・4036 (1/120)	70
Fig.62	不丁地区溝配置図 (1/1,000)	72
Fig.63	南北溝 S D320 (14次) 土層図 (1) (1/60)	74
Fig.64	南北溝 S D320 (76次) 土層図 (2) (1/60)	75
Fig.65	南北溝 S D2340 (84・85・87・90・124次) 土層図 (1/60)	77
Fig.66	南北溝 S D2340・2485実測図 (1/60)	78
Fig.67	石組溝 S D2335 (83次) 実測図 (1/60)	79
Fig.68	石組溝 S D2335 (87次) 実測図 (1/60)	80
Fig.69	東西溝 S D2015・2469・2470土層図 (1/60)	81
Fig.70	東西溝 S D4570, 南北溝4071・4072実測図 (1/60)	82
Fig.71	東西溝 S D4570土層図 (1/60)	83
Fig.72	区画溝 S D2350・4037土層図 (1/60)	84
Fig.73	区画溝 S D2389・2391～2393・2396～2399・2401～2403実測図 (1/200)	86

Fig.74	区画溝S D4566・4569土層図 (1/60)	87
Fig.75	その他の溝S D2419・4610・4611土層図 (1/60)	88
Fig.76	不丁地区井戸・土坑・その他の遺構配置図 (1/1,000)	92
Fig.77	井戸実測図(1) (1/40)	94
Fig.78	井戸実測図(2) (1/40)	95
Fig.79	井戸実測図(3) (1/40)	96
Fig.80	土坑実測図(1) (1/40・1/60)	98
Fig.81	土坑実測図(2) (1/80)	99
Fig.82	土坑実測図(3) (1/40・1/60)	100
Fig.83	土坑実測図(4) (1/60・1/80)	102
Fig.84	土坑実測図(5) (1/40・1/60)	103
Fig.85	土坑実測図(6) (1/40・1/60)	105
Fig.86	土坑実測図(7) (1/60・1/80)	107
Fig.87	土坑実測図(8) (1/60・1/80)	108
Fig.88	土坑実測図(9) (1/60)	109
Fig.89	礫敷遺構S X4045実測図(1) (1/80)	111
Fig.90	礫敷遺構S X4045実測図(2) (1/80)	112
Fig.91	暗渠S X2345実測図 (1/40)	113
Fig.92	暗渠S X4055実測図 (1/40)	114
Fig.93	護岸遺構S X328, 筏状遺構S X2014実測図 (1/40)	115
Fig.94	保土穴S X2421～2423実測図 (1/40)	116
Fig.95	瓦組遺構S X2501実測図 (1/40)	117
Fig.96	瓦敷遺構S X2523実測図 (1/60)	118
Fig.97	粘土採掘遺構SX2339・2342実測図 (1/80)	119
Fig.98	粘土採掘遺構SX2347・2348実測図 (1/80)	120
Fig.99	粘土採掘遺構SX2351・2437実測図 (1/80)	121
Fig.100	粘土採掘遺構SX2438・2439実測図 (1/80)	122
Fig.101	粘土採掘遺構SX2514・2516・2517実測図 (1/80)	123
Fig.102	粘土採掘遺構SX2531実測図 (1/80)	124
Fig.103	自然流路S X2480・4050土層図 (1/60)	126
Fig.104	溜まりS X3830・落ち込みS X3833実測図 (1/60)	128
Fig.105	落ち込みS X4565実測図 (1/80)	129

付 図 目 次

付 図 不丁地区遺構配置図 (1/400)

Tab. 目 次

	頁
Tab. 1 不丁地区調査次数一覧	4
Tab. 2 大宰府史跡調査研究指導委員会委員一覧	5

PL. 目 次

巻頭PL. 1	大宰府政庁周辺官衙跡 不丁地区調査遠景 (84次 南から)
巻頭PL. 2 (1)	不丁地区84次調査区 (北東から)
	(2) 不丁地区85次調査区 (東から)
巻頭PL. 3 (1)	礎石建物S B370 (17次 北から)
	(2) 掘立柱建物S B2365 (83次 西から)
巻頭PL. 4 (1)	掘立柱建物S B2380 (84次 西から)
	(2) 掘立柱建物S B2900 (98次 南から)
巻頭PL. 5 (1)	溝S D320 (76次 北から)
	(2) 溝S D2340 (85次 南西から)
巻頭PL. 6 (1)	石組溝S D2335 (83次 南から)
	(2) 溝S D2340, 流路S X2480 (98次 東から)
PL. 1	大宰府政庁と不丁地区官衙 (昭和40年頃)
PL. 2	(1) 政庁周辺官衙跡 不丁地区遠景 (昭和40年頃 北から)
	(2) 政庁周辺官衙跡 不丁地区遠景 (昭和40年頃 西から)
PL. 3	(1) 政庁周辺官衙跡 不丁地区調査遠景 (84次 南から)
	(2) 政庁周辺官衙跡 不丁地区調査遠景 (147次 西から)
PL. 4	(1) 14次調査区全景 (東から)
	(2) 14次補足調査区全景 (東から)
PL. 5	(1) 17次調査区全景 (東から)
	(2) 76次調査区全景 (東から)
PL. 6	(1) 83次調査区全景 (西から)
	(2) 84次調査区全景 (東から)
PL. 7	(1) 85次調査区全景 (南から)
	(2) 87次調査区全景 (東から)
PL. 8	(1) 90次調査区全景 (南から)
	(2) 98次調査区全景 (東から)
PL. 9	(1) 104次調査区全景 (東から)
	(2) 110次調査区全景 (東から)
PL.10	(1) 124次調査区全景 (東から)
	(2) 129次調査区全景 (西から)
PL.11	(1) 147次調査区全景 (北から)
	(2) 147-2次調査区全景 (東から)

- PL.12 (1) 187次調査区全景 (西から)
(2) 192次調査区全景 (東から)
- PL.13 (1) 礎石建物S B370 (北から)
(2) 掘立柱建物S B2355, 溝S D2350 (東から)
(3) 掘立柱建物S B2360・2365, 溝S D2350・2359 (西から)
- PL.14 (1) 掘立柱建物S B2365 (南から)
(2) 掘立柱建物S B2365 (東から)
(3) 掘立柱建物S B2370 (東から)
- PL.15 (1) 掘立柱建物S B2380・2390, 柵S A2386, 溝S D2391・2403 (南から)
(2) 掘立柱建物S B2395・2400・2405・2410・2415・2420他,
溝S D2419 (南から)
- PL.16 (1) 掘立柱建物S B2380, 溝S D2398・2399・2401 (西から)
(2) 掘立柱建物S B2390 (南から)
(3) 掘立柱建物S B2395・2400他 (東から)
- PL.17 (1) 掘立柱建物S B2400 (北から)
(2) 掘立柱建物S B2405・2401 (東から)
(3) 掘立柱建物S B2410・2420・2425 (北から)
- PL.18 (1) 掘立柱建物S B2415 (東から)
(2) 掘立柱建物S B2430 (北から)
(3) 掘立柱建物S B2460・2486 (南から)
- PL.19 (1) 掘立柱建物S B2460・2486, 落ち込みS X2477 (東から)
(2) 掘立柱建物S B2515・2520, 柵S A2522 (西から)
(3) 掘立柱建物S B2520 (東から)
- PL.20 (1) 掘立柱建物S B2525・2530南半 (北から)
(2) 掘立柱建物S B2525・2530南半 (東から)
(3) 掘立柱建物S B2525・2530 (東から)
- PL.21 (1) 掘立柱建物S B2525・2530 (東から)
(2) 掘立柱建物S B2535 (南から)
(3) 掘立柱建物S B2540 (南から)
- PL.22 (1) 掘立柱建物S B2885 (南から)
(2) 掘立柱建物S B2900, 流路S X2480 (南から)
(3) 掘立柱建物S B3815 (北から)
- PL.23 (1) 掘立柱建物S B3815・3820 (北から)
(2) 掘立柱建物S B3820 (西から)
(3) 掘立柱建物S B3832・2005 (南から)
- PL.24 (1) 掘立柱建物S B4030・2435 (北から)
(2) 掘立柱建物S B4030・4070 (西から)
(3) 掘立柱建物S B4030・2435, 柵S A4036 (西から)

- PL.25 (1) 掘立柱建物 S B 4035 (西から)
(2) 掘立柱建物 S B 4040 (東から)
(3) 掘立柱建物 S B 4035・4048 (西から)
- PL.26 (1) 掘立柱建物 S B 4560～4564, 溝 S D 4570～4572 (南から)
(2) 掘立柱建物 S B 4560・4563 (西から)
(3) 掘立柱建物 S B 4563 (南から)
- PL.27 (1) 柵 S A 2382 (東から)
(2) 柵 S A 2408 (南から)
(3) 柵 S A 2429 (北から)
- PL.28 (1) 礎石建物 S B 370 礎石・根石
(2) 掘立柱建物 S B 2005 柱掘方
(3) 掘立柱建物 S B 2355 柱掘方 (左)・2370 柱掘方 (右)
(4) 掘立柱建物 S B 2365 柱掘方
- PL.29 (1) 掘立柱建物 S B 2380 柱掘方
(2) 掘立柱建物 S B 2460 柱掘方
(3) 掘立柱建物 S B 2415 柱掘方
(4) 掘立柱建物 S B 2415 柱掘方
- PL.30 (1) 掘立柱建物 S B 2420 柱掘方 (左)・2425 柱掘方 (右)
(2) 掘立柱建物 S B 2900 柱掘方
(3) 掘立柱建物 S B 3815 柱掘方
(4) 掘立柱建物 S B 4030 柱掘方
- PL.31 (1) 掘立柱建物 S B 4560 柱掘方 (左)・4562 柱掘方 (右)
(2) 掘立柱建物 S B 4561 柱掘方 (左)・4563 柱掘方 (右)
(3) 柵 S A 2382 柱掘方
(4) 柵 S A 2985 柱掘方 (左)・4036 柱掘方 (右)
- PL.32 (1) 溝 S D 320 (14次 南から)
(2) 溝 S D 320 土層 (14次 北から)
- PL.33 (1) 溝 S D 320・2010・2015 (76次 東から)
(2) 溝 S D 320・2010 (76次 北から)
- PL.34 (1) 溝 S D 2340 (90次 南から)
(2) 溝 S D 2340 (98次 北から)
- PL.35 (1) 溝 S D 2340 (90次 東から)
(2) 溝 S D 2340 (85次 南から)
(3) 溝 S D 2340・2485 (南から)
- PL.36 (1) 溝 S D 2340 土層 (90次 南から)
(2) 溝 S D 2340 土層 (98次 北から)
(3) 溝 S D 2340 木簡出土状況 (85次)
- PL.37 (1) 石組溝 S D 2335 (83次 南から)

- (2) 石組溝S D2335 (83次 北から)
- (3) S D2335石組状況 (西から)
- PL.38 (1) 石組溝S D2335 (87次 南から)
- (2) S D2335石組状況 (87次 北から)
- (3) S D2335石組状況 (87次 南から)
- PL.39 (1) 溝S D2015 (76次 西から)
- (2) 溝S D2470 (85次 西から)
- (3) 溝S D2015・2470 (85次 西から)
- PL.40 (1) 溝S D4570～4572 (南から)
- (2) 溝S D4571・4572 (東から)
- (3) 溝S D4570土層 (西から)
- PL.41 (1) 溝S D2350 (東から)
- (2) 溝S D2350土層1 (西から)
- (3) 溝S D2350土層2 (西から)
- PL.42 (1) 溝S D2010・320 (東から)
- (2) 溝S D2010土層 (南から)
- (3) 溝S D3825 (北から)
- PL.43 (1) 溝S D4037 (西から)
- (2) 溝S D4566 (南から)
- (3) 溝S D4569 (北から)
- PL.44 (1) 井戸S E2346 (83次)
- (2) 井戸S E2357 (83次)
- (3) 井戸S E2414 (84次)
- PL.45 (1) 井戸S E2434 (84次)
- (2) 井戸S E2436 (84次)
- (3) 井戸S E2502 (14次補足)
- PL.46 (1) 井戸S E2503 (14次補足)
- (2) 井戸S E2504 (14次補足)
- (3) 井戸S E2510 (87次)
- PL.47 (1) 井戸S E2890 (98次)
- (2) 井戸S E4031 (147次)
- (3) 井戸S E4031・4032 (147次)
- PL.48 (1) 井戸S E4033 (147次)
- (2) 井戸S E4051 (147次)
- (3) 井戸S E4052 (147次)
- PL.49 (1) 土坑S K388 (17次)
- (2) S K388土器出土状況
- (3) 土坑S K4573 (187次)

- PL.50 (1) 礫敷遺構 S X4045 (南から)
(2) 礫敷遺構 S X4045 (南から)
(3) 礫敷遺構 S X4045 (東から)
- PL.51 (1) 礫敷遺構 S X4045 (東から)
(2) S X4045礫面 (南から)
(3) S X4045断割り状況 (東から)
- PL.52 (1) 暗渠 S X2485 (北から)
(2) 暗渠 S X2485 (南から)
(3) 暗渠 S X2485 (東から)
- PL.53 (1) 暗渠 S X4055 (西から)
(2) S X4055排水口 (西から)
(3) S X4055木樋埋設状況 (西から)
- PL.54 (1) 護岸遺構 S X328 (17次 東から)
(2) 護岸遺構 S X2013 (76次 南から)
(3) 筏状遺構 S X2014 (南から)
- PL.55 (1) 保土穴 S X2421
(2) 保土穴 S X2422
(3) 瓦組遺構 S X2501 (東から)
- PL.56 (1) 瓦敷遺構 S X2523 (北から)
(2) 粘土採掘遺構 S X2438・2439周辺 (84次 北から)
(3) 粘土採掘遺構 S X2532 (87次)
- PL.57 (1) 溝 S D2340, 流路 S X2480 (98次 北上空から)
(2) 流路 S X2480土層 (北から)
(3) 落ち込み S X2417, 溝 S D2418 (西から)
(4) 落ち込み S X2336 (84次 北から)

凡 例

- 1 本書に掲載の遺構実測図は、国土調査法第II座標系をもとに基準点を設け作成している。
- 2 本書掲載の図の内、Fig. 3については、本書第1集（『大宰府政庁周辺官衙跡Ⅰ—政庁前面広場地区一』九州歴史資料館2010）に掲載した図から転載した。この図面作成にあたっては、太宰府市教育委員会発行の報告書（太宰府市教育委員会1989『大宰府条坊跡Ⅴ』）の掲載図から転載し、改変利用した。掲載にあたっては、同市教育委員会の許可を得た。
- 3 遺構番号の頭に付した記号は、以下の遺構を示す。
SA：柵，SB：建物，SD：溝，SE：井戸，SK：土坑，SX：その他の遺構

第 I 章 緒 言

(1) 特別史跡大宰府跡

柿本人麻呂により「大王之遠乃朝庭」と詠まれた大宰府は、古代律令国家において西海道諸国島に対する内政総監の府として君臨し、海边防備及び中国大陸・朝鮮半島との外交・交易の拠点としても重要な役割を担った。また、自らを「天下之一都会」（『続日本紀』神護景雲3年（769）十月甲辰条）と称した如く、碁盤目の街割りが施工され、平城京・平安京に次ぐ規模を誇る最大の地方都市であった。しかし、他に類をみない大宰府のみがもつ特質として、大野城・基肄城・水城大堤・小水城等の古代山城及び土塁からなる堅固な防衛施設によって護られた城郭都市でもあった。その大宰府の中核となる遺跡が、福岡県太宰府市域の北側に位置し、都府楼跡とも称される国指定特別史跡の大宰府政庁跡である。

遠乃朝庭

現在、政庁跡のすぐ南側を県道筑紫野太宰府線が東西方向に走るが、県道以北は国指定特別史跡大宰府跡として面積約29.9haもの土地が保存され、政庁跡は史跡公園として整備されており、桜の开花時期ともなると大勢の花見客で賑わっている。また、政庁跡の背後には、天智天皇4年（665）に築城された朝鮮式山城の一つである大野城跡を擁する四王寺山が望め、四王寺山より派生した月山及び蔵司二つの丘陵が、恰も政庁跡を抱くかの如く南へと伸びる。一方、県道以南には個人住宅・アパートが蟠集し、住宅エリアとして開発されている。この様に、県道を挟んで、開発の手から逃れた大宰府政庁跡から観世音寺にかけての一带は、自然豊かな風光明媚の様相を呈するに至っている。

特別史跡
大宰府跡

ここで、大宰府史跡の調査歴について概要を記しておこう。大宰府史跡の発掘調査は、昭和43年10月19日、政庁中門跡の調査を嚆矢として始まる。調査の結果、Ⅰ期（7世紀後半）・Ⅱ期（8世紀前半～10世紀半ば）・Ⅲ期（10世紀後半～12世紀前半頃）に亘る遺構が確認され、Ⅲ期の建物は天慶4年（941）、藤原純友の乱で焼失したⅡ期の建物を10世紀後半に再建したものであることなど重要な事実が次々に明らかとなった。昭和47年に九州歴史資料館が発足して以降は、同館が大宰府史跡の発掘調査を担当し、出土品の展示を行うとともに、九歴講座、九歴論集等により調査研究成果を公開し、大宰府史跡に関する情報発信を担っている。

大宰府史跡
の発掘

また、政庁前面域の県道以南から御笠川にかけての地区は、今でこそ大宰府政庁に関連する官衙域が広がっていると判明したが、土地区画整理事業が始まった昭和54年時点では誰も予想だにできなかった。大宰府史跡第17次調査で礎石建物が発見されたのを初めとして、第32次調査では掘立柱建物が2棟発見され、その後、官衙と呼ぶにふさわしい大規模な建物群や柵、地域を区切る南北溝等が続々に発見され、特に南北溝S D2340からは天平6年（734）、同8年（736）の紀年銘が書かれた木簡、紫草に関する木簡等が出土し、鏡山猛が想定した県道を南限とする方2町の府庁域が県道以南にも広がっていることが明らかとなった。

大宰府政庁
周辺官衙跡

現在では、政庁跡前面域の建物群は、東から日吉地区官衙、政庁前面広場を挟んで不丁地区官衙、大楠地区官衙、広丸地区官衙と小字を付けて呼称している。なお、政庁前面の区画整理事業地の調査においては、将来の史跡指定に備え遺構の完掘は行わず、地権者に対しては発見された遺構の内容を文書で示すとともに、遺構保存に協力を頂いている次第である。

(2) 調査の経過

本報告書は、大宰府政庁周辺官衙跡の正式報告書の第3冊目で、大宰府政庁跡の南西側にあたる不丁地区で検出された遺構・遺物を網羅的に報告するものであるが、不丁地区は周辺官衙の中でも遺構・遺物量が膨大であることから、報告に際しては遺構編・遺物編の二分冊とし、当年度で遺構編を刊行し、遺物編は次年度の刊行予定とした。従って、今回の報告書では遺構の詳細な時期についてはふれておらず、遺物編において改めて記すこととしたい。

不丁官衙の範囲

今次報告の不丁地区官衙とした範囲は、南北が県道筑紫野太宰府線から御笠川までの長さ約300mで、東縁が政庁前面広場と不丁地区官衙を区切る南北溝S D2340東肩部までで、西縁が不丁地区官衙と大楠地区官衙とを画する南北溝S D320西肩部までの幅約100mの範囲を指す。前述した如く、府庁域の範囲が県道以南にも及んでいることが明らかとなったが、その発端は不丁地区（第17次調査）において礎石建物1棟を検出したことによる。従って、不丁地区の発掘調査においては、建物の配列状況の確認、溝・柵等の区画施設の確認、不丁地区の性格付けに主眼を置いて進めた。不丁地区として発掘調査を行った次数は、大宰府史跡第14・14補足・17・76・83・84・84補足・85・85補足・87・90・98・104・110・124・129・147・187・192次調査である。第187次調査以外は、何れも区画整理事業に伴う緊急調査と

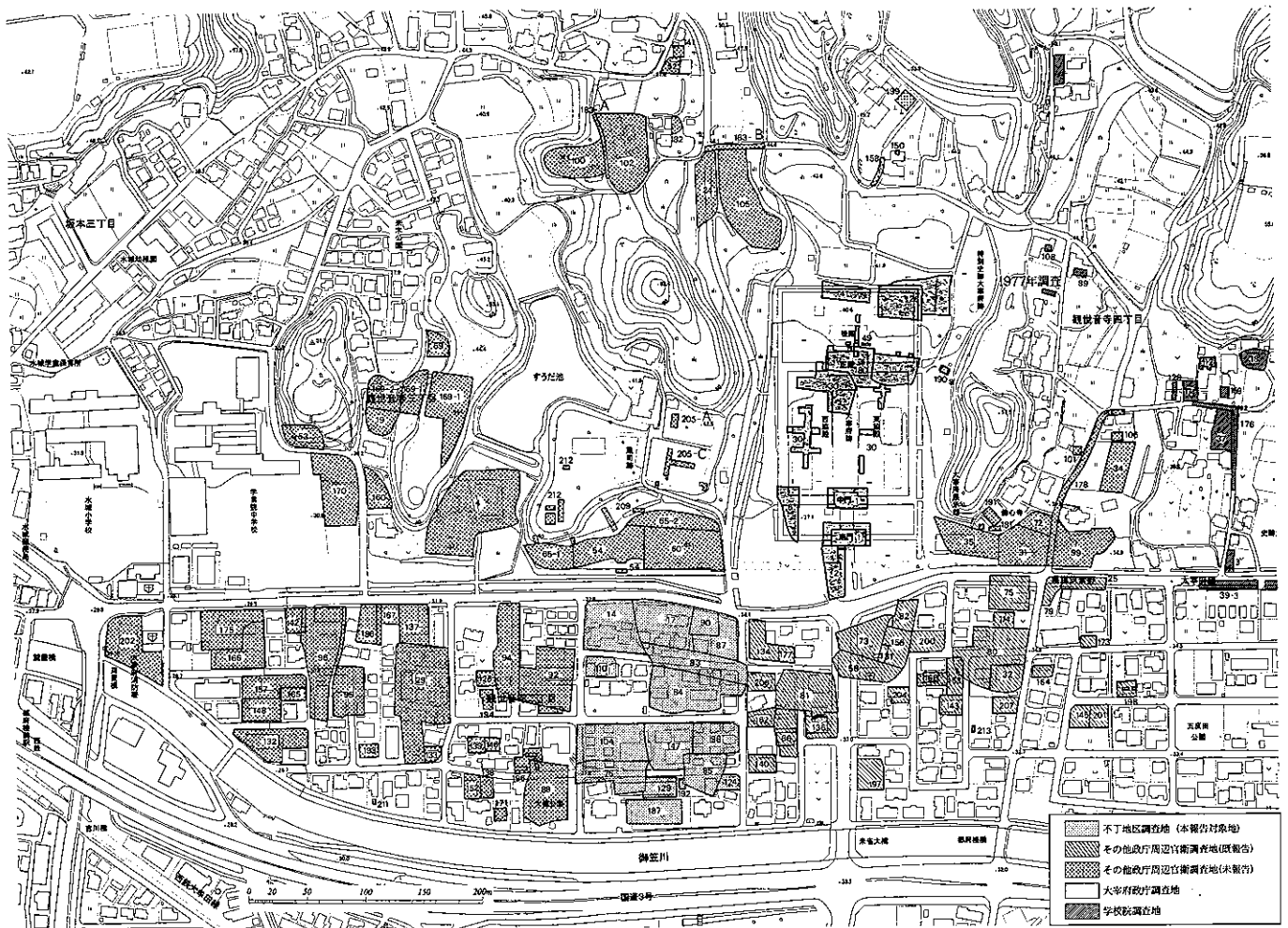


Fig. 1 大宰府政庁周辺官衙跡調査地一覧図 (1/6,000)

して実施した。

第14次・同補足調査地は県道筑紫野太宰府線の南縁に接し、不丁地区官衙の北西端部にあたり、大楠地区官衙との境をなす南北溝SD320を検出した。溝は幅約16mで、溝中からは延暦11年と推定される紀年銘木簡を含む15点が出土し、最下層からは奈良時代の土器が多量に出土するなど貴重な成果が得られた。他の遺構としては、掘立柱建物・柵・井戸等がある。

西限溝
SD320

第17次調査地も県道筑紫野太宰府線の南縁に接し、不丁地区官衙の北端中央部にあたる。当調査地は小字が「不丁」であることから「府庁」に通じるとされ、大宰府政庁関連施設の存在が十分予測されていた地区であった。調査の結果、梁行2間×桁行7間の南北棟礎石建物1棟及び工房に関わる漆付着土器が集積された7世紀後半の土坑SK388が発見され、府庁域の範囲が県道以南にも及んでいることが認識される発端となった重要な調査である。

礎石建物
SB370

第76次調査地は不丁地区官衙の南西部で、鏡山条坊復原案による右郭六条二坊に該当する。調査の結果、第14次調査で検出された南北溝SD320の南延長部が確認され、溝の最終埋没が11世紀後半代であることが明らかになった。溝からは11点の木簡が出土し、第76次調査では合わせて17点の木簡が確認された。建物跡も1棟検出され、朱雀門推定地から東西に延長した線から北に約30mの位置にあたり、御笠川付近まで建物群が広がっていることを確認した。

第83次調査地は第17次調査地の南側に接し、礎石建物SB370の規模確認を目的として調査を行った。調査及び検討の結果、建物としては妻廂建物1棟、側柱建物3棟、総柱建物1棟の他に東西方向の溝SD2350、その後の調査で不丁地区官衙と政庁前面広場とを画することが明らかとなった南北溝SD2340等が検出された。

第84次・同補足調査地は第83次調査地の南に接し、建物群の広がりを把握することを目的として調査を行った。調査及び検討の結果、四面廂建物としたSB2420を初めとして南北棟建物5棟、東西棟建物4棟の他、倉庫と考えられる建物2棟を検出した。また、遺構の再検討によって門建物2棟(SB2388・2450)が存在することも明らかとなり、東西方向の柵SA2451は門建物SB2450に接続し、SA2452とで不丁地区官衙内部を画する柵と考えられた。

四面廂建物
SB2420

第85次調査地は、不丁地区の南東側で、不丁地区官衙の南を限るとみられる東西溝SD2015の東延長部の確認及び建物群の広がりを究明することを調査目的とした。調査及び検討の結果、SD2015は南北溝SD2340に接続することを確認し、SD2340からは「天平六年四月廿一日」と記された紀年銘木簡を初めとして、紫草に関する木簡等計58点の木簡が出土した。また、補足調査と合わせて東西棟建物2棟、柵1列を検出するなど貴重な成果を得ることができた。

東限溝
SD2340
と木簡

第87・90次調査地は第83次調査地の北側にあたり、第17次調査地の東に接する。今回の調査においては、北側部分における建物の広がりとはSD2340の北端部の状況確認を主眼とした。調査及び検討の結果、南北棟建物5棟、東西棟建物2棟、井戸等を検出し、礎石建物SB370以東にも建物群が広がっているのを確認した。また、この調査においてもSD2340から98点の木簡が出土し、SD2340からは計160点の木簡が出土したこととなる。特に注目されるのが、天平8年とみられる紀年銘木簡、紫草に関する木簡、南島に関する木簡(樺美嶋・伊藍嶋)の発見であり、大宰府の支配が遠く南島まで及んでいることが確認された。

第98次調査地は第84次と第85次調査地の中間にあたり、建物の広がりを把握する目的で調

流路
SX2480

査を行い、南北棟建物1棟、東西棟建物2棟、SD2340の延長部、7世紀後半の流路SX2480等を確認した。第104次調査地は第14次と第76次調査地の中間に位置し、両調査地で確認された南北溝SD320の再確認を目的としたためSD320の調査においては上面検出に留めた。第110次調査地は第14次補足調査地の南側で、東西方向の区画溝SD2350の延長部を確認することを目的とした。調査の結果、SD320とSD2350の接続部を確認し、SD2350は東西両方向に延長していることが判明した。第124次調査地は第85次調査地の東隣で、南北溝SD2340の南延長部を検出し、新たに14点の木簡を発見した。

第129次調査地は第76次調査地の東隣接地にあたり、建物群の広がりを把握することを目的とした。調査及び検討の結果、第76次調査で検出していた建物SB2005の東半部分及び新たに側柱建物5棟、総柱建物1棟を検出し、建物が更に南側に広がりをみせることを確認した。

第147次調査区は第85次調査区の西隣にあたり、北側は第84次補足調査区、西は第104次調査区と一部重複する。調査目的は不丁地区南半部における建物群の広がりを把握することであった。調査及び検討の結果、東西棟建物5棟、東西方向の大規模な柵、溝、井戸等の他に築地の基礎とみられる礎敷遺構SX4050を検出した。築地・柵の存在は、不丁地区官衙の建物配列及び変遷を考える上で大変重要である。

不丁官衙の
最南端

第187次調査区は第129次調査地の南側で、不丁地区の最南端に位置する。建物群の南端を確認することを目的として調査を行った。調査及び検討の結果、掘立柱建物6棟、溝等を検出した。建物群は南側に伸びる様相をみせるが、調査区南端は段落ちとなっており、遺構はそこで失われている。この段落ち付近が朱雀門推定地から東西に延長した位置にあたり、建物群は御笠川と府庁域を画す施設近辺まで存在していた可能性が高い。特筆される点として、小壺形のガラス製品が発見されたことで、年代的に8世紀末～9世紀初頭で収まり、西域から将来されたとみられる。第192次調査地は第85次調査南西隅部に接し、溝が検出された程度である。

Tab.1 不丁地区調査次数一覧

No.	次数	地区略号	面積㎡	調査期間	地番(太宰府市)	報告書
1	14	6AYM-B	333	710820～710930	観世音寺字大楠333	略S46
2	14補	6AYM-B	655	831121～840124	観世音寺字大楠333-1	概S59
3	17	6AYM	477	710112～710325	観世音寺字不丁288-1・3・4	概S58
4	76	6AYM-B-N	1,150	810401～810911	観世音寺字大楠325	概S56
5	83	6AYM-B-U	1,053	821126～830228	観世音寺字不丁292	概S58
6	84	6AYM-B-S	2,045	830304～830702	観世音寺字不丁292,294-1・4	概S58
7	84補	6AYM-B	130	830604～830713	観世音寺字不丁292	概S58
8	85	6AYM-B-Q	897	830709～831026	観世音寺字不丁298,300	概S58
9	85補	6AYM-B	248	830930	観世音寺字不丁	概S58
10	87	6AYM-B-V	790	840115～840305	観世音寺字不丁288-2・6・7・9	概S59
11	90	6AYM-B-V	420	840509～840705	観世音寺字不丁288-8・15・16	概S59
12	98	6AYM-B-Q	850	860110～860305	観世音寺字不丁297-2	概S61
13	104	6AYM-B-P	740	861127～870128	観世音寺字大楠326・327	概S62
14	110	6AYM-B-T	350	871130～871214	観世音寺字大楠332-2	概S63
15	124	6AYM-B-Q	102	901011～901023	観世音寺字不丁300-3	概H2
16	129	6AYM-B-N	383	910420～910611	観世音寺字大楠325-1,不丁301-2	概H3
17	147	6AYM-B-Q	1,795	921008～931022	観世音寺字不丁323-1・2	概H5
18	187	6AYM-B	520	020520～020930	観世音寺2丁目7番地	史跡II
19	192	6AYM-B	6	041215～041217	観世音寺2丁目103番地	史跡VI

(概S○：大宰府史跡昭和○年度発掘調査概報，史跡○：大宰府史跡発掘調査報告書○平成△年度)

(3) 調査組織

九州歴史資料館は、大宰府史跡の計画調査及び研究、住宅改築等に伴う緊急発掘調査、歴史資料の収集・保管、調査研究、展示及び整備等を所掌する機関として昭和47年4月に設置され、それ以降は当館調査課が主として大宰府史跡の発掘調査を担っている。

大宰府史跡の発掘調査及び報告書刊行にあたっては、5ヶ年を一つの括りとした年次ごとの調査計画を立案し、調査の実施に際しては諮問機関である10名の委員で構成される「大宰府史跡発掘調査指導委員会」（昭和59年に「大宰府史跡調査研究指導委員会」と改称し、委員も15名に増員）に諮り、その指導・助言のもとに行っている。現在、委員の構成は、国史学5名、考古学4名、建築史学2名、造園学2名、都市工学1名、土木工学1名の15名からなる。

前述した如く、当館は昭和47年に発足し、調査体制も一応整備され、大宰府史跡を総合的・学術的に解明することを目標に掲げた調査計画を立案し、実施しているところである。しかしながら、当館における大宰府史跡の調査研究は、大宰府跡のみならず、水城跡・大野城跡・学校院跡・観世音寺・筑前国分寺跡等の大規模かつ歴史的に重要な遺跡を数多く抱え、さらに大宰

Tab. 2 大宰府史跡調査研究指導委員会委員一覧（在任年順、◎は委員長経験者を表す）

氏名	分野	職（就任時）	在任期間
◎竹内 理三	国史	早稲田大学教授	S43～S58
鏡山 猛	考古	九州大学教授	S43～S46
浅野 清	建築	大阪市立大学教授	S43～S62
井上 辰雄	国史	熊本大学教授	S43～S58
井上 光貞	国史	東京大学教授	S43～S56
大田 静六	建築	九州大学教授	S43～S58
◎岡崎 敬	考古	九州大学助教授	S43～H2
岸 俊男	国史	京都大学教授	S43～S61
坂本 太郎	国史	國學院大学教授	S43～S55
坪井 清足	考古	奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部長	S43～H7
◎小田 富士雄	考古	九州大学助手	S43～
◎平野 邦雄	国史	東京女子大学教授	S59～H7
狩野 久	国史	奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部長	S59～
◎笹山 晴生	国史	東京大学助教授	S59～H22
澤村 仁	建築	九州芸術工科大学教授	S59～
杉本 正美	造園	九州芸術工科大学教授	S59～
中村 一	造園	京都大学教授	S59～H19
◎横山 浩一	考古	九州大学教授	S59～H11
渡辺 定男	都市工学	東京大学教授	S59～
八木 充	国史	山口大学教授	S63～
川添 昭二	国史	九州大学教授	S63～H17
鈴木 嘉吉	建築	奈良国立文化財研究所長	S63～
西谷 正	考古	九州大学教授	H4～H19
佐藤 信	国史	東京大学教授	H6～
坂上 康俊	国史	九州大学教授	H8～
田中 琢	考古	奈良国立文化財研究所長	H8～H10
町田 章	考古	奈良国立文化財研究所長	H11～H16
山中 章	考古	三重大学教授	H12～
田辺 征夫	考古	独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所長	H17～H23・9
林 重徳	土木工学	佐賀大学教授	H18～
石松 好雄	考古	元九州歴史資料館副館長	H20～
尼崎 博正	造園	京都造形芸術大学教授	H20～
松村 恵司	考古	奈良国立文化財研究所長	H23・10～
森 公章	国史	東洋大学教授	H23～

府政庁前面域の土地区画整理事業に係る緊急発掘調査の対応に終始するという有様であった。前述の如く、大宰府政庁前面域の発掘調査の進展により、政庁関連の官衙域が御笠川付近までの広範囲に及んでいるという新たな事実の判明、紀年銘木簡を初めとする大宰府解明に欠かせない貴重な資料の発見が相次いだものの、大宰府史跡の計画調査は遅々として進まない状況下にあった。そのため、年次計画を一度となく練り直し、そのつど指導委員会に諮り、計画の変更を余儀なくせざる状況であった。

大宰府史跡の発掘調査は、昭和43年度に始まる第1次調査から平成23年度に実施した第212次調査の44年に及び、その間多くの職員の出入りがあった。また、平成11年度までは概要報告書という体裁で発掘調査の成果を公表し、正式報告書の刊行を先送りしてきた。しかし、政庁前面域の発掘調査に携わった担当者も大半が現役を引退し、政庁前面域の発掘調査及び概要報告書の作成に全く携わっていない者が正式報告書の刊行に関わっている状況である。こうした弊害を将来に残さないように、平成12年度以降は概要報告書ではなく、報告すべき遺構・遺物を網羅した年次ごとの報告書を作成し、従前のやり方を改めている。

なお、平成19年度までは、九州歴史資料館調査課が大宰府史跡の発掘調査を担当してきたが、平成20年度の組織改編により、学芸一課・学芸二課・調査課が学芸調査室として統合され、その下に学芸班・調査班がおかれ、班体制となり、調査班が発掘調査を担当することとなった。平成22年7月1日には太宰府の地にあった九州歴史資料館が小郡市に移転し、同年11月21日に新施設が開館した。また、平成23年度の組織改編により、九州歴史資料館は総務室・学芸調査室・文化財調査室の三室構成となり、学芸班が学芸普及班に、調査班が調査研究班に改称され、大宰府史跡の調査研究は学芸調査室調査研究班が担うこととなった。

不丁地区調査関係者一覧

不丁地区の発掘調査及び報告書関係者は、以下のとおりである。

九州歴史資料館

館長	鏡山 猛	(S47～55)	副館長	牟田 重夫	(S56)
	田村 圓澄	(S56～H3)		武久 耕作	(S57・58)
	吉久 勝美	(H4～7)		藤井 功	(S59)
	高橋 良平	(H8・9)		前田 栄一	(S60) (兼務)
	光安 常喜	(H9～13) (兼務)		高木 康生	(S61～63)
	森山 良一	(H14～19) (兼務)		前田 栄一	(H1～3)
	西谷 正	(H20～23)		石松 好雄	(H4～8)
				柳田 康雄	(H14)
				橋口 達也	(H16)
				濱田 信也	(H17)
調査課長	石松 好雄	(S56～H1)	学芸調査室長	児玉 真一	(H20)
	栗原 和彦	(H2～H8)		小田 和利	(H21～23)
	横田 賢次郎	(H9～13)			
	高橋 章	(H14～16)			
	児玉 真一	(H17～19)			

調査課

第14次(S46)	石松好雄	倉住靖彦	○高倉洋彰	○横田賢次郎	○森田 勉	高橋 章
第14補(S58)	石松好雄	倉住靖彦	高倉洋彰	○横田賢次郎	○森田 勉	高橋 章
第17次(S46)	石松好雄	倉住靖彦	高倉洋彰	○横田賢次郎	○森田 勉	○高橋 章
第76次(S56)	石松好雄	倉住靖彦	高倉洋彰	○横田賢次郎	森田 勉	○高橋 章
第83次(S57)	石松好雄	倉住靖彦	○高倉洋彰	○横田賢次郎	○森田 勉	○高橋 章
第84次(S58)	石松好雄	倉住靖彦	○高倉洋彰	○横田賢次郎	○森田 勉	○高橋 章
第85次(S58)	石松好雄	倉住靖彦	○高倉洋彰	○横田賢次郎	森田 勉	○高橋 章
第87次(S58)	石松好雄	倉住靖彦	高倉洋彰	○横田賢次郎	森田 勉	○高橋 章
第90次(S59)	石松好雄	倉住靖彦	高倉洋彰	横田賢次郎	○森田 勉	○高橋 章
第98次(S60)	石松好雄	倉住靖彦	高倉洋彰	○横田賢次郎	森田 勉	○赤司善彦
第104次(S61)	石松好雄	◎高倉洋彰	横田賢次郎	森田 勉	赤司善彦	
第110次(S62)	石松好雄	○高倉洋彰	○横田賢次郎	森田 勉	赤司善彦	
第124次(H2)	栗原和彦	橋口達也	横田賢次郎	○赤司善彦	吉村靖徳	
第147次(H4)	栗原和彦	橋口達也	横田賢次郎	◎小田和利	○吉村靖徳	
第187次(H14)	高橋 章	◎中間研志	小田和利			
第192次(H16)	高橋 章	小田和利	◎吉村靖徳			

本報告書作成にあたり、保存処理については横田義章・加藤和歳が、写真撮影は各調査担当の他に石丸洋・北岡伸一が担当した。上記調査に関係した補助員は、山本信夫・齋部麻矢である（◎印：調査主任，○印：調査担当）。

本報告書作成に係る平成23年度の関係者は、以下のとおりである。

九州歴史資料館

総 括	館 長	西谷 正
	副 館 長	南里 正美
庶 務	総務室長	圓城寺紀子
	企画主査	塩塚 孝憲
	事務主査	熊谷 泰容
	主任主事	近藤 一崇
	主 事	谷川 賢治
報 告	学芸調査室長	小田 和利
	調査研究班長	杉原 敏之
	主任技師	下原 幸裕
	主任技師	小嶋 篤
整 理	整理補助員	高田いく子
	整理作業員	市川千香枝 中田千枝子 堤 直美

なお、本報告書作成にあたり、古環境研究所、太宰府市教育委員会文化財課諸氏には有益な御教示を賜わった。末筆ながら、記して感謝したい。

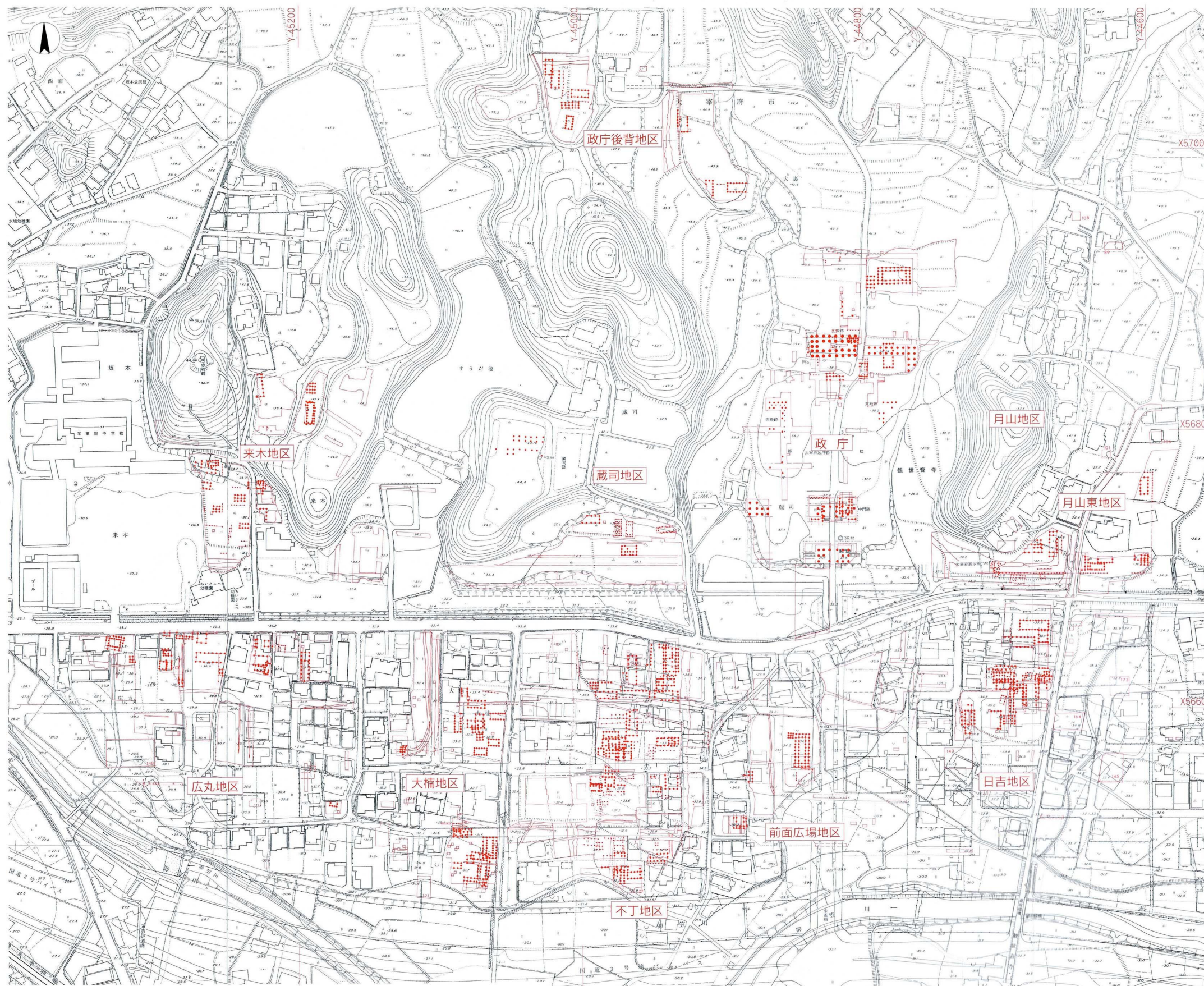


Fig. 3 大宰府政庁跡及び周辺官衙跡検出遺構配置図 (1/3,000)

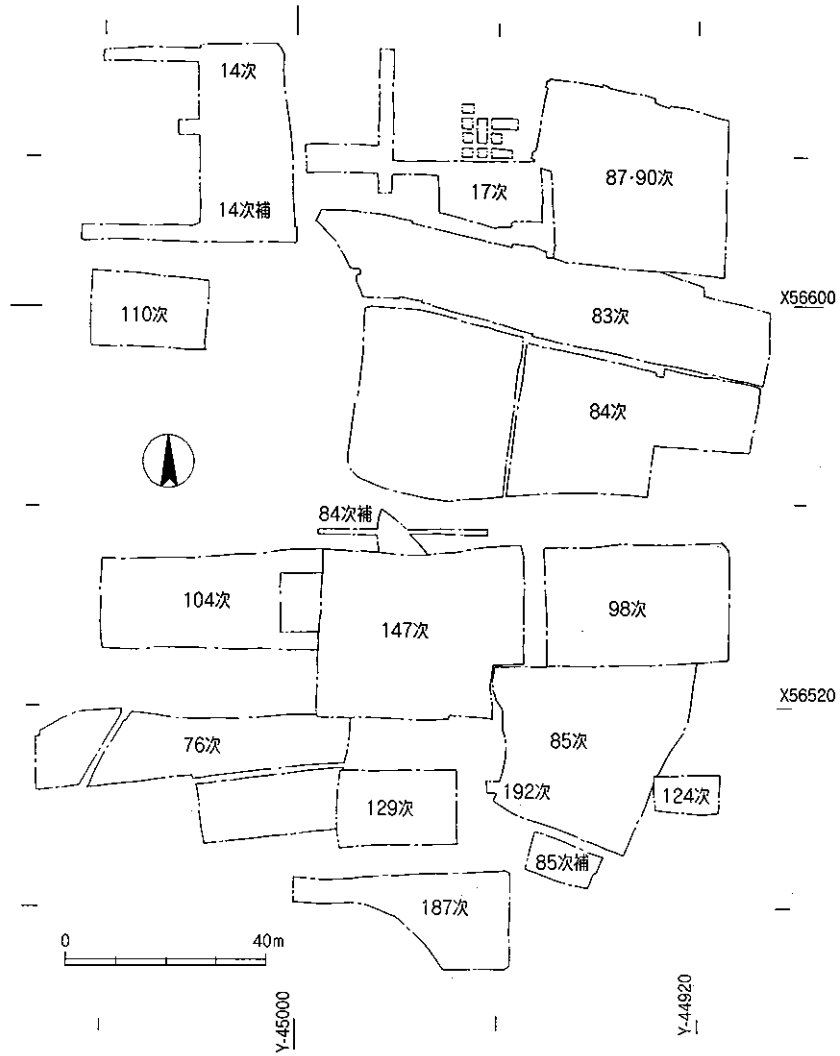


Fig. 5 不丁地区調査地配置図 (1/1,500)

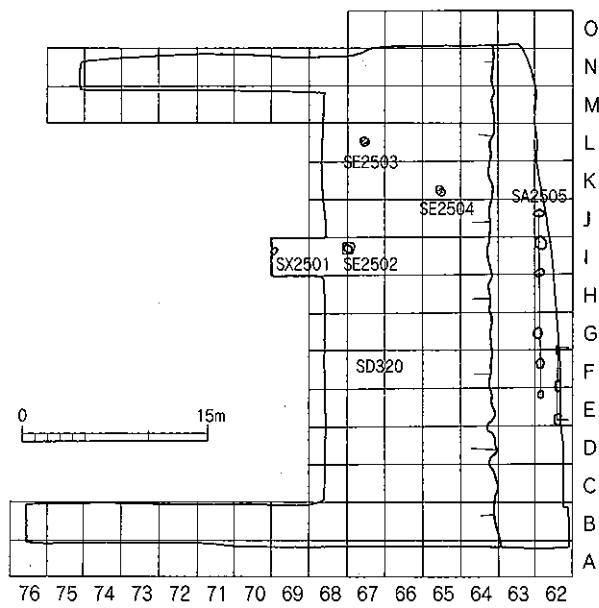


Fig. 6 第14次調査区 (1/600)

部分的な調査ではあったが木簡の出土は特筆され、最下層から奈良期の土器が多量に出土したことも注目される。

2) 第17次調査・17-2次調査

(Fig. 7, PL. 5)

調査期間：1972年1月12日～3月25日

(17次)

2011年6月17日(17-2次)

調査面積：477㎡(17次)・9㎡(17-2次)

概要 調査地は不丁地区中央の北側にあたる。東西軸と南北軸の二つのトレンチを設定し、調査を行った。その結果、東西トレンチの東側部分の2箇所で礎石

の根石状のものと掘方を検出したため、その部分を拡張している。また、その北側にも建物規模確認のためのグリッドを設けている。調査地東側では表土直下が遺構面となるが、西側では緩傾斜となり、東側の遺構面との高低差が0.8mある。総体的に見て、調査地東側の方に遺構面が良好に残る。

主な検出遺構は、礎石建物1棟、掘立柱建物3棟、溝、土坑、粘土採掘遺構などであるが、なかでも不丁地区の唯一の礎石建物であるSB370は当地区の建物群の位置づけを考える上で、重要な位置を占めている。また、不整形土坑であるSK388では、7世紀後半の須恵器平瓶45個が集中して出土している。第17-2次調査は、現地表からの深さを確認するために調査を実施した。

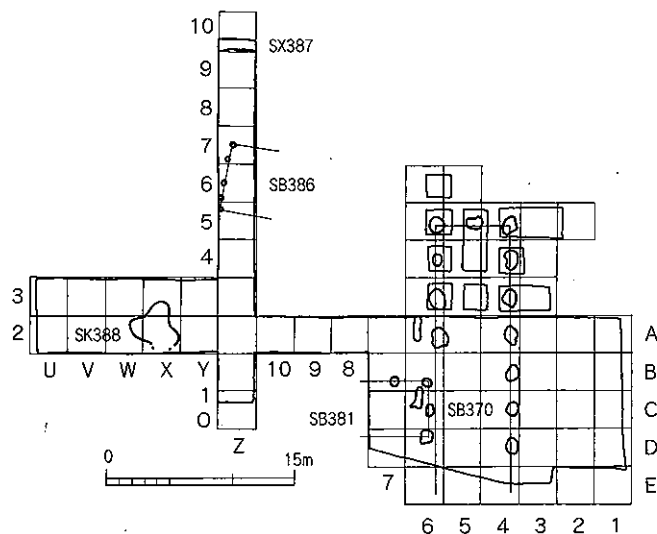


Fig. 7 第17次調査区 (1/600)

3) 第76次調査 (Fig. 8, PL. 5)

調査期間：1981年4月1日～9月11日

調査面積：1,150㎡

概要 太宰府町(当時)の土地区画整理事業に伴う事前調査で、第14次調査の南側に位置する。調査の主目的は第14次調査で発見した区画溝SD320の続きを確認することにあった。

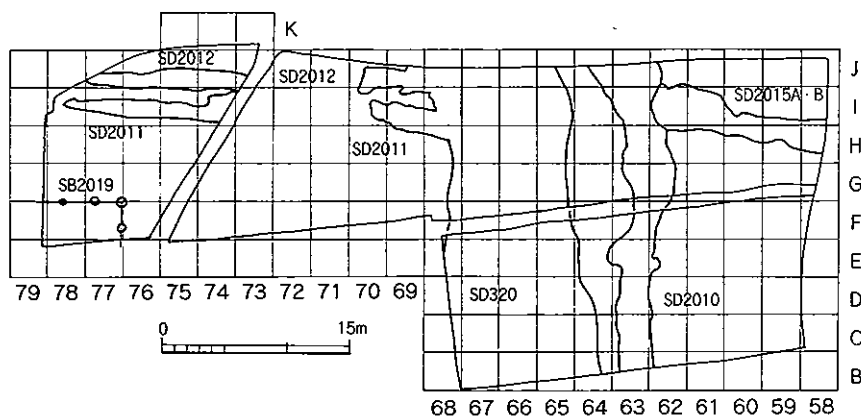


Fig. 8 第76次調査区 (1/600)

調査区一帯は南に向かって緩やかに下降しており、調査区の南15mでは約2mの段落ちとなり、御笠川の氾濫原であったことが窺える。調査区の東・西端部付近では表土・床土を除去後、わずかな暗茶色土があり、これを除くと地山面となる。南側では暗灰色土、茶灰色土、暗茶色土の3層が堆積し、SD320の上では約70cmの厚さとなる。この3層は主要遺構が廃絶し埋没した後に堆積したもので、暗茶色土中に中世以降の遺物は認められなかった。なお、SD320より新しいSD2010では、埋土の上層に暗茶色土が入る。

主な検出遺構は、建物1棟、溝5条、土坑4基などで、中世以降の遺構は確認していない。溝5条には先述のSD320も含まれるが、この調査で新たに東西溝SD2015A・Bが見つかり、調査区の東側に何らかの遺構の存在が推定されるに至った。SD320については第14次調査区から続いて直線的に南北方向に伸びることが確認され、おそらく御笠川に直接流れ込んでいたと考えられる。

4) 第83次調査 (Fig. 9, PL. 6)

調査期間：1982年11月26日～1983年2月28日

調査面積：1,053m²

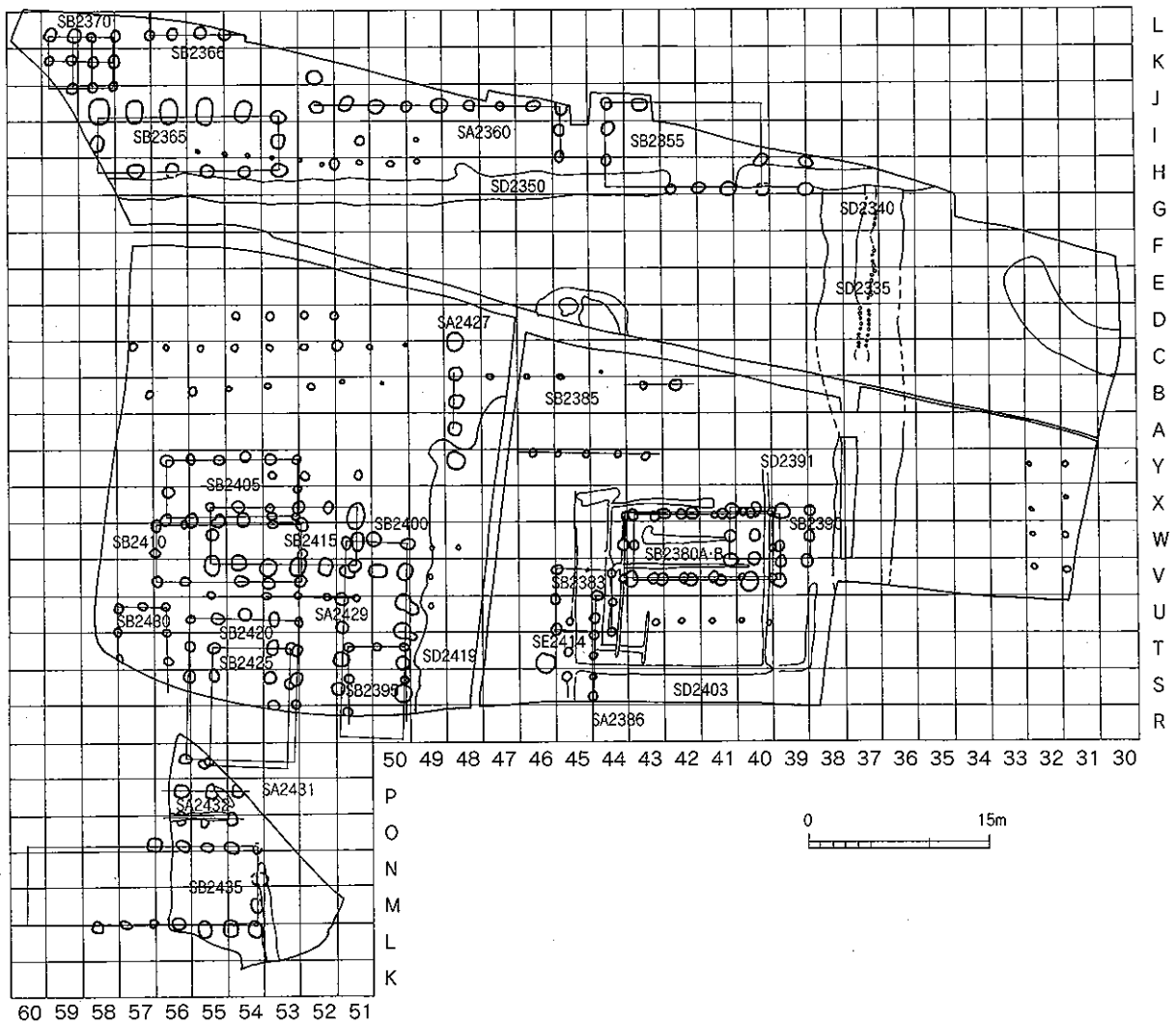


Fig. 9 第83・84次調査区 (1/600)

概要 第17次調査地の南側隣接地にあたり、不丁地区の北側中央部に位置する。遺構面は全体に浅く、調査地北側では床土直下で遺構面となるが、南側に向かって灰褐色土の堆積が厚くなり遺構面は若干深くなる。第17次調査地の遺構面との高低差は高いところで約30cm前後の差があり、第83次調査地の方が低くなる。遺構が検出される地山の多くは黄色ないし、黒褐色の粘質土であり、12世紀前半以降ではSX2348のような粘土採掘遺構が所々にみられる。

主な検出遺構は、掘立柱建物4棟、柵1条、溝3条、土坑5基、井戸2基である。南北溝SD2340からは3点の木簡が見つかった。

5) 第84次調査・84次補足調査 (Fig. 9, PL. 6)

調査期間：1983年3月4日～7月2日 調査面積：2,045㎡・130㎡ (補足)
1983年6月4日～7月13日 (補足)

概要 太宰府市の土地区画整理事業に伴う事前調査で、不丁地区の北東部、第83次調査地の南側に接する位置にある。調査の主な目的は、不丁地区官衙を構成する建物の広がりを確認することにあつた。耕作土・床土を除去すると、全体に灰褐色土層の堆積がみられ、その下層が概ね黄色粘土質の地山となる。東側はその大半がSX2336によって占められ、それを埋める茶灰色土層下で南北溝SD2340を検出した。調査区中央では概ね灰褐色土層下に遺構面がある。西側も基本的に灰褐色土層下で遺構面となるが、北西部は中世期の粘土採掘による攪乱部分に暗褐色土が堆積し、南東部では茶褐色土層が遺構面を覆っていた。調査は、多数の粘土採掘遺構が広範囲に掘られていたため、その埋土と柱掘方埋土との峻別はかなり困難を極めた。

主な検出遺構は、掘立柱建物14棟、柵9条、溝16条、井戸3基、土坑、鍛冶炉、粘土採掘遺構などである。

6) 第85次調査・85次補足調査 (Fig.10, PL. 7)

調査期間：1983年7月9日～10月26日
1983年9月30日 (補足)

調査面積：897㎡・248㎡

概要 不丁地区の南東部に位置し、土地区画整理事業の工区内であることから事前調査を実施した。官衙域を構成する建物や区画溝の確認が主な調査目的である。なお、調査区南端部で見つかったSB2460の広がりを確認するため、東西14m×南北8mほどの調査区を別途設けた。

調査区全体に灰褐色土層がかなり厚く堆積しており、その下層にある遺構面を覆う土はSD2015を境に北半と南半とで異なっていた。北半では茶褐色

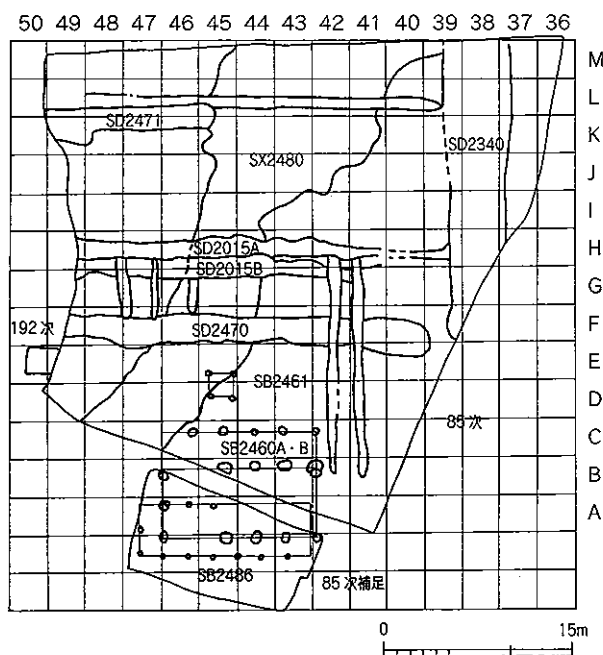


Fig.10 第85・192次調査区 (1/600)

土層、南半では土器・瓦を大量に含んだ暗褐色土層である。遺構はこの茶褐色土層、暗褐色土層直下の地山面で検出された。地山面は北から南へ緩く傾斜する。

主な検出遺構は、掘立柱建物1棟、柵1条、暗渠施設1基、溝、土坑などである。特に不丁地区の東を限るSD2340が南北方向に直線的に伸びること、第76次調査で確認した東西溝SD2015A・BがこのSD2340付近まで直線的に伸びること、SD2015と平行するSD2470が存在することが確認できたことは大きな成果である。また、SD2340では58点にも及ぶ木簡が出土し、その中に「天平六年四月廿一日」と記された紀年銘入りの木簡が含まれていたことで、伴出した土器・瓦などの編年的位置を考察する上で極めて重要な手掛かりを得ることができた。

7) 第87次調査 (Fig.11, PL. 7)

調査期間：1984年1月15日～3月5日

調査面積：790㎡

概要 土地区画整理事業に先立つ発掘調査で、不丁地区の北東隅に位置する。当調査は南北溝SD2340の北側延長部と、建物群の広がり確認が主たる目的である。区画整理事業の工程との関係から調査地を東南部と北東部に分け、前者を第87次調査、後者を第90次調査として実施した。遺構面は全体に浅く、北側では床土直下で遺構面となるが、南側では若干の灰褐色土層がみられる。遺構面は北端部と南端部で約

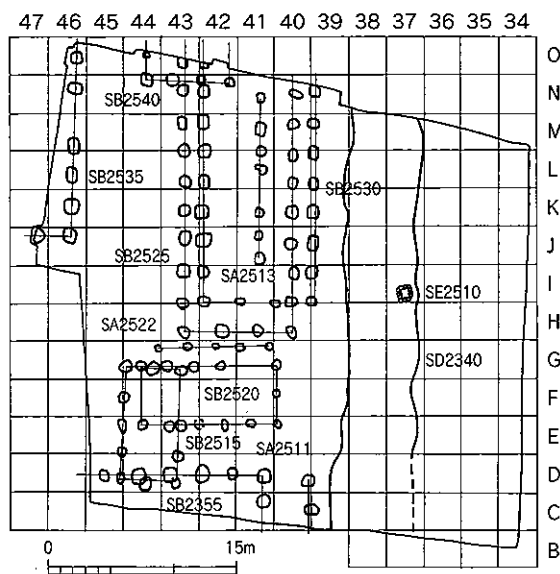


Fig.11 第87・90次調査区 (1/600)

50cmの高低差があり、南に向かって緩やかに傾斜している。遺構が検出される地山の多くは黄色粘質土層で、部分的に茶灰色砂質土層の箇所もある。

主な検出遺構は、掘立柱建物5棟、溝2条のほか、土坑、井戸、瓦敷遺構、粘土採掘遺構などである。特に調査区の南側については粘土採掘遺構が多数みられる。出土遺物ではSD2340の中層から木簡が51点出土しており、「糟屋郡」・「怡土郡」といった郡名や、「紫草」・「庸米」などの物品名が確認でき、「薩麻国」や「大隅郡」など九州南部からもたらされた可能性がある木簡も確認されるなど重要な成果が得られた。

8) 第90次調査 (Fig.11, PL. 8)

調査期間：1984年5月9日～7月5日

調査面積：420㎡

概要 土地区画整理事業に伴う事前調査で、第17次調査区と第87次調査区に挟まれた不丁地区北東隅に位置する。遺構面は全体的に浅く、ほとんど床土直下で遺構面となり、南に向かってわずかに下っている。第87次調査区と同様に、遺構が検出される地山の多くは黄色粘質土で、部分的に茶灰色砂質土の箇所がみられる。

主な検出遺構は、掘立柱建物4棟、溝、土坑などであるが、粘土採掘遺構もなく建物以外の遺構は非常に希薄である。この調査でも南北溝SD2340の一部を発掘し、上層から2点、中層から41点、下層から4点、合計47点の木簡が出土した。判読できるものには、「筑紫」・「豊後」・「合志」といった地域名称もみられ、不丁地区官衙の性格を考える上で重要な資料といえる。

9) 第98次調査 (Fig.12, PL. 8)

調査期間：1986年1月10日～3月5日

調査面積：850㎡

概要 住宅建設に伴う事前調査で、不丁地区の東側中央部に位置し、北には少し離れて第84次調査区があり、西は第147次調査区、南は第85次調査区と接する。調査地は既に土地区画整理事業が完了していた箇所で、工事の際に盛土がなされていた。そのため、耕作土・地上げ土（整地土）・旧表土を重機で除去した。旧表土下には床

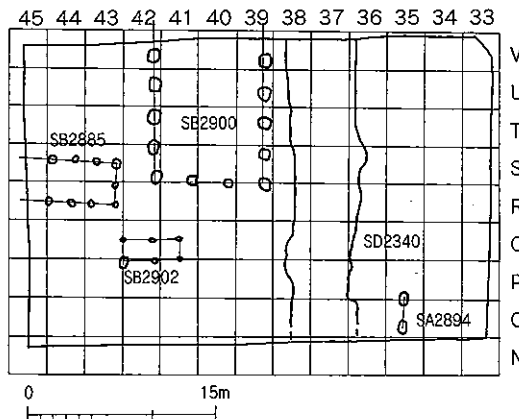


Fig.12 第98次調査区 (1/600)

土があり、これを除去すると暗褐色土層が堆積しており、その直下が遺構面である。ただし、SX2480の上層部分には8世紀後半代を中心とする遺物を包含する黒茶色土層が狭い範囲であるが堆積していた。遺構の多くは全て地山面から掘り込まれており、地山は南に向かって緩やかに傾斜する。

主な検出遺構は、掘立柱建物2棟、柵1条、溝、井戸、土坑、流路などである。調査区の中中央をSD2340が南北に貫流し、その西側に建物群が展開する。SD2340からは12点の木簡が出土したが、1点だけであるが「為班給筑前筑後肥等國遺基肆城稻穀隨大監正六上田中朝□」と記されており、大宰府周辺を囲む古代山城の研究にも大きく寄与する資料として特筆される。

10) 第104次調査 (Fig.13, PL. 9)

調査期間：1986年11月27日～1987年1月28日

調査面積：740㎡

概要 第14次調査と第76次調査で検出された南北溝SD320の確認と、西側における建物

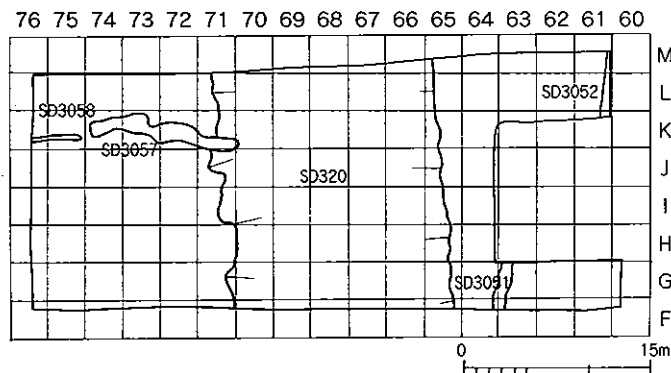


Fig.13 第104次調査区 (1/600)

群の広がりを確認する目的で実施した調査である。なお、この調査と並行して西側で住宅建設に先立つ事前調査を実施し、第104次補足調査としたが、大楠地区官衙域に属するため、今回は当初の調査区についてのみ報告を行う。

主な検出遺構は南北溝SD320のみで、他にピットが散在する程度で、遺構密度は極めて希薄である。SD320は東西幅の規模を確定させることが目的であることから、最上層のみを掘削し、完掘していない。

11) 第110次調査 (Fig.14, PL. 9)

調査期間：1987年11月30日～12月14日

調査面積：350㎡

概要 住宅建設に先立つ事前調査で、不丁地区の北西部、第14次調査区の南側に位置する。調査地は、第14次調査で確認した南北溝SD320と大楠地区官衙の第92次調査で確認した東西溝SD2350A・Bとの交点に当たることから、その状況の把握が主たる目的である。既に土地区画整理事業が完了しており、旧表土は除去されていた。整地土である真

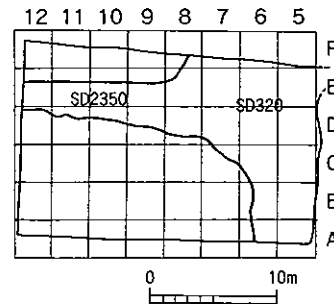


Fig.14 第110次調査区 (1/600)

砂土を除去すると床土があり、その下に遺物包含層である灰褐色土層が堆積している。この灰褐色土層は調査区南側に向かって厚くなり、南端部では約30cmの厚さとなる。北側では灰褐色土層はほとんど認められず、床土除去後に遺構面となる。また、東側では灰褐色土層の下層に暗灰色粘質土層が認められ、これを除去した段階でSD320を検出した。

主な検出遺構は、溝2条、土坑などで、南側ではピット群が広がるが、不丁地区と関連するのは西限の溝SD320のみである。

12) 第124次調査 (Fig.15, PL.10)

調査期間：1990年10月11日～10月23日

調査面積：102㎡

概要 住宅建て替えに伴う事前調査で、不丁地区の中央東端に位置し、西側には第85次調査区が隣接する。その位置から、南北溝SD2340の把握が主たる調査目的であった。遺構面には旧表土と床土が覆っているだけで、包含層の堆積はなかった。

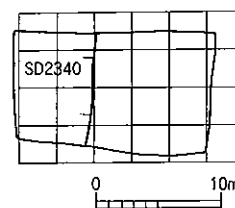


Fig.15 第124次調査区 (1/600)

主な検出遺構は、調査区の西端にあるSD2340のみで、東側の政庁前面広場地区側に浅い掘り込みが1基確認できる。SD2340からは、下層で2点、最下層で12点、合計14点の木簡が出土したほか、木製品なども出土した。

13) 第129次調査 (Fig.16, PL.10)

調査期間：1991年4月20日～6月11日

調査面積：383㎡

概要 アパート建設に先立つ事前調査で、不丁地区の中央南端付近に位置する。旧表土を

除去すると黄褐色土層がある。東側と西側ではこの黄褐色土層を剥ぐと地山面が露出するが、中央部では黒色土層が堆積している。特に、この黒色土層には土器の混入が著しく、明確な遺構としては確認できなかったが、遺物の出土状況からみて単なる自然堆積ではなく、人為的な整地層と推定される。

主な検出遺構は、掘立柱建物6棟、溝4条、土器廃棄遺構、土坑、ピット群などである。目立った遺構はないが、東西南北に走る溝は不丁地区内の小規模な区画に伴う溝とみられる。なお、焼塩壺が多量に出土したことは遺構の性格を考える上で特に注意される。

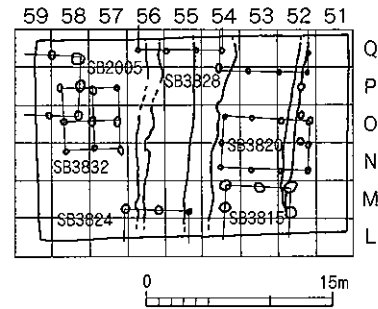


Fig.16 第129次調査区 (1/600)

14) 第147次調査・147-2次調査 (Fig.17, PL.11)

調査期間：1992年10月8日～1993年2月12日 (147次)

1993年4月14日～10月22日 (147-2次)

調査面積：495㎡ (147次)・1,300㎡ (147-2次)

概要 アパート建設に伴う事前調査で、不丁地区の中央部に位置する。遺構面は北から南に向かって緩やかに傾斜しており、調査区の北端と南端とでは約1mの高低差がある。基本層序は上から真砂土 (盛土)、黄褐色粘質土 (盛土)、茶褐色粘質土 (遺物包含層) で、遺構は茶褐色粘質土を除去した段階で確認した。調査区の北東から西南にかけてはもともと幅10m以上の流路が走っており、この部分は暗褐色粘質土で人為的に埋めていた。この整地層を一部掘削したところ厚さが50cmほどあり、さらに下層には遺物を包含する灰褐色の自然堆積層がみられた。その下は黄灰色の砂礫層となる。

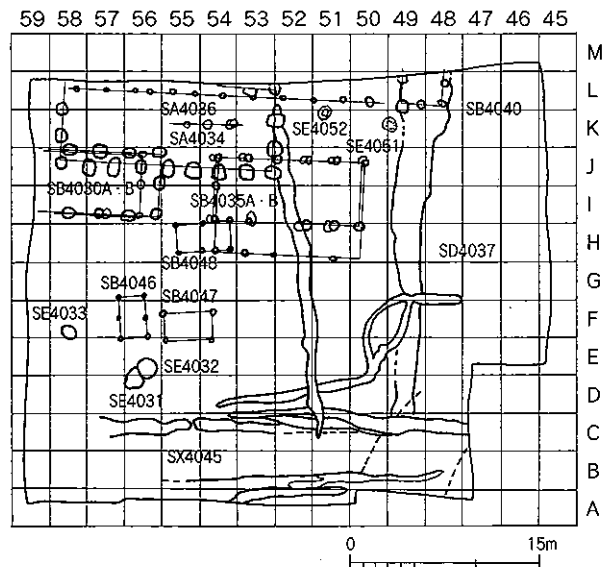


Fig.17 第147次調査区 (1/600)

主な検出遺構は、掘立柱建物9棟、柵1条、溝5条、井戸5基、土坑、流路などである。この他、調査区の南側に東西方向の礫敷き遺構があり、北側と南側に並走する溝が掘削されていることから、築地の基礎部分とみられる。また、木樋SX4055も確認した。

15) 第187次調査 (Fig.18, PL.12)

調査期間：2002年5月20日～9月30日

調査面積：520㎡

概要 不丁地区の調査では最南端に位置し、不丁地区の南端部における遺構の広がりを確認する目的で実施した計画調査である。第129次調査区の南側に位置する。調査予定地の南西

部分は旧御笠川の氾濫により大きく抉られて段落ちになっており、遺構が全く残っていなかったことから北側を中心に調査を行った。

調査地は遺構面上の堆積層が厚く形成されており、地表から順に上位層、遺物包含層、整地層、地山面となる。

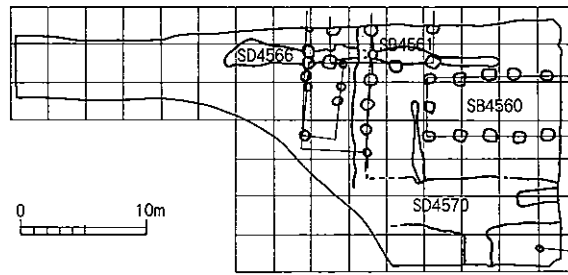


Fig.18 第187次調査区 (1/600)

上位層では、区画整理以前にも2面の水田面が確認された。さらに最下部の床土の下位には黄灰色土の落ち込みが各所に認められ、ここまでが攪乱層である。遺物包含層は、暗褐色～黒褐色を呈し、南ほど厚く堆積し、最大30cmほど堆積していたが、北側では床土を剥ぐと遺構面であった。包含層には多量の土器・瓦などが含まれていた。

整地層は黄茶色土からなり、8世紀代とみられる遺構を覆う箇所もあり、遺構との切り合いなどから平安期以降に下る時期の建物等に伴って施工されたものと推定される。また、SD4569の南半部の両岸には黄色粘質土が敷かれ、硬化面を形成しており、先述の黄茶色土と同時期の所産とみられる。

地山面の大半は自然堆積による沖積層である。上から順に、黄～灰色粘土、花崗岩風化土の二次堆積土、粗砂層、灰褐色粘土、黒色粘土（珪泥炭層）、淡灰色粘土となり、上半が砂質で水はけが良く、下半が良質の粘土層で安定した地盤を形成している。

主な検出遺構は、掘立柱建物6棟、溝7条、土坑3基、ピットなどである。この発見により、従来SD2015・2470が南限とみられた不丁地区は、さらに南側にまで広がっていることが明らかになった。出土遺物で注目すべきは、SK4574から出土した長沙窯黄釉褐彩水注の破片や、SK4573から出土した西アジア系ソーダガラスの小壺形容器である。他にも鑄造関連遺物や鍛冶関連遺物がまとまって出土した点が特筆される。

16) 第192次調査 (Fig.10, PL.12)

調査期間：2004年12月15日～12月17日

調査面積：6㎡

概要 調査地は不丁地区の南側に位置し、第85次調査区の南西隅部に接する箇所にあたる。地表下約1.5mに位置する地山の黄灰色粘質土が遺構面となる。検出遺構は、深さが最大0.1mの極めて浅い溝3条(SD4610・4611・4612)といくつかのピットである。浅い溝3条は不定方向に伸びており、互いに切り合い関係にある。

なお、各次調査区に掲載した主要遺構は概報段階のものであり、特に建物・柵については、本文中と番号・規模が異なっている場合がある。

(2) 基本層序 (Fig.19 ~ 22)

不丁地区官衙の層序を理解する上で重要なのは、本地区が北の四王寺山南麓より派生する丘陵先端部のさらに先に位置し、また南には御笠川が東西に流れている点である。こうした地質的環境は、堆積層の形成にも大きく影響を与えている。

比較的残りのよい北側では、砂層の上に火山灰起源とみられる暗灰色粘質土、黄褐色粘質土が堆積している。これが谷地形となる、南の御笠川に向かうに連れて薄くなり、二次堆積を含む沖積層が広がっている。このような地質的狀況から、南北に広がる本地区の土層堆積狀況も一様ではない。また、調査以前の昭和40年頃までは田畑であり、地点によっては遺構が大きく削平されている可能性もある。そのため、各調査区の基本土層を網羅し、整地層と遺構の関係を対比させて整理することは不可能に近い。

ここでは建物と整地層との関係、基準となる溝と整地層の関係を中心にみていくこととする。北端の17次調査区から南の85次調査区までを取り挙げて説明する。

地質環境と
層序

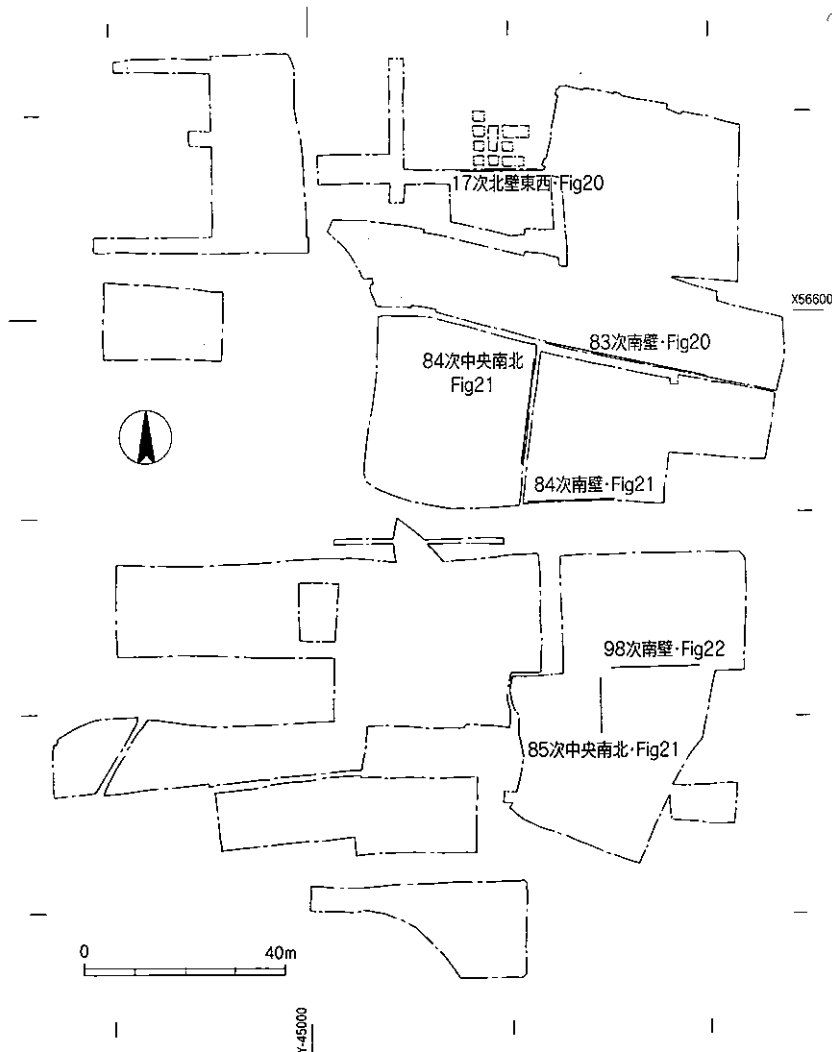
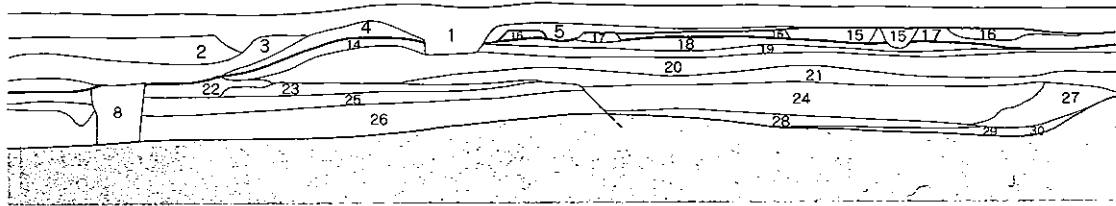


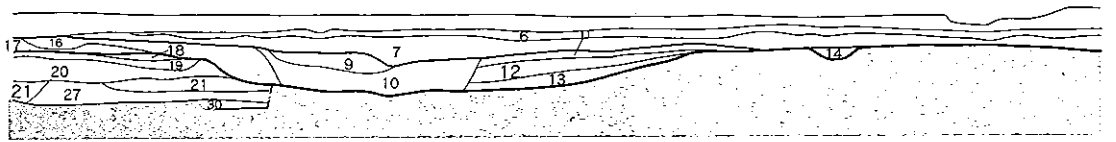
Fig.19 不丁地区基本土層図作成箇所 (1/1,500)

17 次北壁東西

34.60m



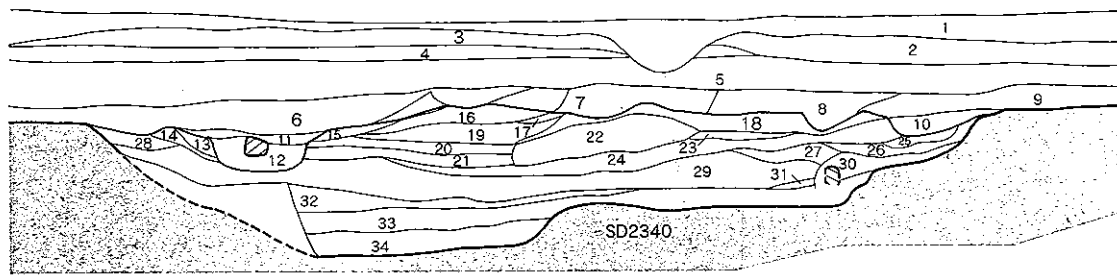
34.60m



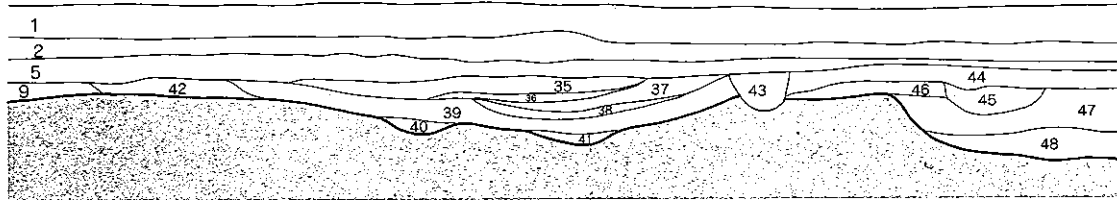
- | | | | | | |
|-----------|-------------------|---------------------|--------------------|-------------------|---------------|
| 1 黒色土 | 6 淡茶灰色砂質土(炭化物含) | 11 茶灰褐色砂質土(黄色ブロック混) | 16 赤褐色土(焼土層) | 21 暗褐色土(20に比べやや暗) | 26 淡黄灰色砂質土 |
| 2 茶黄色粘質土 | 7 暗茶灰褐色砂質土(炭化物含) | 12 茶灰褐色砂質土 | 17 茶黄色土(遺物少量) | 22 暗褐色土 | 27 淡灰色粗砂(遺物混) |
| 3 明黄褐色砂質土 | 8 暗茶灰色土 | 13 茶灰褐色砂質土(炭化物含) | 18 茶褐色土(整地層・遺構面) | 23 黄茶色砂質土 | 28 暗灰色粗砂 |
| 4 茶黄色粘質土 | 9 茶灰褐色砂質土(瓦敷) | 14 茶灰褐色砂質土 | 19 黄褐色粘質土(整地層・遺構面) | 24 暗灰粗砂 | 29 細砂 |
| 5 黄褐色粘質土 | 10 黒灰色砂質土(炭化物、瓦混) | 15 黒色土(炭化物層) | 20 暗褐色土(土器・炭化物混) | 25 黄茶色砂質土 | 30 暗茶色粘質土 |

83 次南壁東西

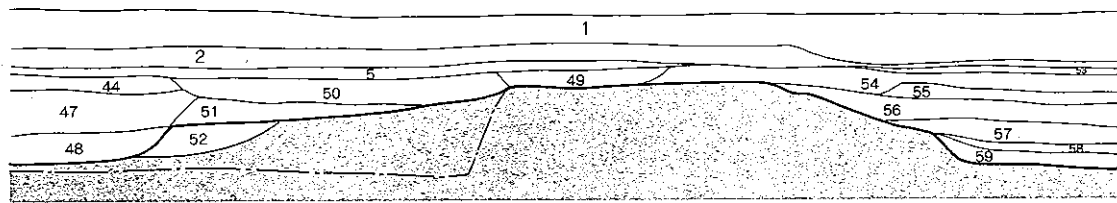
33.60m



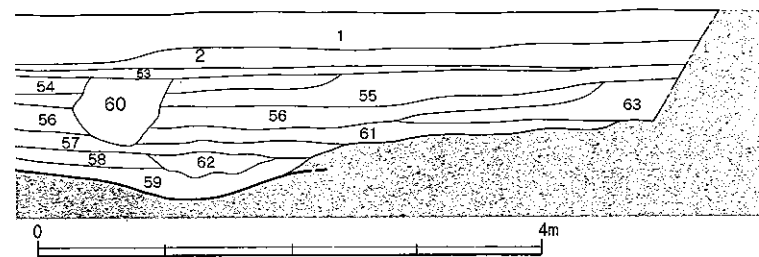
33.60m



33.60m



33.60m



20

- | | | |
|----------------|------------|-------------|
| 1 擾乱土 | 22 黒灰色粘質土 | 43 黄色粘質土 |
| 2 耕作土 | 23 茶白色砂 | 44 茶色土 |
| 3 耕作土 | 24 黒色土 | 45 茶色粘土 |
| 4 床土 | 25 暗灰色粘質土 | 46 濁茶色土 |
| 5 茶灰色砂 | 26 茶灰色粘質土 | 47 暗濁茶色土 |
| 6 茶灰色砂質土 | 27 黒灰色粘砂質土 | 48 黒灰色粘質土 |
| 7 灰色砂 | 28 炭層 | 49 暗灰色砂質土 |
| 8 茶色土 | 29 黒灰色粘質土 | 50 暗茶色土 |
| 9 茶灰色土 | 30 黒色粘質土 | 51 暗茶色土 |
| 10 茶色砂(粗砂) | 31 黒灰色砂 | 52 黄色粘土(地山) |
| 11 茶灰色粘質土 | 32 黒灰色砂 | 53 黄灰色砂質土 |
| 12 灰色砂 | 33 黒灰色粘質土 | 54 茶灰色土 |
| 13 黒色粘土(21に同じ) | 34 暗灰色砂 | 55 黒茶色土 |
| 14 灰色砂質土 | 35 濁茶色土 | 56 黒茶色土 |
| 15 灰色粘質土 | 36 黄色土 | 57 黒茶色土 |
| 16 茶灰色土 | 37 濁茶色土 | 58 黒灰色砂質粘土 |
| 17 茶色砂 | 38 暗茶色土 | 59 黒色粘土 |
| 18 茶灰色粘質土 | 39 灰黒色土 | 60 暗茶色土 |
| 19 黒灰色土 | 40 暗灰色砂 | 61 暗灰色砂質土 |
| 20 黒色砂質土 | 41 暗灰色粘質土 | 62 灰白色砂 |
| 21 黒色粘土 | 42 濁茶色土 | 63 黒茶色粘質土 |

Fig.20 不丁地区(17・83次)基本土層図(1)(1/60)

17次調査区 (Fig.20)

不丁地区の北端にあたる。礎石建物S B370に直交する形で東西にトレンチを設定した。ちょうど、基壇状の高まりを持つ中央では、現地表となる20cm程度の黒色土(1)の直下にわずかな床土を挟んで赤褐色土(16)や炭化物を含む黒色土(15)がある。建物造営当初の整地面ではないが、一時期の遺構面の可能性がある。この層は、東西の基壇状の高まりから落ちるところでは厚くなり、特に東側では遺物を数多く含んでいる。そして、これらの層の下位となる茶褐色土(18)や黄褐色粘質土(19)など、厚さ10cm程度の層が建物造営時の構築面にあたる。この標高は、33.40m前後である。また、この下位の暗褐色土(20・21)が整地層にあたり、その下位では砂質土、砂層の自然堆積となる。東の87次調査区では、旧耕作土・床土下位に褐色土の遺構検出面があり、東端では地山層となる暗紫色粘土層が露出している。

暗紫色
粘土層**83次調査区 (Fig.20)**

不丁地区北半で建物が密集する。調査区南側に残る畦を取り込む形で、東西方向に土層観察を行った。旧耕作土・床土下位に茶灰色砂(5)や茶灰色砂質土(6)、灰色砂(7)下位で東限溝S D2340を確認することができる。標高は32.50m前後である。このS D2340と西側の粘土採掘遺構S X2342との前後関係については、土層観察箇所では捉えることはできていないが、出土遺物や周辺の状態から粘土採掘遺構は溝埋没以降の掘削と考えられる。さらに西側の土坑S K2344、S E2346についても耕作土下位の茶灰色砂質土直下で確認できる。この付近は黄褐色粘質土、灰色砂層が地山となる。

粘土採掘
遺構**84次調査区 (Fig.21)**

不丁地区中央付近で調査区南壁の東西方向に、中央畦で南北方向にそれぞれ土層観察を行った。南壁では、旧耕作土・床土下位に遺構廃絶後の包含層となる灰褐色土(3・4)があり、その下位に遺構検出面を直接覆う暗茶灰色土(5)、黄茶色土(6)、暗黄茶色土(7)がある。この下位で建物柱掘方を確認した。遺構検出面の標高は、32.60mである。南北方向の土層観察では、旧耕作土・床土の下位に灰褐色土(3)・黄灰色土(4)、茶灰色土(7)、焼土層の茶赤褐色土(8)がある。また、中央部付近では、この下位にレンズ状の堆積層(15~18)がある。この堆積状態はS D2419の溝の埋土と理解されているが、流路状の落ち込みを埋めた整地層の可能性もある。このような状態は、浅くなって調査区北側まで続いている。付近では、地山となる暗紫色粘土層や黄灰色砂粘土層が確認できる。

85次調査区 (Fig.21)

不丁地区南半となる調査区において、中央畦の北側を南北方向に土層観察を行った。2面の耕作土の下位に整地層に切り込む東西溝S D2469の埋土(7)を確認できる。この遺構を確認できた地点の標高は、31.60m前後である。整地層は、暗灰色砂質土(8)、暗茶色土(9)、暗茶灰色土(10)である。図示していないが、南の東西溝S D2015も同様に暗灰色砂質土(8)面からの掘削を確認できる。この二つの東西溝の掘削が、付近を整地した後に行われたことは確かである。

整地層と溝

98次調査区 (Fig.22)

不丁地区南半となる調査区の南端壁において、東限溝S D2340と流路S X2480の関係を把握するために東西方向の土層観察を行った。S D2340は、旧耕作土・床土下の灰褐色土(3)

溝SD2340
と流路S X
2480

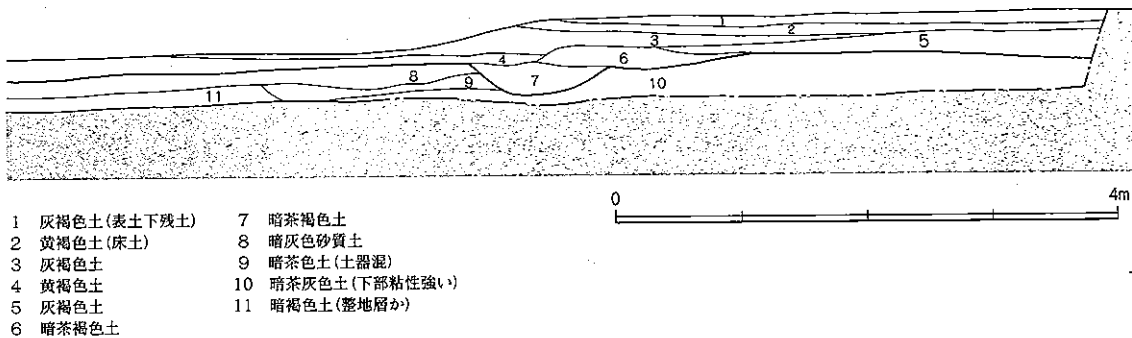
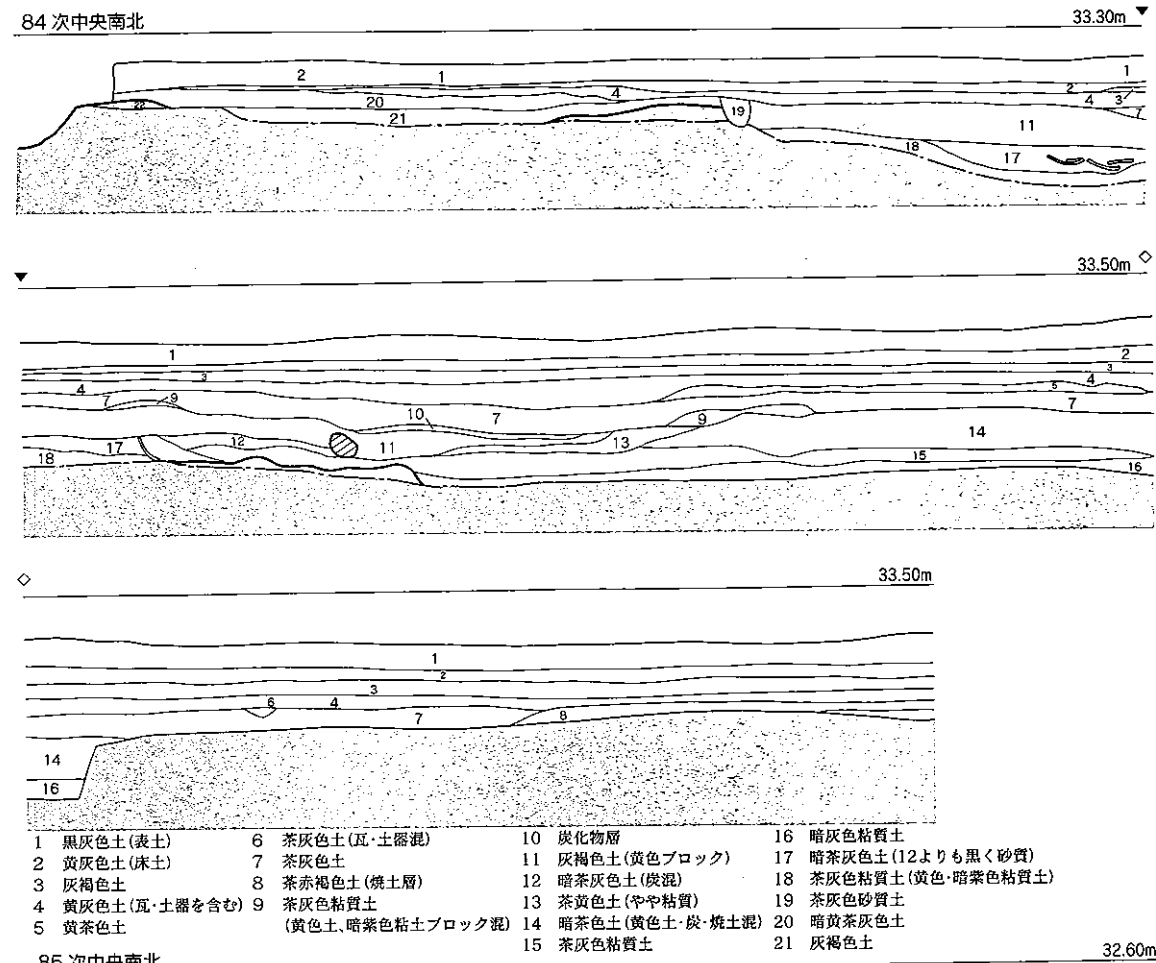
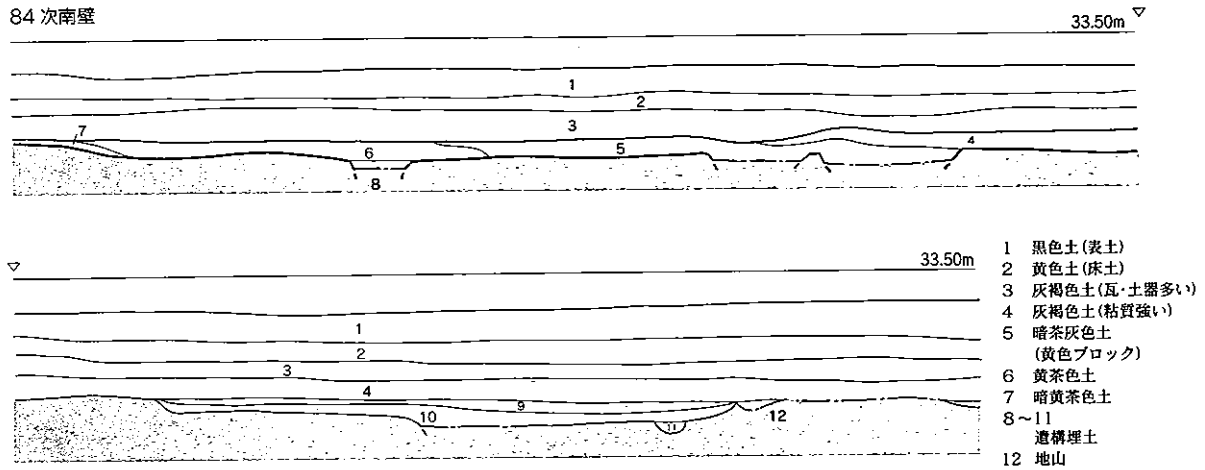


Fig.21 不丁地区 (84・85次) 基本土層図 (2) (1/60)

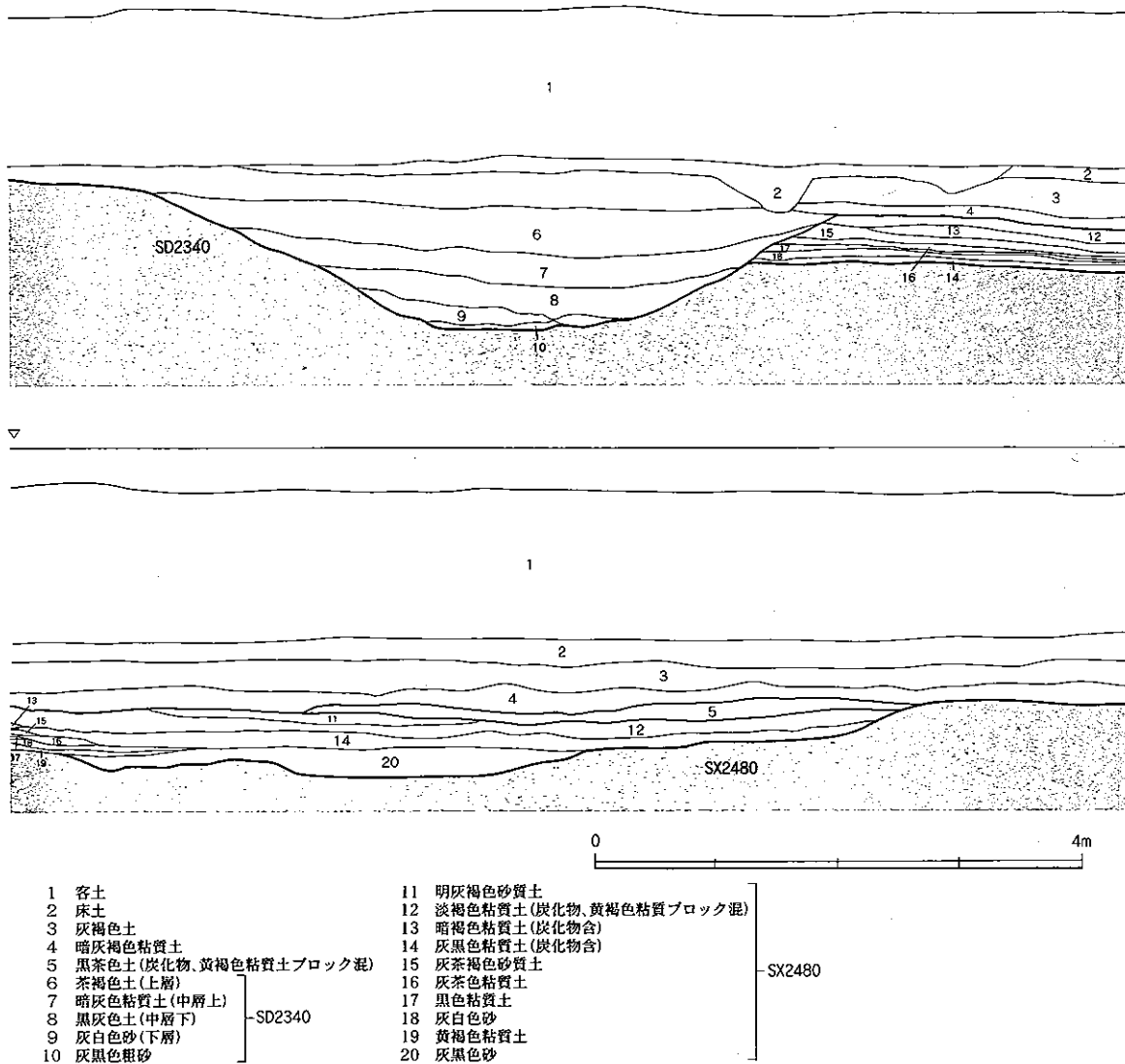


Fig.22 不丁地区 (98次) 基本土層図 (3) (1/60)

や暗灰褐色粘質土 (4), 黒茶色土 (5) の下位で確認できる。SD2340の上層となる茶褐色土 (6) は最終的な埋没を示しており, 下位の堆積層とは色調・遺物の包含状況などは異なっている。中層 (7・8) は暗灰色粘質土で多量の遺物が出土した。この溝の詳細については, Ⅲ章 (3) で詳しく触れている。溝の掘削がみられた遺構面は, 自然流路SX2480の埋土最上層となる淡灰色粘質土 (12) に切り込む形で確認できる。そのため, SX2480を埋めた後に開削している。整地の状況を見る限り, 他に不整合面は見られず大きな時間差は無く行われている。

以上, 各調査区における, 重要遺構に関する土層をみてきたが, それぞれに共通するのは, 床土下位には, 灰褐色土系の包含層が存在し, その下位に遺構が切り込む整地面を確認することができる。遺構の残存状況を見る限り, 当時の生活面や最終埋没面が残っている可能性は低く, 土層堆積に不整合面が認められる。そのため, 南北に長い調査区において, 層位から一時期における生活面を復元して理解することは困難な状況である。また, 溝SD2340溝底の比高差をみると, 南北両端部で1.85mの高低差を持って北から南へ流れていたことが分かる。生活面 溝の高低差についても, ある程度の高低差はあったと考えられる。

第Ⅲ章 検出遺構

(1) 建物 (Fig.23)

不丁地区では、第17・76・83～85・87・90・98・129・147・187次調査において大小64棟の建物を検出しているが、基本的には古代の大型建物が南北及び東西方向に配置され、小型建物は東に5°程振って築造されている。なお、一棟のみであるが、礎石建物 (SB370) も存在する。また、区画整理以前においては、「不丁」・「大楠」地区の南側にあたる「油田」地区とに小字境の段落ちが存在していたが、その段落ちは鋸歯状をなしており (Fig. 2小字図参照)、旧御笠川流路の痕跡とみられる。実際、発掘調査で建物を確認している範囲は段落ち以北までであり、段落ち以南は砂礫が厚く堆積し、御笠川の氾濫原となっている。従って、不丁地区の南側においては、何処まで建物群が広がっていたかは不明瞭である。

SB370 (Fig.24, PL.13)

17次調査区の東半部で検出した南北棟の礎石建物で、北半部2間分は坪掘りトレンチで確認した。建物規模は梁行2間、桁行6間以上であるが、南妻部の掘方が南隣の83次調査区までは伸びていないことから桁行7間規模の建物となる。残存する掘方14個中、根石のみ存在するのは10個で、礎石が存在するのは2個であるが、そのうち1個は動かされている。柱間は根石のみ残る掘方が大半であるため不明瞭であるが、梁・桁行とも3.0m等間とみられる。

礎石建物

礎石Aは長さ97cm、幅76cm、厚さ50cmの直方体を呈し、上面は平坦であるが柱座は設けていない。礎石Bは長さ131cm、幅90cm、厚さ45cm程を測る三角形を呈し、掘方も歪であることから礎石が引つ繰り返されている可能性がある。根石を残す掘方は長軸1.6m、短軸1.2～1.3m程で、何れも礎石抜き取り時の段がみられ、底面には長さ15～30cm大の根石が遺存する。建物方位は北から東に30°振っている。また、建物の東側1.6～1.7mの位置に南北溝SD368が、西側1.3～1.4mの位置に南北溝SD374が平行して存在することから、両溝は建物に伴う排水溝の可能性を有する。

建物排水溝

SB381 (Fig.25)

概報時点では、遺構番号を付していなかったが、今回は建物として報告する。礎石建物SB370に西接する掘立柱建物であるが、SB370の南半部が削平を受けるため両者の前後関係は判然としない。南北方向2間以上、東西方向1間以上を検出したが、南北方向の柱間は北から2.25m・2.1mで、東西方向が2.7mを測り、政庁前面官衙の建物は梁行よりも桁行の柱間が長いことからみて、当建物は東西棟になると考えられる。柱掘方は長軸1.0m、短軸0.7m程の隅丸方形を呈し、深さは0.2mと著しい削平を受ける。柱痕跡は確認できていないが、北東隅柱から2番目の掘方中央には長軸0.38m×短軸0.22mの楕円形を呈する柱穴があることから、柱径は0.2m程になろう。建物の方位は、柱痕跡が確認されていないため不明瞭であるが、SB370の方位とほぼ等しい。

SB386 (Fig.25)

当建物も概報時点では、遺構番号を付していなかったが、今回は掘立柱建物として報告する。17次調査区南北トレンチの北半部で検出した。調査区の西半部にはピットが無数にあり、建物として報告するのが憚られたが、小型建物は梁行2間、桁行3間規模で、桁行が6m程である

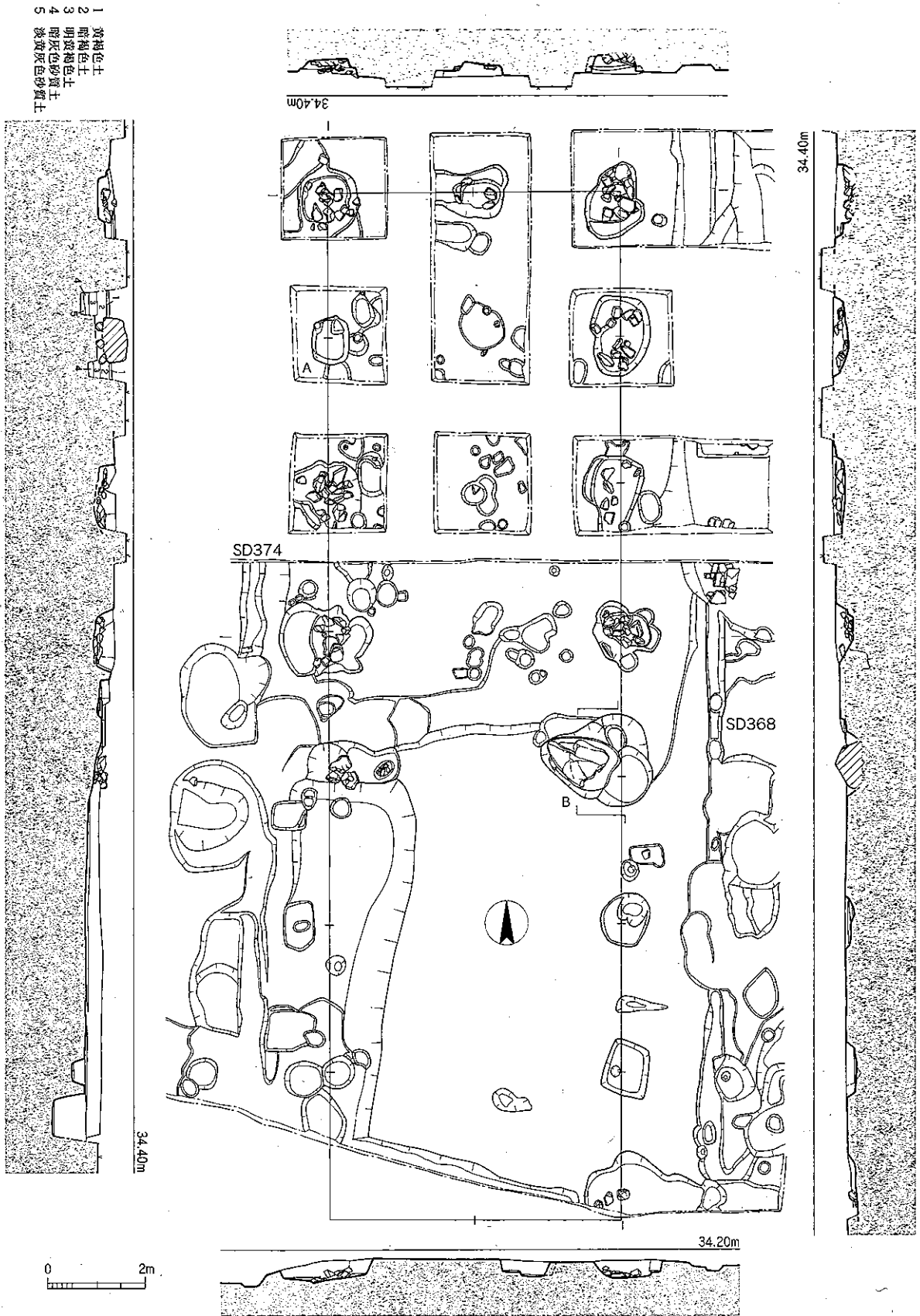


Fig.24 礎石建物 S B 370 実測図 (1/120)

ことから建物とみなした。建物規模は梁行1間以上、桁行3間で、柱間は梁側が1.57m、桁側が北から1.92m、2.05m、2.21mとばらつきがみられる。柱穴は0.3m程の円形を呈し、深さは0.2m程を測る。桁行方位は北から東に8°振っている。

SB2005 (Fig.26)

76次調査区の東端部に位置し、129次調査の総柱建物SB3832と重複するが、両者の前後関係は判然としない。当初、梁行1間×桁行2間以上の掘立柱建物としていたが、その後、東隣接地を129次として調査したところ東妻部を確認し、梁行2間、桁行4間以上の東西棟と判明した。しかし、西妻部の柱掘方は溝SD2010と重複するため確認し得ていないが、おそらく桁行5間規模かと思われる。

柱間は桁側が2.25～2.66mとばらつきがあり、梁側が2.22m・2.45mを測る。柱掘方は径0.6m程の円形を呈するが、北東隅柱掘方のみ長軸1.1mの隅丸方形を呈することから柱を抜き取った可能性を有する。柱痕跡は25cm程の大きさに、掘方内に角礫・平瓦片・埴土を入れているものもあった。桁行方位は北から東に3°30'振っている。

SB2018 (Fig.26)

76次調査区の南西隅部で検出した掘立柱建物で、溝状遺構と重複するものの前後関係は判然としない。また、大半が調査区外にあるため現状で南北1間以上、東西2間以上の建物規模であるが、柱間は南北が2.03m、東西が隅柱から2.2m・2.65mを測り、東西方向の柱間が広いことから東西棟の

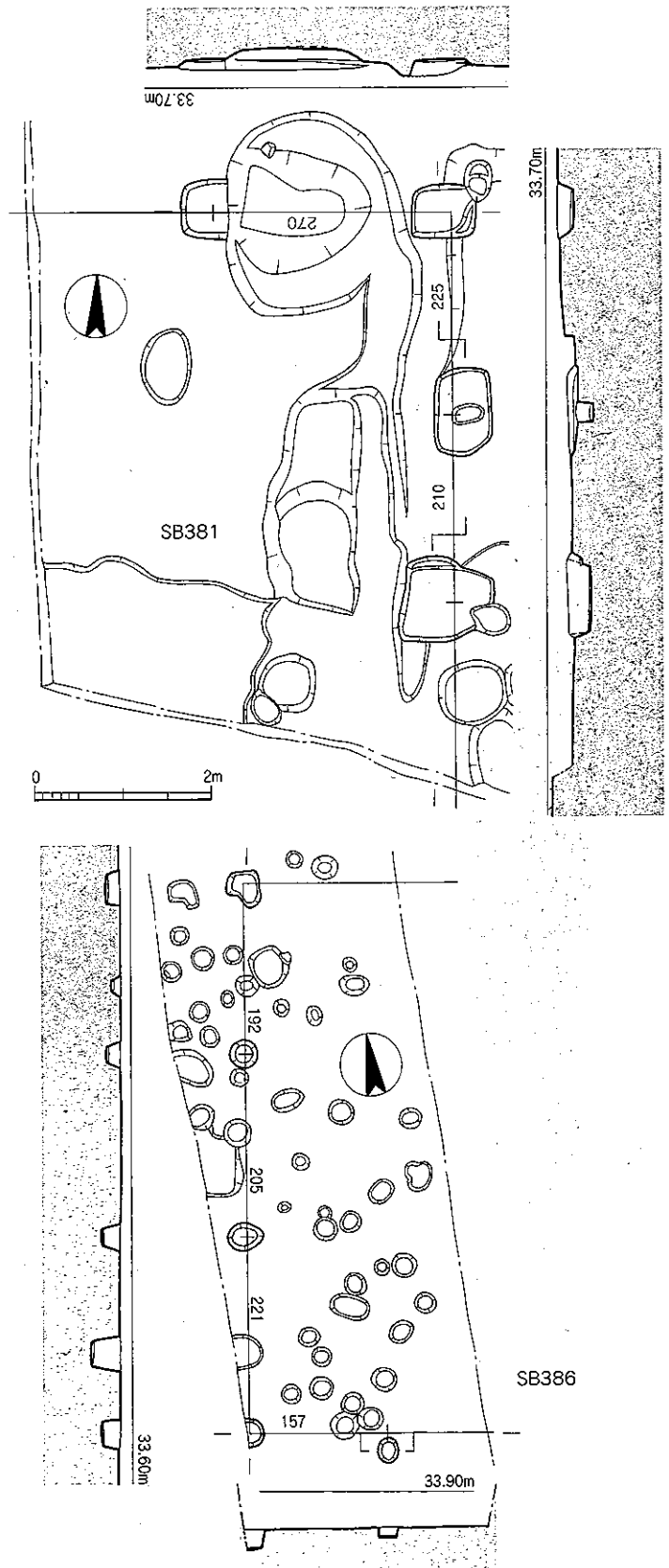


Fig.25 掘立柱建物SB381・386実測図(1/80)

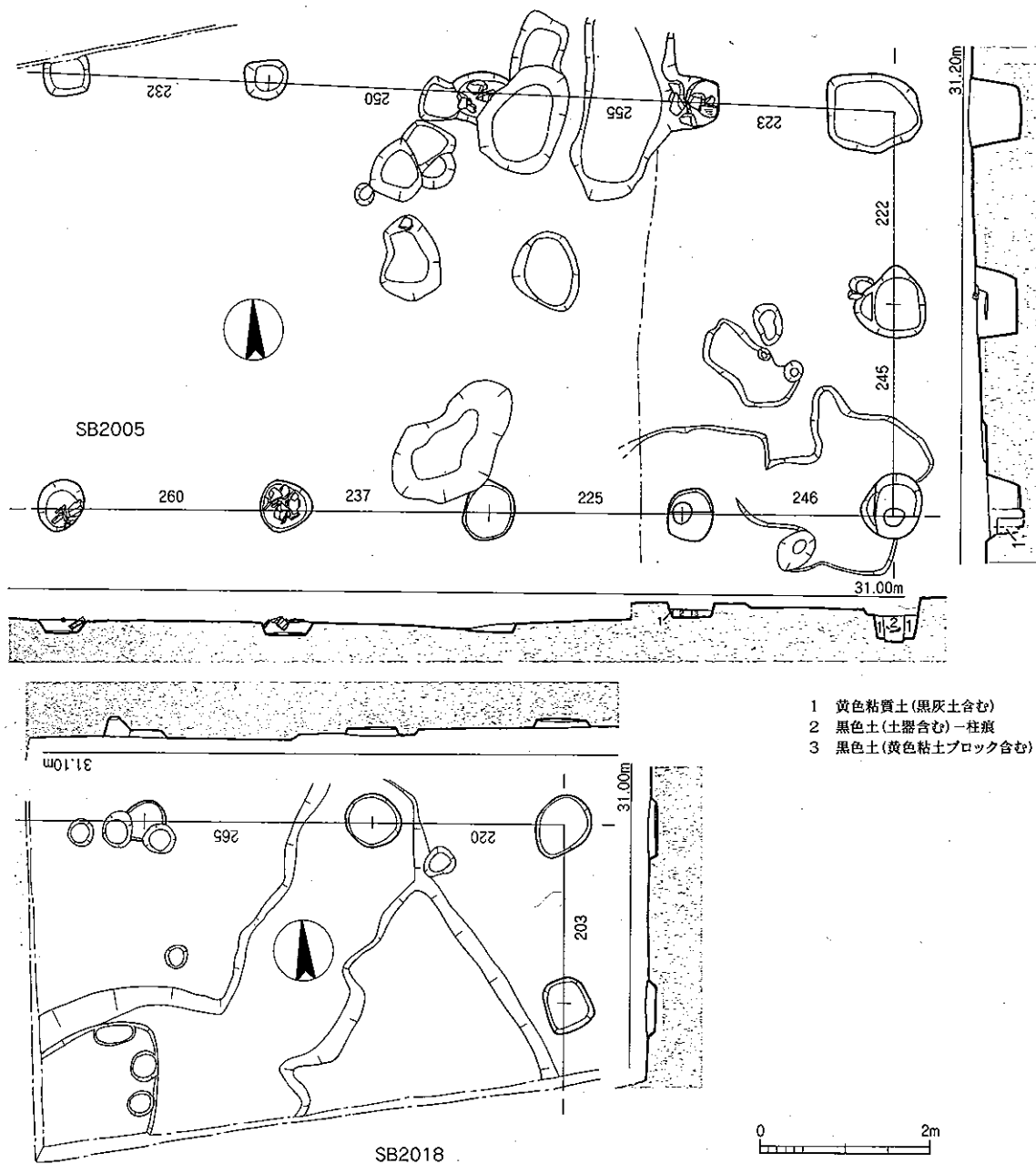


Fig.26 掘立柱建物S B 2005・2018 実測図 (1/80)

建物になると考えられる。柱掘方は径0.6m前後の円形を呈し、深さは削平により10cmを測る程度であった。なお、当建物は大楠地区に含まれるが、76次ということで報告した。

S B 2355 (Fig.27, PL.13)

83次調査区の中央北側及び87・90次調査区の南西端で検出した掘立柱建物である。南側桁行柱列は東西溝S D2350に切られ、北側梁行柱列の一部は掘立柱建物S B2515に切られる。当建物は概報時点では梁行3間、桁行5間の東西棟建物としていたが、検討の結果、83次調査検出の柵S A2360のL形部分及び87・90次調査検出の柵S A2511が当建物に伴う妻廂部分と考えられることから梁行3間、桁行5間の身舎の両妻側に廂を設けた二面廂建物とした。身舎部分の柱掘方は0.9～1.2mの隅丸方形を呈し、深さ0.8m前後で、廂部分の柱掘方は1.0m

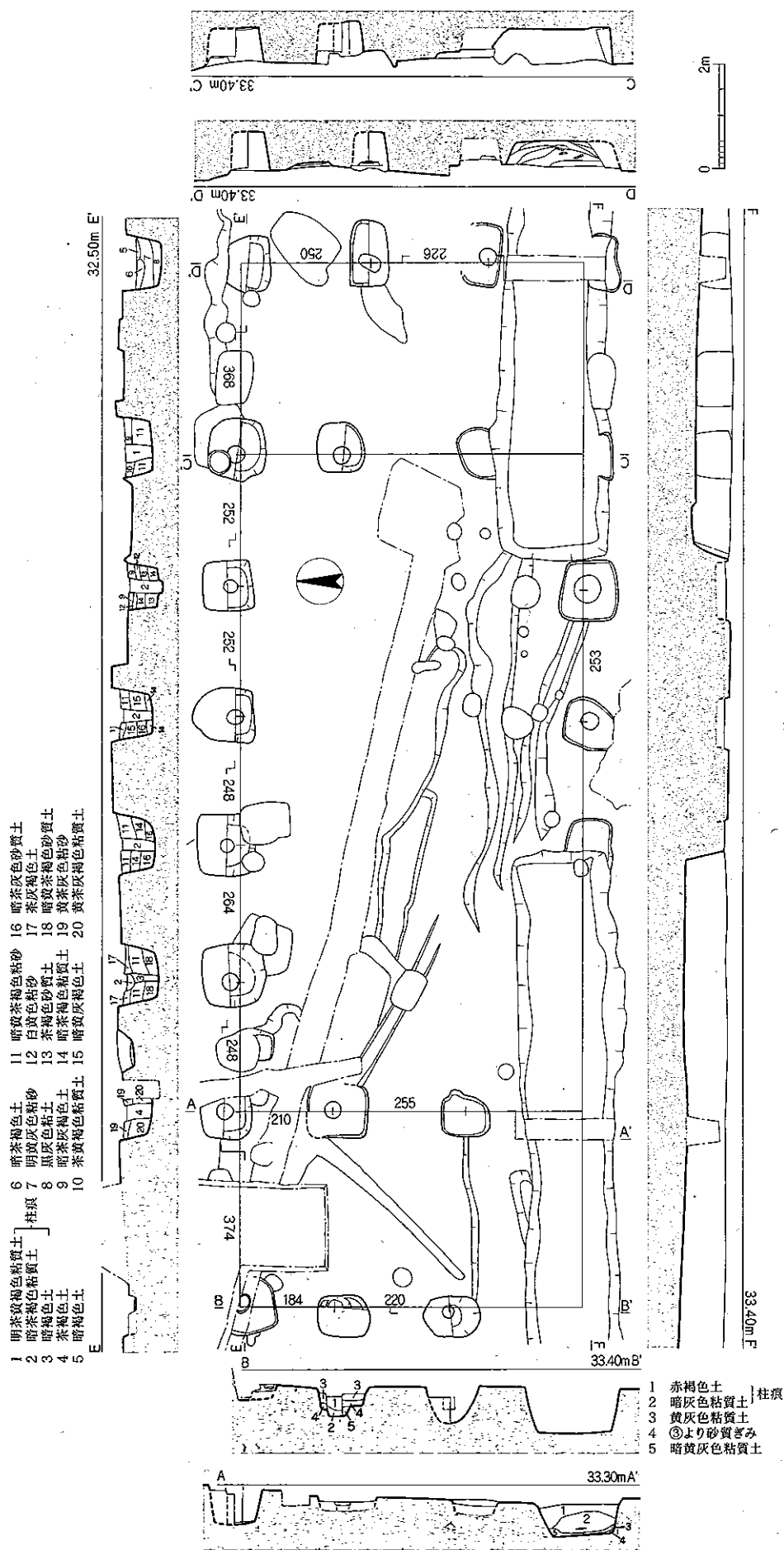


Fig. 27 掘立柱建物 S B 2355 実測図 (1/120)

とやや小振りの印象を受ける。大半の柱掘方に径20～25cmの柱痕が遺存しており、柱間は身舎部分が2.48～2.64mで、廂部分が3.68m・3.74mと1m程広い。梁行方位はほぼ北を示す。

S B 2360 (Fig.28, PL.13)

83次調査区の北側中央部で検出した掘立柱建物で、北半部は調査区外にあり、溝S D 2359、土坑S K 2358に切られ、土坑S K 2363と重複する。概報時点ではL字形をなす東西方向8間の柵として報告していたが、遺構検討の結果、8間目の東端柱穴はS B 2355の西側妻廂柱穴とみなしたため今回は梁行1間以上、桁行7間(18.03m)の東西棟建物として考えた。柱掘方は一辺0.9～1.3mの隅丸方形ないしは円形を呈し、深さは浅いもので0.4m、深いもので0.9mを測る。柱痕跡は20～30cmの円形を呈し、桁側の柱間は2.28～2.78mとばらつきがみられる。建物方位は北から東に1°振っている。

S B 2365 (Fig.29, PL.13・14)

83次調査区の北西端部に位置する掘立柱建物で、南側桁行柱列は東西溝S D 2350に切られ、北側桁行柱列も東西溝S D 2359に切られ、東梁行は柵S A 2367と重複する。梁行2間(4.41m)、桁行5間(14.72m)の東西棟建物で、前述のS B 2360の1.8m西側に柱筋を揃えて築造される。南側桁行の柱掘方は溝に削平されるため規模は定かではないが、北側桁行の柱掘方は長軸1.74～2.05m、短軸1.24～1.65mを測る隅丸長方形を呈し、深いもので0.7mの深さであった。掘方が長大であることから柱抜き取り穴と重複している可能性を有する。柱根を2個留めており、桁側の柱間は3.0m、梁側の柱間は2.16～2.42mを測る。また、掘方底面に花崗岩を据え、礎盤としているものもみられる。梁行の建物方位はほぼ北を示す。

花崗岩の礎盤

S B 2366 (Fig.28)

83次調査区の北西端で検出した掘立柱建物で、大半が調査区外に伸びるため詳細は不詳。柵の可能性もあるが柱掘方が大きいことから建物として報告しておく。柱列は西側には伸びないことを確認しているので、南北棟建物とすると南妻側柱列3間分となり、東西棟建物とすると南桁行3間以上を検出したこととなる。柱間は西側から1.96m、2.32m、1.92mとばらつきがある。掘方は隅丸方形を呈し、一辺0.72～1.1m、深さ0.2m前後を測る。建物方位は北から西に2°30'振っている。

S B 2370 (Fig.30, PL.14)

83次調査区の北西端で検出した。S B 2365のすぐ北側に位置する掘立柱建物である。梁行2間(2.4m)、桁行3間(5.2m)の総柱建物で、東西方向に桁行を置く。柱掘方は一辺1m前後の隅丸方形を呈し、深さは0.5m程の遺存状況である。柱痕跡がほとんど検出されていないので柱間は不確定であるが、梁側は2.1m(7尺)、桁側は1.6～1.88mとばらつきがみられる。梁行方位はほぼ北を示す。なお、不丁地区における総柱建物は、当建物と129次調査検出のS B 3832の2棟のみである。

数少ない総柱建物

S B 2380A・B (Fig.31, PL.15・16)

84次調査の中央やや南側に位置し、掘立柱建物S B 2390を切っている。梁行2間、桁行5間の東西棟建物で、同一場所で建て替えがなされており、古期建物をAとし、A建物西側の新期建物をB建物とした。また、S D 2403は当建物をコ字形に圍繞しており、建物に伴う区画施設とみられる。A建物の柱掘方は0.9～1.7mの隅丸方形を呈し、深さは0.6～0.8mと深

同一場所で建て替え

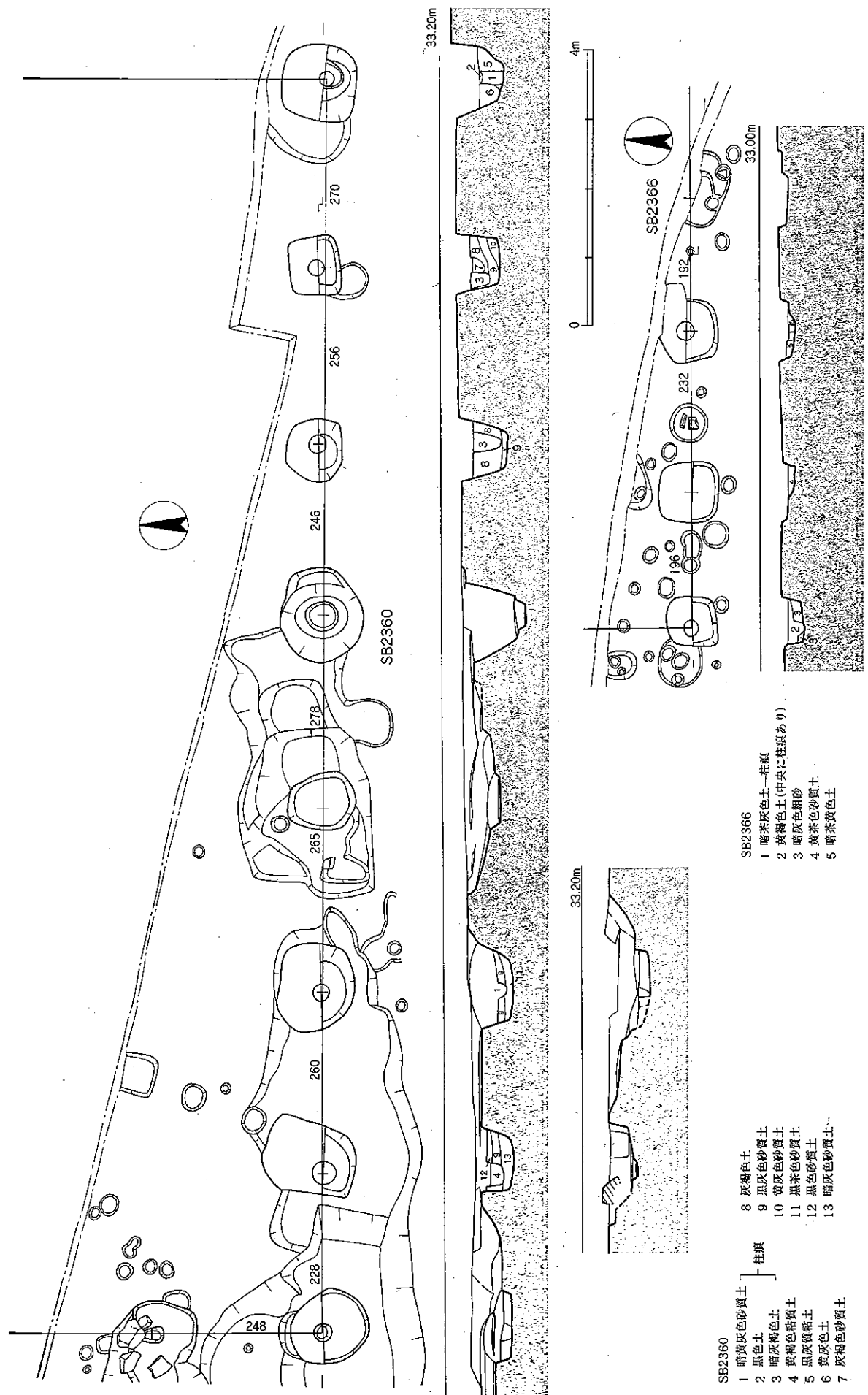


Fig. 28 掘立柱建物 S B 2360・2366 実測図 (1/80)

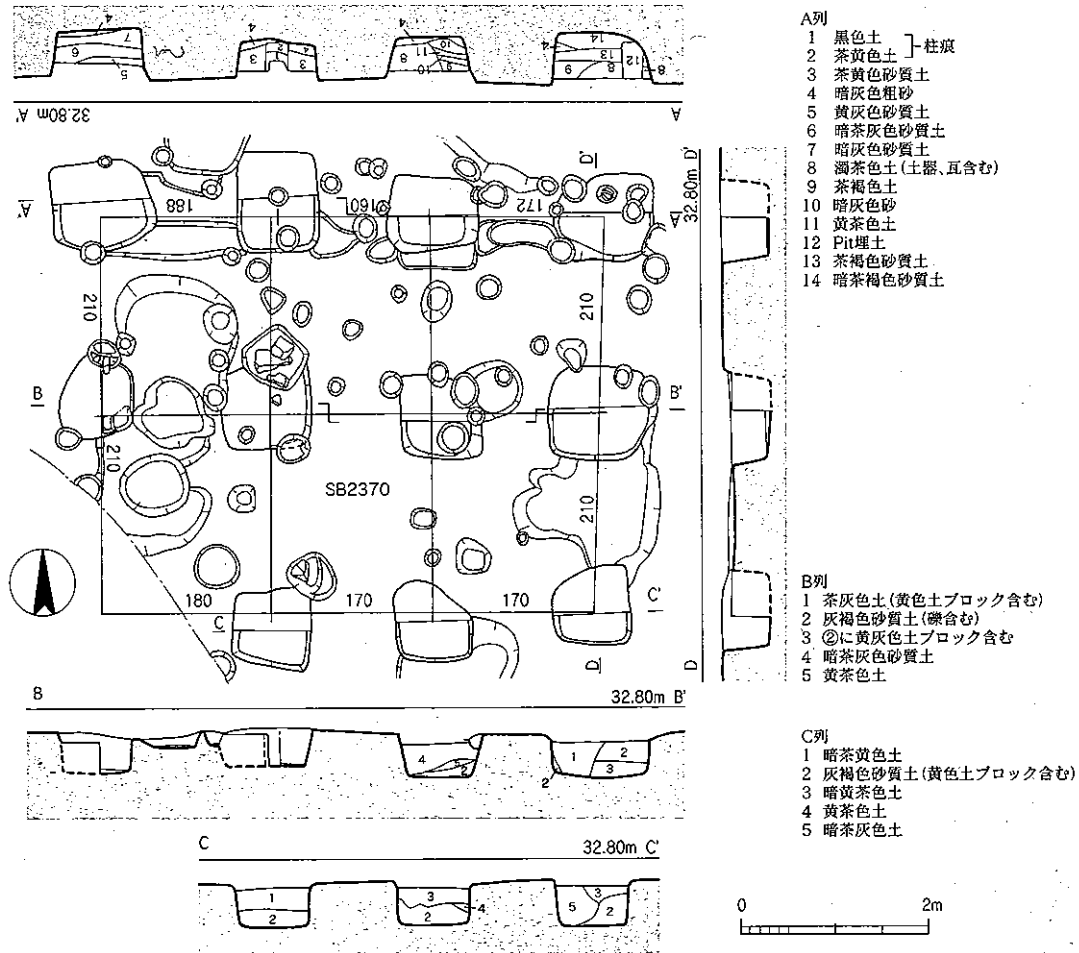


Fig.30 掘立柱建物 S B 2370 実測図 (1/80)

めであった。柱根が5ヶ所に遺存しており、梁側の柱間は2.7m (9尺) 等間で、梁行長5.4m、桁側の柱間は2.4m (8尺) 等間で、桁行長12.0mを測る。柱根は径22～25cmを測り、底部に花崗岩の割石を入れている掘方もある。また、柱根の沈下痕跡がみられないことから屋根は板葺であったと想像される。建物の方位はほぼ東西方向を示す。

B建物はA建物の西0.85mにずらして建てているが、その際A建物の柱を抜き取っていない。掘方は0.7～1.0mの不整形を呈し、A建物より小規模で、深さも0.4m前後と浅めである。南西隅柱のみ径25cmの柱根が遺存しており、底部に瓦・花崗岩を入れて礎盤としている掘方もみられる。柱根・柱痕跡が不明瞭ながら梁側の柱間は2.7m (9尺) 等間で、梁行長5.4m、桁側は2.33～2.58mとばらつくが、桁行長12.26mを測る。方位はほぼ東西方向を示す。

S B 2383 (Fig.32)

84次調査区の南側で、S B 2380Aのすぐ西隣に位置する。柵 S A 2384・2386、溝 S D 2403と重複する。建物規模は梁行1間 (4.65m)、桁行2間 (5.07m) で、総柱建物ではないものの梁行が長く方形を呈することから倉庫とみられる。掘方は0.7～0.9mの隅丸方形を呈し、深さは0.26～0.52mであるが、桁行中央の掘方は他に比して浅めである。桁側の柱間は2.45～2.55mとばらついている。また、▲印を付した柱穴は梁行の中央にあり、径20cm程と小さいが束柱柱穴の可能性が有る。桁行方位は北から東に2°振っている。

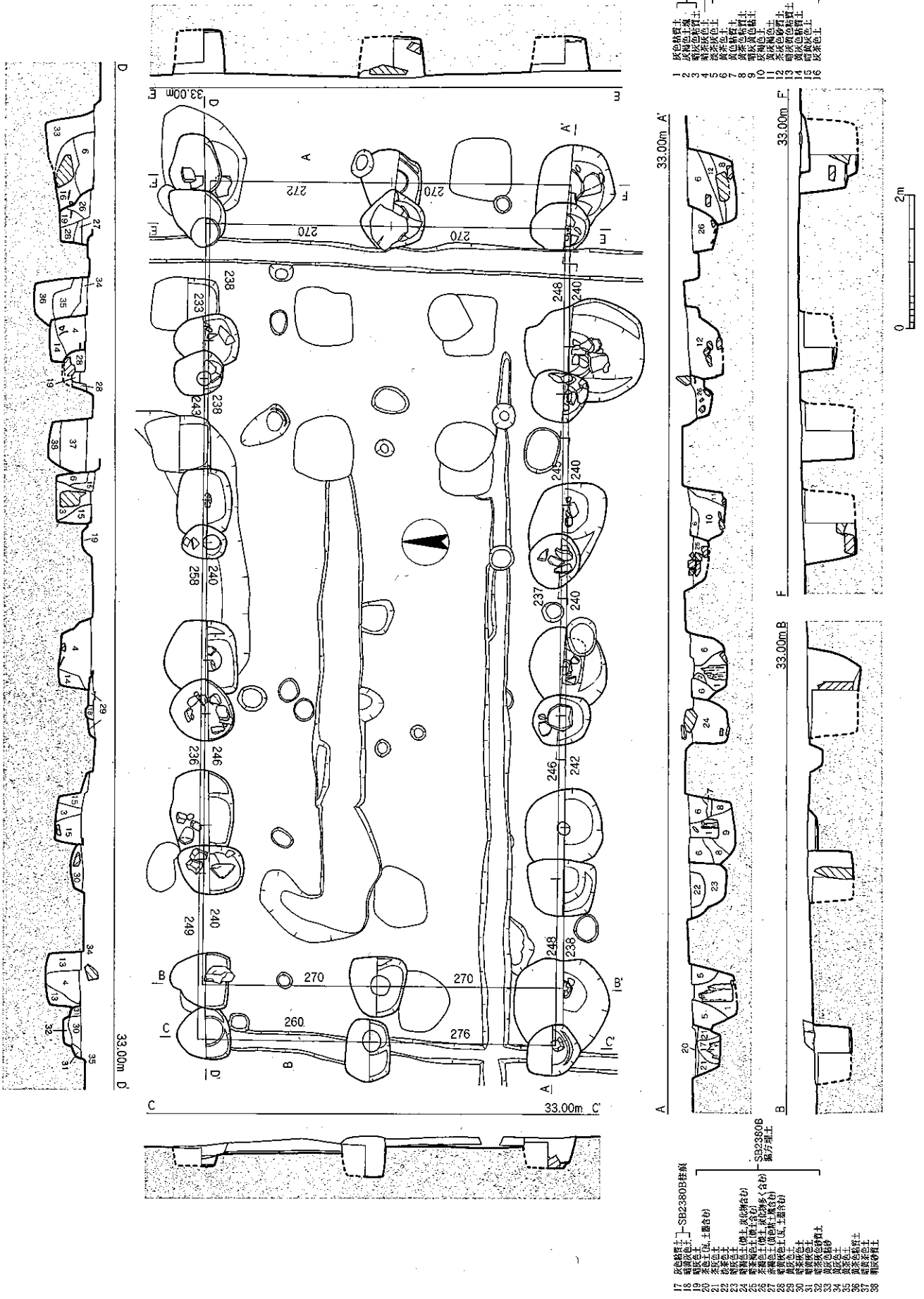


Fig.31 掘立柱建物 S B 2380 A B 実測図 (1/80)

S B 2385 (Fig.32, PL15)

概報時点で掘立柱建物としていた遺構を柵 S A 2381・2382に変更したため、S B 2400の東側で建物として認識した遺構に新たに当番号を付した。84次調査区の南側中央に位置し、溝 S D 2419, 土坑 S K 2453に切られる。現状で東西1間以上、南北2間以上の規模であるが、+印の位置で柱穴を確認できていないこと、▲印の位置の抉れが柱穴の痕跡とすれば、梁行1間、桁行2間の南北棟建物に復元されよう。柱穴は50cm程の円形を呈し、深いもので80cmを測り、北東隅柱から東1個目の柱穴には柱根が遺存していた。桁行方位は南北方向を示す。

S B 2388 (Fig.32)

84次調査区の東端部に位置し、落込 S X 2336に切られる。梁行1間(3.0m)、桁行3間(8.77m)の小規模な南北棟建物である。柱穴は東桁行側がやや大きく、0.6～0.7mの円形もしくは楕円形を呈し、深さも西側に比して0.4mと深めである。西桁行側の柱穴は径0.3～0.4mで、深さも0.15m程と浅く、控え柱的である。なお、当建物は後述の門建物 S B 2450と規模的に等しく、東桁行の延長線上で当建物に接続する柱穴列は確認されていないものの、S B 2450に取り付け柵 S A 2451の東延長線とは直交関係にあり、当建物も門建物と考えておく。桁行方位は北から西に1°30'振っている。

S B 2390 (Fi.33, PL.16)

84次調査区の中央やや東側に位置し、掘立柱建物 S B 2380 A B に切れ、南北溝 S D 2391と重複するが、S B 2390→S B 2380 A→S B 2380 B→S D 2391(矢印は古→新)の切合い関係から溝が最も後出する。現状で梁行2間(4.2m)、桁行2間(4.3m)の身舎の西側に廂を設けた片廂建物である。当初、梁行2間、桁行3間の総柱建物として精査したものの中央の柱掘方は検出できなかった。S B 2383同様、機能的には倉庫とみられる。

柱掘方は一辺1m前後の隅丸方形を呈し、深さは0.8mと深めである。大半の掘方に柱抜き取り穴がみられ、正確な柱間は不明瞭であるが、梁側の柱間が2.15m等間、桁側の柱間が2.1m(7尺)等間に復原した。梁行方位はほぼ北を示す。

S B 2395 (Fig.34, PL.15・16)

84次調査区の南側やや西寄りに位置し、掘立柱建物 S B 2425を切り、S B 2400と重複する。なお、S B 2400の掘方とは直接切り合っていないが、当建物が後出する。梁行2間(4.81m)、桁行2間以上の南北棟建物で、南半は調査区外に伸びる。柱掘方は0.7～0.9mの隅丸方形を呈し、深さは0.2～0.4mを測る。梁行中央の掘方に径16cmの柱根が、両隅柱に柱痕跡が遺存しており、梁行の柱間は東から2.35m・2.46mを測るが、8尺を基本としよう。桁側の柱間は柱痕跡を確認した掘方が一つしかなく、柱間は定かではないが、北東隅柱から1間目が2.62mで、梁行に比して30cm程長い。梁行方位は北から東に2°30'振っている。

S B 2400 (Fig.34, PL.15～17)

84次調査区の南側やや西寄りに位置する南北棟建物で、掘立柱建物 S B 2395・2415 A B・2425に切られる。切り合い関係は、S B 2400→S B 2425→S B 2395(矢印は古→新)の順で、三者では最も古い。桁行柱列の北端から次の掘方間にも柱穴があることから梁行2間(4.92m)、桁行5間の両妻側に廂を付設した妻廂建物とみられるが、南妻側は調査区外にある。柱 妻廂建物掘方は長軸1.2～1.5mの隅丸方形を呈し、深さは深いもので0.6mを測る。また、東側桁行の

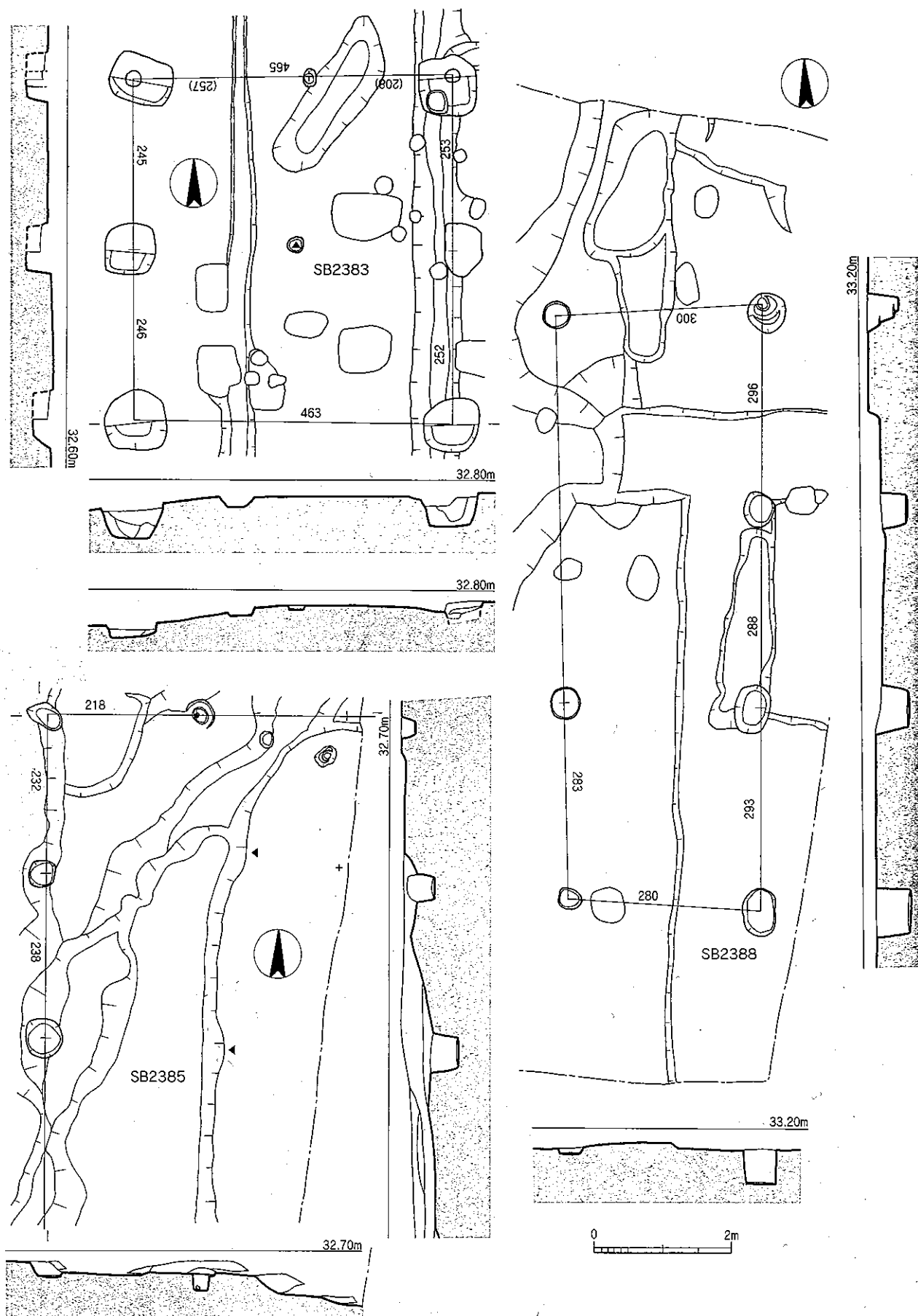


Fig.32 掘立柱建物 S B 2383・2385・2388 実測図 (1/80)

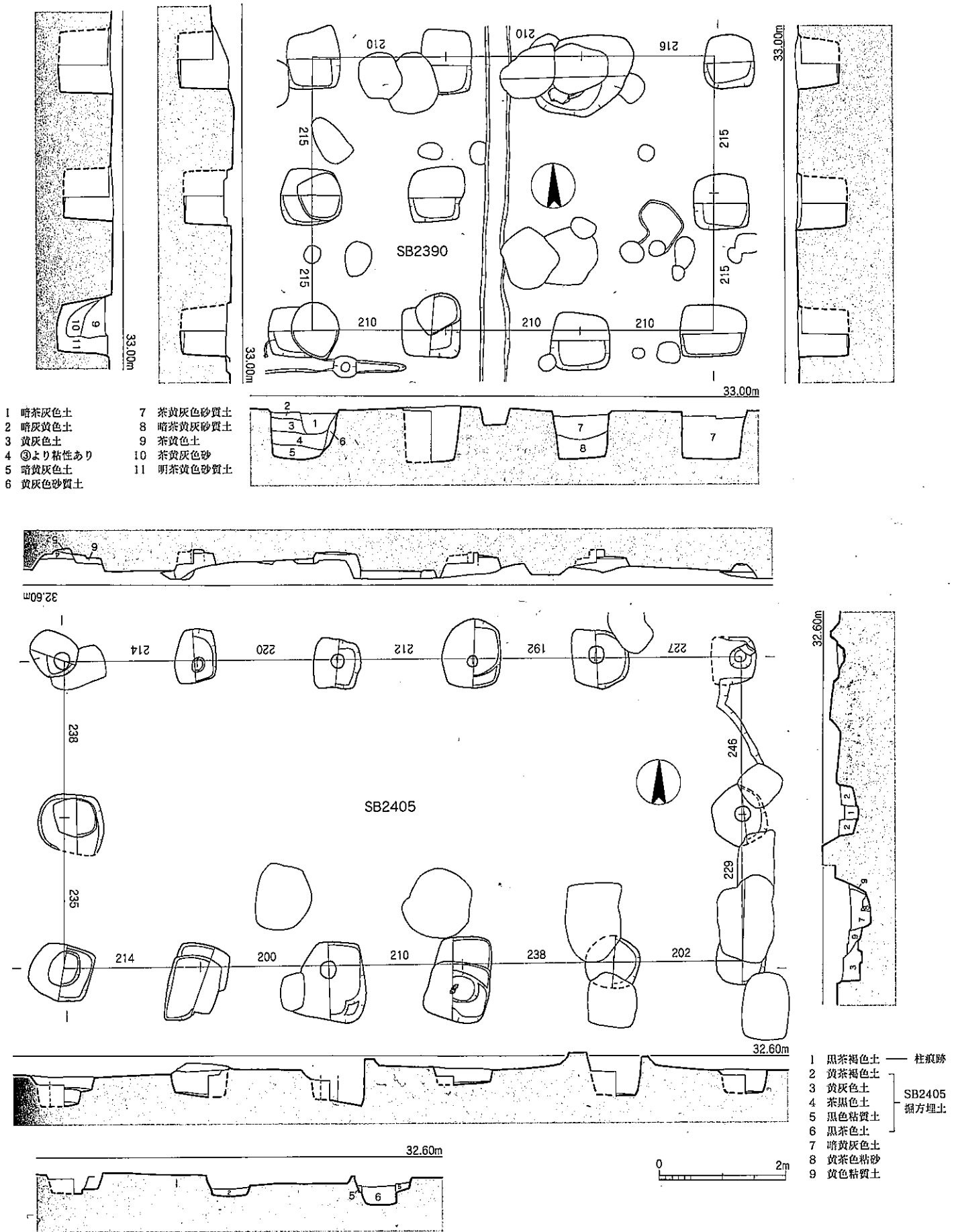
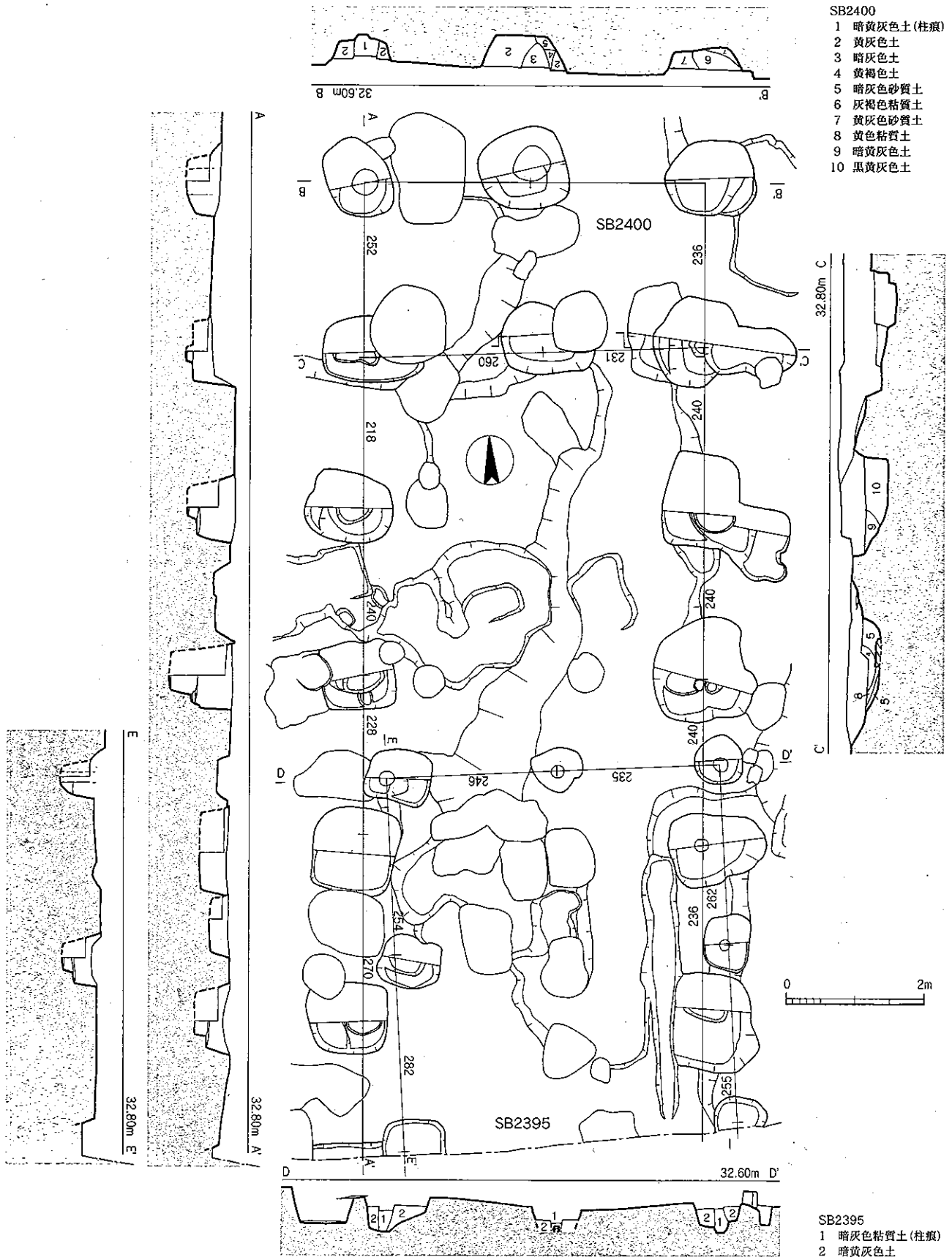


Fig.33 掘立柱建物 S B 2390・2405 実測図 (1/80)



掘方は別の柱穴に切られている。この柱穴は柱の抜き取り穴とみられるが、西側桁行掘方にはそれがないことからこの柱穴は建物の掘方と考えられ、別建物が東側に展開する可能性がある。なお、柱痕が遺存していないため柱間は定かではないが、梁側2.31m・2.6m、桁側は2.18～2.7mとばらつく。桁行方位は2° 30'を示す。

SB2405 (Fig.33, PL.15・17)

84次調査区の西側に位置し、掘立柱建物SB2410・2415ABに切られる。切り合い関係は、SB2405→SB2415AB→SB2410(矢印は古→新)の順となる。採土遺構に掘削されるため掘方の遺存状況は悪い。梁行2間(4.75m)、桁行5間(10.68m)の東西棟建物である。柱掘方は一辺0.7～1.0mの隅丸方形を呈し、深いもので0.7mの深さであった。梁側の柱間は2.35～2.46mであることから8尺を基本とする。桁側の掘方には径20cm前後の柱痕が遺存しており、柱間は1.92～2.27mとばらつく。建物方位は東から北に1°振っている。

粘土採掘による掘削

SB2410 (Fig.35, PL.15・17)

84次調査区の西側に位置し、掘立柱建物SB2405・2415ABを切り、三者で最も後出する。梁行2間(4.75m)、桁行5間(10.68m)の東西棟建物である。柱掘方は一辺0.7～1.0mの隅丸方形を呈し、深さは0.3～0.6mを測る。柱が抜き取られているため柱間は定かではないが、梁側が2.36～2.52mで、桁側は1.98～2.66mとばらついている。北側桁行の東隅柱から3番目の掘方には径18cmの柱根が遺存していた。また、東隅柱と2番目の掘方底部には扁平な石が据えられており、礎盤としている。建物方位はほぼ東西方向を示す。

SB2415AB (Fig.35, PL.15・18)

84次調査区の西側に位置し、掘立柱建物SB2405・2400を切り、SB2410に切られる。概報時点では梁行2間、桁行5間の側柱建物とし、SA2429は同建物の目隠し塀と報告していたが、図面検討の結果、SA2429はSB2415の廂とみられ、今回は梁行2間(4.72m)、桁行5間(12.1m)の身舎の2.73m南側に廂を付設した片廂建物と考えた。

片廂建物

また、全ての掘方は円形の掘方と重複しており、方形の掘方をA建物(古期)、円形の掘方をB建物(新期)とした。廂はB建物に伴う可能性がある。A建物の柱掘方は長軸1.0～1.4mで、B建物の掘方は0.8～1.0mの円形を呈し、柱間は梁側が2.32～2.38m、桁側が2.25～2.65mとばらつく。B建物掘方内には礫が充填され、柱の押さえとしている。廂の柱掘方は0.7m前後と小振りである。梁行方位は北から東に2°振っている。

礫は柱の押さえか?

SB2420 (Fig.36, PL.15・17)

84次調査区の南西部に位置し、SB2425を切り、SA2444と重複する。概報時点では、補足調査で検出した東西方向の柵SA2431・2432を別遺構と捉えて梁行4間、桁行5間の二面廂建物としていたが、詳細に検討した結果、全体として梁行2間(4.6m)、桁行5間(12.0m)の身舎の四周に廂を付設した四面廂建物と考えた。柱掘方は一辺0.8～1.1mの隅丸方形を呈し、深さは0.5m前後を測る。ほとんどの掘方で柱痕跡を確認しており、柱間は身舎の梁側が2.3m、桁側が2.22～2.35mで、廂の梁側が2.03～2.32m、桁側が2.22～2.4mを測る。また、身舎と廂との柱間は梁側が2.1mで、桁側が2.4mと1尺長い。桁行方位は2°30分を示す。

四面廂建物

SB2425 (Fig.37, PL.17)

概報時点では、SB2420に切られる梁行2間、桁行3間規模の建物としていたが、図面検

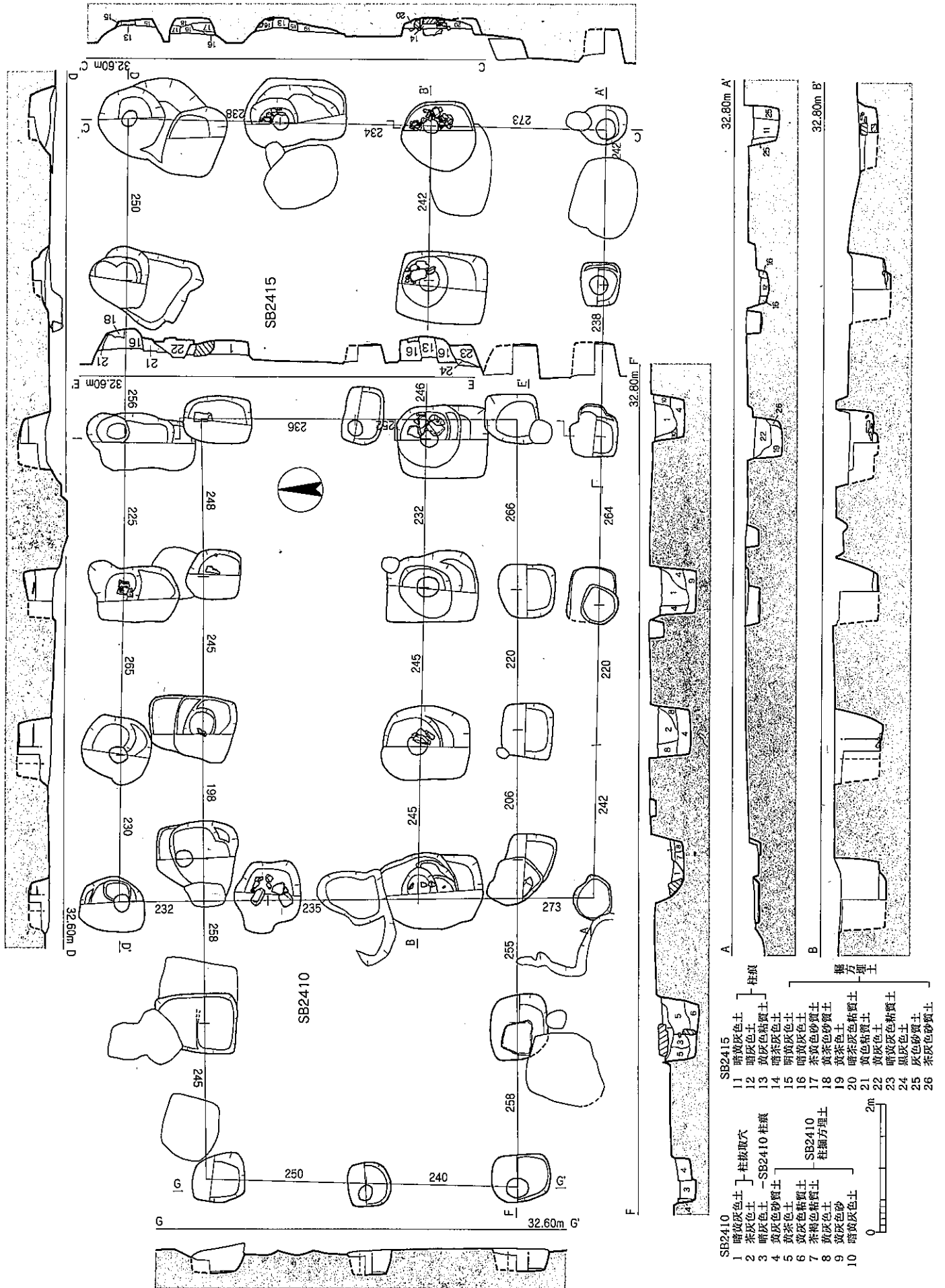


Fig.35 掘立柱建物 S B 2410・2415 実測图 (1/80)

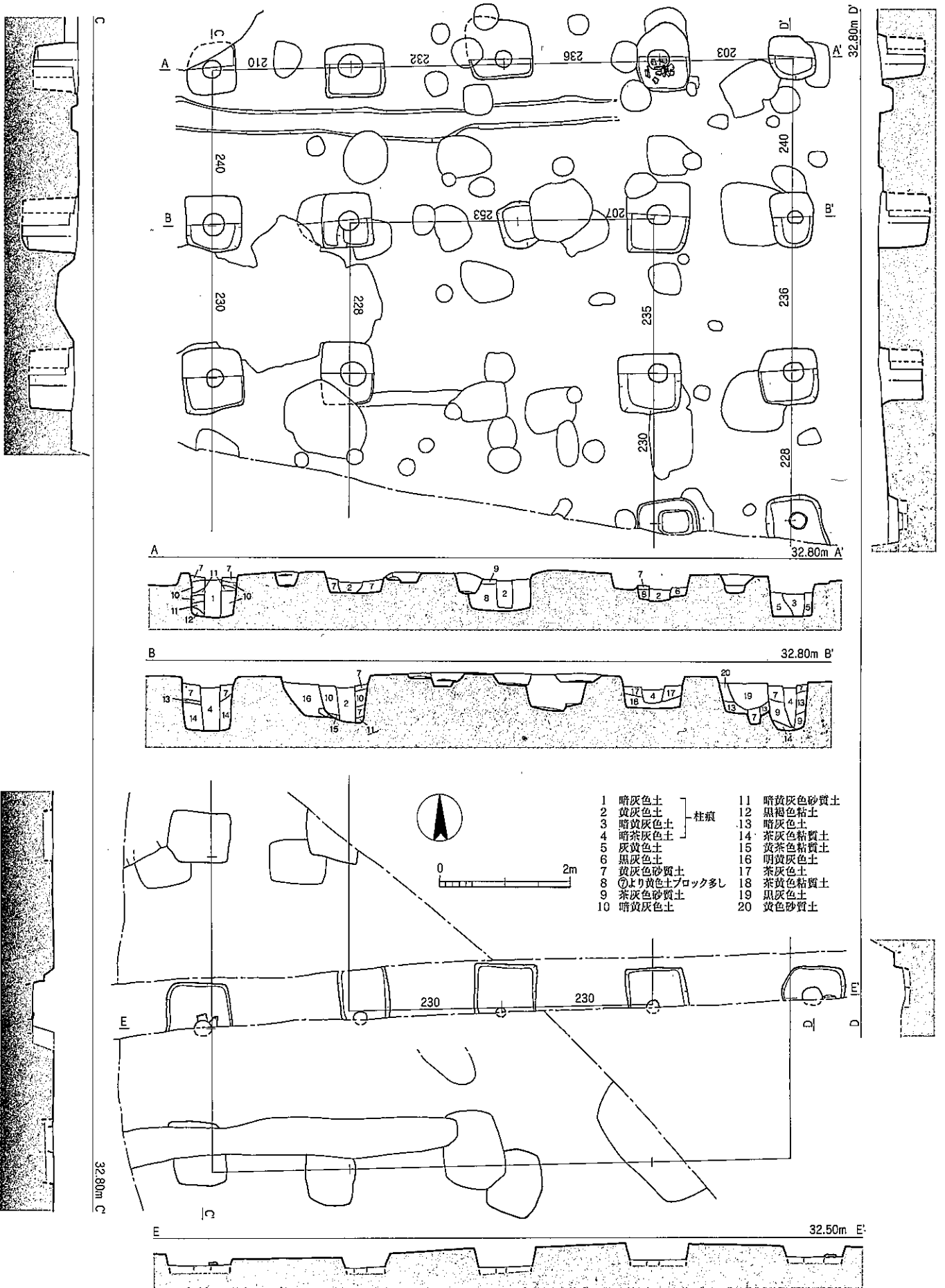


Fig.36 掘立柱建物 S B 2420 実測図 (1/80)

討の結果、S B 2420の身舎部分に該当すると考え、廂に切られる柱穴列を建物として番号を付した。S B 2420に切れ、S B 2400を切る。梁行2間 (4.25m)、桁行2間以上の南北棟建物である。柱掘方は0.6～1.0mの不整形を呈し、深さは0.2mと浅い。柱痕跡を確認し得ていないので柱間は定かではないが、梁側は2.1mで、桁側は2.8～3.1mと長めである。建物方位は北から東に1°振っている。

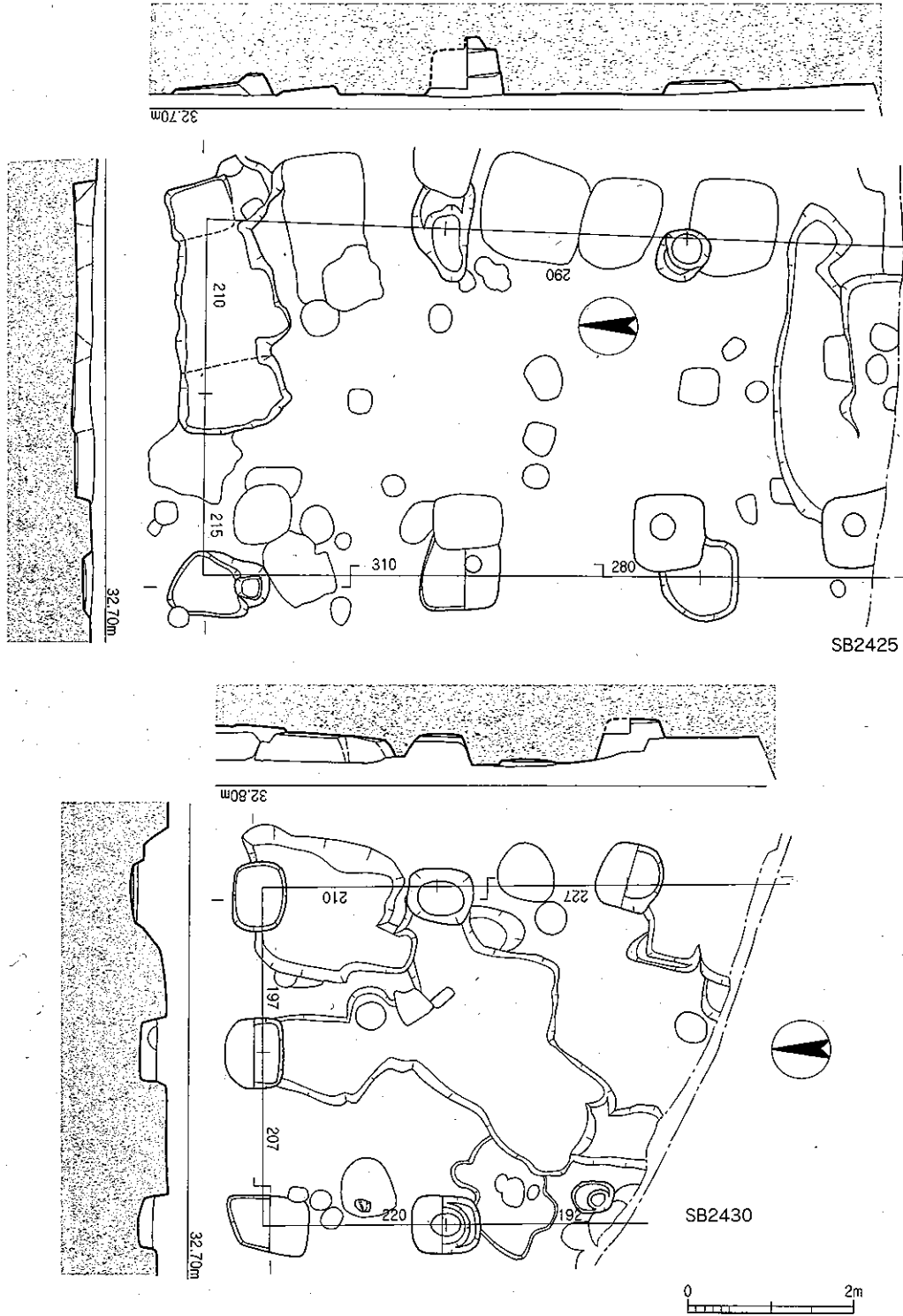


Fig.37 掘立柱建物S B 2425・2430 実測図 (1/80)

S B2430 (Fig.37, PL.18)

84次調査区の南西端で検出した掘立柱建物で、S B2420の2m西側に位置する。採土遺構に切られるため掘方の遺存状態は悪い。梁行2間(4.04m)、桁行2間以上の南北棟建物で、南梁行は調査区外にある。掘方は一辺0.8mの隅丸方形を呈し、深さは0.4m前後を測る。柱痕跡が確認できていないため正確な柱間は定かでないが、梁側が1.97m・2.07m、桁側が1.92～2.22mとばらつく。建物方位はほぼ北を示す。

S B2435 (Fig.38)

84次補足と147次調査で検出した。S A4036に切られ、S B4030A B・4035A B、S A4034と重複するが、最も古くならう。梁行3間(6.4m)、桁行8間(17.0m)の東西棟建物である。柱掘方は0.9～1.3mの隅丸方形で、深さは0.6m前後を測る。大半の掘方で柱痕跡を確認しており、柱間は梁側が1.95～2.36m、桁側が1.73～2.45mを測る。また、東梁側柱列から4番目の掘方間には小振りの柱掘方2個が存在し、東柱或いは間仕切りに関わるとみられ、建物が5間と3間の二部屋に仕切られていたと考えられる。桁行方位は北から南に1° 二室構造
30' 振る。

S B2445 (Fig.39)

84次補足調査区の中央北側に位置し、柵S A2451・2452、井戸S E2434・2436と重複する。また、採土遺構に切られるため遺存状態は悪い。概報時点では東桁行をS A2427としていたが、建物としたためS A2427を欠番とした。梁行3間、桁行7間以上の規模であるが、桁行は7間にならう。柱掘方は長軸1.2m程の隅丸長方形を呈し、深いもので0.7mを測る。柱間は柱痕跡が不明なため定かでないが、梁・桁側とも2.4m程にならう。建物の方位はほぼ北を示す。一応建物としたものの確証はない。

S B2450 (Fig.61)

84次調査区の北西部に位置する。採土遺構に切られ、掘立柱建物S B2445と重複する。梁行1間(2.7m)、桁行3間(8.44m)の小規模な東西棟建物である。柱掘方は0.7m前後の不整形を呈し、深さは0.3mを測る。柱痕跡を確認し得ていないため柱間は不正確であるが、2.8m程にならう。当建物の南側桁行には柵S A2451が接続しており、当建物は薬医門的な門構造を呈すると考えられる。 薬医門的な
構 造

S B2460A B (Fig.40, PL.18・19)

85次調査区の南端から補足調査区にかけて検出した。S B2486に切られ、土坑S K2478と重複する。概報時点では梁行2間、桁行5間の東西棟建物単独とし、S A2465は当該建物に伴う目隠塼と報告していたが、検討の結果、北側桁行は大小二つの柱掘方が重複していること及びS A2465とは柱筋を揃えていることから、S A2465は古期建物(A)に伴う廂と考え、北側桁行の大きい掘方をA(古期)、小さめの掘方をB(新期)の桁行とみなした。

A建物は梁行2間(5.62m)、桁行5間(12.2m)の身舎の北側桁行に廂を付設した東西棟の片廂建物である。柱痕跡を留めており、柱間は2.32～2.5mとややばらつきがみられるものの2.4m(8尺)を基本とする。北側桁行の東隅柱から3番目の掘方には礎盤として50cm大の花崗岩を据えていた。身舎の掘方は0.7～1.2mの隅丸方形を呈し、廂部分の掘方は0.5～0.7mと小振りである。B建物は梁行2間(5.2m)、桁行5間(12.2m)の側柱建物で、北側桁行 片廂建物

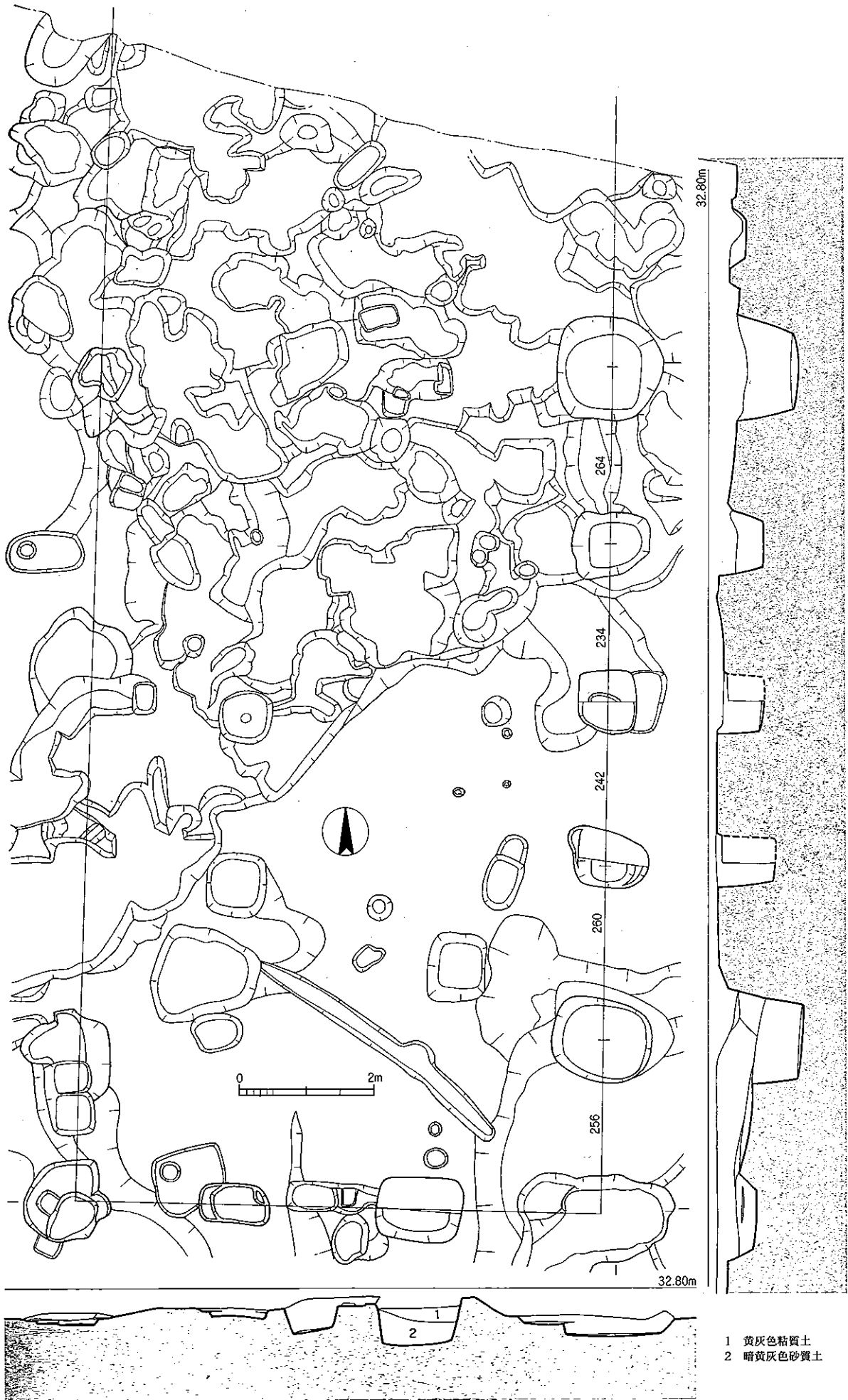


Fig.39 掘立柱建物 S B 2445 実測図 (1/80)

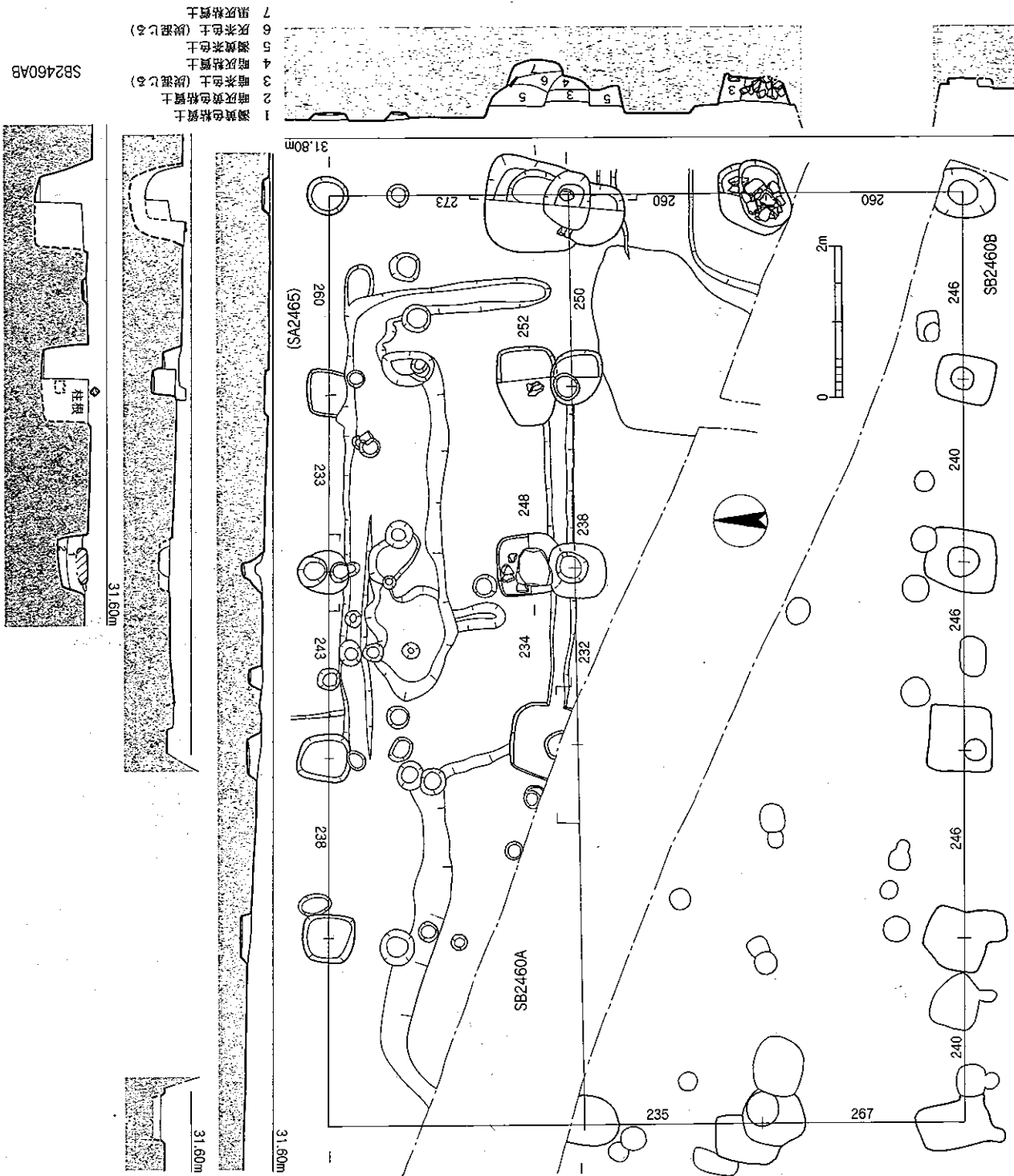


Fig.40 竪立柱建物 S B 2460 A B 実測図 (1/80)

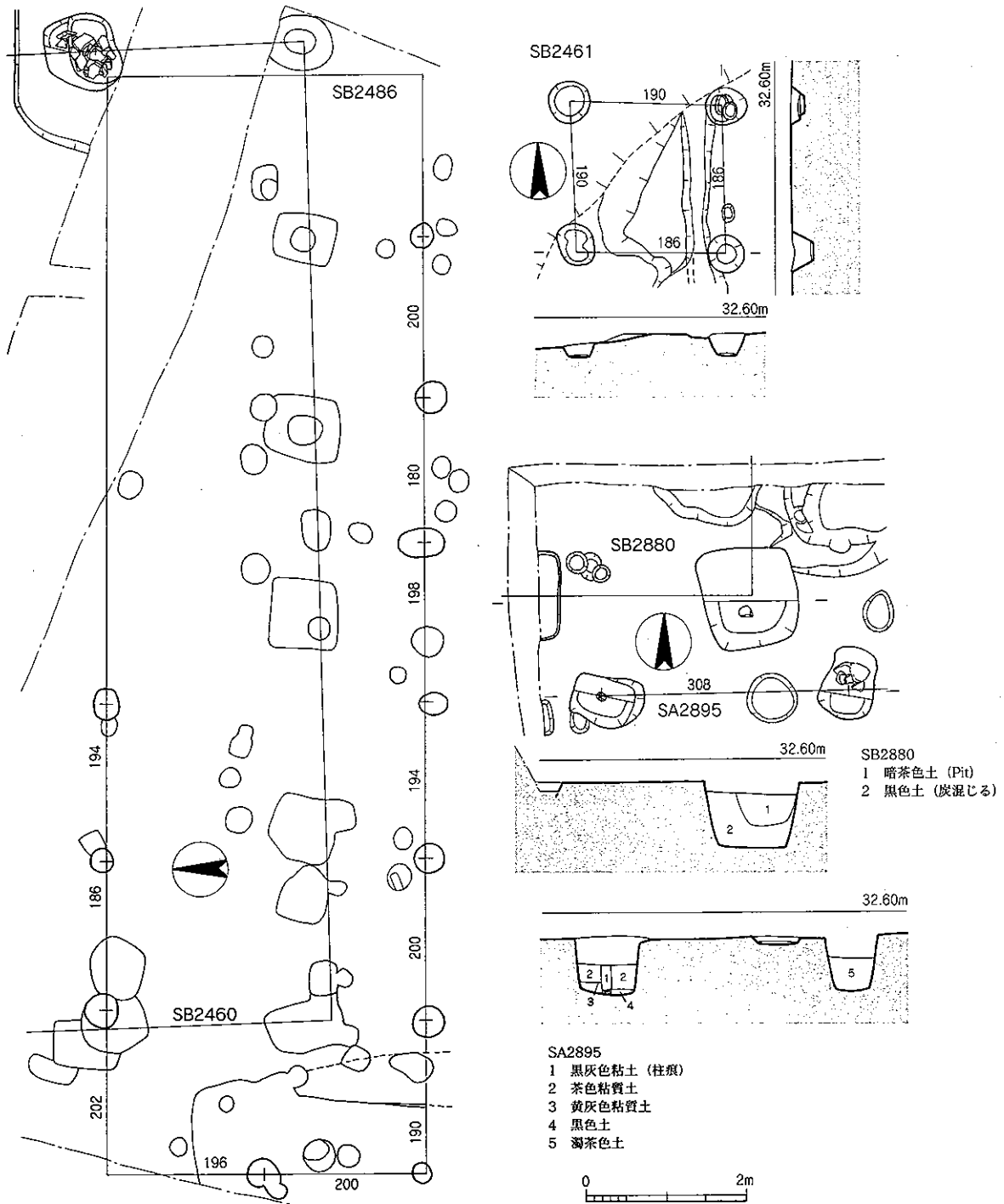


Fig.41 掘立柱建物S B 2461・2486・2880, 柵S A 2895実測図 (1/80)

及び梁行中央の掘方を改築しており、A建物に比して梁行が一尺半短くなっている。掘方は0.7mを測る。建物方位はA・B建物ともほぼ東西方向を示す。

S B 2461 (Fig.41)

85次調査区の南側中央部に位置する掘立柱建物で、自然流路S X 2480を切っている。梁行1間、桁行1間規模で、竪穴住居の壁面が削平された可能性もあるが、一応建物として報告し 竪穴住居かしておく。柱間は梁・桁行ともに1.9mを測る。柱穴は円形を呈し、径0.5m前後、深さ0.2m前後の遺存状態である。

S B 2486 (Fig.41, PL.18・19)

85次の補足調査区で検出した掘立柱建物で、S B 2460を切っている。梁行2間 (3.96m)、桁行6間以上の東西棟建物であるが、北側桁行柱列が本調査区までは伸びていないことから桁行は7間 (推定長13.6m) になると考えられる。補足調査においては、遺構の上面検出に留めたため、柱痕跡及び柱穴の深さについては不明であるが、柱掘方は径0.4m前後の円形を呈する。柱間は梁側が1.96m・2.0mで、桁側は1.8～2.02mとばらつきがみられる。桁行方位は東から南に1°振っている。

S B 2515 (Fig.42, PL19)

87・90次調査区の南西隅部に位置する掘立柱建物である。梁行2間 (4.4m)、桁行4間 (8.94m) の南北棟建物で、採土遺構S X 2532に切られ、掘立柱建物S B 2355を切っている。また、掘立柱建物S B 2520と重複するが、前後関係は判然としない。なお、北東隅柱から桁側2番目の柱掘方は、概報時点ではS X 2533の掘方としていたものであるが、今回の報告では当建物に伴う掘方と判断した。柱間は梁側が2.1～2.3m、桁側が2.12～2.29mで、ややばらつきがみられる。柱掘方は隅丸方形ないしは長方形を呈し、一辺0.9m前後の大ききで、深さは0.5m前後を測る。柱痕跡は径15～30cm前後のものである。桁行方位は北から東に3°振っている。

S B 2520 (Fig.43, PL.19)

87・90次調査区の南西部で検出した掘立柱建物である。梁行2間 (4.58m)、桁行5間 (10.82m) の東西棟建物で、採土遺構S X 2531に切られ、掘立柱建物S B 2515と重複する。なお、西梁行側中央の柱掘方は、概報時点ではS X 2533の掘方としていたものであるが、今回の報告では当建物に伴う柱掘方と判断した。柱痕跡を留めている掘方が少ないため柱間は不明瞭で

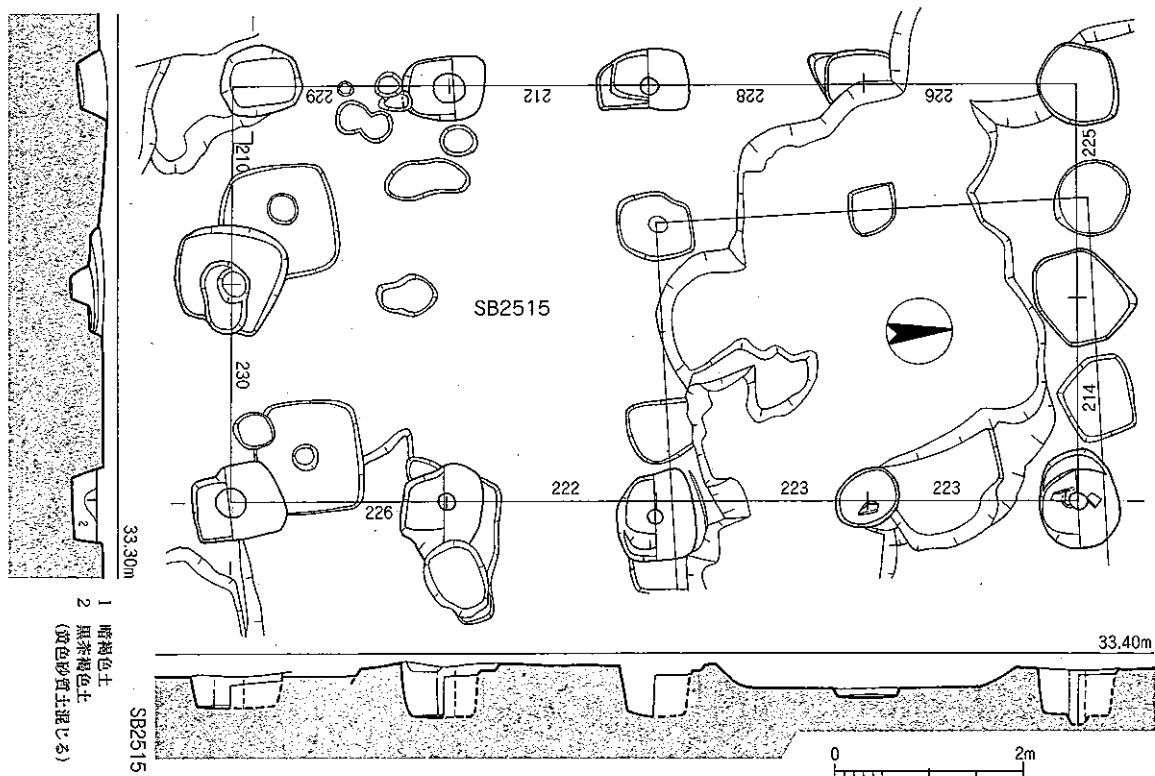


Fig.42 掘立柱建物S B 2515実測図 (1/80)

あるが、梁側が2.24～2.4m、桁側が2.10～2.38mとばらつきがある。柱掘方は隅丸方形を呈し、大きさは0.5～0.8m、深さは0.6m前後を測る。柱痕跡は3箇所では確認し得ていないが、径20cm前後のものであった。建物方位はほぼ東西方向を示す。

SB2525 (Fig.44, PL.20・21)

87・90次調査区の北側中央で検出した南北棟の掘立柱建物で、SB2530・2540、柵SA2513と重複する。梁行3間(8.78m)、桁行9間以上の建物で、北側梁行は調査区外にあるが、桁行5間分の建物中央には間仕切りに関わりとみられる掘方があることから桁行10間(23.6m程)になる可能性を有する。大半の掘方で柱痕跡を確認しているが、南東隅柱から桁行2番目と6番目の掘方には柱根が遺存しており、径25cm前後のものであった。柱間は梁側が2.83

桁行10間
規模の建物

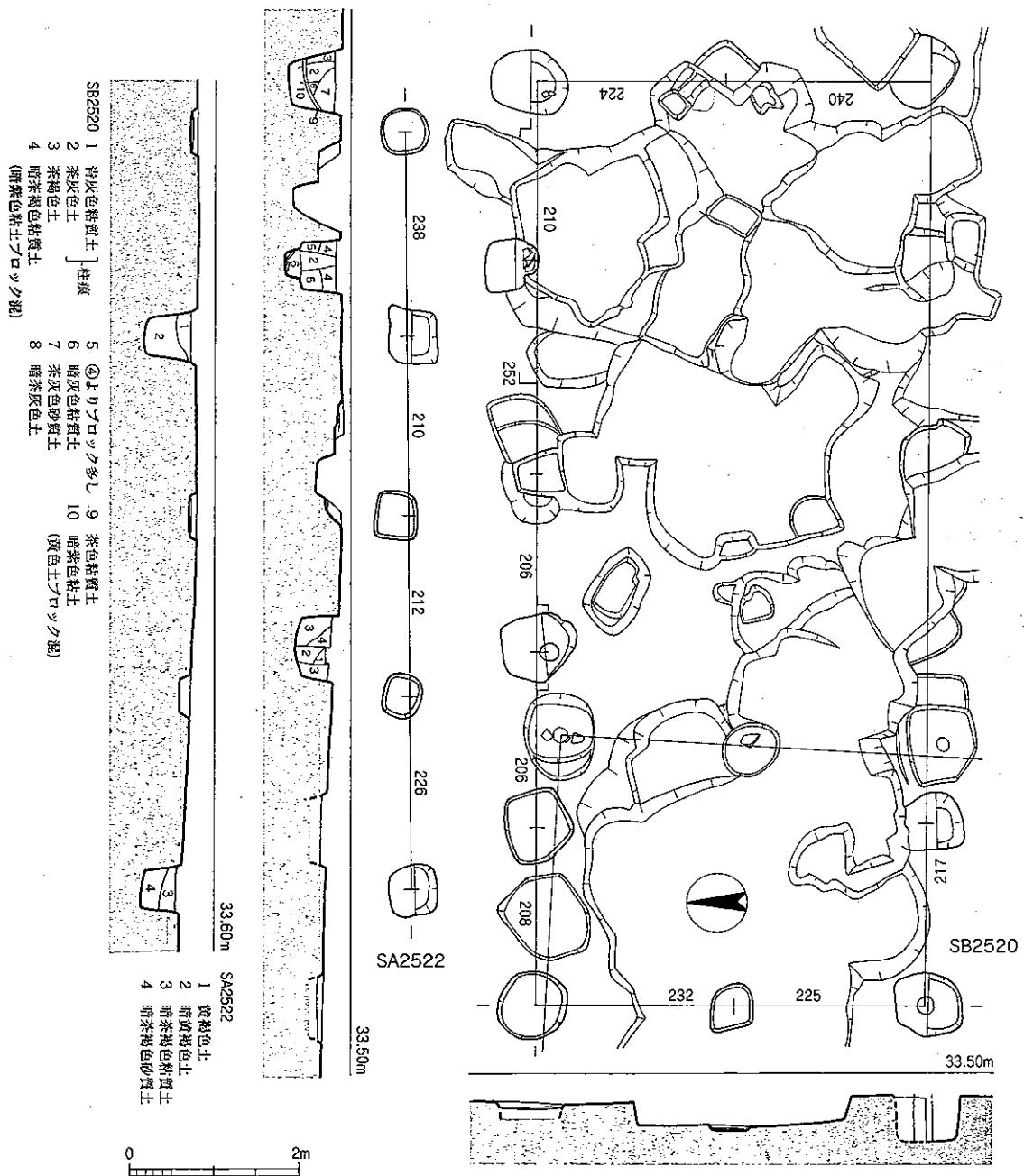


Fig.43 掘立柱建物SB2520、柵SA2522実測図(1/80)

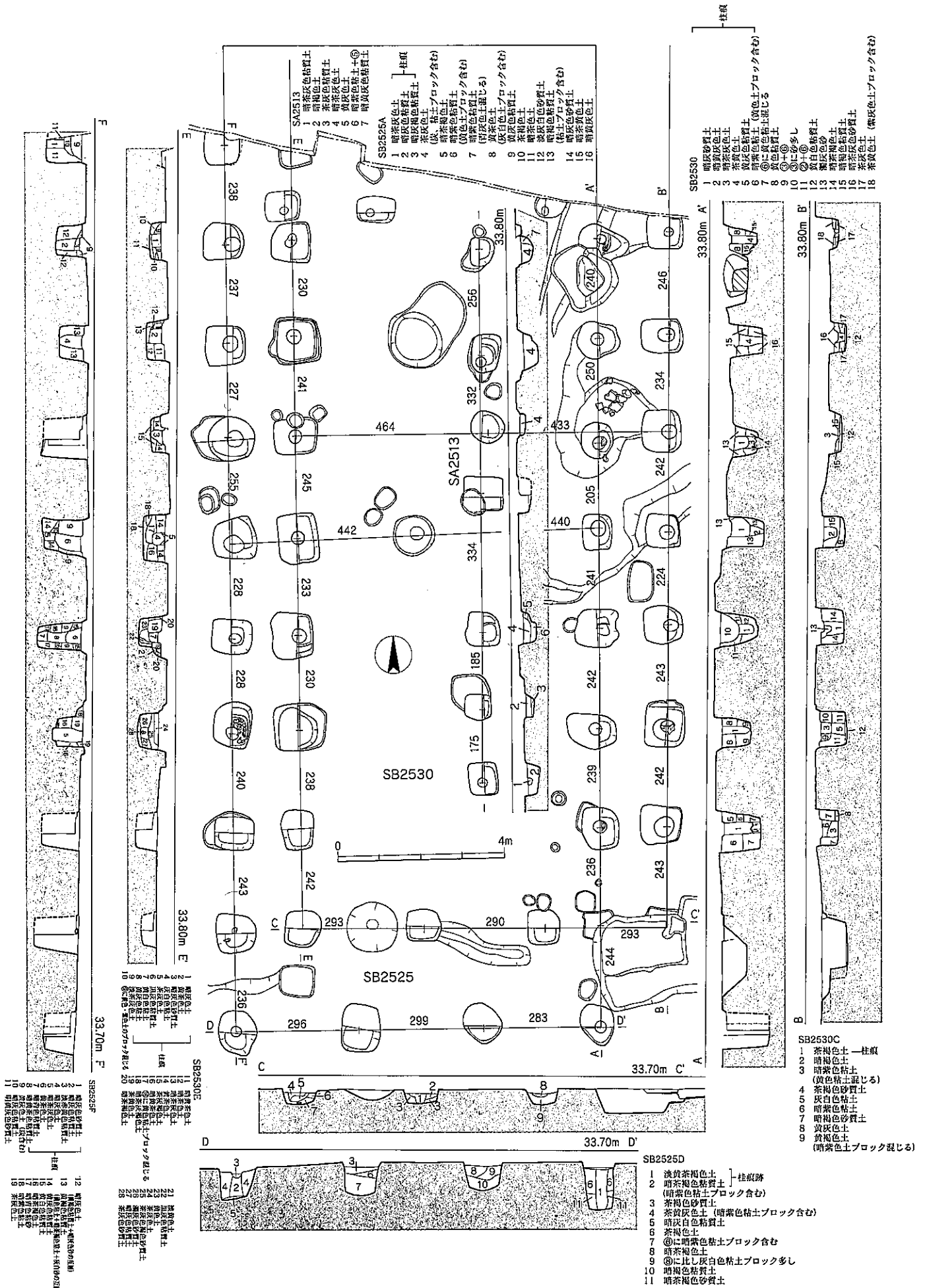


Fig.44 掘立柱建物 S B 2525・2530, S A 2513 実測図 (1/120)

～2.99mと10尺に近く、桁側は2.05～2.5mで、梁側に対して短めである。柱掘方は一辺1m前後の隅丸方形を呈し、深さも1m前後としっかりしていた。なお、南西隅柱から桁行1番目の掘方埋土上位から鉄滓が出土しており、3番目の掘方底面には瓦・礫が入れられていた。建物方位は北から東に30'程振っている。

S B2530 (Fig.44, PL.20・21)

掘立柱建物S B2525・2540、柵S A2513と重複するが、前後関係は判然としない。建物規模は梁行3間(8.76m)、桁行8間以上で、北側梁行は調査区外にあるが、S B2525同様、桁行5間分の建物中央には間仕切りに関わりとみられる掘方があることから桁行10間規模になる可能性を有する。柱間は梁側が2.9mで、桁側は2.24～2.46mとややばらつきがみられるものの8尺を基本とする。柱掘方は一辺1m前後の隅丸方形を呈し、深さは0.6m前後を測る。柱根は遺存していないが、柱痕跡は20～30cmであった。また、建物方位は北から東に1°振っている。当建物はS B2525の2m北東側に位置し、規模・方位的にも類似性が高く、丁度一間分北東側にずらした格好であり、掘方が浅いことからみてS B2525の建て替えとみられる。

桁行10間
規模の建物

S B2535A B (Fig.45, PL.21)

87・90次調査区の北西端で検出した南北棟の掘立柱建物で、丁度半分が調査区外にある。同一場所で建て替えがなされており、古期建物をA、新期建物をBとした。ともに梁行1間以上、桁行6間以上の確認に留まるが、おそらく桁行は7間、梁行は2間ないしは3間規模の建物となろう。S B2535Aは柱掘方を留めるのみであるが、掘方は隅丸長方形を呈し、長軸0.8～1.2mを測る。S B2535Bの柱掘方はA建物掘方と完全に重複することから、A建物の柱を一端抜き取った後に築造している。柱間は2.28～2.43mとばらつきがあるものの基本8尺等間とみられる。柱掘方は不整形を呈し、長軸0.7～1.1m、短軸0.55～1.0mを測り、何れも底面東側に段を有する。柱痕跡は20cmと小振りなものであった。桁行方位は北から東に2°30'振る。

S B2540 (Fig.45, PL.21)

87・90次調査区の北西端部に位置する南北棟の掘立柱建物で、掘立柱建物S B2525・2530と重複するも前後関係は判然としない。当建物は大半が調査区外にあるため梁行3間(6.5m)、桁行1間以上を確認したにすぎない。柱痕跡が全ての掘方にみられ、梁側の柱間は東から2.08m、2.3m、2.08mと中央間が広くなっており、桁側の柱間は2.06mを測る。柱掘方は隅丸長方形を呈し、長軸0.92～1.04m、短軸0.63～0.84m、深さ0.4m前後を測る。柱痕跡は20cm前後のものであった。桁行方位は北から東に1°振っている。

S B2880 (Fig.41)

98次調査区の北西隅部に位置する。南東隅柱と西側1間分の柱掘方2個を検出したにすぎないが、西隣の147次調査区及び北側の84次調査区には伸びていないことから梁行2間、桁行3間規模の南北棟建物と考えられるが、大半が調査区外にあるため詳細は不明。ただ、掘方は隅丸方形を呈し、一辺1.1m、深さ0.8mと大きいことから2間×3間の総柱建物になる可能性も考えられる。

総柱建物の
可能性

S B2885 (Fig.46, PL.22)

98次調査区の西側で検出した東西棟の掘立柱建物である。現状で梁行2間(3.3m)、桁行3間以上の規模であるが、西隣の147次調査区までは伸びていないことから桁行は5間とみら

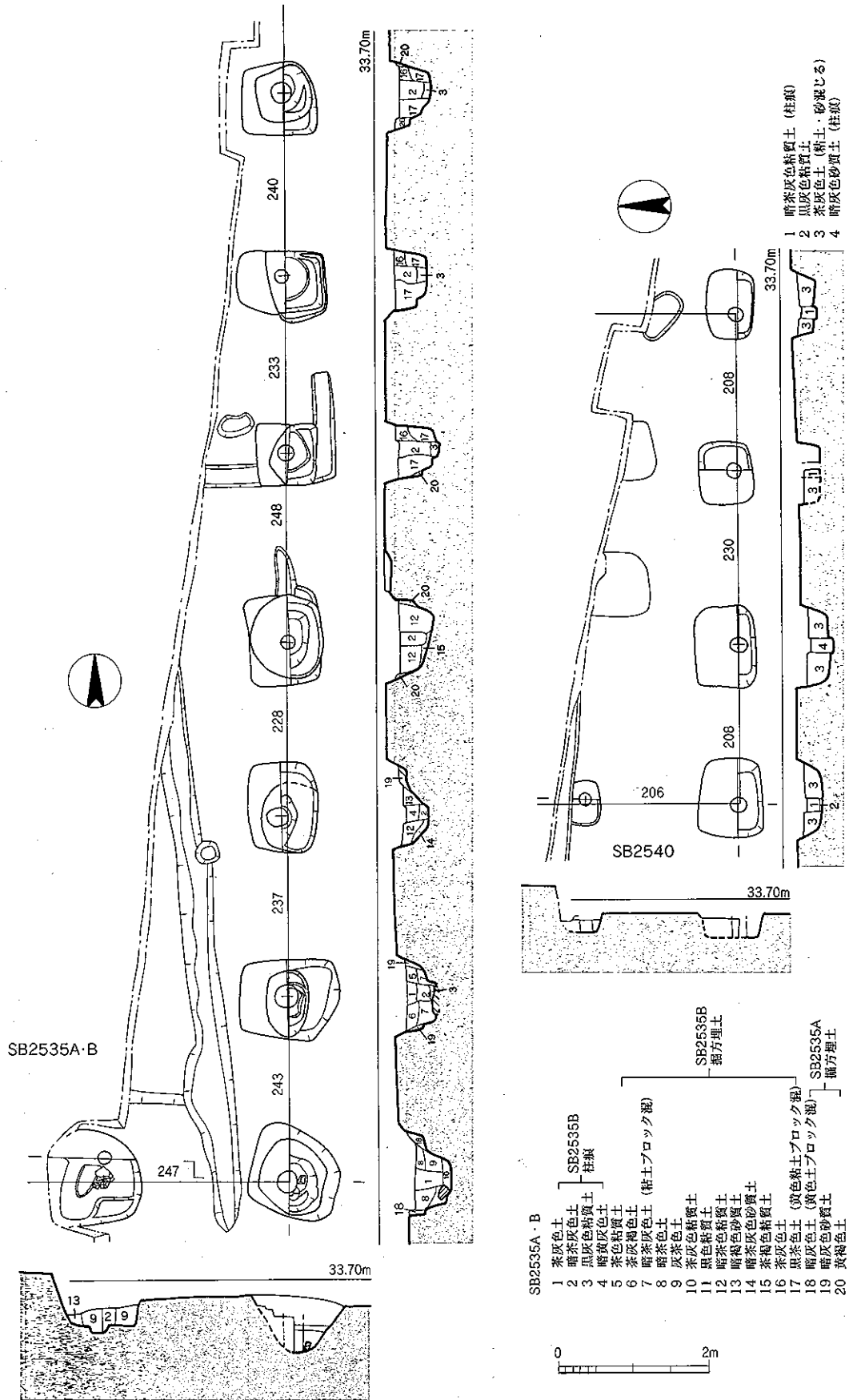


Fig.45 掘立柱建物 S B 2535 A B ・ 2540 実測図 (1/80)

れる。柱間は柱痕を留めていないため不確定であるが、梁側は1.53m・1.77mで、桁側は1.58～1.9mとばらつきがみられる。柱掘方は0.4～0.7mの不整形を呈し、深いもので0.5m、浅いもので0.3mの深さであった。梁行方位は北から東に4°振っている。

SB2900 (Fig.47, PL.22)

98次調査区の中央部から北側にかけて検出した。南北溝SD2340の1.2m程西側に位置する。梁行3間(8.56m)、桁行4間以上の南北棟の掘立柱建物である。柱間は東側桁行では2.36～2.5mとばらつきがあるが、柱痕跡を留めている西側桁側では2.43mを測り、基本8尺等間とみられる。桁側の柱掘方は一辺0.8～1.2mの隅丸方形を呈し、深さも0.5～0.8mと深いものであるが、梁行中央の柱掘方2個は一辺0.75mと小振りで、深さも0.5mと浅いものであった。なお、西側桁行隅柱から3個目の掘方には径15cmの柱根が遺存しており、2個目の掘方には木製礎盤を据えていた。また、隅柱から2個目の柱掘方からは、幅30cm、深さ4cmの溝が東西方向に伸びており、建物内部を仕切った地覆に関するものと考えられる。建物はほぼ南北を向いている。

SD2340の西側に位置

木製礎盤
地覆に関する溝

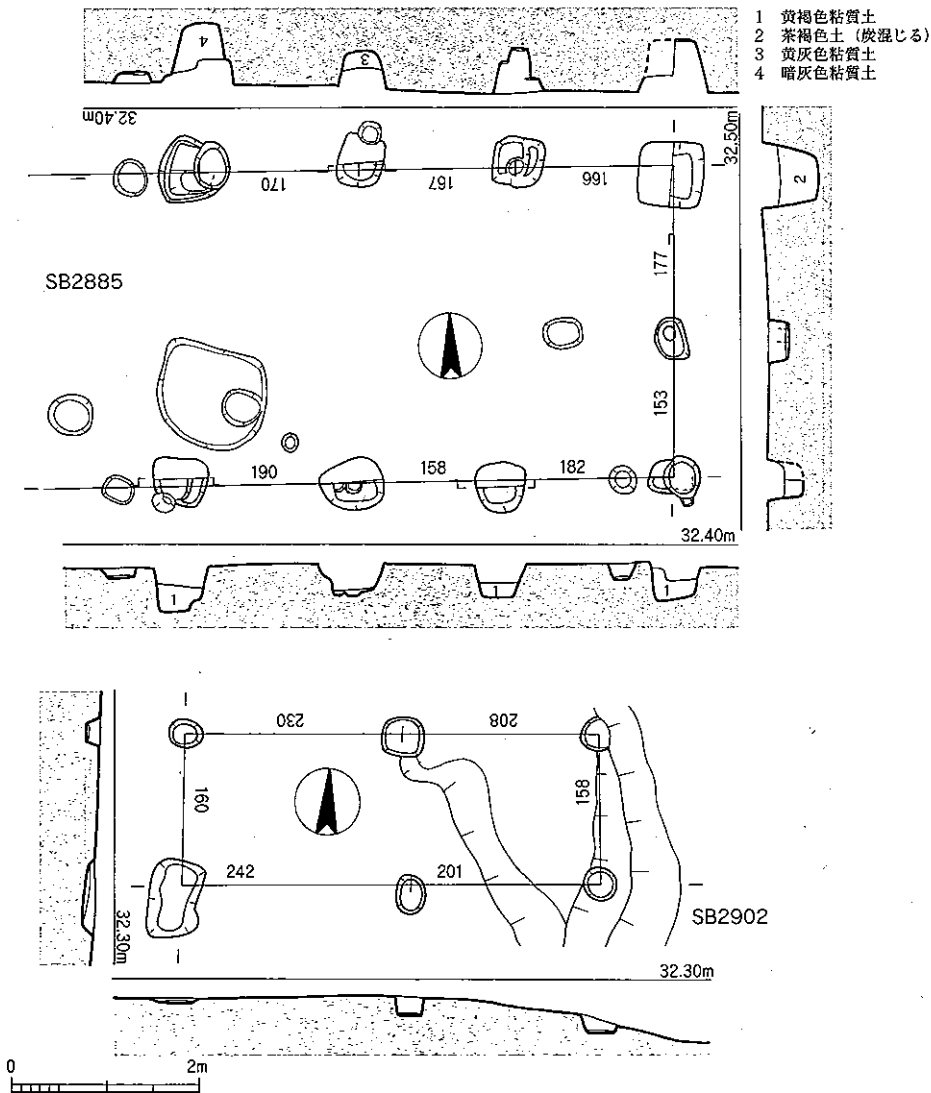


Fig.46 掘立柱建物 S B 2885・2902 実測図 (1/80)

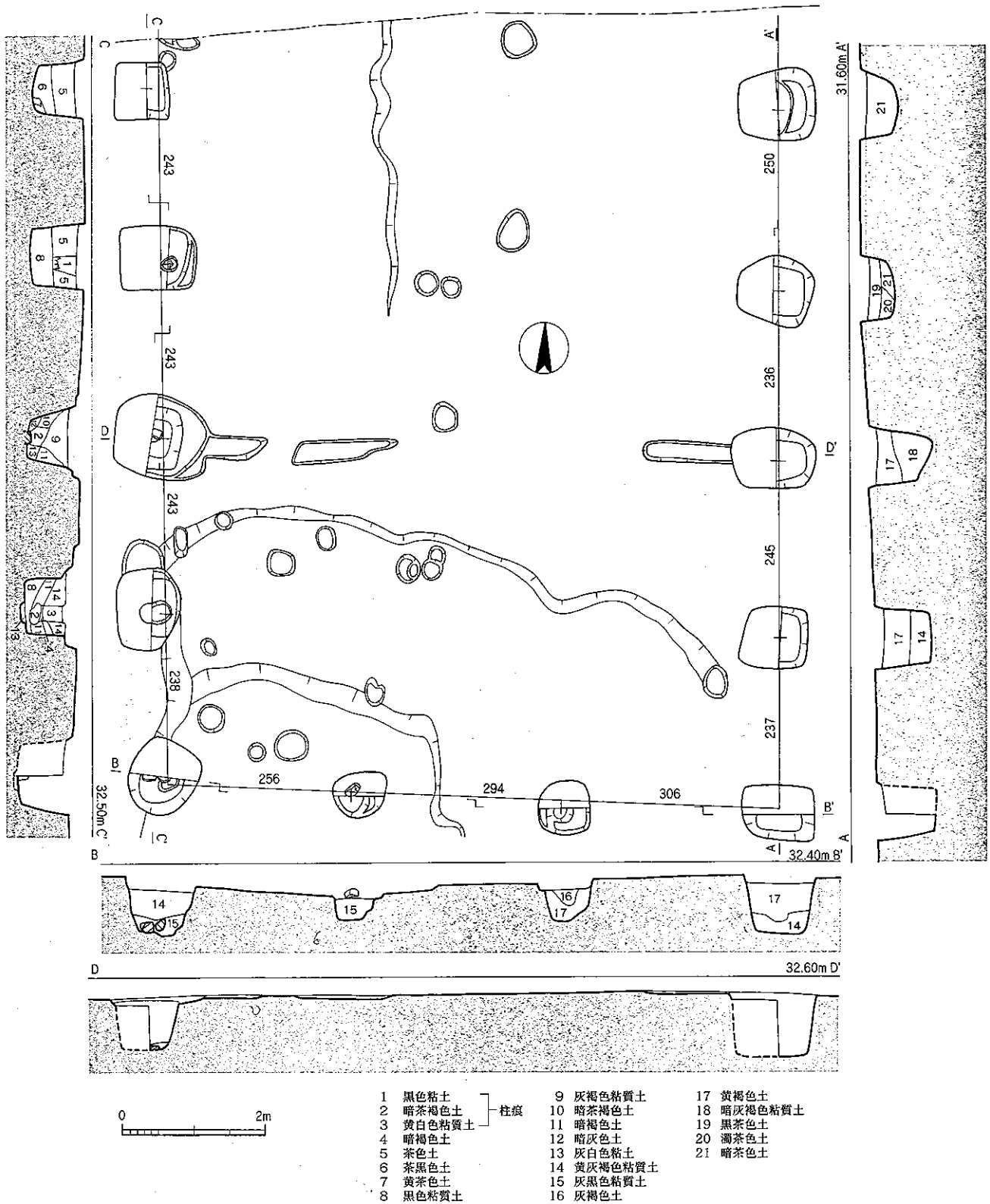


Fig.47 掘立柱建物S B 2900 実測図 (1/80)

S B 2902 (Fig.46)

98次調査区の南西側に位置し、落込S X 2480と重複する。梁行1間 (1.6m)、桁行2間 (4.4m) の東西棟の掘立柱建物である。桁側の柱間は2.01 ~ 2.42mとばらつきがみられる。柱穴は円形を呈し、径0.35 ~ 0.45m、深さ0.2m前後を測る。桁行方位は東から北に2° 振る。

S B 3815 (Fig.48, PL.22・23)

129次調査区の南東部に位置し、南北溝S D3818と重複する。桁行1間分の検出で、大半が調査区外にあるが、187次調査区北端中央で検出した柱掘方に接続するのであれば、梁行2間(5.15m)の身舎の東側に廂を付設した桁行6間の南北棟建物に復原される。身舎の柱掘方は0.8~1.0mの円形を呈し、深さは0.7mを測る。廂の柱穴は径0.3m前後の円形を呈し、深さも0.3mと浅い。また、東側桁行の2番目の掘方には径19cmの柱根が遺存していた。柱間は梁側2.23~2.94mで、桁側は1.96mと梁側が長い。桁行方位は北から東に2°30'振っている。

桁行6間の
片廂建物

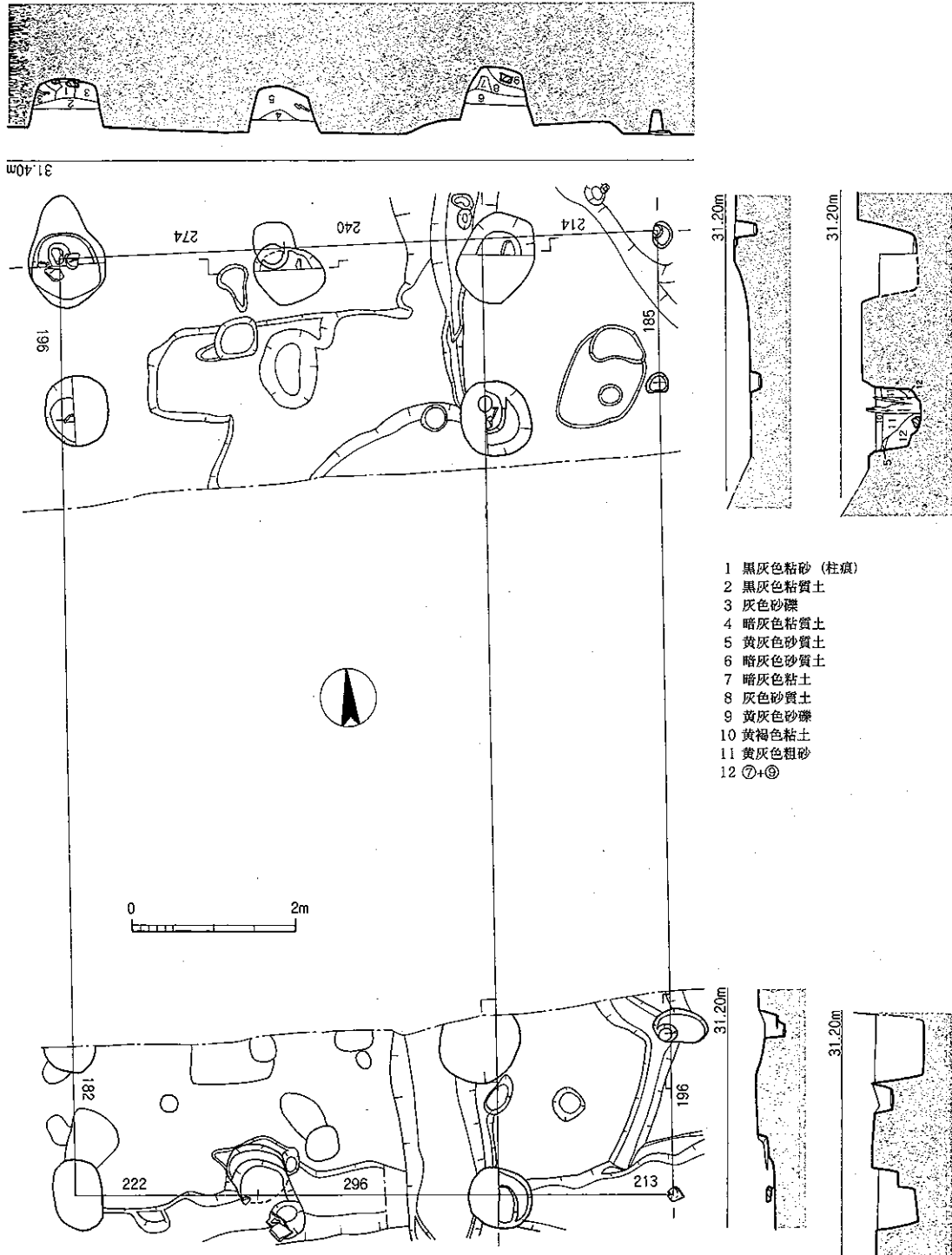


Fig.48 掘立柱建物S B 3815 実測図 (1/80)

SB3820 (Fig.49, PL.23)

129次調査区の東側に位置し、柵SA3816、南北溝SD3818と重複する。梁行2間(3.98m)、桁行3間(6.86m)の小規模建物である。柱掘方は径0.4~0.5mの円形を呈し、深さ0.3m前後を測る。柱間は梁側が1.89~2.09m、桁側が2.13~2.47m。梁行方位は $3^{\circ}30'$ を

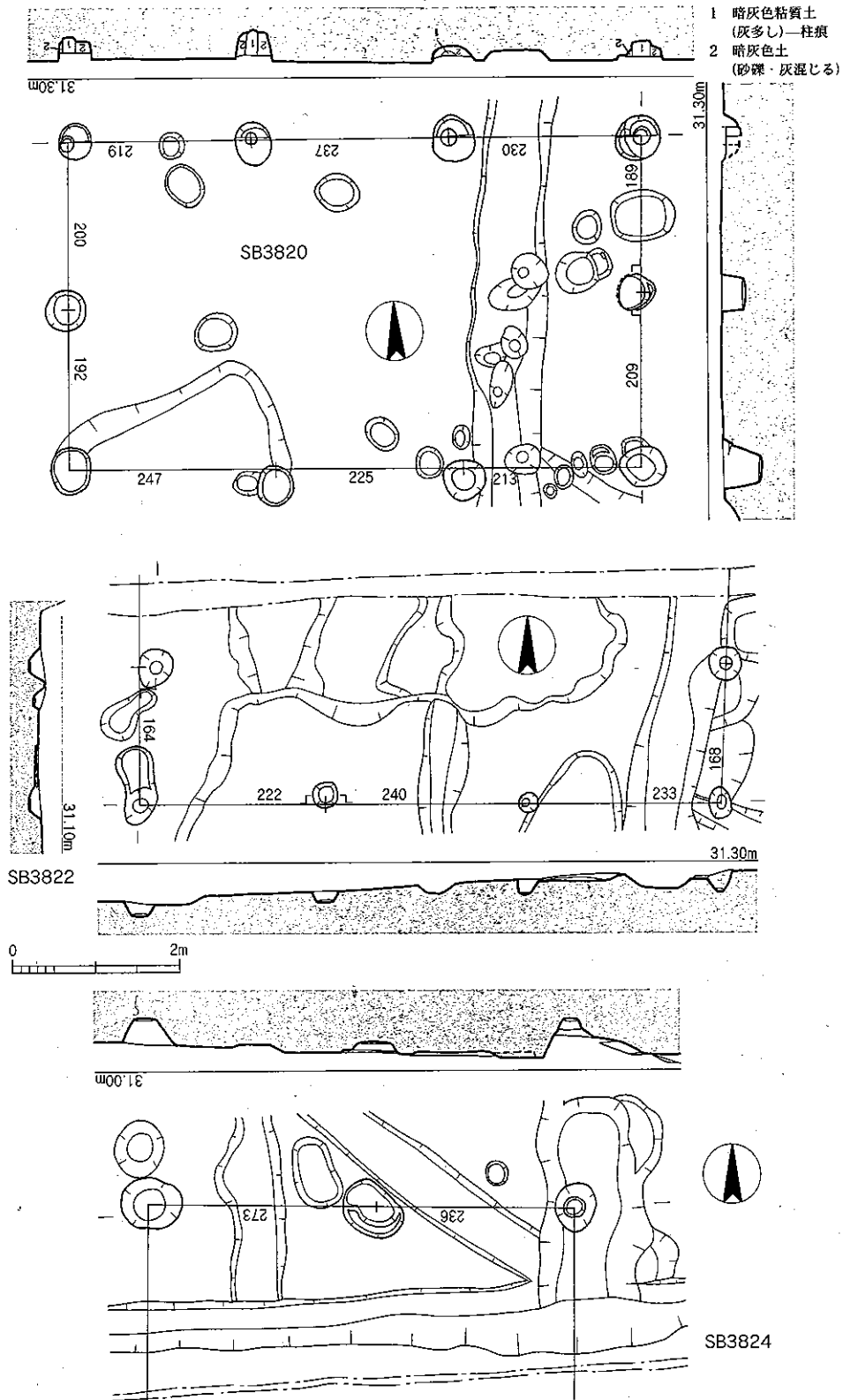


Fig.49 掘立柱建物SB3820・3822・3824実測図(1/80)

示す。

S B3822 (Fig.49)

129次調査区の北東側で、S B3820の3.5m南で検出した。掘立柱建物S B3828, 溝S D3818と重複する。北側が調査区外にあるため詳細は不明であるが、梁行2間、桁行3間 (6.95

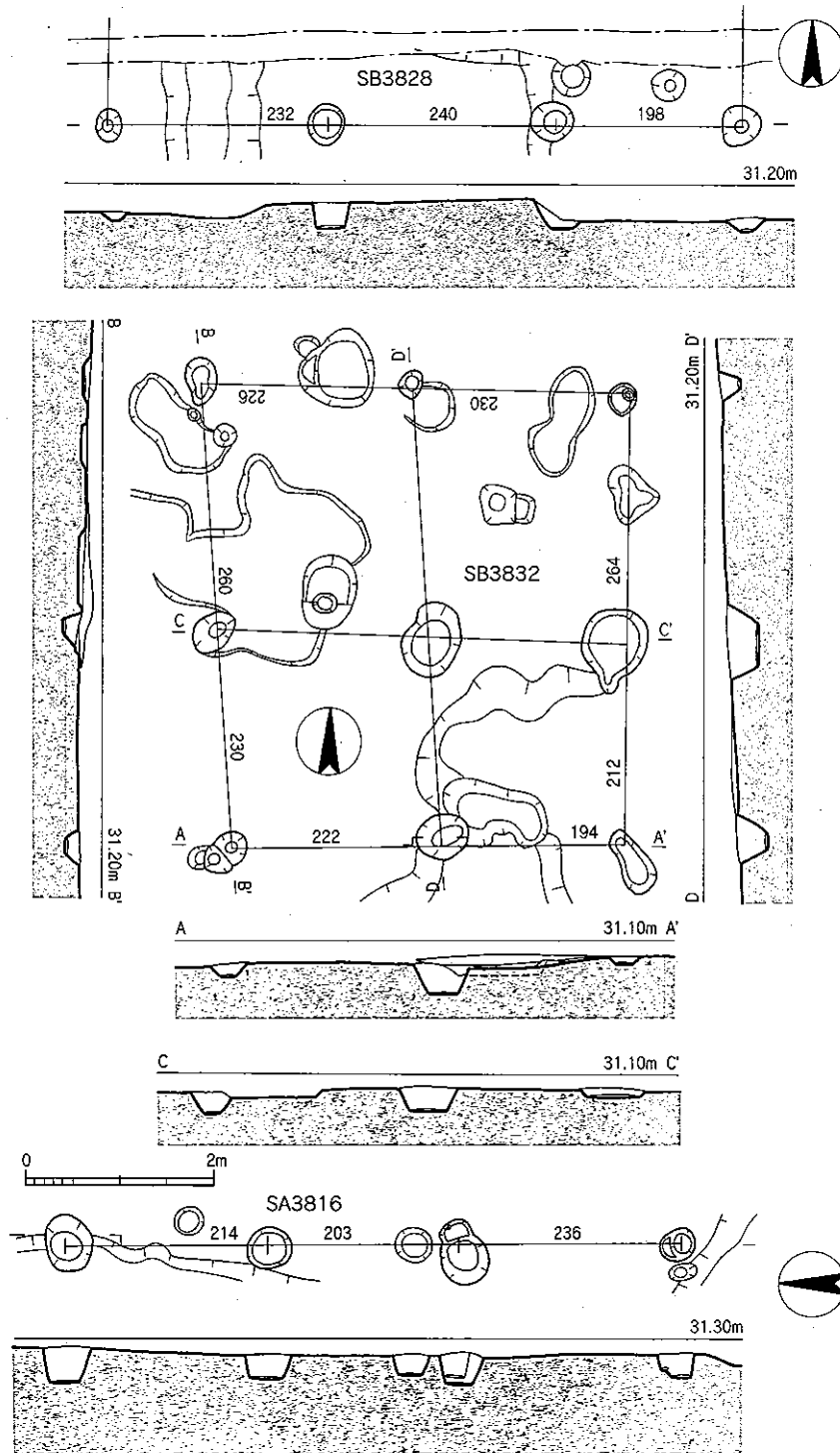


Fig.50 掘立柱建物S B 3828・3832, 柵S A 3816 実測図 (1/80)

m) の小規模な建物になろう。柱掘方は径26～40cmの円形を呈し、深さは20cm前後を測る。建物方位は東から南に1°振れている。

S B 3824 (Fig.49)

129次調査区の南側中央に位置し、溝S D 3824・3835と重複する。大半が調査区外にあるため詳細は不明であるが、梁行2間(5.09m)の南北棟建物とみられる。柱穴は50～70cmの円形を呈し、深さは30～45cmを測る。建物方位は東から南に2°30'振れている。

S B 3828 (Fig.50, PL.23)

129次調査区の北側中央に位置し、掘立柱建物S B 3822と重複する。柱穴4個の検出で、大半が北側調査区外にあるため詳細は不明であるが、梁行2間、桁行3間(6.7m)規模の建物かと思われる。柱穴は34～48cmの円形を呈し、深さは30cm前後を測る。建物方位は東から南に1°30'振れている。

S B 3832 (Fig.50, PL.23)

129次調査区の西側に位置し、掘立柱建物S B 2005と重複する。調査時点では建物として認識していなかったが、図面検討の結果、梁行2間(4.56m)、桁行2間(4.9m)の南北にやや長い総柱建物とした。柱穴は0.3～0.7mの不整形円形を呈し、深いもので0.3mを測る。柱痕跡が確認できていないので、正確な柱間は定かでないが、梁側が1.94～2.3m、桁側が2.3～2.64mを測る。建物方位はほぼ北を示す。

総柱建物

S B 4030 (Fig.51, PL.24)

概報時点ではS B 4030 A Bとして報告していたが、今回は掘方が大きい方を当建物、小さい方を別建物(S B 4070)とした。147次調査区の北西側に位置し、掘立柱建物S B 2435と重複する。梁行2間(4.9m)、桁行3間以上の東西棟建物であるが、西隣の104次調査区までは伸びないことから桁行は5間と考えられる。柱掘方は0.7～1.1mの隅丸方形を呈し、深さは0.5～0.7mを測る。大半の掘方で径25cm程の柱痕跡を確認しており、柱間は梁側が2.28m・2.62mで、桁側が2.3～2.52mを測る。梁行方位は北から東に3°30'振っている。

S B 4035 A B (Fig.52, PL.24・25)

84次補足調査で北側桁行掘方5個を確認していたが、建物として認識していなかった。S B 4030 Aの4.5m東に位置し、S D 4044, S K 4058・4059に切られ、S B 2435・4048, S A 4053と重複する。古期をA建物、A建物の建て替えとみられる新期建物をB建物とした。

S B 4035 Aは梁行2間(4.86m)、桁行5間(12.14m)の東西棟で、西側梁行方位は北から東に2°振っている。柱掘方は0.6～0.8mの隅丸方形を呈し、深さは0.4mを測る。柱痕跡がほとんど存在しないため柱間は定かでないが、梁行4.8m等間、桁行2.1mであろう。S B 4035 BはS B 4035 Aを切り、そのすぐ東側に位置する。身舎梁行2間(4.92m)、桁行5間(11.8m)の2.4m南側に廂を付設した片廂建物である。柱掘方は一辺0.5～0.8mの隅丸方形を呈するが、廂の掘方は0.5mとやや小振りである。柱間は梁行2.4m、桁行2.36m等間である。

SB4035B
は片廂建物

S B 4040 (Fig.51, PL.25)

147次調査区の北東側に位置し、流路S X 4050を切り、柵S A 4036, 溝S D 4037に切られる。梁行2間(3.23m)、桁行1間以上の掘立柱建物で、北側梁行は調査区外にあるため詳細は不明。掘方は0.6～0.9mの隅丸方形を呈し、深さは0.6m前後としっかりしている。径

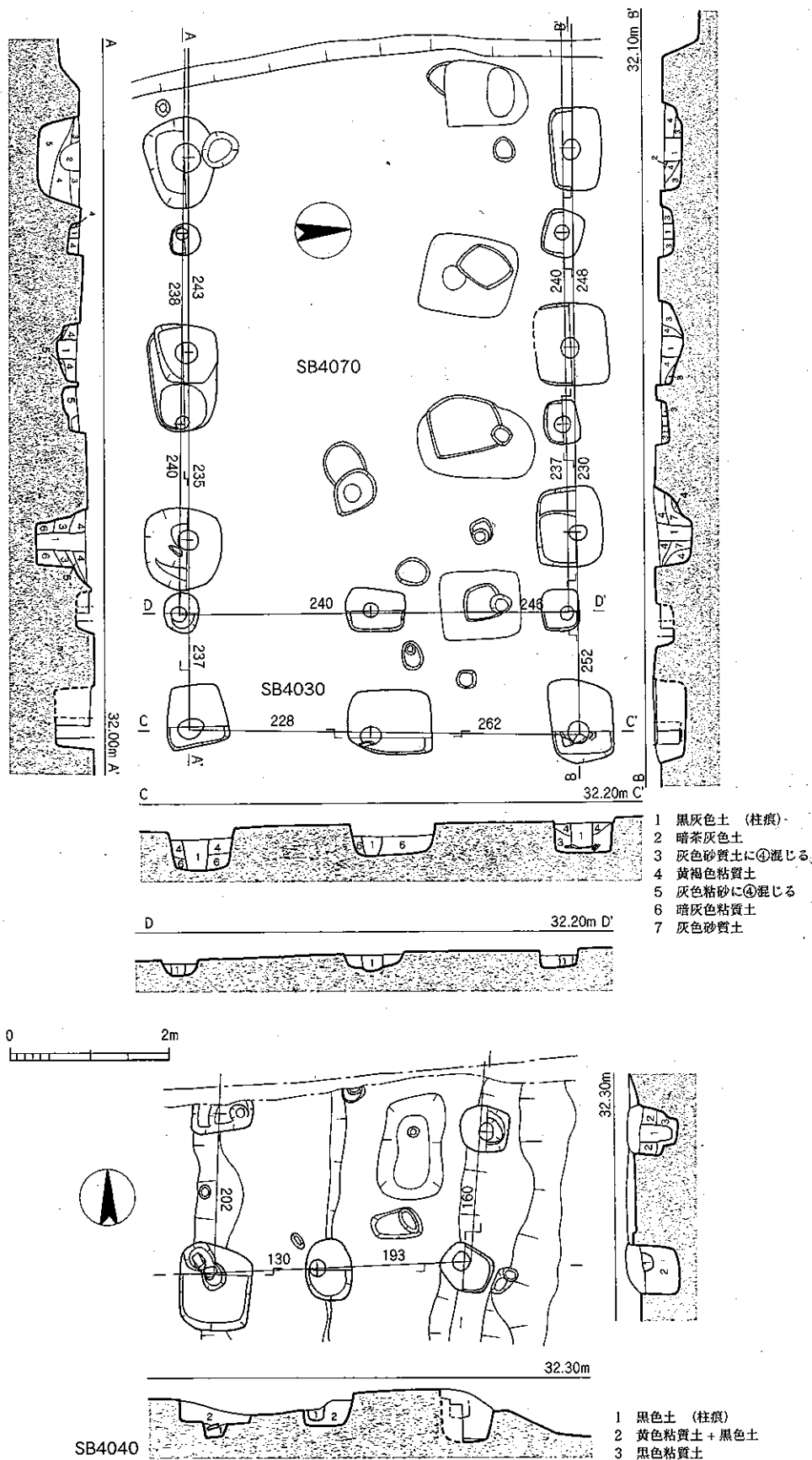


Fig.51 掘立柱建物 S B 4030・4040・4070 実測図 (1/80)

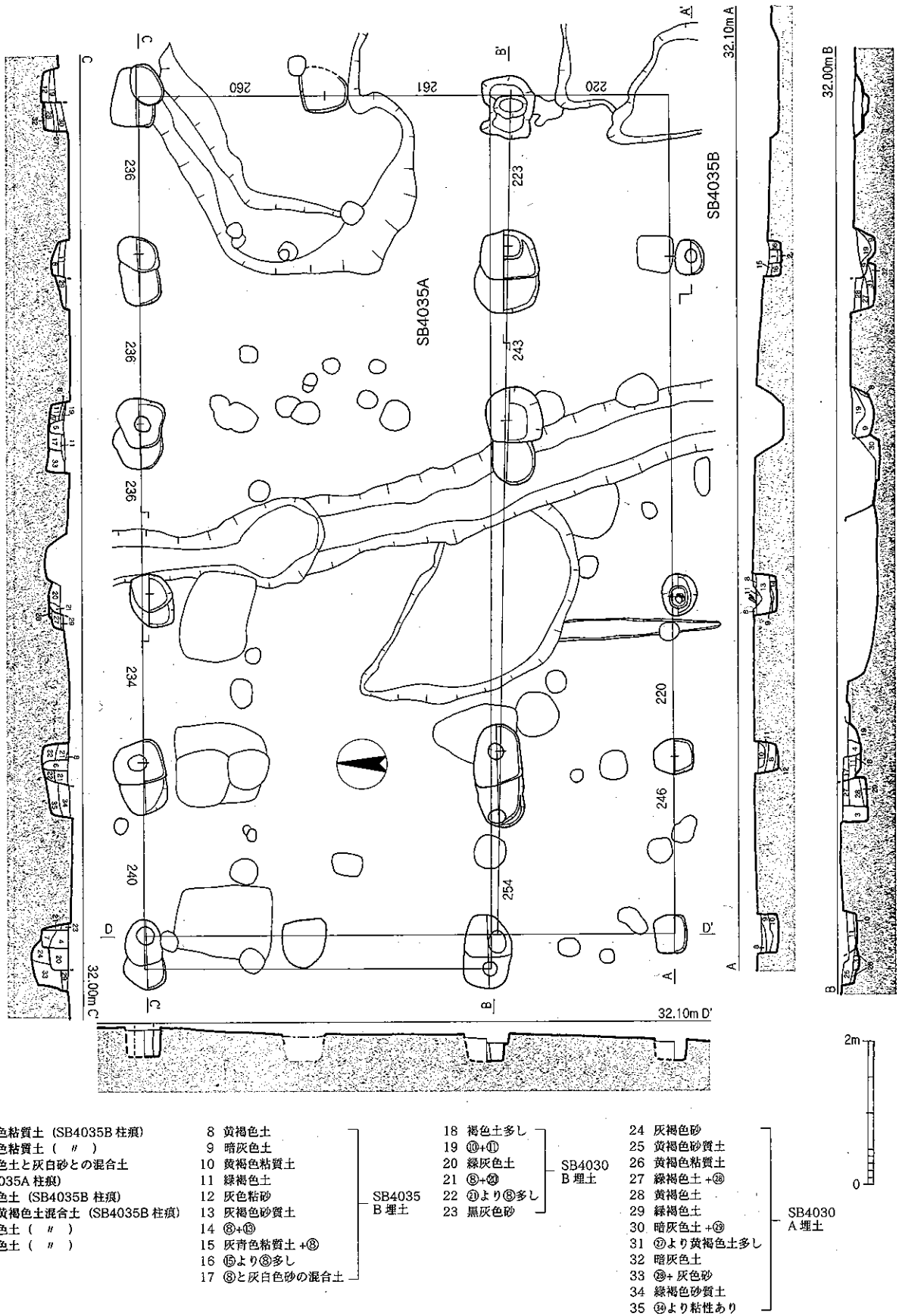


Fig.52 掘立柱建物SB 4035 AB実測図 (1/80)

20cm程の柱痕跡が確認でき、柱間は梁側が1.3m・1.93mで、桁側が1.6m・2.02mを測る。桁行方位は北から東に3°振っている。

SB4046 (Fig.53, PL.26)

147次調査区の西側に位置し、土坑SK4056と重複する。梁行1間(2.21m)、桁行2間(3.41m)の小規模な掘立柱建物である。柱穴は径25～50cmの円形を呈し、深さは北梁側が10cmであるが、南梁側が34cmと深くなる。柱間は梁側が2.0m・2.21mで、桁側が1.65～1.76mと梁側に比して短い。柱穴を結ぶ線は歪な長方形を呈し、東桁行方位は西に4°30'振る。

SB4047 (Fig.53)

147次調査区の西側に位置し、落込SX4065と重複する。SB4046の1m東側で、同建物とはL形に配される。梁行1間(2.37m)、桁行2間(3.94m)の小規模な掘立柱建物である。柱穴は径40cmの円形を呈し、深さは20～30cmを測る。柱間は梁側が2.28m・2.37mで、桁側が1.68～2.13mを測る。西側梁行方位は西に4°30'振っており、SB4046と等しい。

SB4048 (Fig.53, PL.25)

147次調査区の中央やや西側に位置し、SB4035ABと重複するが、当建物が後出する。

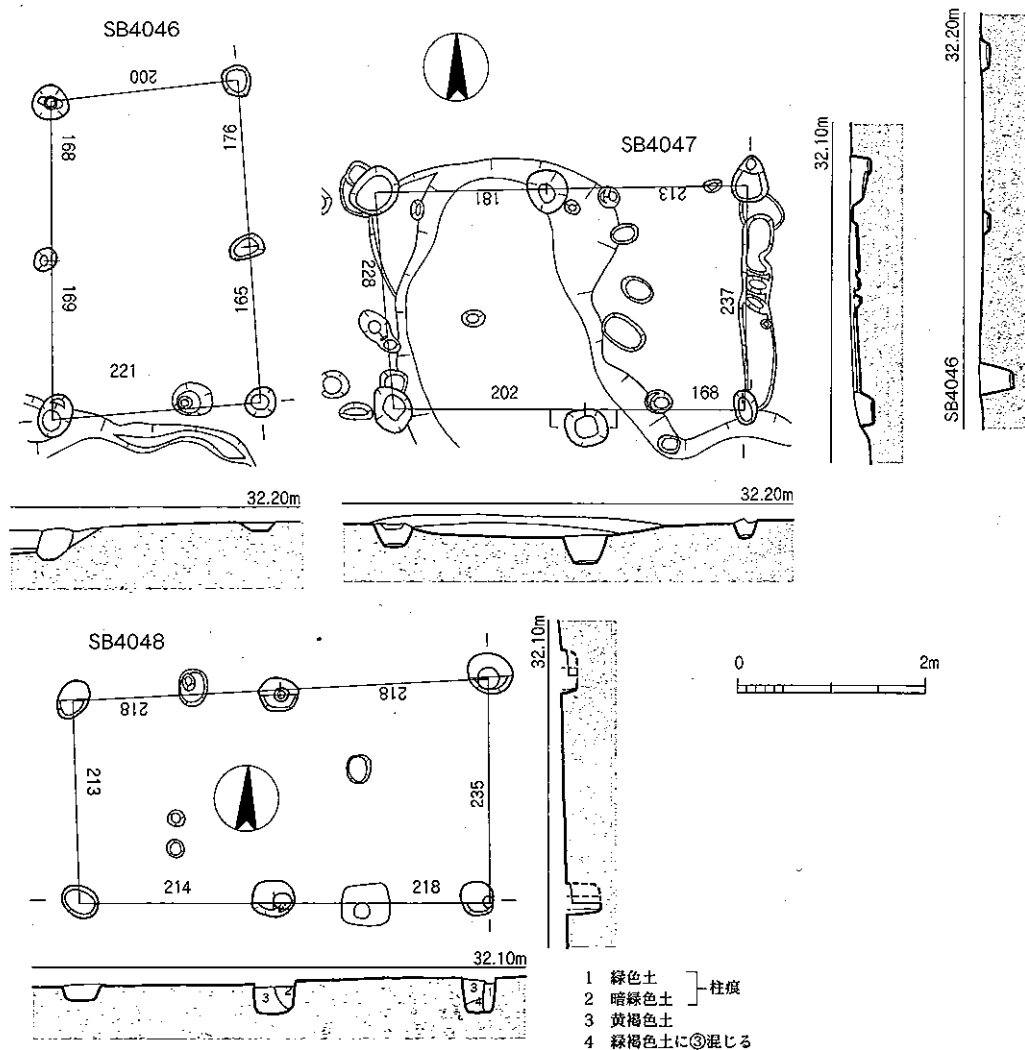


Fig.53 掘立柱建物SB4046・4047・4048実測図(1/80)

が2.37～2.4mであり、8尺を基本とする。梁行方位は北から東に2° 30′ 振っている。

SB4560 (Fig.54, PL.26)

187次調査区の東側に位置し、SB4562を切り、柵SA4578と重複する。梁行2間(4.63m)、桁行4間以上の東西棟建物で、東側梁行は調査区外にある。柱掘方は一辺0.9m前後の方形を呈し、深さは0.7m前後としっかりしている。大半の掘方で径25cm程の柱根を確認しており、南西隅柱と4・5番目の掘方には柱根が遺存していた。柱間は梁行が2.3mで、桁行は2.28～2.51mとばらつく。柱の沈下痕跡がみられることから瓦葺であった可能性を有する。また、

柱痕の遺存
と沈下痕跡

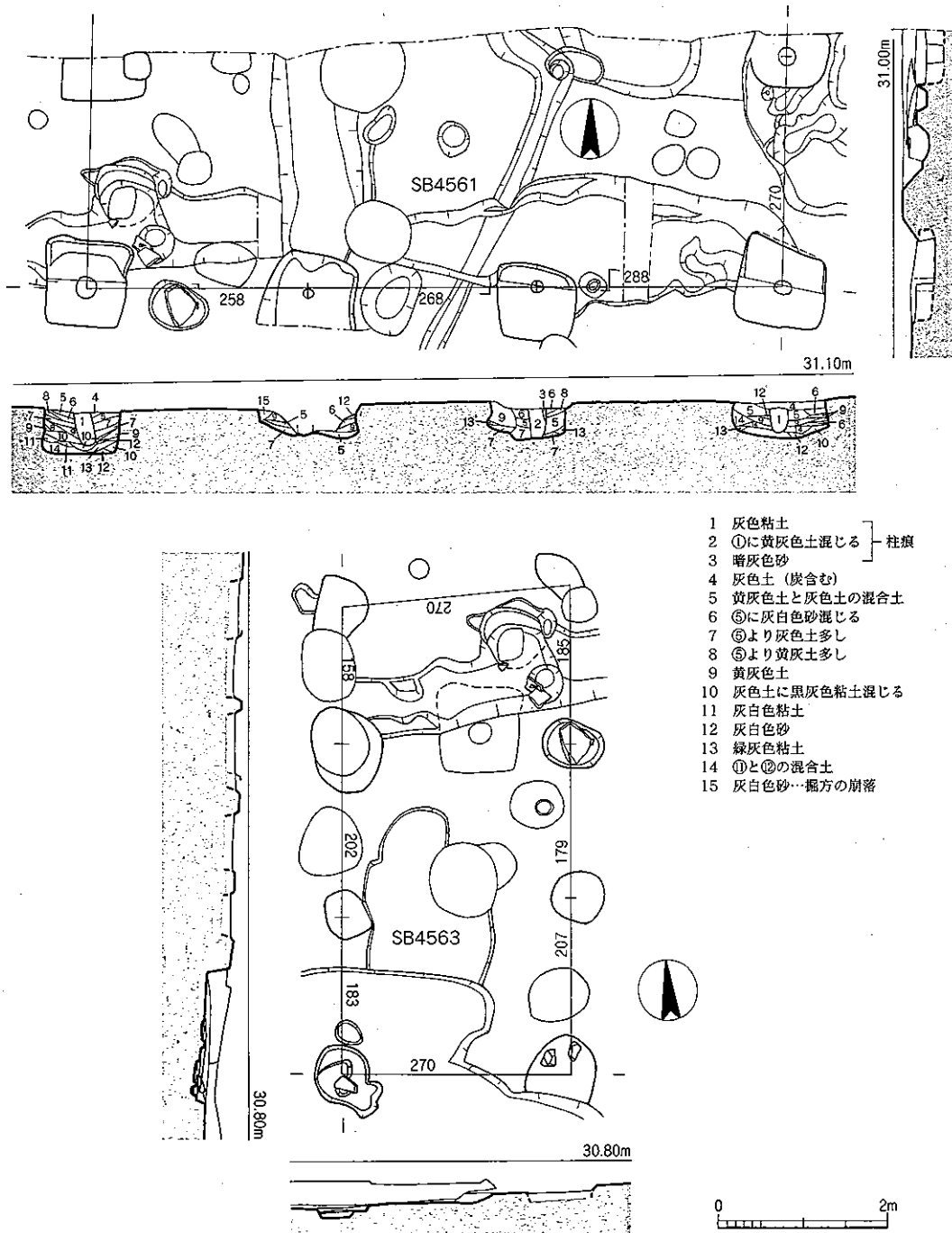


Fig.55 掘立柱建物SB4561・4563実測図(1/80)

SD4567は南桁行に平行する溝SD4567は建物に伴う雨落溝とみられる。桁行はほぼ東西方向を示す。
雨落溝

SB4561 (Fig.55, PL.26)

187次調査区北側に位置し、土坑SK4574、溝SD4566・4569に切られ、SB3815・4563と重複するが、当建物が最も古くなる。現状で東西3間(8.14m)、南北1間以上の建物であるが、北側の129次調査区までは伸びておらず、桁行は最大で4間となる。柱掘方は1m程の方形を呈し、深さは0.5mを測る。柱痕跡が遺存しており、柱間は南北2.7m、東西2.58~2.88mを測る。南北柱列の方位は北から東に2°30'振っている。

SB4562 (Fig.56, PL.26)

187次調査区の北東端に位置し、SB4460、SK4573に切られる。掘方が一辺0.8mと大きいことから建物としたが、大半が調査区外にあるため詳細は不明。柱列3間分の検出で、柱間は2.4m等間となる。柱列の方位は北から東に1°振っている。

SB4563 (Fig.55, PL.26)

187次調査区の中央に位置し、SB3815、SD4566に切られ、SB4577と重複するが、当建物が最も古くなる。梁行1間(2.7m)、桁行3間(5.43m)の南北棟建物で、年次報告時点でも桁行3間としていたが、今回は1間北側の掘方を隅柱とした。柱掘方は0.6m程の円形を呈する。上面検出に留めたので、深さは明らかでない。柱痕跡も確認できなかったが、掘方

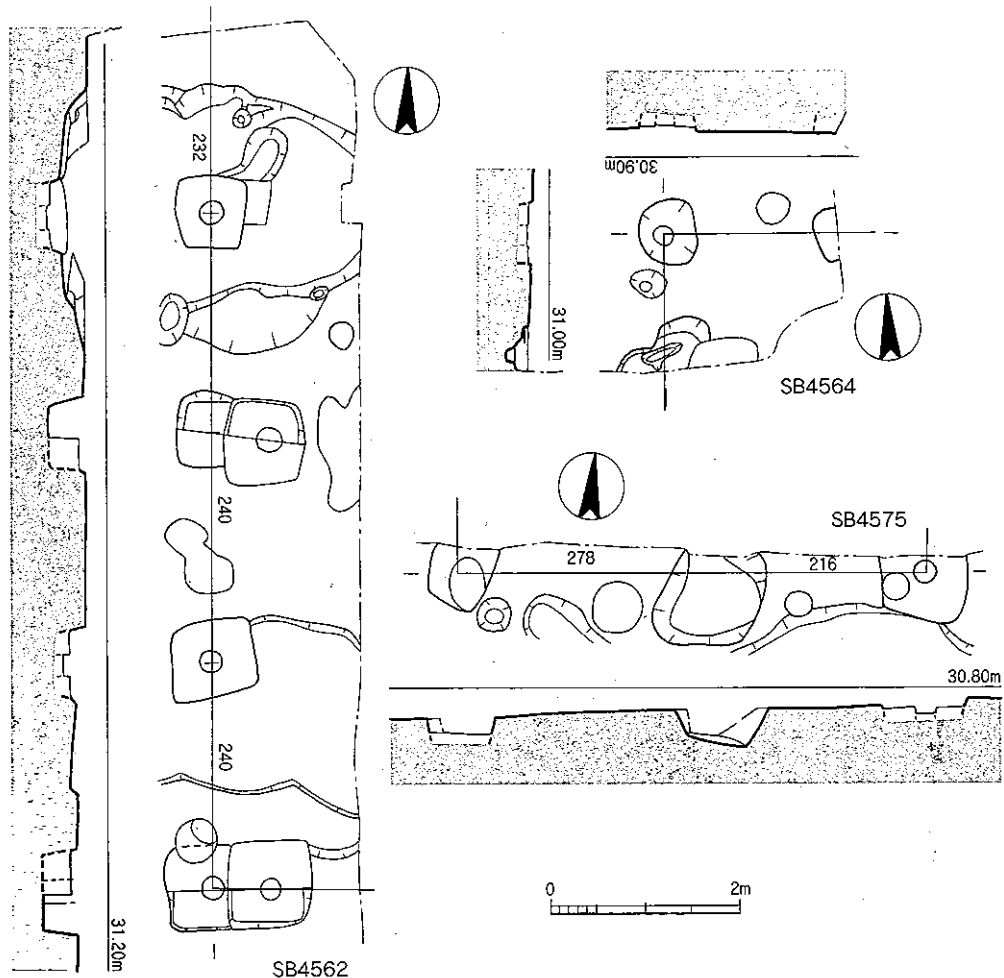


Fig.56 掘立柱建物SB4562・4564・4575実測図(1/80)

底部に花崗岩の割石を入れ、礎盤としている。桁行方位は北から東に5°振っている。

S B4564 (Fig.56, PL.26)

187次調査区の南東隅で検出した東西南北とも1間以上の建物で、大半が調査区外にあるため詳細は不明。掘方は0.6mの円形を呈し、柱間は東西が1.8m、南北が1.3m程を測る。当建物は不丁地区の最南端に位置する建物で、御笠川付近まで官衙域が広がっていることを示す。

建物群は御笠川付近まで広がる

S B4575 (Fig.56)

187次調査区の北側に位置し、S D4566を切る。柱掘方3個を検出した程度であり、中央の掘方はS K4575として報告していたが、今回は建物掘方とみなした。掘方は0.7~1.0mの

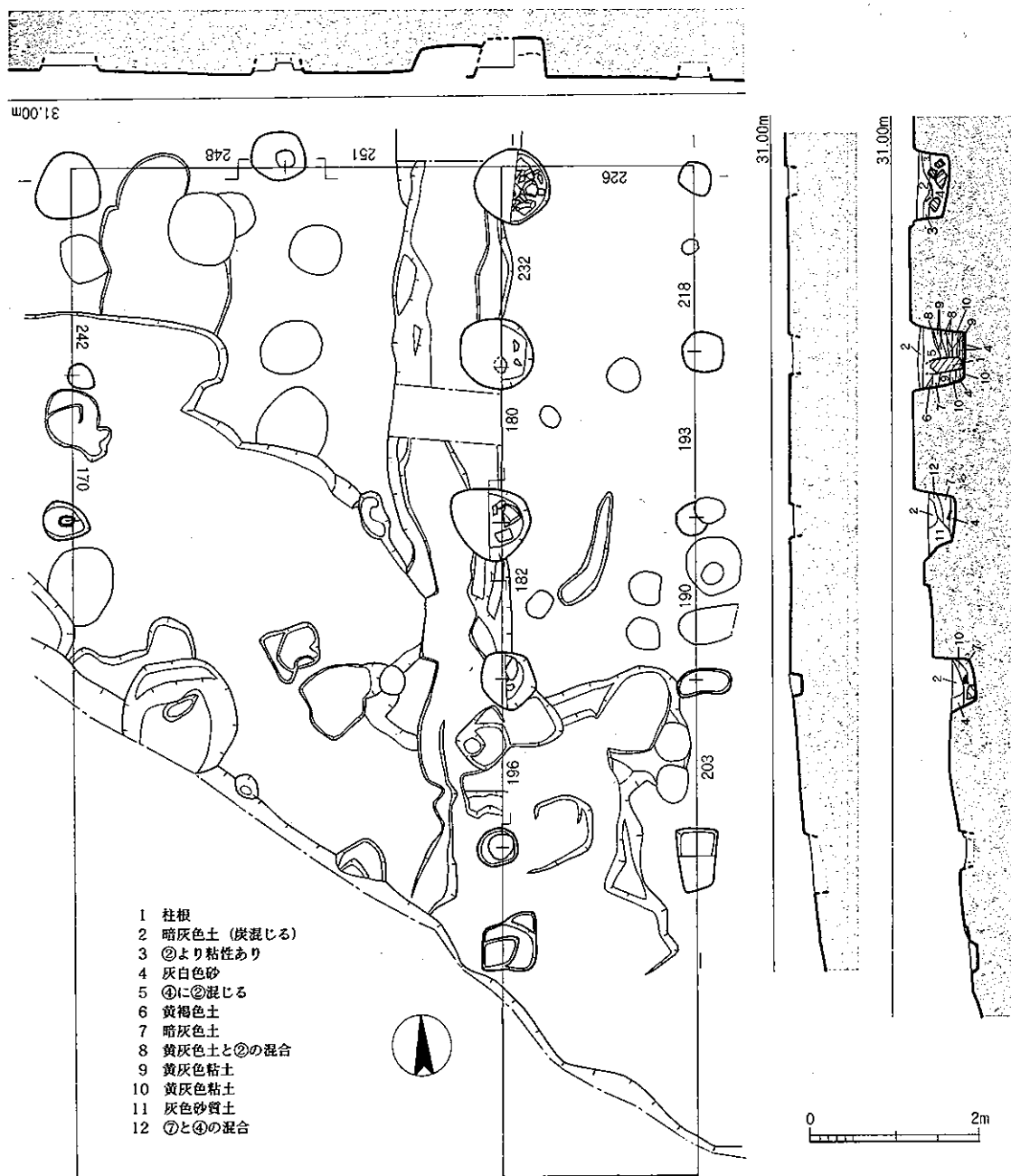


Fig.57 掘立柱建物 S B 4577 実測図 (1/80)

方形を呈し、柱間は2.16m・2.78mを測る。柱列の方位は南から北に5°振れている。

S B4577 (Fig.57)

187次調査区の中央部に位置し、S B4563を切る。年次報告時点ではS B3815として桁行10間と報告していたが、桁行が長大でかつ偶数であることから、今回は別建物として報告した。S B3815とは柱筋を揃えており、同規模の建物2棟が南北方向に並列する格好となる。

梁行2間(4.99m)、桁行4間以上の建物で、東片廂建物 桁行側に廂を付設する。身舎の柱掘方は径0.6~0.8mの円形を呈するが、廂の掘方は0.5mと小振りであった。柱痕跡もほとんど確認できていないため柱間は定かでないが、梁側2.5m、桁側1.8~2.32mを測る。東側桁行掘方底部には花崗岩・瓦片が入られていた。桁行方位は北から東に3°振る。

(2) 柵

不丁地区では、14次補足・83・84・84補足・85・87・90・98・129・147・187次調査において21列の柵を検出している。

SA318 (Fig.58)

昭和46年度に実施した14次調査は、コ字形に設定したトレンチ調査であり、当該柵は検出していなかったが、補足調査において確認した。調査区東端のやや南側において一辺80cm程の掘方3個が南北方向に並び、東西棟の建物掘方と考えられたが、東隣の17次調査区には掘方と言える穴がないことから柵とした。柱間2間分の長さ5.5mを確認したが、さらに北側に伸びる可能性がある。柱間は北から2.84m・2.68mで、柱掘方は0.78~0.9mで、深さは中央の掘方が最も深く0.35mを測る。方位はほぼ南北を示す。

SA2354 (Fig.59)

83次調査区の西側で、掘立柱建物S B2360の4.6m南側に同建物と平行して位置する。L形を呈する東西方向の柵で、南北方向に1間、東西方向に3間確認した。柱掘方は0.7mの隅丸方形を呈し、深さ

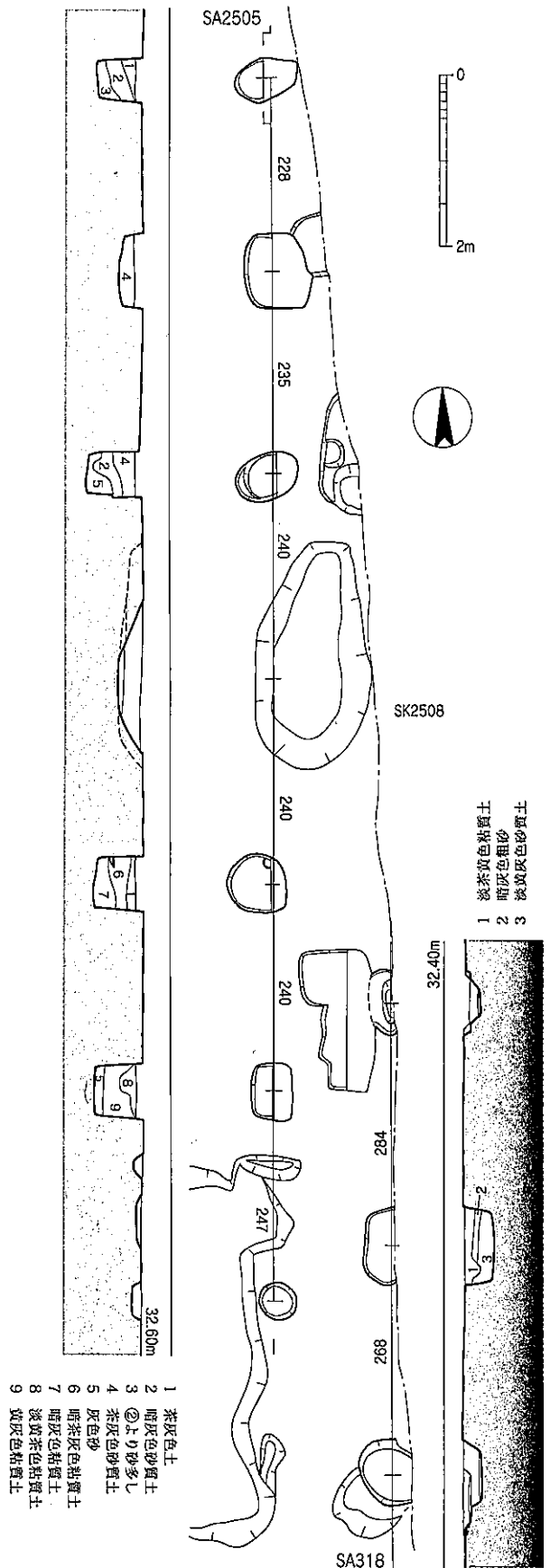


Fig.58 柵SA318・2505実測図(1/80)

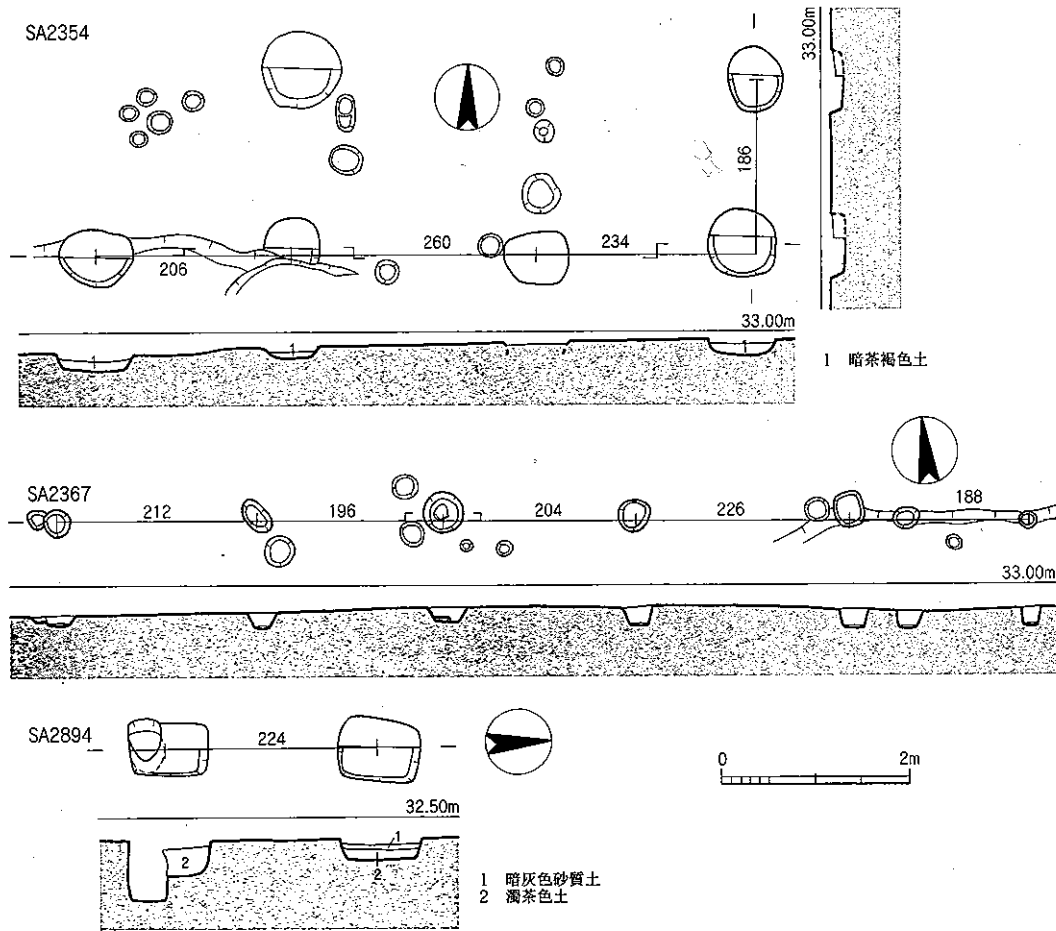


Fig.59 柵 S A 2354・2367・2894 実測図 (1/80)

は15cmを測る。柱痕跡が不明瞭であるため柱間は定かではないが、南北1.86m、東西2.06～2.6mとまちまちであった。

SA2367 (Fig.59)

83次調査区の西側で、掘立柱建物S B2365と重複して位置する。遺構検討の際、今回新たに柵として取り上げたものである。東西方向に並ぶ柱列で、5間分の10.26mを検出した。柱穴は径0.3mの円形を呈し、深さは0.2m前後を測る。柱間は1.88～2.26mとばらついている。柵の方位は東から南に11°30'振れる。

SA2381 (Fig.60)

84次調査区の中央で、柵S A2382の5m北側に位置する。概報段階ではS A2382と合わせて東西棟建物S B2385として報告していたが、柱筋の西延長部で柱穴が検出されていないこと及びS A2382とは柱列の方向が異なることから別遺構と判断し、今回は柵として報告する。2個の柱掘方を検出したのみであるが、径15cm程の柱根が遺存しており、柱間は2.52mを測る。柱掘方は0.7～0.8mの不整形を呈する。なお、柱根の周囲には角礫・縄目瓦・埴が詰められており、柱を固定するために入れたものと考えられる。方位は東から北に2°振っている。

瓦類は柱の
根 固

SA2382 (Fig.60, PL.27)

84次調査区の中央で、掘立柱建物S B2380の北側に位置する。前述した如く、概報段階で

は東西棟建物SB2385として報告していたものであるが、SA2381とは柱列の方向が全く異なるため今回は柵として報告する。東西方向に並ぶ柱列で、4間分の9.42mを確認したが、柱列の東側部分は浅い落込となっており、既に削平された可能性がある。柱穴は0.5～0.9mの不整形円形を呈し、中には角礫・縄目瓦・埴が入っていた。柱間は東から2.42m、2.53m、2.32m、2.15mとばらつきがみられる。方位は東から南に1°30'振れている。

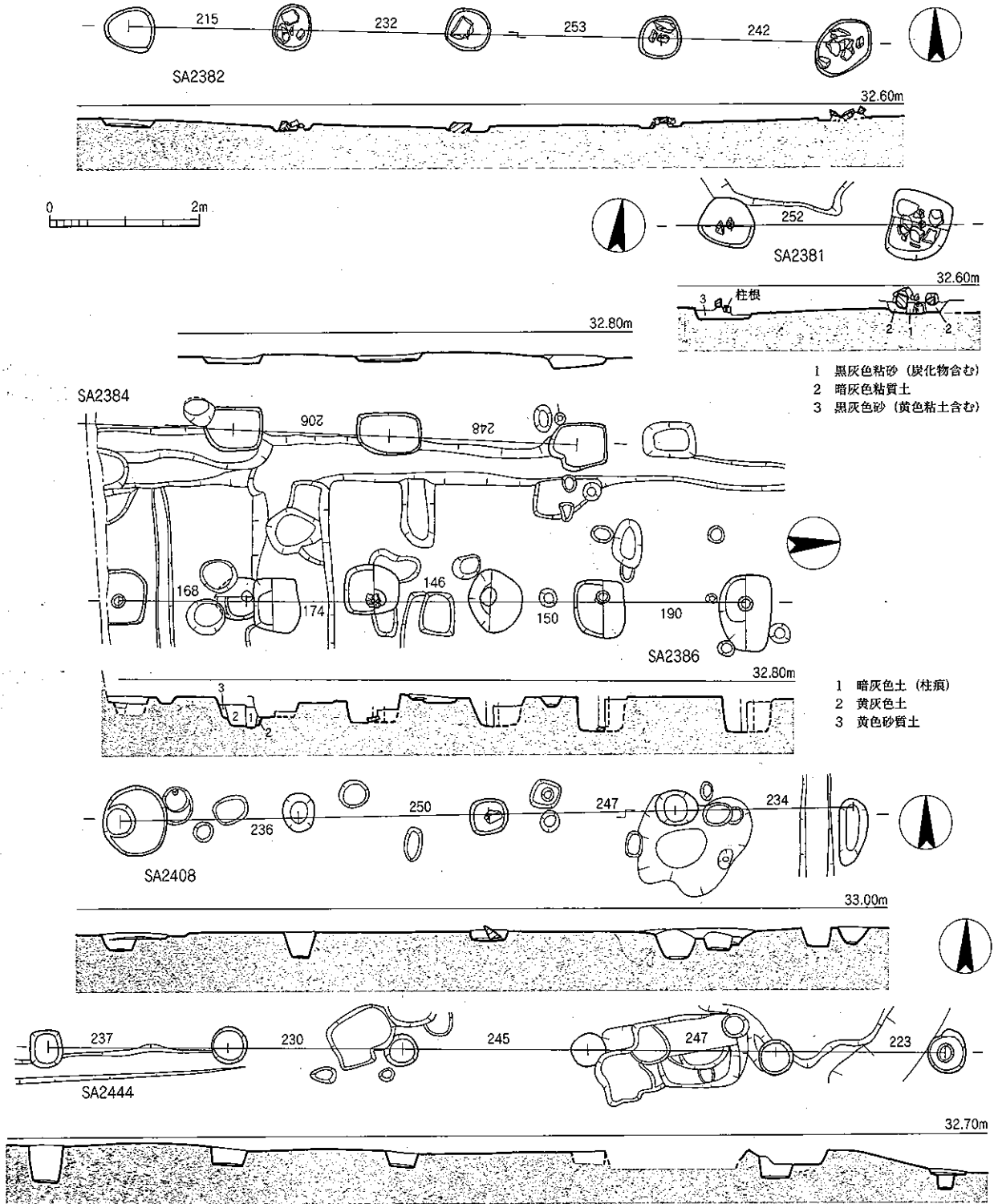


Fig.60 柵 S A 2381・2382・2384・2386・2408・2444 実測図 (1/80)

S A2384 (Fig.60)

84次調査区の南端中央部に位置し、溝SD2403を切り、掘立柱建物SB2383と重複する。柱穴3個が南北方向に並ぶことから新たに柵として番号を付した。柱穴は長軸0.8mの隅丸方形を呈し、深さは10cm前後と削平が著しい。柱痕跡が不明であるため柱間は定かではないが、北から2.48m・2.06mを測る。方位は北から東に3° 30' 振っている。

S A2386 (Fig.60)

84次調査区の南端中央部で検出した。柵SA2384の1.7m東側で、同柵と平行して位置する。溝SD2403に切られ、SB2383と重複する。柱間5間分を確認したが、さらに南に伸びる可能性がある。柱穴は0.7m前後の不整形を呈し、深さは0.4mである。柱痕跡が明瞭であり、柱間は1.46～1.9mとばらつく。柱痕は15cm程であった。なお、柱痕跡の横に石を入れているものがあり、柱の押さえとしたものと考えられる。方位は北から東に1° 30' 振っている。

S A2408 (Fig.60, PL.27)

84次調査区の南側中央部に位置し、溝SD2391と重複する。柱穴5個が東西方向に並ぶことから、今回、柵として新たに番号を付した。柱穴は径0.5mの円形を呈し、深さは0.1～0.3mを測る。柱間は東から2.34m, 2.47m, 2.5m, 2.36mとばらついているものの8尺を基本としよう。方位は東から北に1° 振っているが、掘立柱建物SB2380Bの3m南側に位置し、同建物と柱筋を等しくすることからSB2380Bに関連する施設と考えられる。

SB2380B
関連施設

S A2444 (Fig.60)

84次補足調査区の南西部に位置し、SB2420を切り、SB2400・2425と重複する。柱穴6個が東西方向に並ぶことから柵として新たに番号を付した。柱穴は径0.5m前後の円形を呈し、深さは0.2～0.4mを測る。柱間は東から2.23m, 2.47m, 2.45m, 2.30m, 2.37mとややばらついているものの8尺を基本とする。方位は東から南に2° 振っている。

S A2451 (Fig.61)

84次調査区の北西部に位置し、門建物SB2450に接続する東西方向の柵である。門建物から西側は3間分(8.37m)、東側は5間分(13.6m)検出したが、東側延長部は方向的にSB2388に接続する可能性がある。柱穴は0.5～0.7mの円形を呈し、深さは0.2m前後を測る。柱間は2.7～2.85mであるが、9尺を基本としよう。方位は東から南に1° 振っている。

SB2450に
接 続

S A2452 (Fig.61)

84次調査区の北西部で、柵SA2451の2.5m南側に位置する。SB2445と重複し、採土遺構に切られるが、都合11間分(33.7m)を確認した。柱穴は0.5m程の円形で、深さは0.2m前後を測る。柱間は2.68～3.52mとばらつく。方位は東から北に2° 振っている。

S A2505 (Fig.58)

14次補足調査区の東端で検出した南北方向の柵で、SA318の1m西側に並んで位置する。当初、梁行2間の東西棟建物が2棟並列するとみられたが、東隣の17次調査区には掘方と言える穴が存在しないことから柵と断定した。柱間5間分(14.38m)を確認したが、北側に伸びよう。掘方列の中央には土坑SK2508が存在するが、柵の掘方と重複した痕跡は認められず、当初からこの間が広がったとみられ、両者の関連性が窺われる。柱間は2.28～2.47mとややばらつきがあるものの8尺を基本とする。掘方も楕円形のものと隅丸方形のものが存在し、交互に配している。深さは0.6mとしっかりしているが、柱痕跡は確認できなかった。

S A2513 (Fig.44)

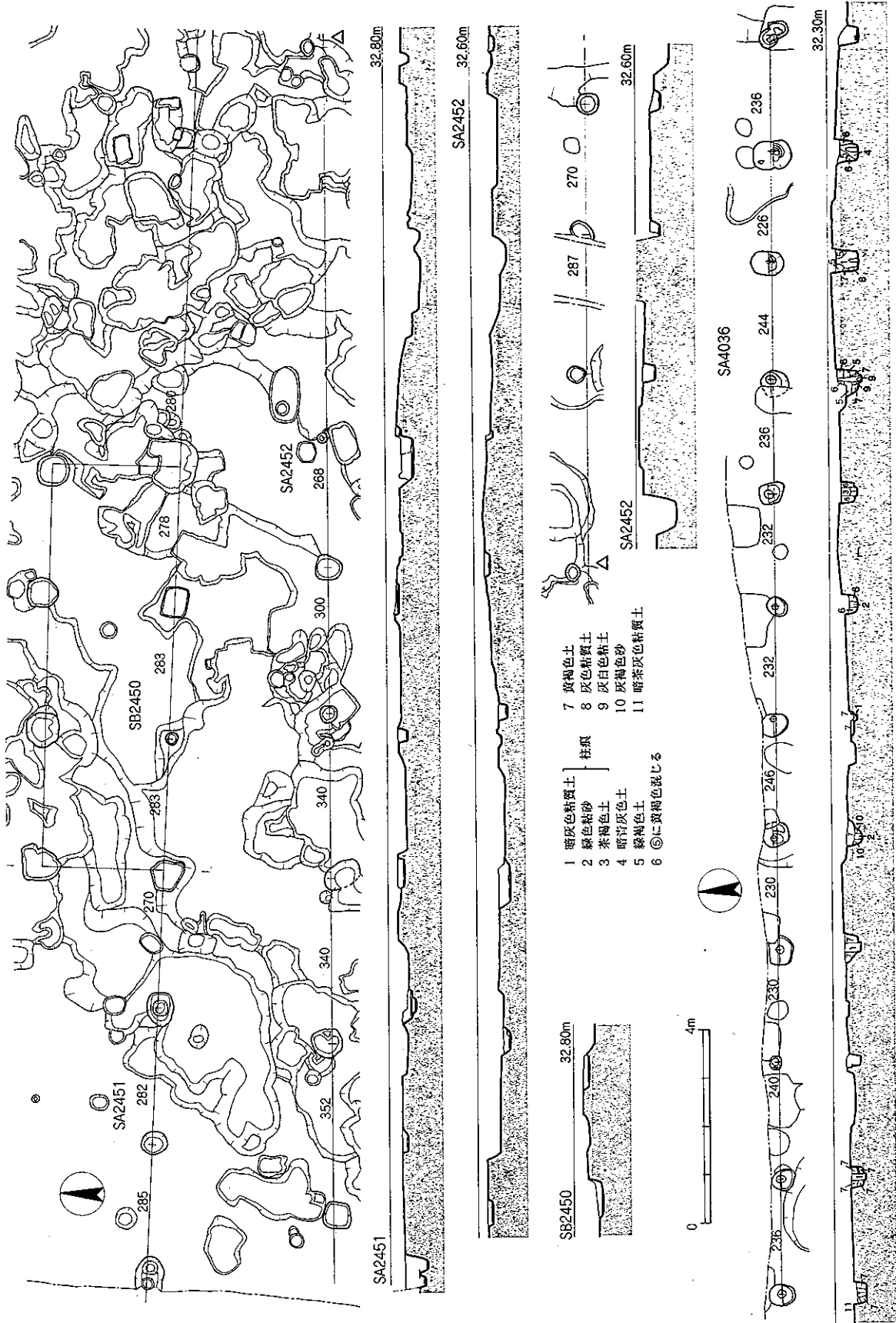


Fig.61 掘立柱建物S B 2450, 柵 SA2451・2452・4036 (1/120)

87・90次調査区の北側中央に位置し、掘立柱建物S B 2525・2530と重複するが、前後関係は判然としない。南北方向の柵で、5間以上(12.83m)を確認したが、北側に伸びる可能性を有する。柱間は1.75～3.34mとばらつきがみられる。柱掘方は隅丸方形を呈し、大きさは0.65～0.95mで、深さは0.4m前後を測る。柱痕跡は不明瞭であった。

S A 2522 (Fig.43)

87・90次調査区の西側で検出した東西方向の柵で、S B 2520とS B 2525との中間に位置し、4間分(8.86m)を確認した。柱間は2.1～2.38mとばらつきがある。掘方は隅丸方形を呈し、0.5m前後を測る。深さは東から2番目と西端のものが0.5mと深く、他のものは10cm前後と浅い。方位はS B 2520と軸を等しくすることから、同建物に付属する施設と考えられる。

S A 2894 (Fig.59)

98次調査区の南東部に位置する南北方向の柵で、柱掘方1間分を検出したが、南側は調査区外に伸びる。柱掘方は隅丸長方形を呈し、長軸0.85m前後、短軸0.65m前後、深さ0.2～0.35mであった。掘方中央での間隔は2.24mを測る。方位は北から東に2°振っている。

S A 2895 (Fig.41)

98次調査区の北西端部に位置する東西方向の柵で、柱掘方1間分を検出したが、西側は調査区外に伸びる。軸が揃っておらず、建物掘方の可能性を残す。柱掘方は隅丸長方形を呈し、長軸0.9m前後、短軸0.6m前後、深さ0.7m前後を測る。東側の掘方上層には花崗岩の割石が数個入っていた。柱間は3.08mを測る。

建物掘方が

S A 3816 (Fig.50)

129次調査区の東端部に位置する南北方向の柵で、柱掘方4個を検出したが、北側が溝S D 3816、南側が落込S X 3813と重複するため3間以上になる可能性を有する。また、掘立柱建物S B 3820と重複する。柱間は北から2.14m、2.03m、2.36mとばらついている。掘方は径50cm前後の円形を呈し、深さは30cm前後を測る。方位は北から西に1°振っている。

S A 4034 (Fig.38)

147次調査区の北西側で検出した東西方向の柵で、S B 2435と重複する。柱掘方3個の2間分(3.85m)を検出した。掘方は径0.8m程の不整円形を呈し、深さは0.5～0.6mと深い。中央の掘方のみ径0.2mの柱痕が確認できた。方位は東から南に1°振っている。

S A 4036 (Fig.61)

147次調査区の北端で検出した東西方向の柵で、掘立柱建物S B 2435・4040を切る。11間分(25.86m)を確認したが、西側へはさらに伸びよう。柱掘方は0.5m前後の隅丸方形を呈し、深さは0.3mを測る。東端から2～4番目に径10cmの柱根が遺存していた。S B 4035Bと方向・柱間が対応しており、関連施設とみられる。方位は東から南に3°振っている。

S A 4053 (Fig.38)

147次調査区の北側で、S B 2435を切る。3間分の長さ6.8mを確認した。柱穴は0.4mの円形を呈し、柱間は東から2.48m、2.28m、2.04mを測る。方位はほぼ東西方向を示す。

S A 4578 (Fig.54)

187次調査区の東側で、掘立柱建物S B 4560・4562と重複する。新規に番号を付した東西方向の柵で、3間分(7.43m)を検出したが、東側へはさらに伸びよう。柱穴は0.3～0.5mの円形を呈する。深さは上面検出に留めたため不明。方位は東から北に1°振っている。

(3) 溝 (Fig.62)

二つの南北溝

政庁周辺官衙跡・不丁地区は、二つの南北溝によって他の官衙と分けられる。西を限るSD320は大楠地区と、東を限るSD2340は正面広場地区とそれぞれ境界を成している。ただし、東限溝SD2340の埋没後は、石組溝SD2335が新たに構築される。さらに、この境界溝の間を東西方向に走る溝によって幾つかの区画に分かれる。これらの溝には、流水の痕跡が認めら

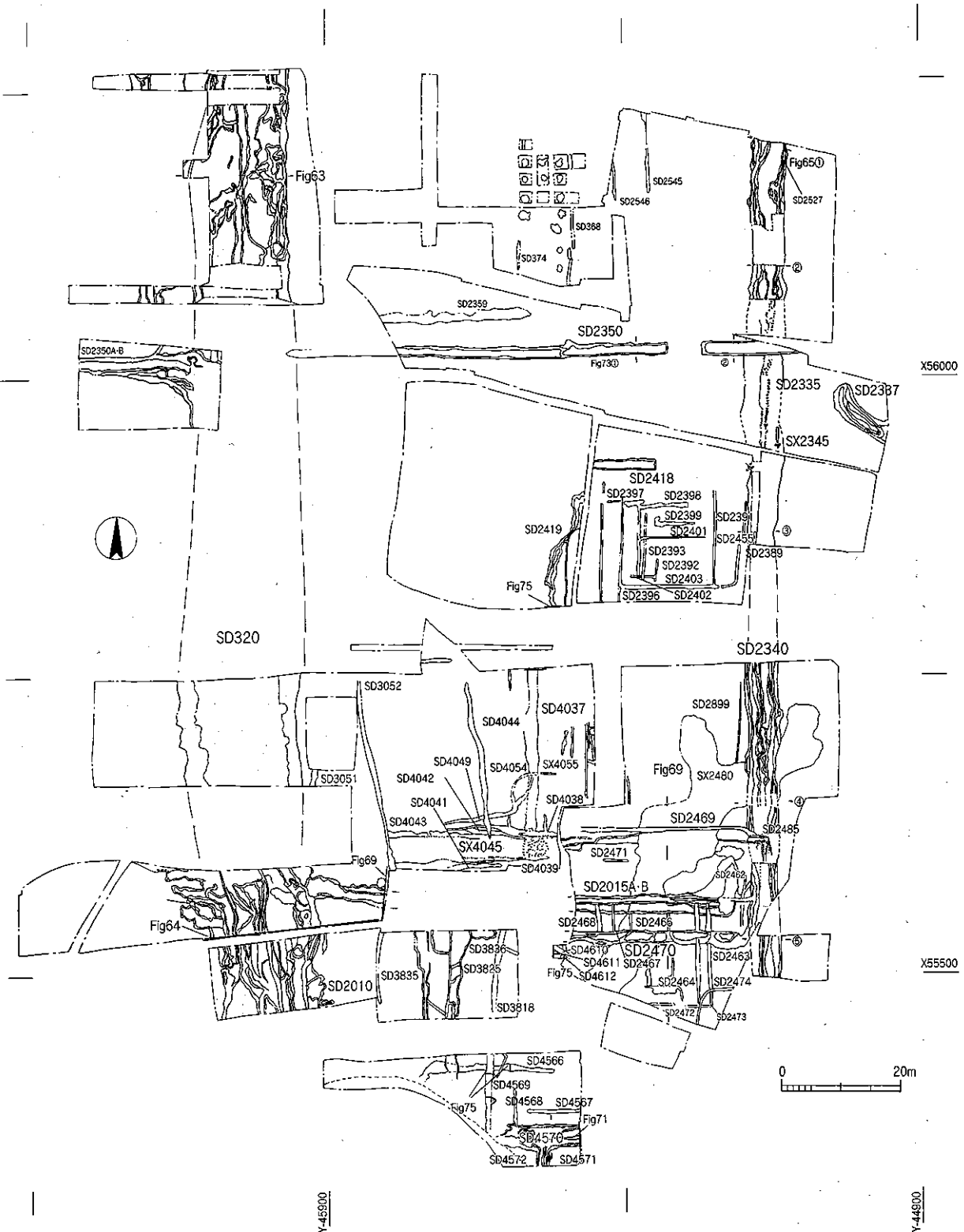


Fig.62 不丁地区溝配置図 (1/1,000)

れるものや意図的に埋め戻されたものがある。そして、これらの溝以外にも方位に併せて東西・南北に走る溝や、建物と軸線をあわせて並走する溝がある。ここでは、1) 境界溝、2) 区画溝、3) その他の区画溝、4) その他の溝の順に報告する。

1) 境界溝

SD320 (Fig.63・64, PL.32・33)

不丁地区の西境を限る溝で、14・同補足・76・104・110次調査で検出した。各調査区において確認した溝の幅は、14次調査区の北端で13.5m、南端で16.0m、76次調査では11.0m、104次調査では上面検出で16～17mである。各地点における、溝幅の違いは、氾濫（流水の影響）による溝肩の浸食のためと考えられるが、残りの良い北端の14次では13.5m、南側の76次調査では11.0mであり、13m前後が、溝本来の幅となる可能性がある。溝肩からの深さについては、14次調査で1.9m、76次調査で1.6mであった。さらに溝底の標高を比較すると、14次で30.6m、76次で29.5mとなり、0.9mの高低差を持って、南へ向かって傾斜している。

調査において、土層堆積状況を含めて断面形状を確認することができたのは、14・76次調査である。14次調査区では、溝内の中央部が最も深く平坦であり、東西の立ち上がりはなだらかである。これに対して、76次調査区では、約10mに亘る溝底があり、東西端で60cm程度の高低差をもって立ち上がる。断面形状は、底面の幅の広いU字状である。

14・76次調査区では、まず床土下位に溝埋没後の堆積層がそれぞれ認められる。14次調査では、灰褐色粗砂や砂質土（4・5）が、76次では暗灰色土や茶灰色土（7～9）が堆積している。そして、この下位で両調査区の、溝の堆積層がそれぞれ確認できる。

14次調査 (Fig.63) では、堆積層は大きく上・中・下層に分かれる。このうち上層（7～21）は、黒灰色粘質土、暗青灰色砂質粘土層が中心であり、最下部には流水を示す粗砂層がある（17・18）。中層（22～29）には、上層との境となる黒色粘質土（22）が堆積し、中央部では流水を示す淡茶灰色砂（26）がある。そして、この層に切られる形で腐植土（25・27）があり、題箋と木簡が出土した。下層（30～37）は、灰白色砂礫層や暗青灰色砂層、茶褐色砂層であり、その中でも、わずかな腐植土層（36）が部分的にみられ、ここでも木簡が出土した。最下層の灰白色砂礫層（35）は、拳大の礫を含んでおり流水の痕跡とみられる。溝底のほぼ中央部を蛇行しながら南北に伸びる幅1.5m～2.0mの流路状の小溝である。

木簡の出土

76次調査 (Fig.64) では、上・中・下・最下層に分かれる。上層（11～16）は、灰色砂礫層の下に腐植土（14・16）がある。中層（17～31）では、中央部に砂層（25）や砂礫層（29）があり、その下位に腐植土（31）が形成される。そして最下層には淡青灰砂礫層（34）が堆積している。この砂層堆積は流水の影響によるものであろう。

両地区では、砂層堆積の後に腐植土が形成され、その上位に再び砂層堆積がみられる点は共通している。溝が、滞水と流水を繰り返す形で機能していたことが分かる。概ね最下層の礫層堆積上位の腐植土は、各調査地点共に同時期とみられる。また、溝内では、東肩に僅かに笹が

護岸遺構

残存し、また北東隅部で丸太と杭、笹が組まれたSX2013を検出した。このSD320には、西からSD2011・2012が、東からSD2015がそれぞれ接続する形をとる。また東側では、この溝廃絶後、SD2010が掘削される。

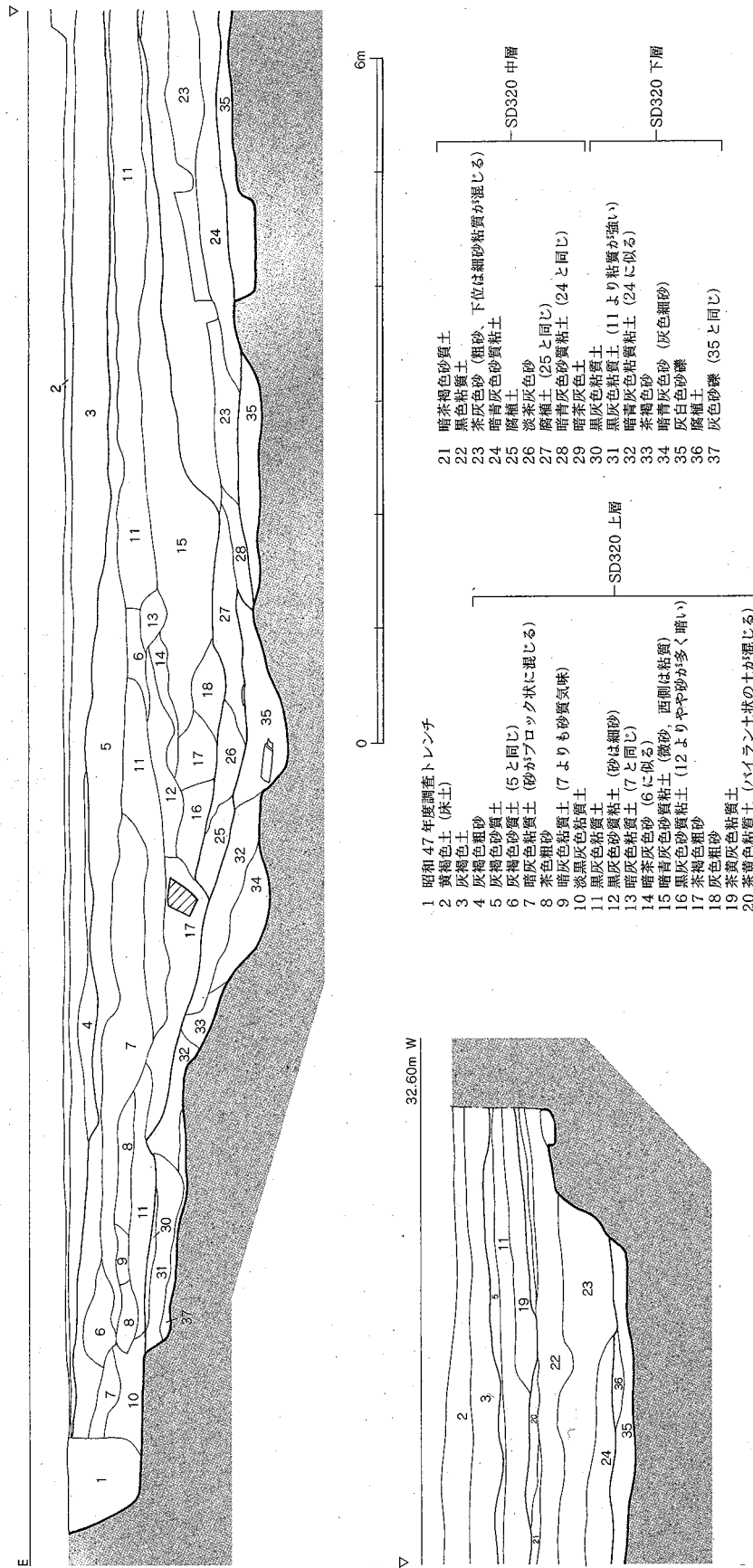


Fig.63 南北溝SD320 (14次) 土層図 (1) (1/60)

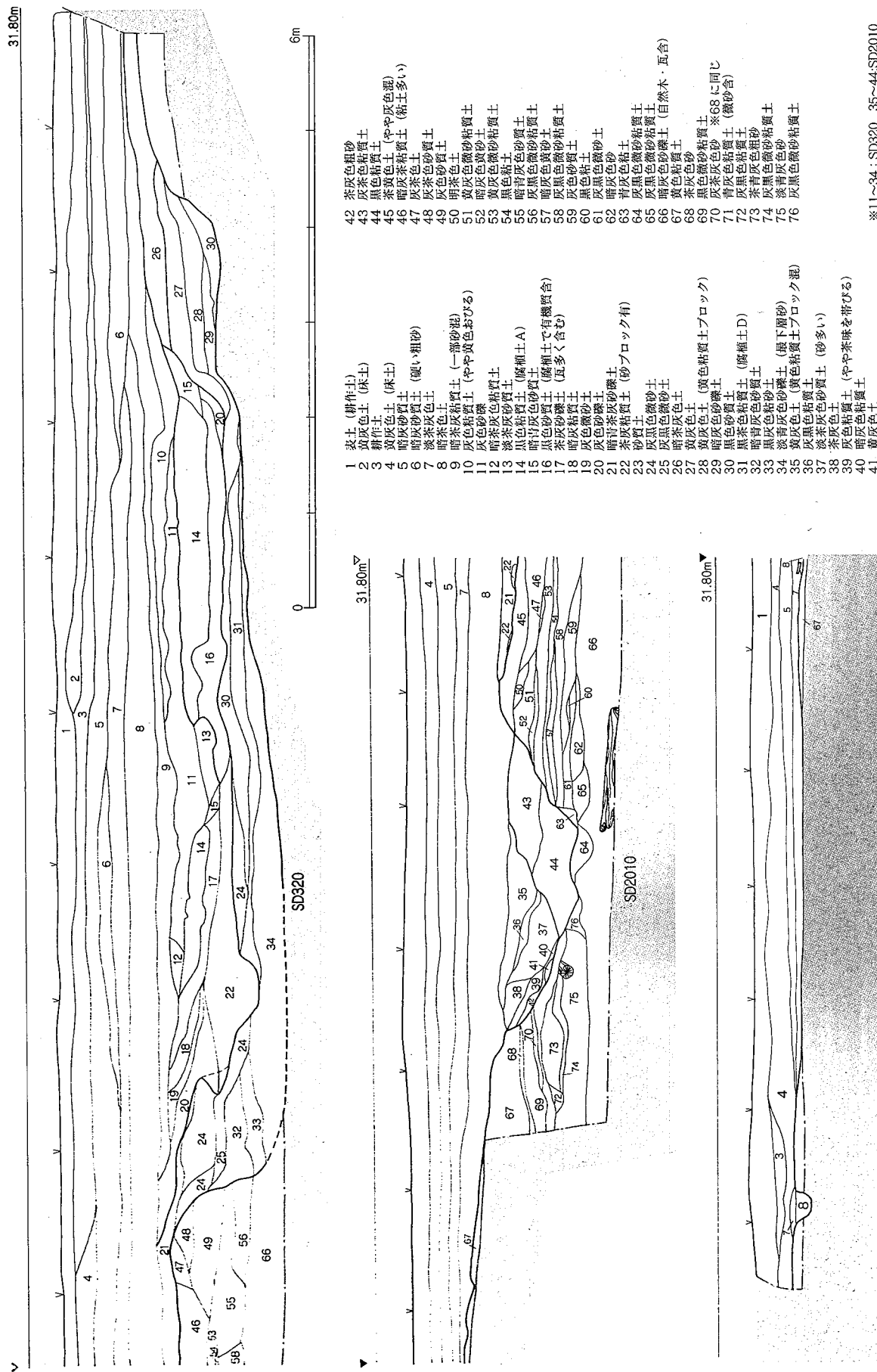


Fig.64 南北溝SD 320 (76次) 土層図 (2) (1/60)

S D2340 (Fig.65・66, PL.34～36)

不丁地区の東を限る溝で、83・84・85・87・90・98・124次調査で検出した。この溝埋没後には、石組溝S D2335、暗渠S X2435・2485などが築かれている。この溝とS D320との心々距離は約87mである。また、北端の90次調査区から南端の124次調査区までの長さは約140mであり、S D2335が重複する83次調査区以外は上層遺構に影響の無いところではほぼ完掘した。

各調査区での溝の大きさをみると、84次調査では幅5m前後、深さ0.95m、85次調査北では幅5.2～5.4m、深さ約1.05m、87・90次調査区南半では幅約5.5～6.0m、深さ約1.25m、98次調査では幅5.5m、深さ1.0m、124次調査では幅5.2m以上、深さ1.55mを測る。このように溝幅は各地点で異なるが、概ね5.5m前後である。これに対して溝の深さは残存状況から、必ずしも一定ではない。溝底の標高は北端の87・90次調査区の北側では標高32.36m、南側では31.98mとなる。さらに南端の124次調査区では標高30.40mである。南北両端部で1.96mの高低差を持って北から南へ傾斜している。溝の断面形状は逆台形で、平坦な溝底で幅1.5～1.8m、そこからハの字状に開く形で溝肩へ立ち上がる。

次に溝の堆積状況を北から南へ追ってみたい。90次調査区の溝埋土は、大きく上層(7～9)・中層(10～12)・下層(13・14)に分かれる。上層は溝埋没に関わる堆積土、中層は粘質の強い滞水層、下層は流水の痕跡を残す砂層である。11層・黒灰色粘質土で木簡が出土している。近接する87次調査区でも上(10・11)・中(12～15)・下(16～18)層に分かれる。このうち13層・黒灰色粘質土が90次に木簡出土層(11)に対応する。また、上層の10・11層でも木簡が出土している。最上層では、S D2340埋没後に築かれたS D2335の堆積土・茶灰色砂質土(8)を埋める整地層(6・7)がある。南の84次調査区では、黒灰色粘質土(3)が87・90次における木簡出土層に相当しよう。

85次調査区では、大きく2度に亘って溝は堆積し、上下層に分かれる。このうち下層の黒灰色粘質土(9)の下部では、部分的に溜り状の腐植土がみられ、「天平六年」銘木簡が出土した。さらに上層(5～7)も滞水を示す粘質土であり、ここからも木簡が出土している。この調査区の南端部(Fig.66)では、下層に黒色土や黒色砂質土、暗青灰色粘質土が堆積している。この上層には、暗灰色砂質土、茶黒色土、暗茶灰色粘質土などがあり、S X2485を構築する際に人為的に埋めた整地層と考えられる。整地土中には人頭大の礫が投げ込まれていた。

「天平六年」
銘木簡の
出土層

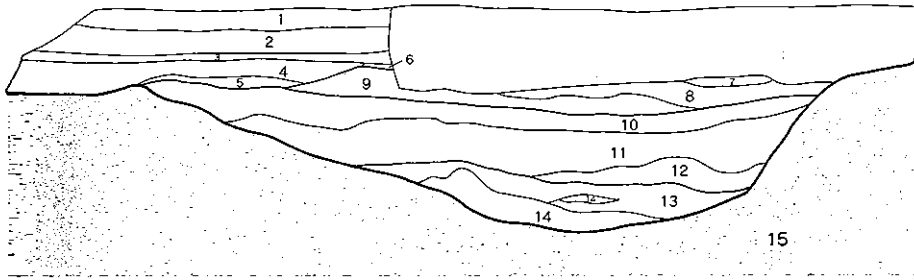
98次調査では、上・中・下層に分かれる(Fig.23)。このうち上層の茶褐色土は最終的な埋没を示す。中層(7・8)は暗灰色粘質土や黒灰色土で多量の遺物が出土した。下層の灰白色砂や灰黒色粗砂層は流水の痕跡とみられるが、遺物は少ない。最南端の124次調査区では、上(3)・中(5・6)・下(7～9・13)・最下(10～12)層に分かれ、下層の黒茶灰色土(9)より木簡が出土している。

このほか、85次調査区南半部では、溝底面の両端において、南北2列の丸杭を検出した(Fig.66)。東西の杭幅約1.80mであり、杭径は約5～10cm程度である。堆積状況から、溝掘削の早い時期に溝の護岸のために設けられたと考えられる。

護岸の杭列

90次北壁

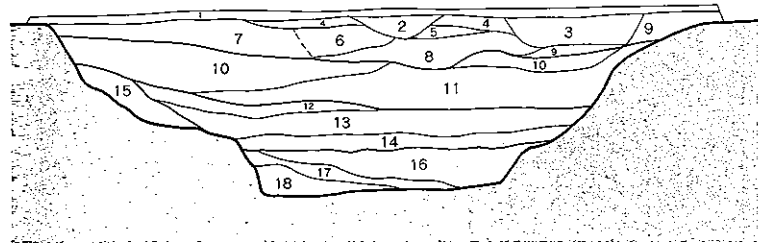
34.40m



- 1 真砂土
 - 2 黒灰色土(表土)
 - 3 黄褐色土(床土)
 - 4 茶褐色土(黄褐色ブロック混)
 - 5 茶褐色土(4に同じ炭化物混)
 - 6 茶黄色土
 - 7 茶灰色土(黄灰色粘質土)
 - 8 淡茶灰色土(黄灰色粘質土)
 - 9 茶灰色土(黄色粘土ブロック、砂混)
 - 10 黒色粘質土(暗灰色粘質土)
 - 11 黒灰色粘質土(木簡出土41点・炭化物混)
 - 12 青灰色粘質土
 - 13 腐植土(茶褐色粗砂土)
 - 14 茶褐色粗砂土
 - 15 黄灰色粘質土(地山)
- 上層
中層
下層

87次北壁

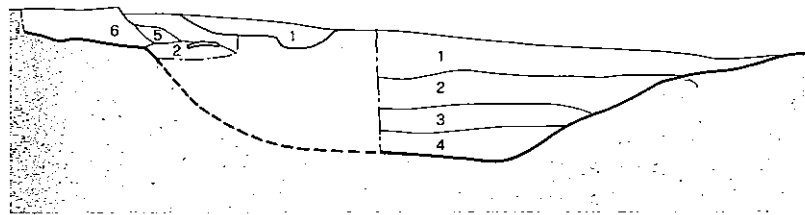
33.80m



- 1 黄色土
 - 2 暗茶灰色砂質土
 - 3 暗褐色土
 - 4 暗灰色土(瓦も混じる)
 - 5 灰茶色砂
 - 6 暗茶色砂質土(瓦も混じる)
 - 7 明茶黄色土
 - 8 茶灰色砂質土(SD2335埋土)
 - 9 茶灰色砂質土
 - 10 黒色土
 - 11 暗灰色粘質土
 - 12 黒色土
 - 13 黒灰色粘質土
 - 14 暗青灰色粘質土(黒灰色粘土塊を含む)
 - 15 暗茶灰色粘質土(灰色粘土混じる)
 - 16 茶褐色砂土
 - 17 黒茶色粘質土
 - 18 暗灰色粗砂
- 上層
中層
下層

84次北壁

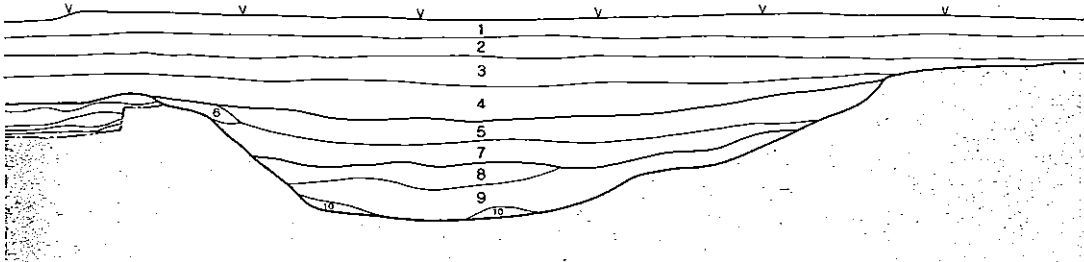
33.00m



- 1 黄茶色土
- 2 暗茶色粘質土(茶色混)
- 3 黒灰色粘質土
- 4 黒灰色粘質土(青灰色粘土ブロック混)
- 5 灰色砂(ブロック状)
- 6 黄灰色砂質土

85次北壁

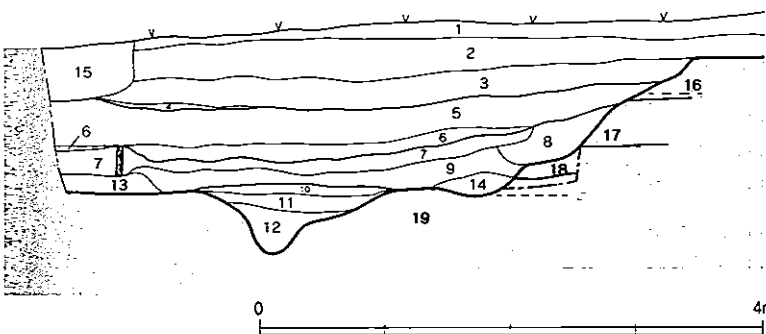
33.00m



- 1 表土
- 2 黄灰色土(床土)
- 3 灰褐色土
- 4 暗褐色土
- 5 茶灰色粘質土
- 6 茶灰色砂
- 7 暗茶灰色粘質土
- 8 暗灰色粘質土
- 9 黒灰色粘質土(下層に部分的に腐植土) ※「天平六年」銘木簡出土
- 10 暗青灰色砂質土

124次北壁

32.40m



- 1 表土
- 2 床土
- 3 茶灰色砂質土(瓦片・小石混)
- 4 茶色砂層
- 5 茶灰色粘質土
- 6 黒灰色砂質土
- 7 暗茶灰色土(腐植土層・砂がブロック状に混じる)
- 8 青灰色砂質粘土
- 9 黒茶灰色土(木片炭化物混) ※木簡出土層
- 10 腐植土
- 11 暗灰色粘質土(砂礫混)
- 12 腐植土
- 13 灰白・青灰色細砂
- 14 茶灰色粗砂(老司II式軒先瓦出土)
- 15 粗乱(新期)
- 16 黄色粘質土(地山)
- 17 砂質土(地山)
- 18 灰色粗砂(地山)
- 19 黒色粘質土(地山)

Fig.65 南北溝 S D 2340 (84・85・87・90・124次) 土層図 (1/60)

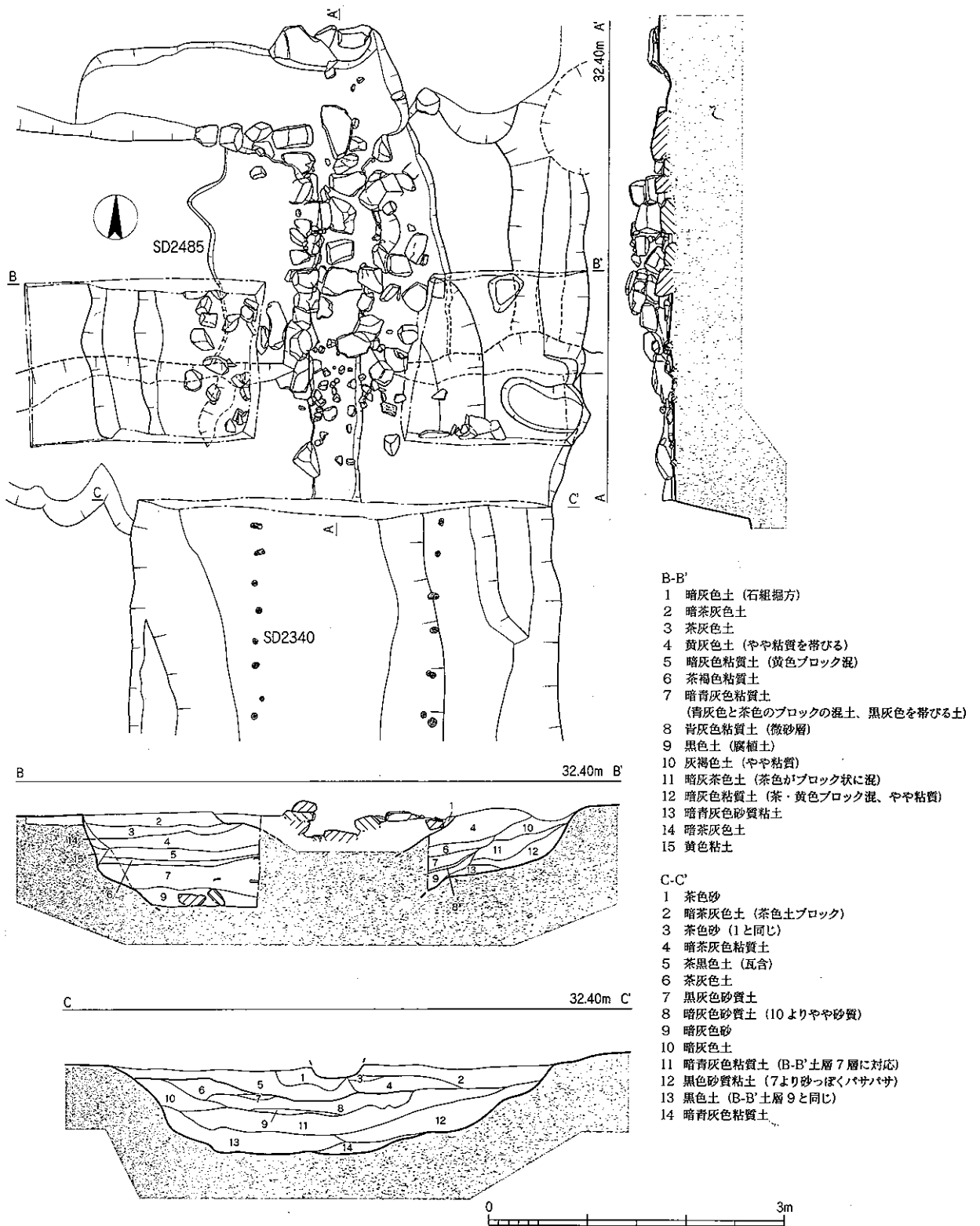


Fig.66 南北溝 S D 2340・2485 実測図 (1/60)

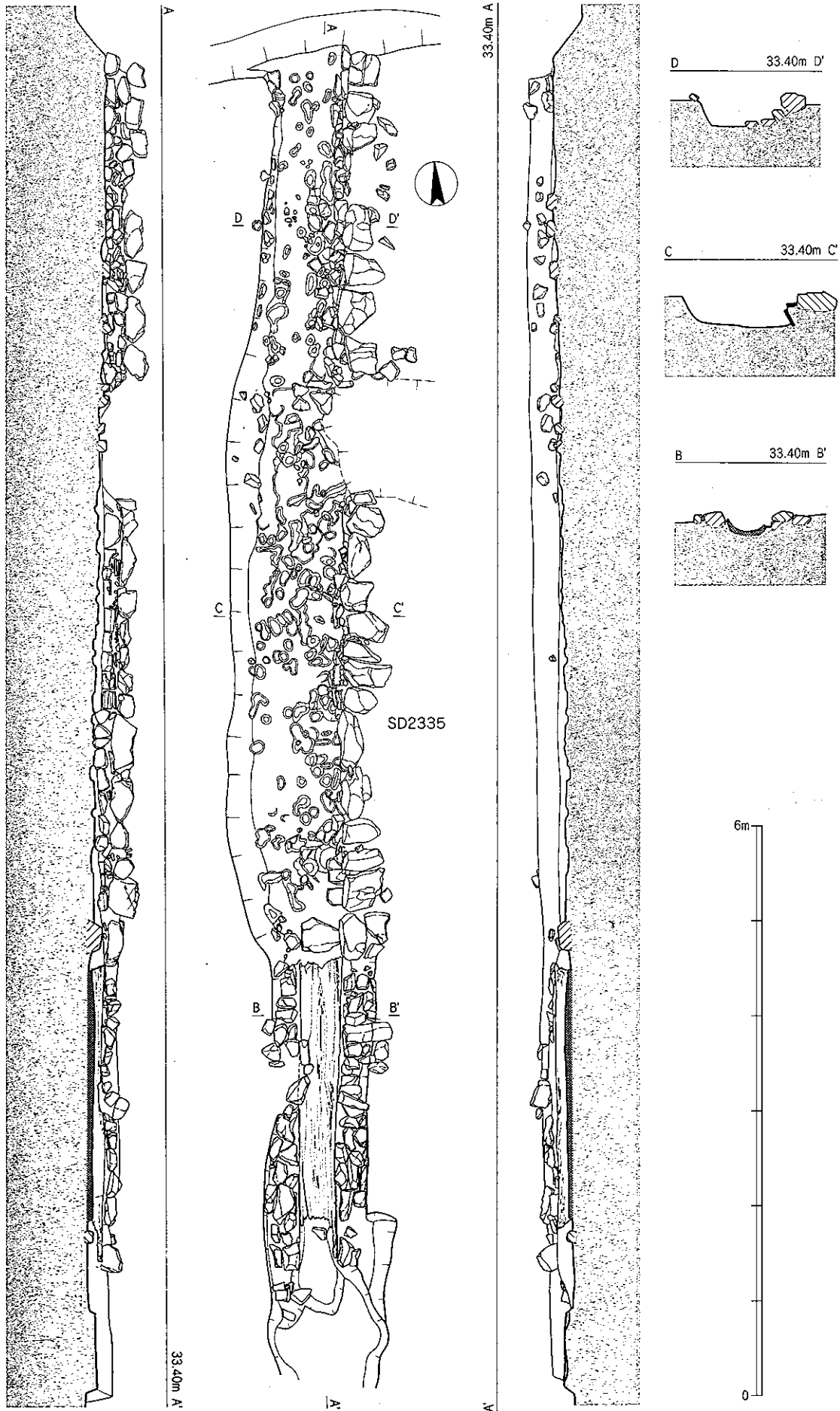


Fig.67 石組溝SD 2335 (83次) 実測図 (1/60)

2) 区画溝

南北溝

SD2335 (Fig.67・68, PL.37・38)

83・87次調査区東側で検出した。不丁地区の東を限る、南北溝SD2340の埋没後に構築された南北方向に流れる石組溝である。また、南端部付近では木樋を使用した暗渠となっている。調査では、約28m分を検出したが、本来はまだ北側に伸びていたとみられる。ただし、87次調査区の北側では、わずかに砂の流れがある程度で不明瞭なため、この溝が全てに亘って石組であったのかは分からない。石組の溝幅は0.5m、深さ0.4mであり、東側が残りのよい状態であるのに対し、西側はほとんど残っていない。東側の観察では、掘方の基底部に無文磚を置き、その上に土の目地を積んで自然礫を積み上げて石組としている。また、南端部付近に設置された木樋は、長さ3.20m、径0.50mの丸太材を半裁して、凹面に削り抜いたものである。この石組溝は北側で、東西溝SD2350に切られている。

木樋使用の
暗渠

SD2455 (Fig.62・付図)

84次調査区東側で検出した。SD2340の埋土を掘り込んでいる南北溝だが、畦の下に潜っており、十分に調査できていない。一部に石組がみられることから、本来は石組の護岸であったと考えられ、溝幅1.2m、深さ0.2mを測る。北側で確認した石組溝SD2335もSD2340を掘り込んで構築しており、一連の溝の可能性も考えられるが、軸線や方位が異なっており別遺構と捉えている。

東西溝

SD2015A・B (Fig.69, PL.39)

76・85次調査区で検出した。西限溝SD320と東限溝SD2340とに接続する東西方向の溝である。同一箇所重複し、古(A)・新(B)に分かれることを確認している。西側の76次調査区では、溝幅はA・B共に約3.0mあり、深さは古期溝Aが約0.8m、新期溝Bが約0.6mである。一方、東側の85次調査区では、古期溝Aの幅は西端で幅1.3m～1.5mだが、東へ向かうにつれて次第に狭くなっており、SD2340付近では、幅0.5～0.6m程度になる。埋土は灰色砂質土であり、堆積状況をみると東から西側に流れている可能性が高い。新期溝Bは、古期よりも浅く、幅0.25～0.70mである。このSD2015は、流路SX2480を切り込んでおり、またSK2475に切られている。この溝の南側には、約5m(心々距離)の間隔をおいて、SD

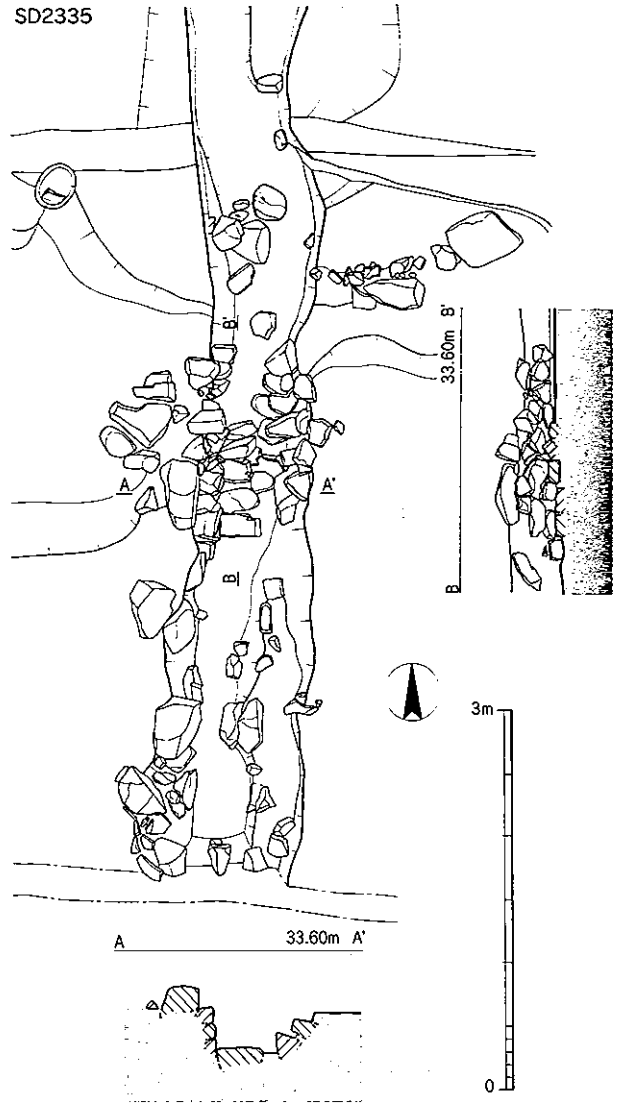
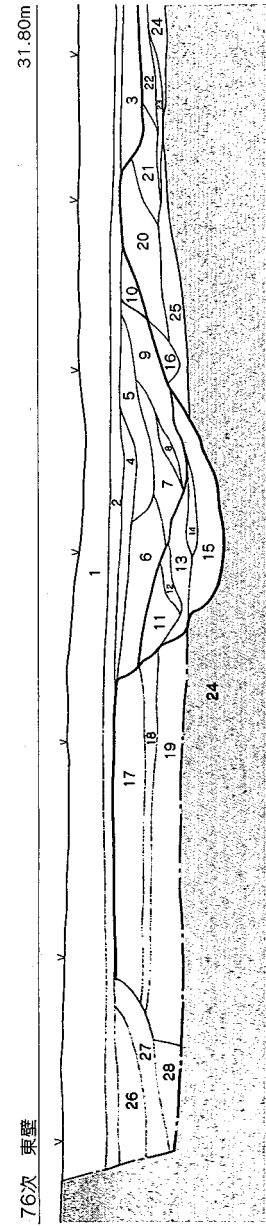
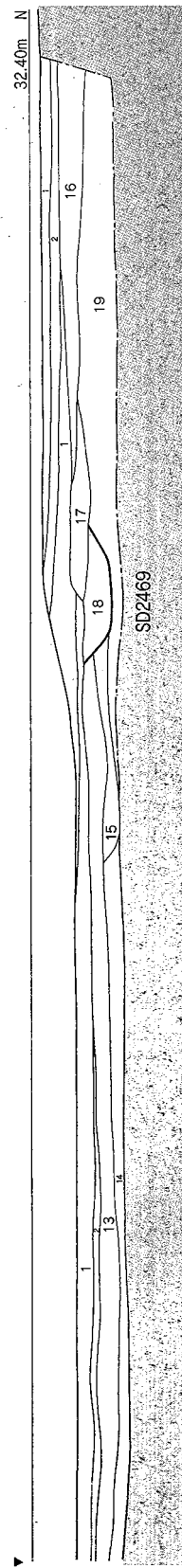
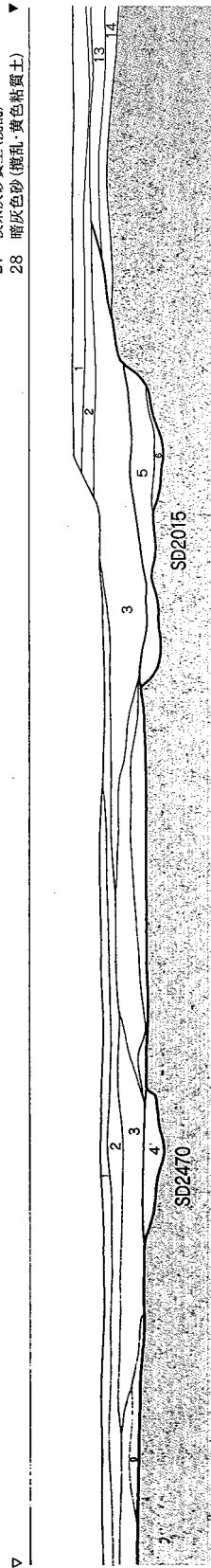
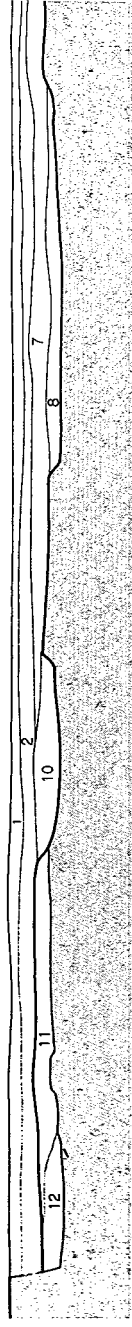


Fig.68 石組溝SD2335(87次)実測図(1/60)



S_85次中央



- 1 表土
- 2 黄灰色土(床土)
- 3 淡茶灰色土(攪乱)
- 4 黄茶色土
- 5 淡茶褐色土(遺物含む)
- 6 淡茶灰色粘質土(薄かに遺物含む)
- 7 暗茶褐色土(9と類似するがやや暗い)
- 8 灰色砂
- 9 黒褐色土(10より黒味強い)
- 10 茶褐色土(遺物含む)
- 11 暗灰色粘質土
- 12 暗灰色粘質土
- 13 暗灰色粘質土(粗砂)
- 14 暗灰色砂(黄灰色粘土ブロック混)
- 15 暗灰色砂(13より細かい,土器を多量に含む)
- 16 灰白色砂
- 17 黄褐色粘質土
- 18 灰色微砂
- 19 黄灰色粘質土
- 20 暗茶灰色砂質土(地山)
- 21 暗灰色砂質土(地山)
- 22 黄褐色粘質土(17と同じ)
- 23 灰色微砂(18と同じ)
- 24 灰白色粘土(地山)
- 25 灰色粗砂(遺物含まない)
- 26 淡茶灰色土(攪乱)
- 27 淡茶灰色粘土(攪乱)
- 28 暗灰色砂(攪乱・黄色粘質土)

- | | | |
|---------------------------|------------------|------------------|
| 1 灰褐色土(表土) | 8 暗黄灰色粘質土 | 15 暗茶灰色土 |
| 2 黄褐色土(床土) | 9 暗茶灰色土 | 16 暗茶褐色土 |
| 3 暗灰色土 | 10 暗褐色土(黄色ブロック混) | 17 灰褐色土 |
| 4 暗褐色土(黄色粘土ブロック・SD2470埋土) | 11 暗茶灰色土 | 18 暗茶褐色土(SD2469) |
| 5 暗褐色土(暗灰色粘土混・SD2015埋土) | 12 暗茶灰色土 | 19 暗茶灰色土(下部粘質) |
| 6 暗灰色砂(SD2015下層) | 13 暗灰色粘土 | |
| 7 暗褐色土(土器多量に混じる) | 14 暗黄褐色土 | |

Fig.69 東西溝 S D 2015・2469・2470 土層図 (1/60)

2470が並走しており、SD2340に接続する。

SD2470 (Fig.69, PL.39)

85次調査で検出した東西方向の溝である。SD2015の南側を並走してSD2340に接続している。残りの良いところで、溝幅2.0～2.5m、深さ0.3mである。約30m分を調査したが、西側の129次調査区では不明瞭となり、西側の南北溝SD320との接続関係などは確認できていない。

SD4570 (Fig.70・71, PL.40)

不丁地区南端となる187次調査区で検出した、東西方向に走る溝である。溝底が大きく2つ

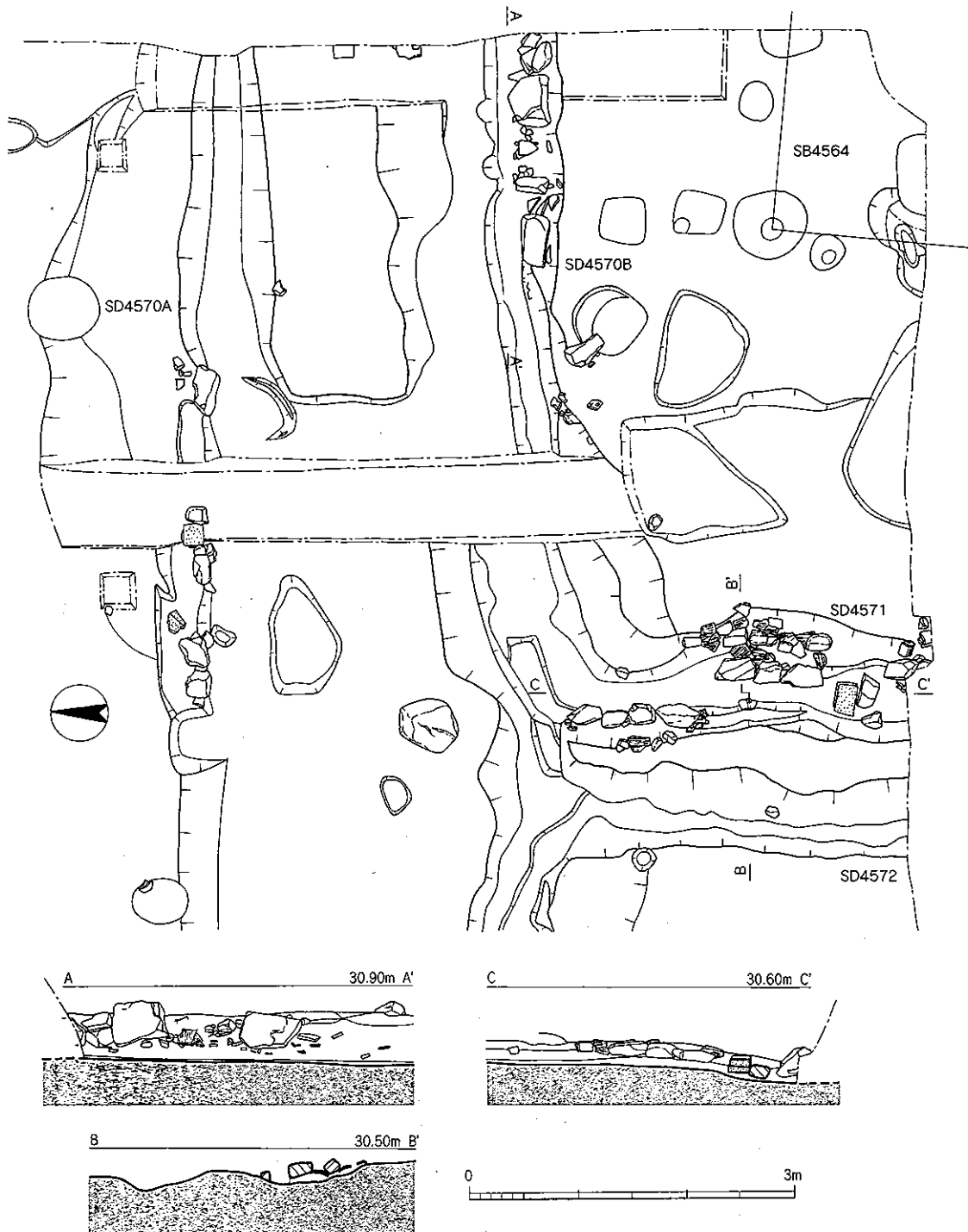
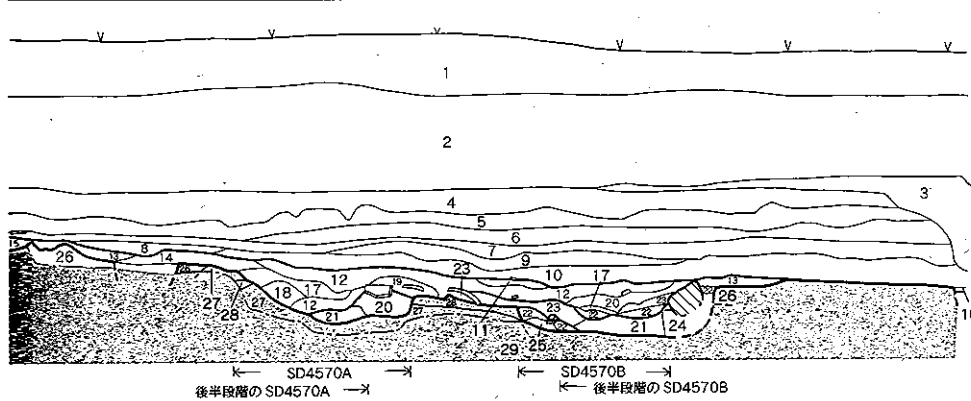


Fig.70 東西溝SD4570, 南北溝4071・4072実測図(1/60)

SD4570 東端壁土層



- 1 現水田耕作土
- 2 真砂土盛土(区画整理時)
- 3 ある時期の耕作土
- 4 床土
- 5 旧水田耕作土(灰黒色土)
- 6 旧水田耕作土(床土、灰黄色土)
- 7 旧水田耕作土(床土、黄色土)
- 8 黄灰色土
- 9 暗黄灰色土
- 10 暗褐色包含層
- 11 暗灰色粘質土
- 12 暗灰色粘質土(最終埋没土)
- 13 暗黄灰+茶色土(整地層)
- 14 暗茶色土
- 15 暗茶褐色土、炭多し(遺構)
- 16 暗茶褐色土(柱穴)
- 17 灰褐色砂質土
- 18 灰色砂層
- 19 暗褐色土
- 20 灰茶色砂質土
- 21 灰色細砂
- 22 茶黒色土
- 23 黒色砂質土
- 24 暗灰粘質土
- 25 29と26の泥土
- 26 灰黄色粘土(地山)
- 27 粗砂層(地山)
- 28 灰褐色粘土(地山)
- 29 黒色粘土(地山)

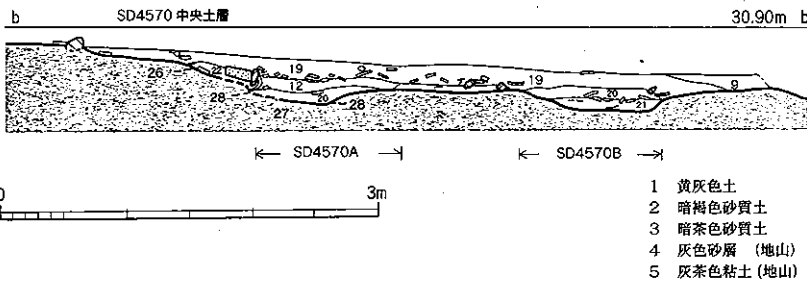


Fig.71 東西溝SD 4570 土層図 (1/60)

にわかれ、北をA、南をBに区分したが、明確な切り合いは把握できていない。ただし、Aは埋没においても溝形状を維持しているが、Bについては、酸化鉄の沈着した層があり、両者の埋没に時間差が存在した可能性もある。また、Aには炭化物が多く、Bは砂質土であり堆積状況も異なる。溝幅は3.8～4.8m、最も深いところで0.55mを測る。また、Aの溝肩北側には、護岸用の石組が約3mに亘って残存している。その基底部には、基礎材として軒丸瓦の瓦当面を上にして水平に並べ、その上に無文塼を置いている。一方、Bは、南北溝SD4571・4572との切り合い関係がみられずに繋がっており、連続した関係を持つ溝とみられる。

溝底が分かれる

SD4571 (Fig.70, PL.40)

187次調査区で検出した。東西溝SD4570に直交する形で接続する。また西側には、SD4572が並走している。約3m分を調査したが、まだ南側の調査区外へ伸びる。溝の東西両肩には、石組が残っており、石列の裏側には平瓦などが密に敷かれているが、幾度か改修されたようである。石組間の幅は0.2m程度であり、開渠の規模としては小さく、暗渠であった可能性もある。また、溝南半の中央には長方形の無文塼が置かれていた。この溝の埋土最下部は粗砂であり、流水の痕跡とみられる。

SD4572 (Fig.70, PL.40)

187次調査区で検出した。SD4571の西側に並走して、SD4570Bに接続する。幅1.1m、深さ0.2mを測る。溝底の傾斜と地形からSD4570Bの西から流れる水が、この溝に入って南へ排水されたと考えられる。溝底の凹凸は激しいが、東のSD4571が石組であるのに対し、この溝には石組や瓦などの護岸補強の痕跡は認められない。このような状況から両溝の掘削に時期差が存在する可能性もある。

S D2350 (Fig.72, PL.41)

83次調査区で検出した東西溝である。不丁地区を限る南北溝S D320とS D2340の範囲に広がっており、石組溝S D2335、掘立柱建物S B2355・2365などを切る。総長約85mを測るが、S B2355付近では5.60mの間隔をおいて繋がっていない。そのため、東側は長さ16.0m、西側は長さ63.4mになる。溝は断面逆台形状に掘られ、溝幅1.60～1.90m、深さ0.45～0.60mを測る。埋土は、黄色や黒褐色の粘土がブロック状に入っており、瓦や土器などを含んで硬く締まっている。流水に関する砂層や黒灰色粘質土はわずかにみられるだけであり、人為的に埋め戻されていることは確かである。

人為的な埋戻し

S D2418 (Fig.62, PL.57)

84次調査区中央付近で検出した東西方向の溝である。約10m分を調査した。上縁の幅1.60m、下縁幅1.35mで、現状で深さ0.2mを測る。中央畦より西側については、S D2419等によって切られるためか不明瞭である。

S D2469 (Fig.62)

85次調査区の北端で検出した。東西方向の溝であり、西側に向かうにつれて不明瞭となるが、約30m分を調査した。溝幅は0.5～0.8m、最深部で0.28mを測る。切り合い関係から、この溝はS D2340よりも新しく、石組暗渠S X2485よりも古い。

S D2471 (Fig.62)

85次調査区で検出した東西方向の溝である。S D2469の南側に位置している。溝幅0.8～1.0mで、溝内には人頭大の自然礫を数個配していた。この溝の南肩は、石組暗渠S X2485の北側で東西方向に配された石列と筋を併せていることから一連の遺構とみられる。

S D4037 (Fig.72, PL.43)

147次調査区で検出した南北溝である。掘立柱建物S B4040の柱掘方を切っている。南端部で溝S D4038、礫敷遺構S X4045に接続している。上縁幅1.4～2.3m、底部幅1.0～1.75m、深さは最大で0.25mを測る。溝の底面は急に立ち上がっている。溝底部の高低差は、南端

SX4045に接続

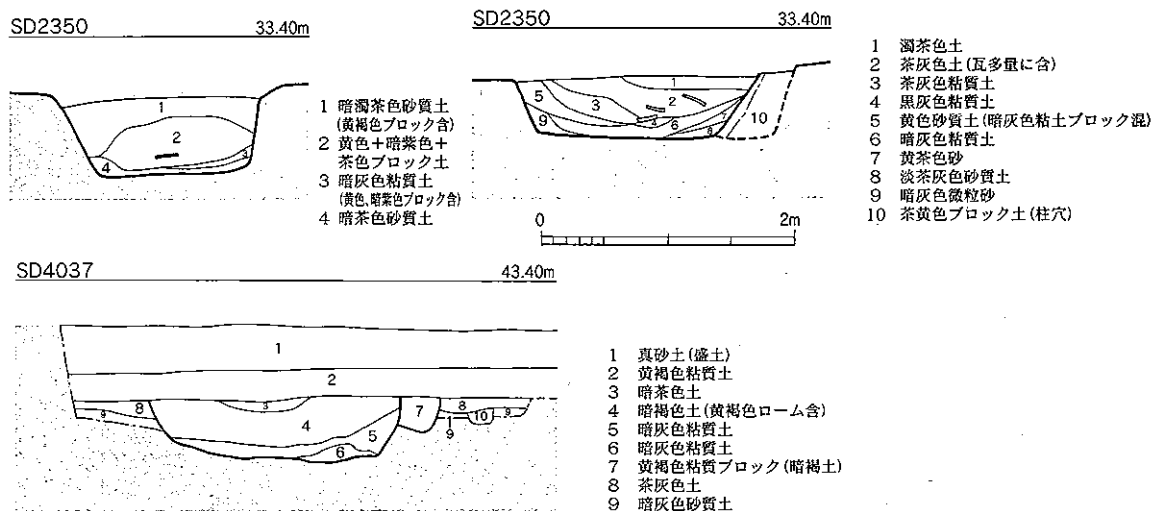


Fig.72 区画溝S D 2350・4037 土層図 (1/60)

と北端で0.5m程あり、南に向かって低く傾斜している。溝埋土は、黄褐色粘質土のブロックが混じる暗褐色砂質土で、人為的に埋戻された状況である。主軸方位は、45° 東へ振れる。S D2340からの心々距離は約40mである。

3) その他の区画溝

S D368 (Fig.24・62)

17次調査区で検出した。S B370の東で建物と並走する雨落溝である。東西両方向にあるが、所々土坑や瓦溜まりなどに切られて残りは良くない。東側では約3.5m分確認でき、溝幅は約0.35mである。不明瞭だが、西側のS D374も同じ性格の溝であろう。

S D2389 (Fig.73, PL.16)

84次調査区で検出した。S D2340西側となるS B2380周辺を南北に走る幾つかの細い溝群の一つである。北から南へ走り、途中からほぼ真西へ折れ曲がる。ちょうど西のS D2403と肩筋を併せた状態だが、繋がっていない。南北6.70m、東西2.20mの長さとなる。幅は0.40～0.60m、深さ0.90～0.21m程度である。

S D2391 (Fig.73, PL.16)

84次調査区で検出した。S B2380の周囲に展開する溝の一つで、S B2380の柱掘方を切っている。長さ15.8m、溝幅0.15m、深さ0.25mである。溝は、南側で東西に走るS D2403に接続して終わっている。

S D2392 (Fig.73, PL.16)

84次調査区で検出した。S D2403に直交する形で切られる南北溝であり、東西方向に走るS D2402とも繋がっている。溝幅0.25m、深さ0.08～0.14mを測る。

S D2393 (Fig.73, PL.16)

84次調査区で検出した。S D2392と並行し、またS D2402に直交する東西溝である。さらに北側では、S B2380の西側柱筋にも重なっている。総長は11.20m、幅0.30m前後、深さ0.10～0.20mである。

S D2396 (Fig.73, PL.16)

84次調査区で検出した。S D2403の西端に直交して、取り付く南北溝である。北側はS B2380の北側桁行柱筋の延長となる付近で途切れ、また南側は調査区外へ伸びている。そのため現状では、16.40mを測る。溝幅0.15～0.80m、0.04～0.15mとなり、北側が細く、南側へ向かうに連れて幅が広がって深くなる。西側のS D2397と並走し、溝の間隔は2.90～3.20m、心々距離で3.30mを測る。

S D2397 (Fig.73, PL.16)

84次調査区で検出した。S D2396の西側を南北に並走している。所々途切れる状況にある。南は調査区外へ伸びており、現状で長さは16.3mになる。溝幅は0.20～0.30m、深さは南端で0.70m、中央付近で0.06m、北端で0.10mになる。

S D2398 (Fig.73, PL.16)

84次調査区で検出した。S B2380の北側に隣接する東西方向の溝である。長さ8.4m、幅0.55

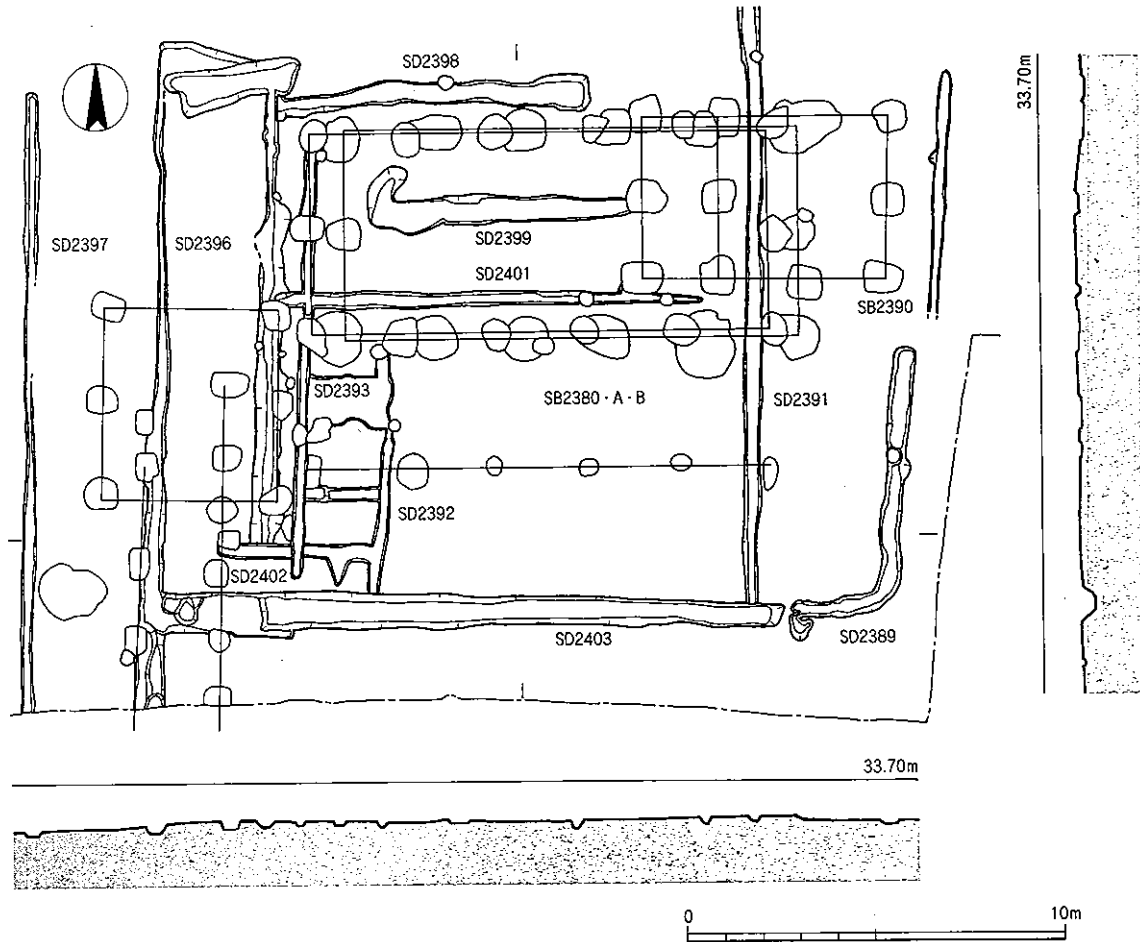


Fig.73 区画溝SD 2389・2391～2393・2396～2399・2401～2403実測図(1/200)
 ～1.00m,深さ0.60～0.19mを測る。SB2380と関わりがあるとみられるが,近接しており,建物の雨落溝とは考え難い。

SD2399 (Fig.73, PL.16)

84次調査区で検出した。SB2380内を東西方向に走る溝である。長さ7.00m,幅0.45～0.60m,深さ0.06～0.15mを測る。

SD2401 (Fig.73, PL.16)

84次調査区で検出した。SB2380内を東西から南北方向に折れ曲がって走る溝である。また西端では,SD2393と切り合う形となる。溝の長さは東西11.3m,南北6.4m,幅0.20～0.70m,深さ0.05～0.22mを測る。

SD2402 (Fig.73, PL.16)

84次調査区で検出した。SD2393に直交する溝である。長さは,途中0.60mほど途切れるところを含めて,5.50mになる。溝幅は0.40m,深さ0.05mを測る。

SD2403 (Fig.73, PL.16)

84次調査区南側で検出した。東西方向の溝である。長さ13.3mで,西端では幅1.0m,深さ0.25mとなるが,東に向かうにつれて,狭く深い溝になっている。SD2391との接続部では,幅0.6m,深さ0.4mになる。溝の性格については不明である。

SD4038 (Fig.89, PL.50・51)

147次調査区南側で検出した。東西方向の礎敷遺構SX4045の北側を並走する溝である。

SD4049に切られる。幅0.85m、深さは残りの良いところで0.2mを測る。溝の南肩には、拳大から人頭大の石列が配置されている。溝は、東の85次調査で検出したSD2471と一連の施設とみられる。

SD4039 (Fig.89・90, PL.50・51)

147次調査区で検出したSX4045の南側を並走する溝である。幅0.35～0.60m、深さ0.20mを測る。東側は、SX4045が終わる部分で同じように途切れている。溝北側の肩には、石列が配されている。埋土は、黄褐色粘質土のブロックを含む暗褐色土である。

SD4041 (Fig.90, PL.50・51)

147次調査区の南端で検出した。東西方向の溝である。幅0.45m～0.8m、深さ0.1mを測る。西端は、調査区外へ伸びる。

SD4042 (Fig.90, PL.50・51)

147次調査区で検出した。SD4035の南側に接する東西方向の溝である。幅0.3～0.8m、深さ0.1mを測る。切り合いから、SD4038よりも新しく、SD4044より古い。

SD4043 (Fig.90, PL.50・51)

147次調査区で検出した、SX4045北側を並走する溝である。南肩にはSX4045に連なる石列を伴うことからSD4038と一連のものと考えられる。幅0.7～1.3m、深さ0.15mを測る。

SD4566 (Fig.74, PL.43)

187次調査区で検出した。SB4560の北側を並走する溝で、西側で南へ折れる。SB4561を切るが、SK4573、SB3815・4563、SK4573、SD3825・4569に切られる。幅0.8～2.0m、深さ0.4mを測る。溝埋土の下半には、砂質土の堆積があり、流水の痕跡とみられる。SB4560の雨落溝の役割を果たしていた可能性もある。

SD4567 (Fig.62・付図)

187次調査区で検出した。SB4560の南側を東西に走る雨落とみられる溝である。幅0.5～0.8m、深さ0.1mを測る。溝の西半については、溝を覆う黄茶色土系の整地層を残したため検出できていない。溝の北側の肩には、20～25cm大の花崗岩礫が所々残っており、また部分的に抜き跡を確認した。

SD4568 (Fig.62・付図)

187次調査区で検出した。SB4560西側を南北方向に走る溝で、SK4576を切る。北半に

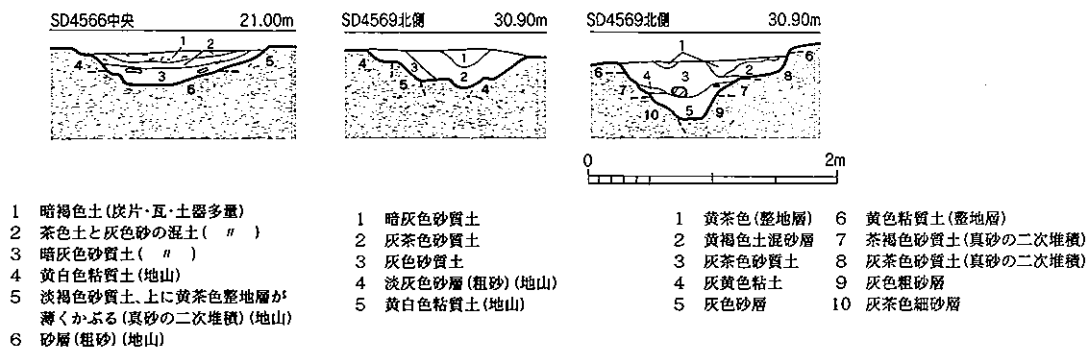


Fig.74 区画溝SD4566・4569土層図(1/60)

については、確認できていない。溝幅0.2～0.9m、南の最深部で0.15mを測る。南端ではSD 4570の埋土最上部に切られる。

SD4569 (Fig.74, PL.43)

187次調査区で検出した中央を南北に走る溝である。幅1.1～1.15m、深さ0.60mを測る。溝底は、南北で0.5mの高低差がある。また、溝上面には、SB3815に関わると考えられる整地層がある。SD4566、SB4561を切り、またSB3815に切られる。この溝は北側の129次調査区では検出できていない。

4) その他の溝

SD2010 (Fig.64, PL.33)

76次調査区で検出した。SD320の東側を並走する溝である。SD320廃絶後に開削されたもので、幅約2.5～4.0m、深さ0.40～1.60mの規模となる。溝底は、南へ向うにつれて低くなっている。

SD2337 (Fig.62・付図)

83次調査区東端で検出した。東から北西方向に蛇行する溝である。約12m分を調査した。大きく2つの溝底に分かれるが、最終的な堆積は同時期とみられる。溝幅は3.0～3.4m、深さ0.23mを測る。東端の溝内には長軸2.5m、短軸1.35mの長楕円形の土坑状の落ち込みがある。

SD2359 (Fig.62・付図)

83次調査区北側で検出した。東西方向の溝で、西側は調査区外に伸びている。今回は28.6m分を調査した。ちょうど、SB2365の北側柱筋を切る形で重複する。溝の形状は、不整形な土坑が連続するような状態で東西に走っている。そのためか、溝幅は1.90～2.90mと一定せず、深さも0.10～0.47mである。同様に並走する溝としてSD2350があり、どちらも掘

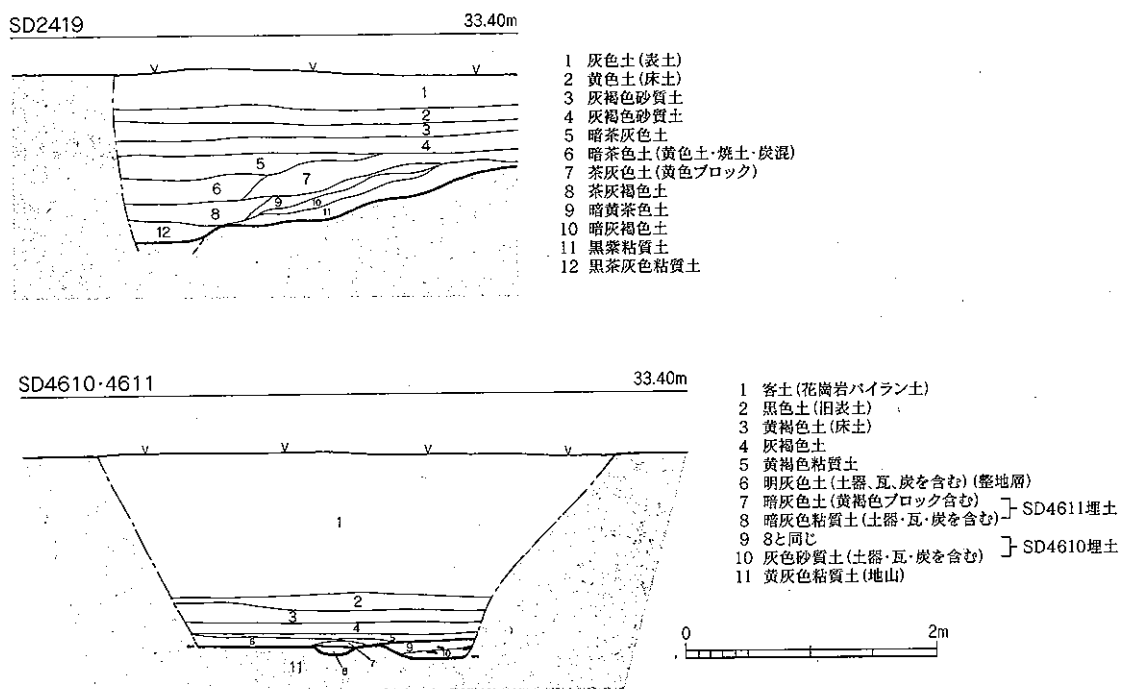


Fig.75 その他の溝SD 2419・4610・4611土層図 (1/60)

立柱建物S B2365を切る。

S D2419 (Fig.75)

84次調査区中央付近で検出した。東に7°振れる南北溝で北端では東に折れる。ちょうど東西に展開する建物群を二分するような位置にある。ただ、東側では、建物の整地面の下位に潜ることから溝肩を検出できていない。幅5m以上、深さ0.6mを測る。埋土には、炭や焼土が混じるが、特に下層では多量の土器、鞆羽口、鉄滓などの鍛冶遺物が出土している。自然流路の可能性も考えられる。

S D2462 (Fig.62・付図)

85次調査区で検出した。S D2340の西側に位置する溝で、途中から二股に分かれる。西側の溝の長軸は3.95m、深さ0.75mを測る。

S D2463 (Fig.62・付図)

85次調査で検出した。S D2015・2470を切る形で直交する南北溝である。並走するS D2464・2466～2468なども同じ性格の溝であろう。現状では17.3m確認できる。S D2464とは、約1.5mの間隔で並走する。心々距離は1.9m前後である。溝幅は0.50～0.85m、深さは0.06～0.18mと比較的浅く、北から南へ傾斜している。S D2473・2474に切られる。

S D2464 (Fig.62・付図)

85次調査で検出した。S D2463に並走する南北溝である。現状で17.2m確認した。溝幅は0.40～0.90m、深さ0.15～0.31mとなる。S K2489、S D2474に切られる。

S D2466 (Fig.62・付図)

85次調査で検出した。南北方向の溝である。現状では2.80m確認できるが、南側の残存状況は不明である。幅0.4～0.6m、深さ0.07mを測る。S D2467と並走する。溝間は2.7m、心々距離で3.0mを測る。

S D2467 (Fig.62・付図)

85次調査で確認した。南北方向の溝である。現状で7.60m確認できるが、南側では不明瞭となって消滅する。幅0.3～0.5m、深さ0.25mを測る。また、S D2468との間隔は約1.5mで配されている。

S D2468 (Fig.62・付図)

85次調査で検出した南北溝である。現状で4.90m確認できる。溝幅0.65～1.00m、深さ0.10mを測る。溝幅は、0.40～0.60mである。北から南へ傾斜している。

S D2472 (Fig.62・付図)

85次調査区で検出した。東西方向の溝である。S B2460の柱の間に3.85m分確認できる。柱筋と軸線を併せることから、建物に関する溝の可能性がある。

S D2473 (Fig.62・付図)

85次調査区南端で検出した東西方向の溝である。幅0.40～0.50m、深さ0.07mを測る。

S D2474 (Fig.62・付図)

85次調査で確認した。東から西へ伸びて、途中より南へ折れ曲がる。S D2463・2464・2473を切る。溝幅は0.30～0.80m、深さは0.07m程度である。

S D2545 (Fig.62・付図)

90次調査区で検出した南北方向に走る溝である。調査区の北に伸びるが、今回は13.6m分を調査した。幅0.50～0.70m、深さ0.075～0.110mを測り、SX2544を切る。

SD2546 (Fig.62・付図)

90次調査区で確認した。SD2545と並走する溝である。北側で調査区外に伸びる。現状で7.5m分を調査した。幅0.4m、深さ0.02m程度である。SB2535より新しい。

SD2527 (Fig.62・付図)

87・90次調査で検出した。SD2340埋没後に東肩付近を南北方向に走る溝である。層的にはSD2528よりも新しい。SD2340埋没過程における溝の痕跡と考えられる。

SD2528 (付図)

87・90次調査で検出した。SD2340埋没後、軸線を合せて中央部を南北方向に走る溝である。埋土には粗砂がみられる。南の石組溝SD2335の痕跡の関係も考えられ、土層観察で確認した。

SD2899 (Fig.62・付図)

98次調査で検出した。南北方向に走る溝で、SB2900にほぼ併走する。約13.85m分を調査した。幅0.4m前後、深さは残りの良い所で0.10m程度である。SB2900に関わる溝の可能性もある。

SD3051 (Fig.62・付図)

104次調査区で検出したが、南側では不明瞭となる。幅1.1m、深さ0.07mを測る。

SD3052 (Fig.62・付図)

104次調査区東端で検出した。幅0.3m程度、深さは約0.07m程度である。北側へ続くが一部土坑状の落ち込みSX3053と切合っており、プランを確認できなかった。

SD3818 (Fig.62・付図)

129次調査区東で検出した南北溝である。幅0.80m前後、深さ0.10m前後である。溝底は僅かに南へ傾斜し、調査区南端近くで消滅する。溝の方位は約10°強東偏している。この溝は187次調査区でも確認されている。SD4566を切って、SB3815と並走している。

SD3825 (Fig.62・付図, PL.42)

129次調査区中央で検出した南北方向の溝である。幅2.00m前後、深さ0.30mを測る。溝の西肩は直線的で明確だが、東肩は蛇行して北側で不明瞭となる。溝の底部は部分的に窪み、凹凸も著しい。溝埋土は上層の堆積土と同じ黒色土で流水の痕跡は無かった。この溝は、南側の187次調査区でも確認された。幅2m前後、深さ0.2m程度である。東西溝SD4566を切り、SB3815と平行する。

SD3835 (Fig.62・付図)

129次調査区で検出した。SD3825と約3.20mの間隔をおいた南北溝である。溝幅は0.60m～1.20m、溝肩も必ずしも明瞭でなく途中で消滅する。深さは0.15m程度だが、南端では0.05mとなってわずかに痕跡を確認できる程度である。

SD3836 (Fig.62・付図)

129次調査区で検出した東西方向の溝である。溝の輪郭は明瞭でなく、部分的に南肩が確認できる状況である。SD3825と直交しているが、埋土の状況、および出土遺物より同時期に存在していたと考えられる。

SD4044 (Fig.62・付図)

147次調査区で検出した南北溝である。長さ26.5m, 幅0.65～1.1m, 深さ0.3m程度を測る。断面逆台形状を呈する。埋土は茶灰色粘質土である。主軸は、7°5′東偏する。

SD4049 (Fig.62・付図)

147次調査で検出した東西溝である。幅0.3～0.45m, 深さ0.20mを測る。

SD4054 (Fig.62・付図)

147次調査で検出した。暗渠SX4055を出てすぐ二股に分かれ、その後、合流して西側に流れる。幅0.2～0.8m, 深さは残りの良いところで0.3mを測る。

SD4610 (Fig.75, PL.12)

192次調査で検出した。西北西から東南東へ直線状に走る。幅約0.50～0.60m, 深さ0.15mを測る。SD4611・4612を切る。

SD4611 (Fig.75, PL.12)

192次調査で検出した東西方向に走る溝である。幅0.2～0.3m, 深さ0.05mを測る。

SD4612 (Fig.75, PL.12)

192次調査で検出した南北方向に走る溝である。北端では幅0.4m, 深さ0.05mだが、南端では幅1.0～1.1m, 深さ0.1mになる。

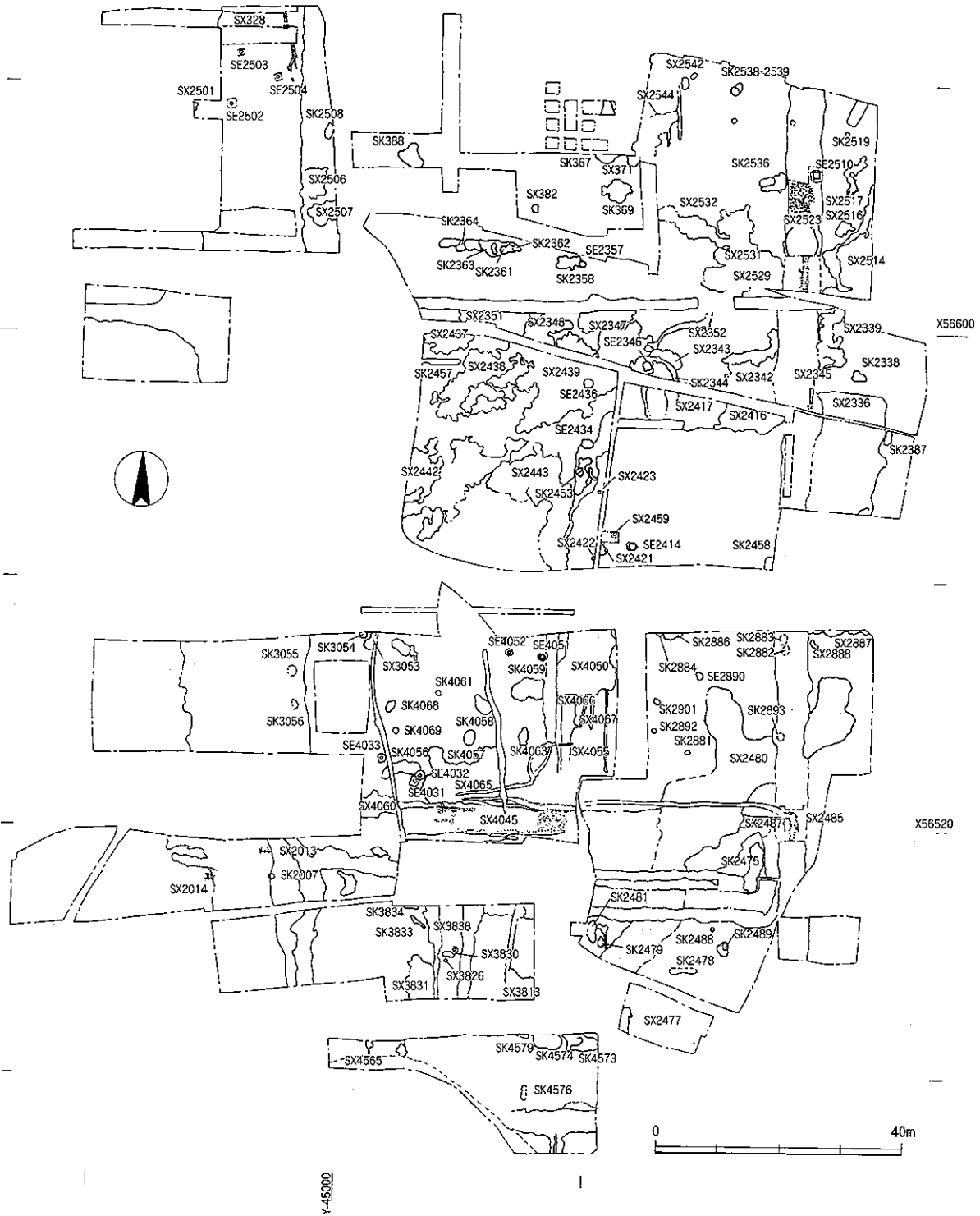


Fig.76 不丁地区井戸・土坑・その他の遺構配置図 (1/1,000)

(4) 井戸

S E 2346 (Fig.77, PL.44)

83次調査区中央付近南側で検出した。土坑SK2344Bに切られる。現状で平面は隅丸方形を呈しているが、上部の掘削が大きく、かろうじて掘方の底隅に支柱である隅柱が3本残っている。復元される井戸枠の大きさは、長辺0.8×0.6m程度である。

S E 2357 (Fig.77, PL.44)

83次調査区北側で検出した。SB2360の柱掘方を掘り込んでいる。掘方は円形であり、直径1.2m、深さ0.7mを測る。また、掘方内の中央には、径0.6m、深さ0.15mの穴があるが、井戸枠に関係する部材や遺物は出土していない。

S E 2414 (Fig.77, PL.44)

84次調査区中央南側で検出した。長軸1.50m、短軸1.23m、残存する深さ0.73mで、隅丸長方形を呈している。底面は、1.04m×0.84mの略長方形となる。井戸枠などは確認できておらず土杭にも見えるが、内部の湧水量は多く、木質が出土することから井戸枠を持つ方形井戸と考えられる。鴻臚館式軒平瓦が出土した。

S E 2434 (Fig.77, PL.45)

84次調査区中央付近西側で検出した。既に井戸枠はなく、掘方も崩壊している。現状で隅丸長方形を呈しており、残りの良い部分では上縁約1.50m×1.25m、底面で約1.20m×1.10m、深さは1.10mを測る。本来は方形の井戸であろう。遺物は出土しなかった。

S E 2436 (Fig.77, PL.45)

84次調査区中央付近北側で検出した。ちょうどSE2434の北側にあたる。隅丸方形を呈しており、上縁は約1.30m、底面は約1.10m、深さ約0.90mを測る。本来は、方形井戸であろう。遺物は出土しなかった。

S E 2502 (Fig.77, PL.45)

14次補足調査区中央部付近で検出した。SD320に切り込む。上部は方形の縦板、下部が曲物の構造となる。縦板材は南・西辺に残っており、幅約10～12cm、厚さ約1.5cmで、二・三重に重ねる。上部と下部が接続する箇所には、桜の材を横にわたしている。下部の曲物は2段で、曲物の設置
上段の径は約60cm、高さ約22cm、下段の径は約46cmで、最下部は径50cmとなる。掘方は方形で東西0.9m、南北0.8m、深さ約0.9mを測る。

S E 2503 (Fig.77, PL.46)

14次補足調査区中央部付近で検出した。SD320を切り込んでいる。現状で上端から底面までの深さは約0.6mである。幅20～25cm、厚さ2cm程度の板材を立てているが、東側は格子目叩きの平瓦を立てて側板とし、南側は縄目・格子目叩きの丸・平瓦を積んでいる。下部には径38.0cm、高さ27.0cmの曲物が据えられていた。

S E 2504 (Fig.77, PL.46)

14次補足調査区中央部付近で検出した。残りは悪く、井戸枠の検出面から底までは深さ0.35m程度しかない。据えられていた曲物は二段で、上部で径46.0cm、下部で径40.0cmを測る。検出面周辺で板材が確認されている。

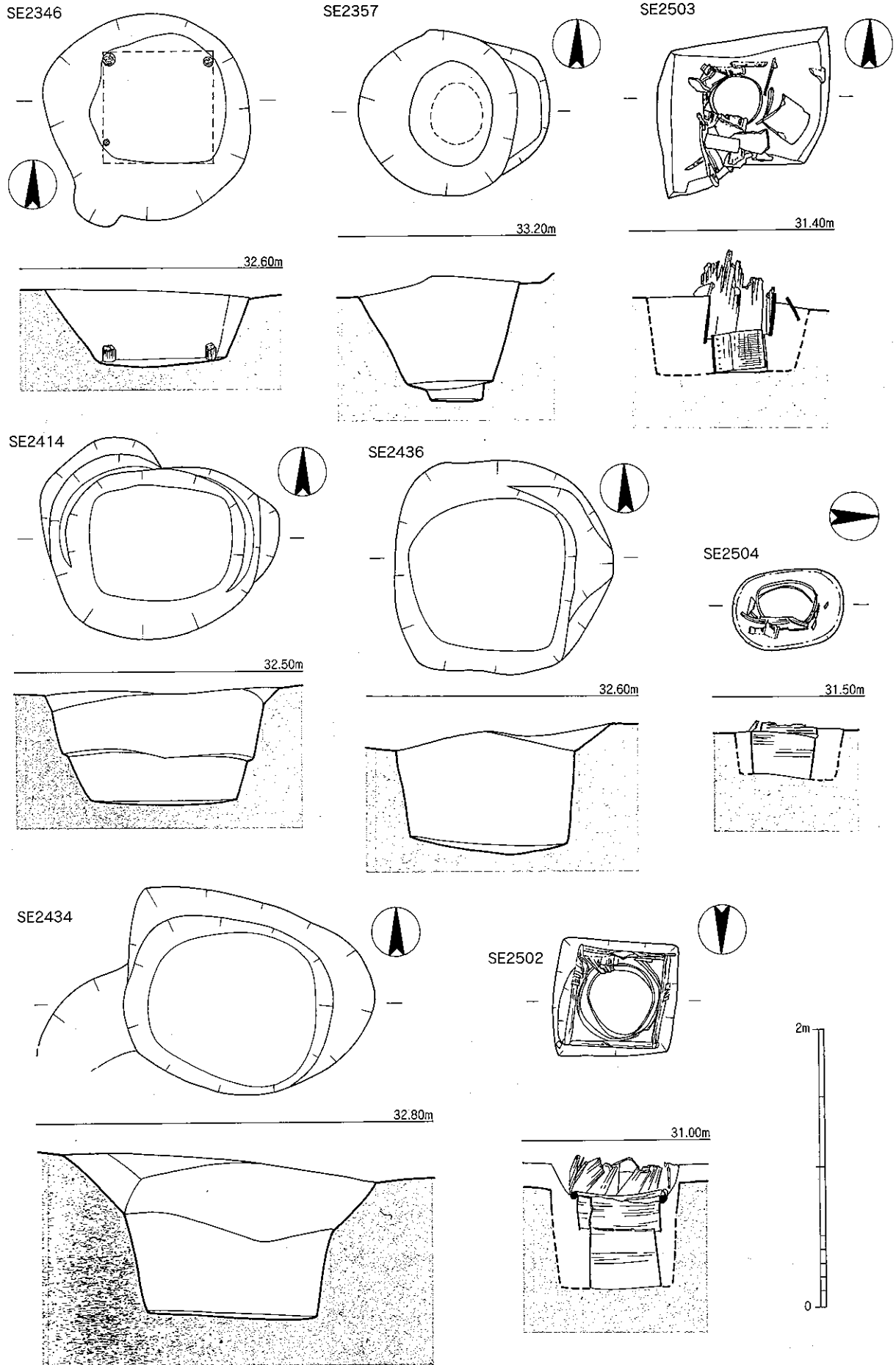


Fig.77 井戸実測図 (1) (1/40)

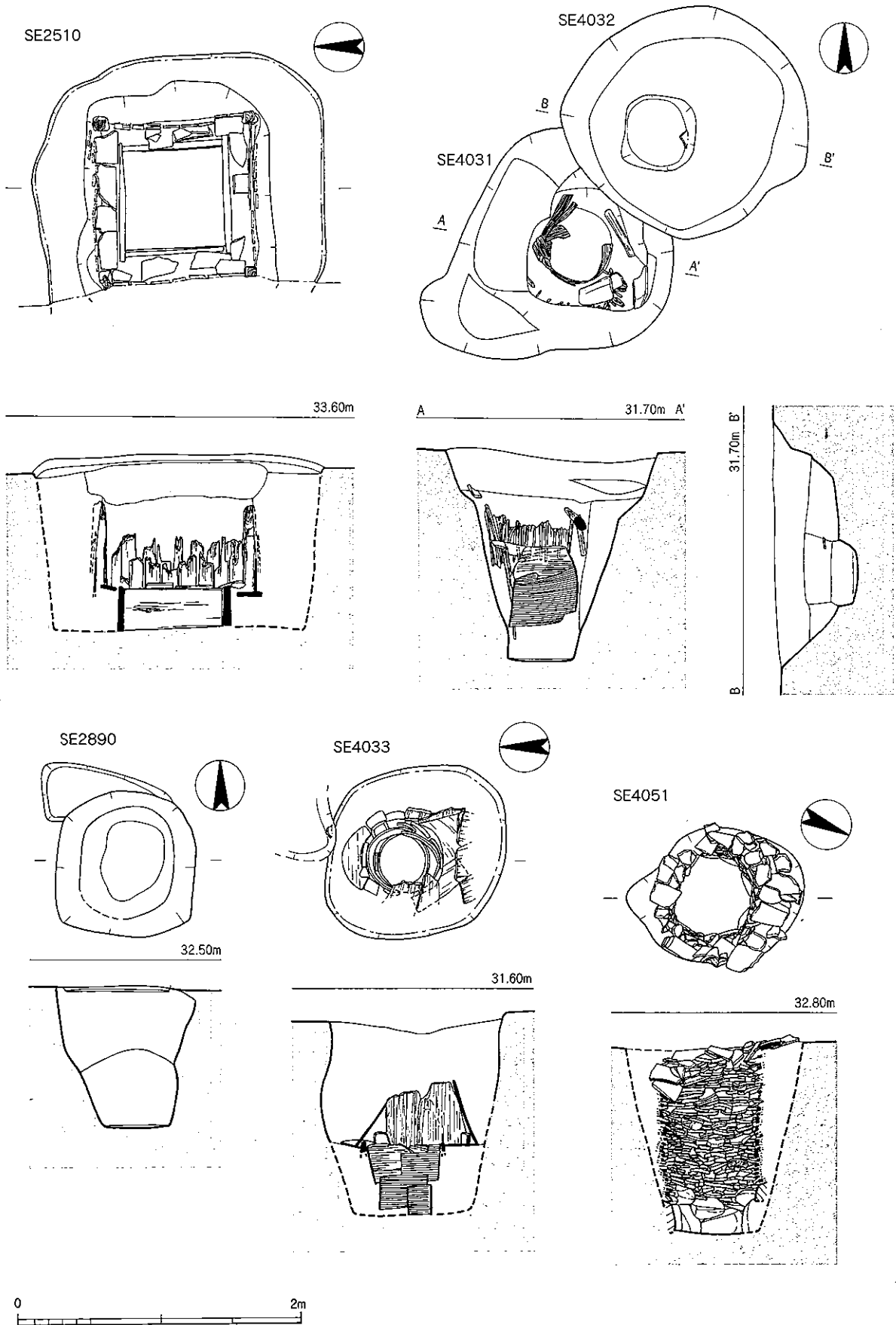


Fig.78 井戸実測図 (2) (1/40)

SE2510 (Fig.78, PL.46)

87次調査区東の南北溝SD2340の上位で検出した。掘方は一辺1.9mの隅丸方形を呈しており、検出面から底面までの深さは約1.2mを測る。上部の四隅には一辺8cmの断面方形の角柱材を配し、その間に幅10cm～12cm、厚さ2cm程度の板材8～9枚を縦に並べて井戸枠の上部としている。縦材は二重になっており、内側の板材の合せ目に外板を配して補強する。角柱どおしの長さは東西0.94m、南北0.98mではほぼ正方形を呈している。下部は、井籠組の井戸側1段分、高さ約28cmが残存していた。一辺の長さは、内法0.70～0.71m、厚さ約0.65mである。上部の縦板材と井籠組の間は約1.5cm程度で、格子目叩きの平瓦、丸瓦が敷かれていた。

縦板材の
井戸枠

SE2890 (Fig.78, PL.47)

98次調査区中央西側で検出した。上縁約1.0m、底面0.5mで方形を呈している。検出面からの深さは1.0mである。方形の掘方から、木組みで方形の井戸が想定される。

SE4031 (Fig.78, PL.47)

147次調査区南西側で検出した。SE4032に切られる。掘方は約1.5mの隅丸方形を呈しており、検出面からの深さは約1.5mである。井戸は上下二段からなる。上部は角に隅柱を配して、その間に外枠の板材を並べる。板材を固定するために長さ40cm程度の杭を3～5cm間隔で打ち込んでいる。下部には曲物を配置している。上部と下部の間は瓦を積めて固定していた。

SE4032 (Fig.78, PL.47)

147次調査区南西側で検出した。SE4031を切る。検出した掘方の平面形は楕円形を呈しており、径約1.6m、深さ0.6mを測る。井戸枠は既に残っていなかったが、検出面から約0.2m下位付近で径0.5m程度の黒色の円形痕跡を確認した。これが、曲物の痕跡と考えられる。

SE4033 (Fig.78, PL.48)

147次調査区西端で検出した。掘方は一辺約1.2mの隅丸方形を呈しており、深さ約1.4mを測る。井戸枠は上下二段からなる。上部は幅20～30cmの板材を立てており、下部は径35cm、高さ25cmの曲物を配置している。また、上部の板材と下部の曲物の間には、円形に削り抜いた板材を3枚置き、さらに瓦や土器、石などを積めて固定していた。

SE4051 (Fig.78, PL.48)

147次調査区北側で検出した、瓦積みの井戸である。掘方は、径1.0m程度の楕円形であり、深さは約1.3mを測る。基底部分には、人頭大程度の河原石を二段に据えて、そこから平瓦を面的に置きながら、垂直に積み上げている。井戸の内径は約0.6m、瓦積は高さ1.0m遺存していた。

SE4052 (Fig.79, PL.48)

147次調査区で検出した。SE4051の西

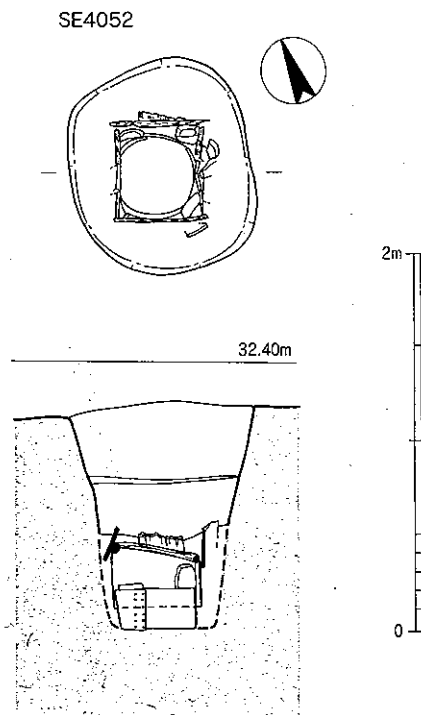


Fig.79 井戸実測図 (3) (1/40)

側に位置する。掘方は、0.9×1.0mの隅丸方形を呈しており、深さは約1.2mを測る。井戸枠は上下二段からなる。上部は、幅20cm程度の板材を縦に立てて木枠で固定し、下部は径40cm、高さ20cmの曲物を据えている。上部と下部の間には、瓦や土器、礫などを詰めて固定している。

(5) 土 坑

S K388 (Fig.80, PL.49)

17次調査区の西寄りに位置し、無数のピット群の中にある。平面形は凸字状を呈し、おおよそ東西4.28m、南北3.52m、深さ0.18mを測る浅い土坑である。中央付近から完形あるいは略完形の須恵器壺・平瓶などが45個出土したことが特筆される。そのほとんどは正位置を保っており、4箇所程度のまとまりがみられる。そのため、無造作に投棄されたのではなく、意識的に遺棄された可能性がある。なお、多くの個体で口縁部を意図的に打ち欠いており、漆が付着していることも付記しておく。

漆付着土器

S K2007

76次調査区の東寄りに位置し、SD320に西側を切られる形で検出した。輪郭のみしか実測されていないため、規模は不明確であるが、径約1.0m、深さ0.6mの円形を呈する。土器類がまとまって出土している。

S K2344A・B (Fig.81)

83次調査区中央南端から84次調査区中央北端にかけて掘り込まれた大型の土坑である。新旧二時期の掘り込みがあり、古段階をSK2344A、新段階をSK2344Bとする。

SK2344Aは長さ10.3m、幅4.1m、深さ0.46mを測り、南側の端はSD2419に切られることもあって不明確である。南北に長い楕円形を呈する。底面近くの埋土は、黒灰色の粘土層および腐植土層である。

SK2344Bは84次調査区内ではほとんど確認できていないことから、正確な規模は不明である。現状で把握できる平面的な規模は、おおよそ東西4.0m、南北3.2mで、深さは0.3mを測る。埋土は黄褐色粘質土で、これを除去した段階で井戸SE2346を検出した。

S K2358 (Fig.80)

83次調査区の中央やや西寄りに位置する。全体的には平面が長方形に近いが、底面は複数の掘り込みが行われて乱れている。概ね東西方向に軸をとり、長さ3.98m、幅1.92m、深さ0.48mを測る。南東隅を井戸SE2357に切られている。

S K2361 (Fig.82)

83次調査区の東北部に位置する一連の土坑群に含まれる。不整形ながら東西に軸をとる長楕円形を呈し、長径2.48m、短径1.38m、深さ0.44mを測る。土坑SK2362とSK2363を切る。

S K2362 (Fig.82)

83次調査区の東北部に位置する一連の土坑群に含まれる。土坑群の東端にあり、長径1.3m、短径1.1m、深さ0.34mを測る楕円形を呈する。埋土中には0.2～0.4mほどの礫が数石みられるが、その性格は不明である。遺構の切り合いから、土坑SK2363より新しく、SK2361より古いとみられる。

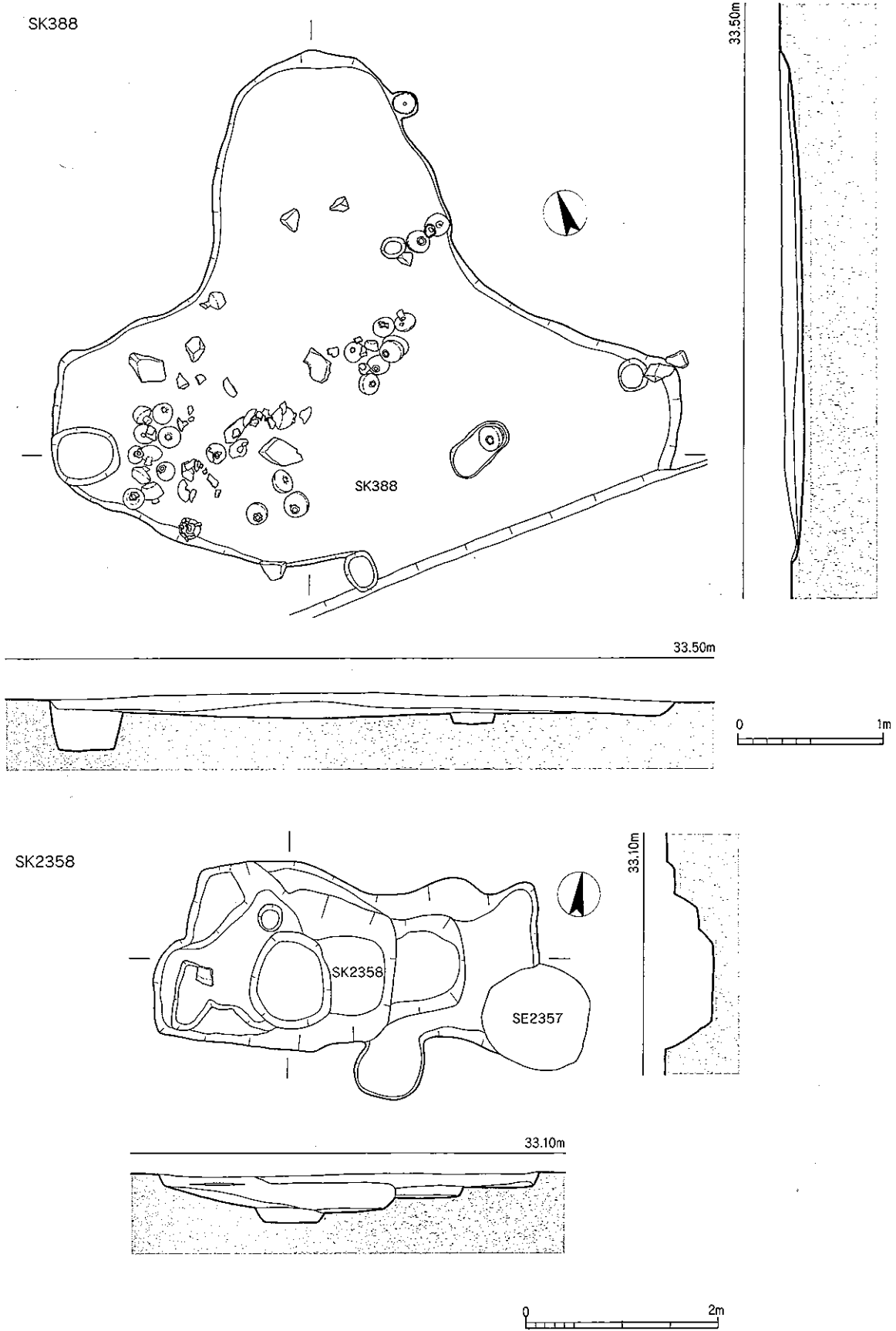


Fig.80 土坑実測図(1) (1/40・1/60)

SK2344A·B

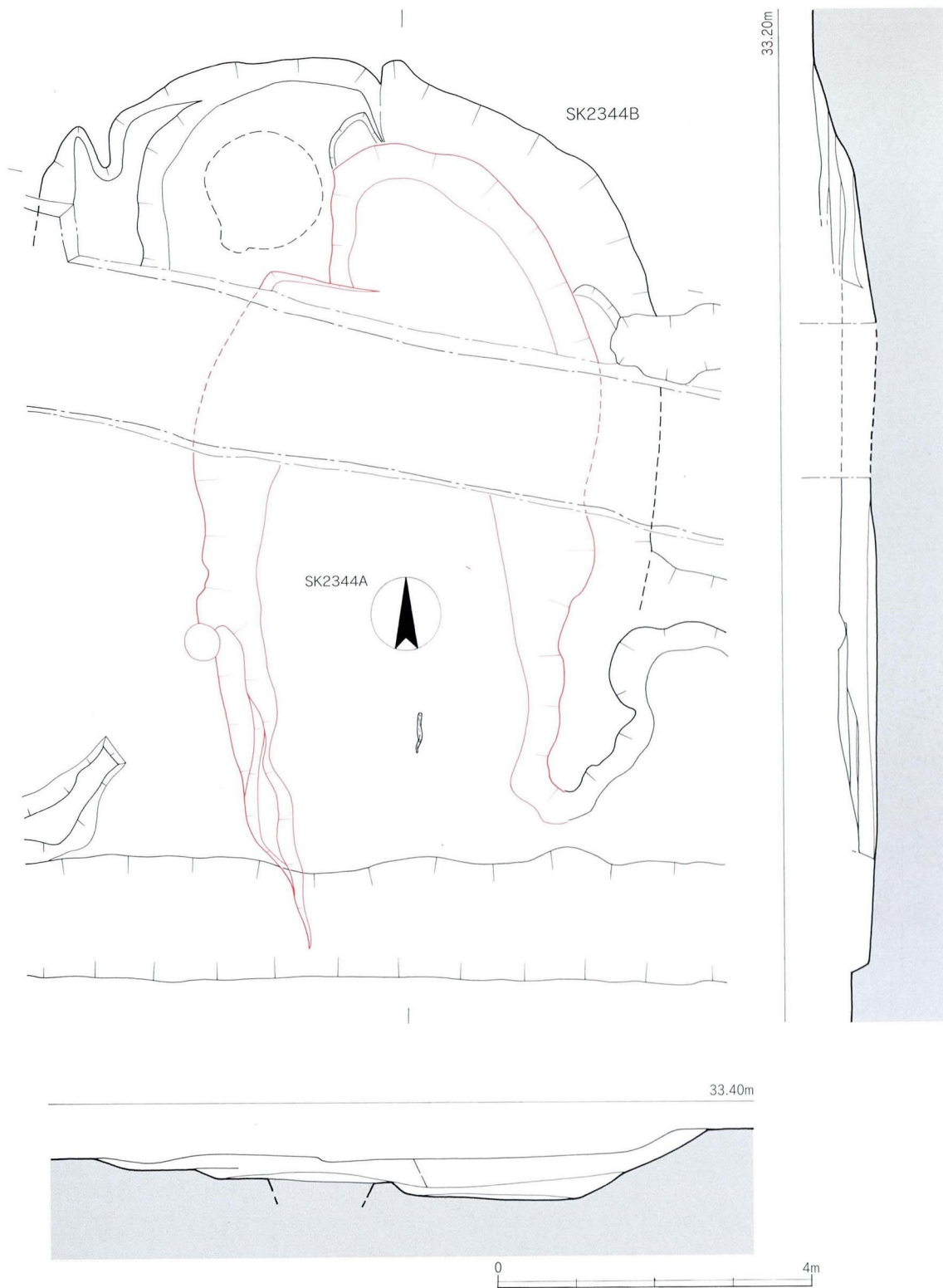


Fig.81 土坑实测图 (2) (1/80)

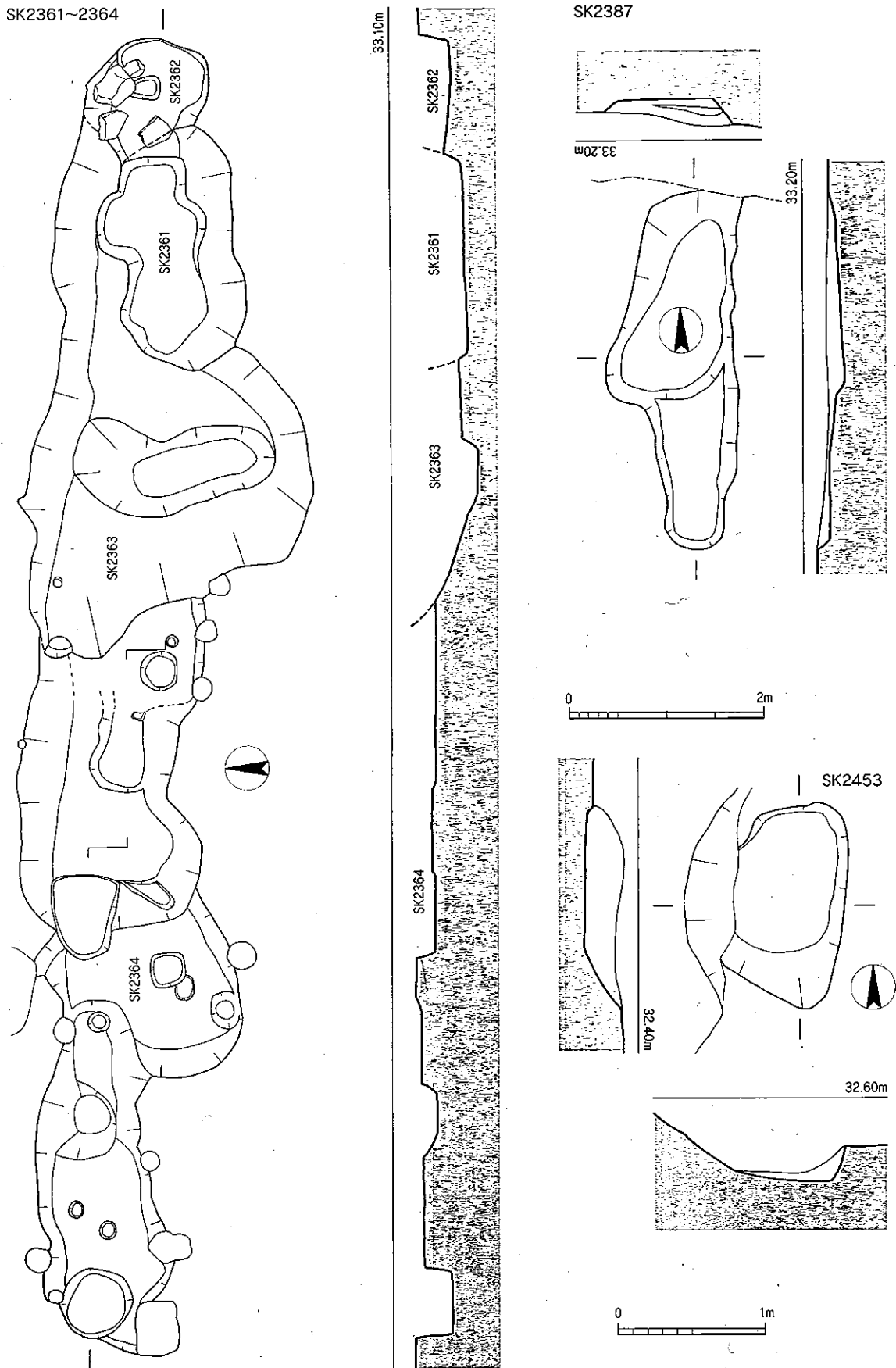


Fig.82 土坑実測図 (3) (1/40・1/60)

S K2363 (Fig.81)

83次調査区の東北部に位置する一連の土坑群に含まれる。土坑群の東半分に掘り込まれた土坑で、不整形であるが東西に軸をとる。残存長は5.5m、幅は最大3.02m、深さは最大0.53mを測り、全体的に壁の傾斜が緩やかで、船底状を呈する。東側は土坑SK2361・2362に切られ、西側はSK2364を切る。

S K2364 (Fig.82)

83次調査区の東北部に位置する一連の土坑群に含まれる。土坑群の西半分を占め、本来複数の土坑に分けるべきかもしれない。軸は他の土坑と同じく東西にとり、東西の長さ7.65m、最大幅1.84m、深さは0.33mを測る。東側をSK2363に切られる。

S K2387 (Fig.82)

84次調査区の東端部に位置する。軸を南北にとる長楕円形の土坑で、長さ3.65m、幅1.33m、深さ0.28mを測る。建物SB2388と重複関係にあるが、先後関係は不明である。

S K2453 (Fig.82)

84次調査区の中央付近に位置し、溝SD2419の底面に掘り込まれた土坑である。長径1.38m、短径0.88m、深さ0.24mを測り、南北に長い楕円形を呈する。土器のほか、焼土や鉄滓なども出土している。

S K2457 (Fig.83)

84次調査区の北西端に位置し、東西方向に軸をとる溝状の土坑である。調査区外にも続くようで、長さ6.24m以上、幅1.08mを測り、深さは西から東へ一段ずつ深くなるため、東側では0.4mを測る。

S K2458 (Fig.83)

84次調査区の南東端に位置し、大半は調査区外に広がる。南北長2.1m、東西長1.4mを測る矩形の土坑で、深さは0.1mと浅い。

S K2475 (Fig.83)

85次調査区の北東部に位置し、溝SD2015A・Bを切る。軸は概ね南北にとり、長さ8.66m、幅2.18m、深さ0.21mを測る。

S K2478 (Fig.83)

85次調査区の南側中央付近に位置し、L字に曲がる溝状遺構を切っている。長さ4.56m、幅1.28m、深さ0.07～0.17mを測り、東西方向に軸をとる。

S K2479 (Fig.84)

85次調査区の南西隅に位置し、西側には土坑SK2481が隣接する。南側は南北1.38m、東西1.11mの隅丸方形を呈し、北側に細長く0.8mほど突出するため、遺構全体の長さは2.04mに達する。深さは0.14mである。

S K2481 (Fig.84)

85次調査区の南西隅に位置し、東側に土坑SK2479が隣接する。南北に軸をとる、南西部が鍵状に曲がる不整形な土坑で、南側については別遺構の可能性もある。長さ3.96m、幅1.51m、深さ0.10～0.18mを測る。

S K2488 (Fig.84)

85次調査区の南東部に位置する。平面は不整形な方形を呈し、長軸0.76m、短軸0.71m、深さ0.06mを測る。土師器・須恵器のほか鍛冶羽口が出土している。

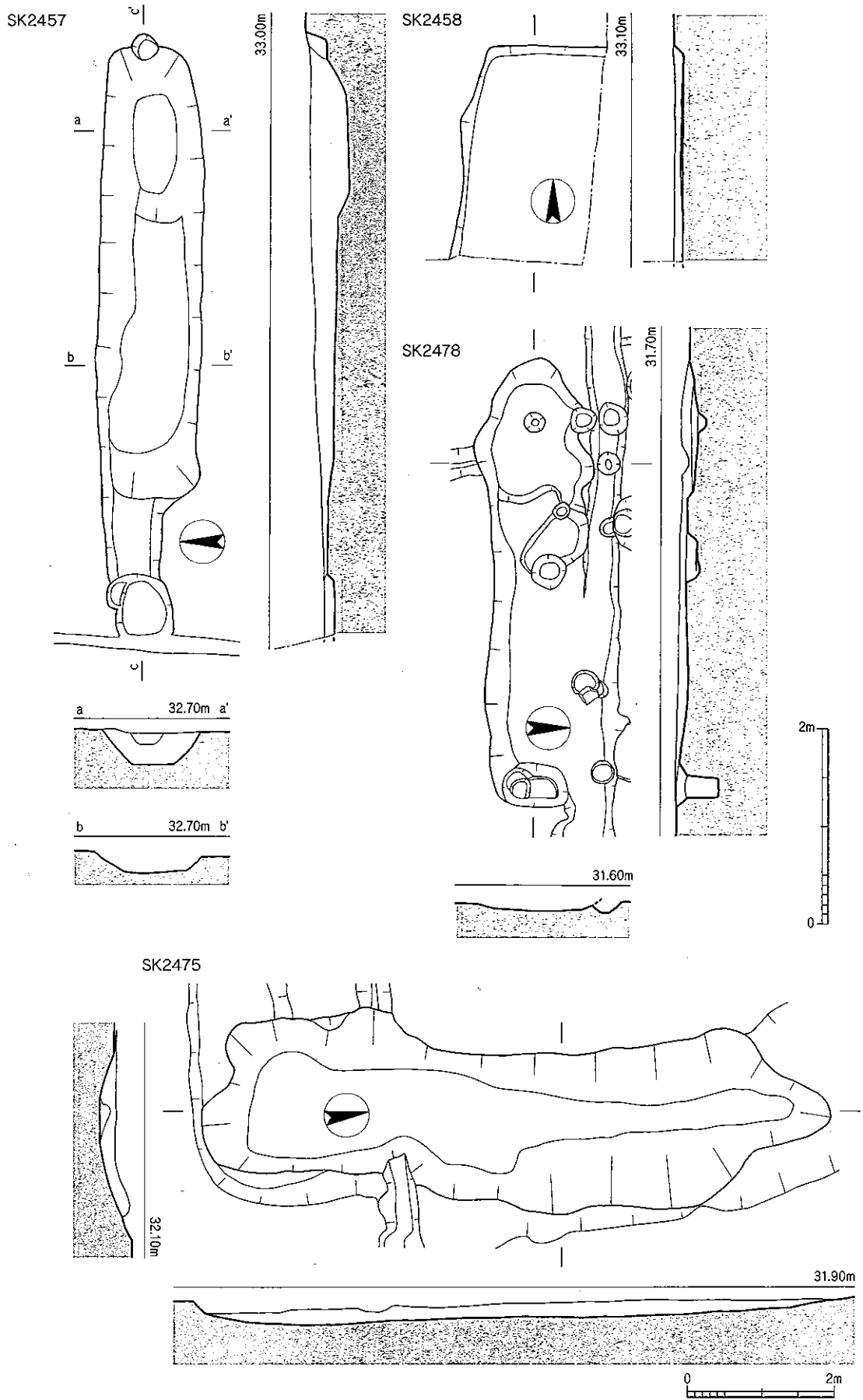


Fig.83 土坑実測図(4) (1/60・1/80)

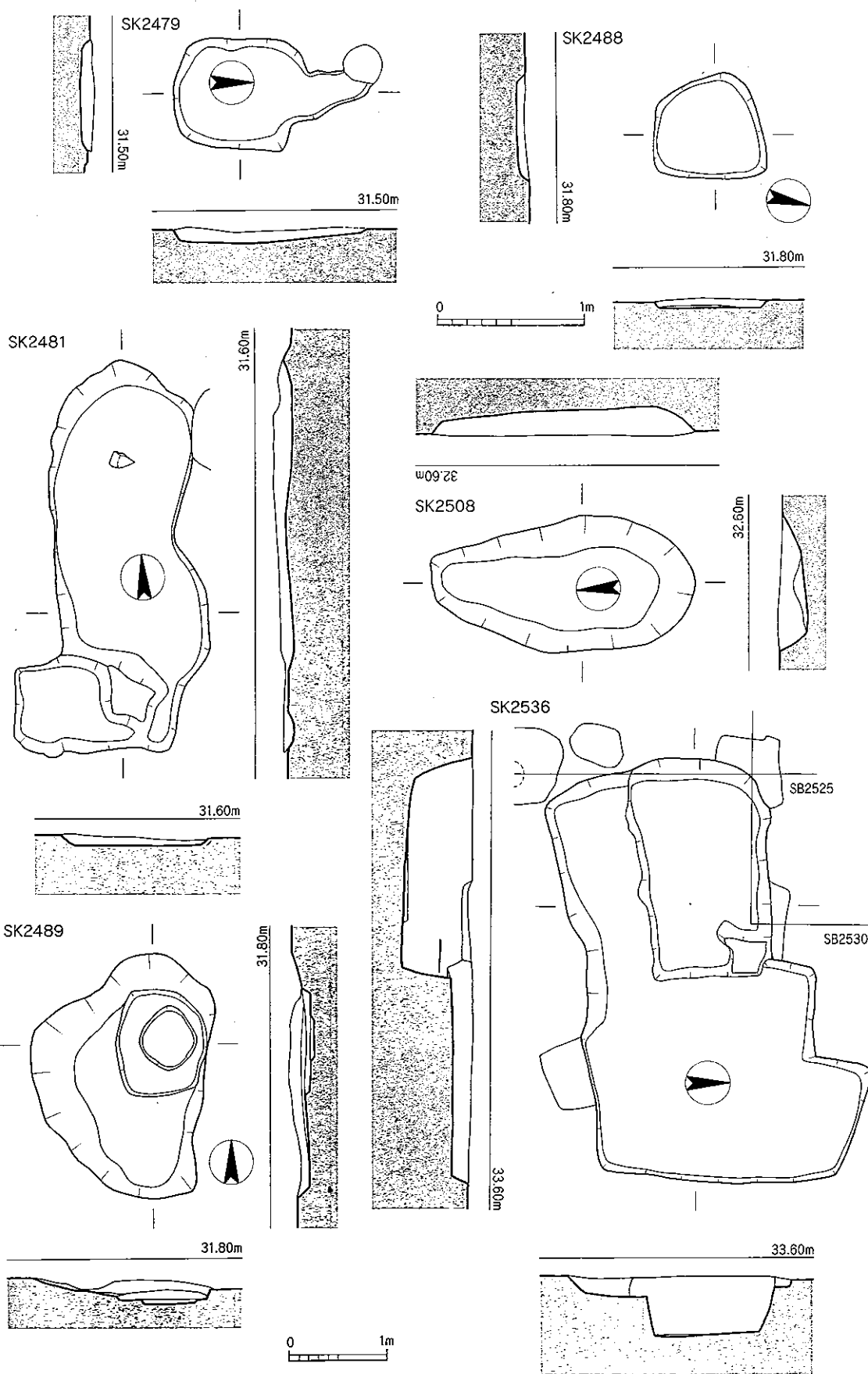


Fig.84 土坑実測図 (5) (1/40 · 1/60)

S K2489 (Fig.84)

85次調査区の南東部に位置し、溝SD2464を切る。長径2.50m、短径1.82m、深さ0.25mを測り、北側の底部は段状に掘り込まれて深くなる。

S K2508 (Fig.84)

14次補足調査時の調査区中央の東端に位置し、床土直下で検出した。長径2.68m、短径1.38m、深さ0.3mを測り、平面は長楕円形、断面は船底状を呈する。位置的にはSA2505と重複関係にあるが、遺構の上からは先後関係は導けない。

S K2536 (Fig.84)

87次調査区の中央部に位置し、北端部は90次調査区に及ぶ。東端が鍵状に折れるL字状をなし、概ね東西方向に軸をとる。東西4.32m、南北2.86m、深さ0.2mを測る。ただし、北西側だけ東西2.26m、南北1.42mの規模で深くなり、この部分の深さは0.61mを測る。SB2525およびSB2530を切る。

S K2538 (Fig.85)

90次調査区の中央北寄りに位置し、SK2539を切る。長径1.36m、短径1.26m、深さ1.09mの円筒状をなす。

S K2539 (Fig.85)

90次調査区の中央北寄りに位置し、SK2538に切られる。長径2.21m、短径1.58mの楕円形を呈し、深さは0.05mと非常に浅い。軸は北東に向ける。

S K2881 (Fig.85)

98次調査区の南西部に位置する。一辺0.66mほどの隅丸方形を呈し、深さは0.07mと浅い。土器等はしなかったが、内部に炭が詰まっていたことが特筆される。

S K2882 (Fig.76)

98次調査区の中央北端に位置し、SK2883の南1.0mにある。検出のみのため個別図はない。東西2.0m、南北1.8mを測り、東西に長い楕円形を呈し、SD2340に掘り込んでいる。

S K2883 (Fig.76)

98次調査区の中央北端に位置し、SK2882の北1.0mにある。検出のみのため個別図はない。径1.0～1.2mの楕円形を呈し、SD2340に掘り込んでいる。

S K2884 (Fig.85)

98次調査区の北西隅に位置し、大半は調査区外に広がるようであるが、SK2886を切り込むことが確認できる。東西1.35m、南北0.5m以上、深さ0.17mを測る。

S K2886 (Fig.85)

98次調査区の北西隅に位置し、西端をSK2884に切られる。調査区外にも広がるが、底面は段掘り状を呈し、中央部が最も深くなる。現状では東西3.23m以上、南北1.16m以上、深さ0.35mを測る。また、掘立柱建物SB2880と切り合っている。

S K2892 (Fig.85)

98次調査区の西端に位置する。長径1.0m、短径0.98mの楕円形を呈し、深さは0.12mを測る。

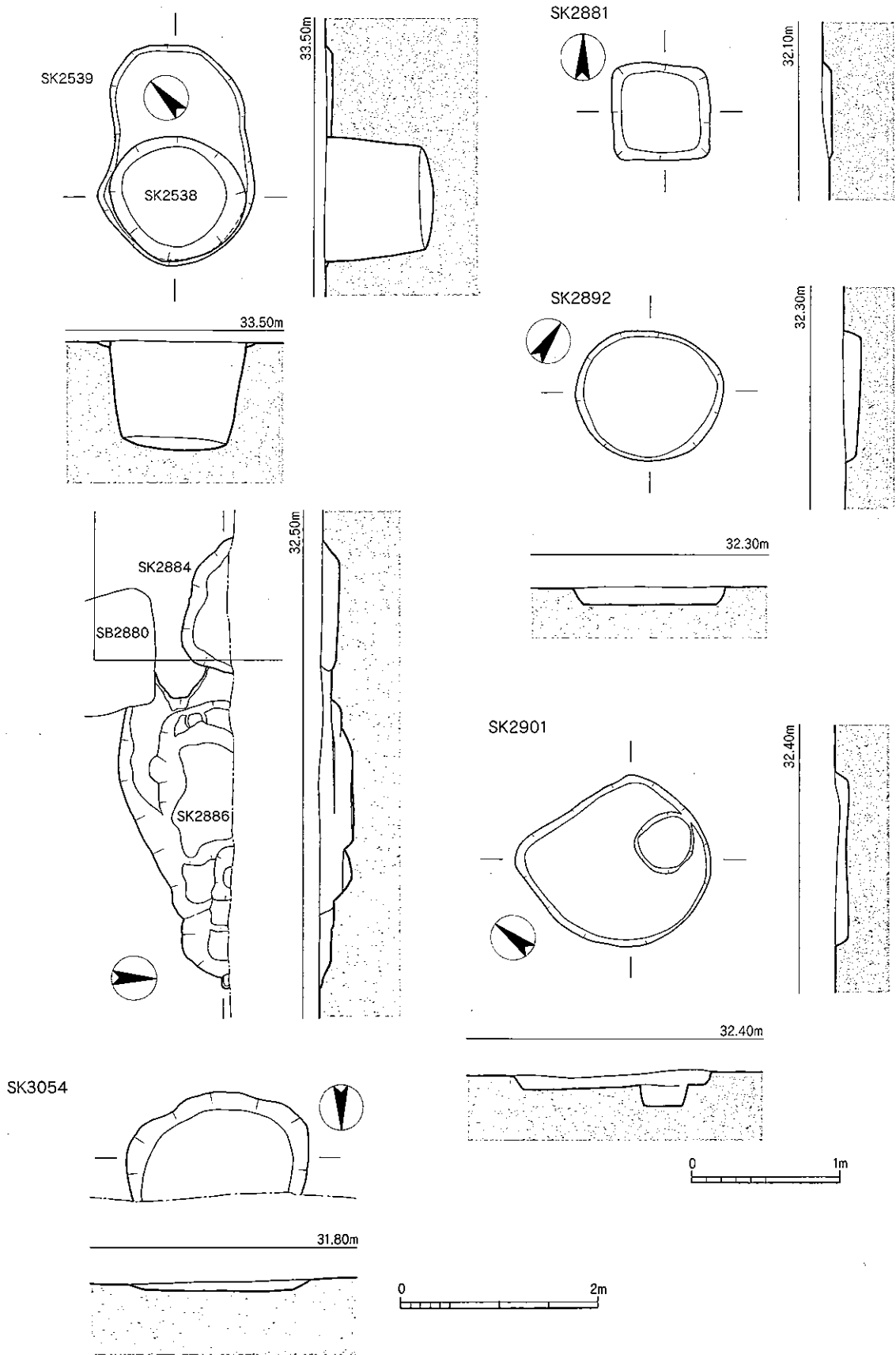


Fig.85 土坑実測図(6) (1/40・1/60)

S K 2893 (Fig.76・付図)

98次調査区の中央南寄りに位置する。検出のみのため個別図はない。長径1.8m、短径1.3mの長楕円形を呈し、南北に軸をとる。SD2340に掘り込んでいる。

S K 2901 (Fig.85)

98次調査区の西端に位置し、位置関係ではSB2885と重複する場所にあるが、遺構から先後関係を判断することはできない。長径1.32m、短径1.15mの平面倒卵形を呈し、深さ0.06～0.1mを測る。南東隅に径0.42m、深さ0.23mほどの小穴が掘り込まれているが、土坑との先後関係は不明である。

S K 3054 (Fig.85)

104次調査区の北東隅に位置し、調査区外にも広がる。現状で東西1.22m、南北0.8m、深さ0.07mを測り、平面は楕円形を呈するとみられる。

S K 3055 (Fig.76・付図)

104次調査区の東寄りに位置し、西側をSD320に切られる。遺構は未掘で個別図はない。平面規模は南北1.66m、東西1.24m以上を測り、南北に少し長い楕円形を呈する。

S K 3056 (Fig.76・付図)

104次調査区の東寄りに位置し、西側をSD320に切られる。遺構は未掘で個別図はないが、確認できる平面規模は南北1.68m以上、東西0.8m以上を測り、おそらくSK3055と同規模になるとみられる。

S K 3834 (Fig.86)

129次調査区の北西端に位置し、北側が調査区外に及んでいる。東西方向に軸をとる狭長な土坑で、長さ2.54m、幅0.5m以上、深さ0.32mを測る。

S K 4056 (Fig.86)

147次調査区の南西部に位置する大型の土坑である。東端を井戸SE4032に切られる。概ね東西方向に溝状にのび、底部の掘り込み状況から複数の土坑が接続している可能性もある。長さ6.35m、幅1.58～2.05mを測り、最も深くなる中央部では深さ0.64mを測る。埋土は黒灰色土で、鍛冶羽口や鉄滓が出土した。

S K 4057 (Fig.86)

147次調査区の中央部に位置する。長径2.7m、短径1.8m、深さ0.14mを測り、軸がやや東に傾く楕円形を呈する。墨書のある須恵器が出土した。

S K 4058 (Fig.86)

147次調査区の中央部に位置し、溝SD4044に切られる。長軸3.75m、短軸2.22m以上、深さ0.45mを測り、主軸は北西方向にとる。埋土は黒灰色土で、炭化物が混じる。

S K 4059 (Fig.87)

147次調査区の中央やや北東寄りに位置する大きな土坑である。概ね東西方向に軸をとり、東西5.24m、南北3.65m、深さ0.25mを測る。SB4035A・Bに切られる。埋土は暗灰色土で、炭化物が混じる。

S K 4061 (Fig.87)

147次調査区の中央から少し北西寄りに位置し、SB4030A・BとSB4035A・Bとの間にあ

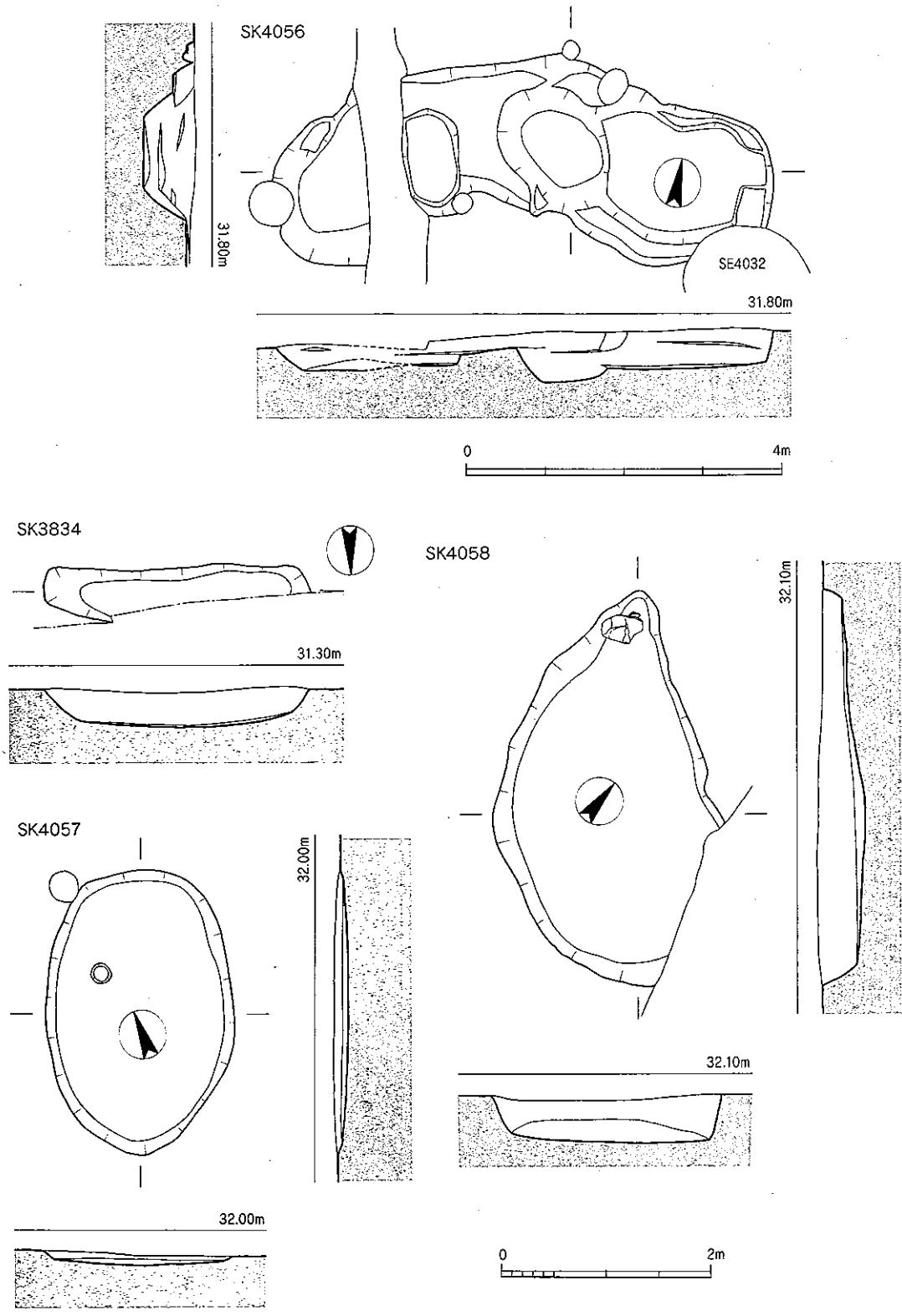


Fig.86 土坑実測図 (7) (1/60 · 1/80)

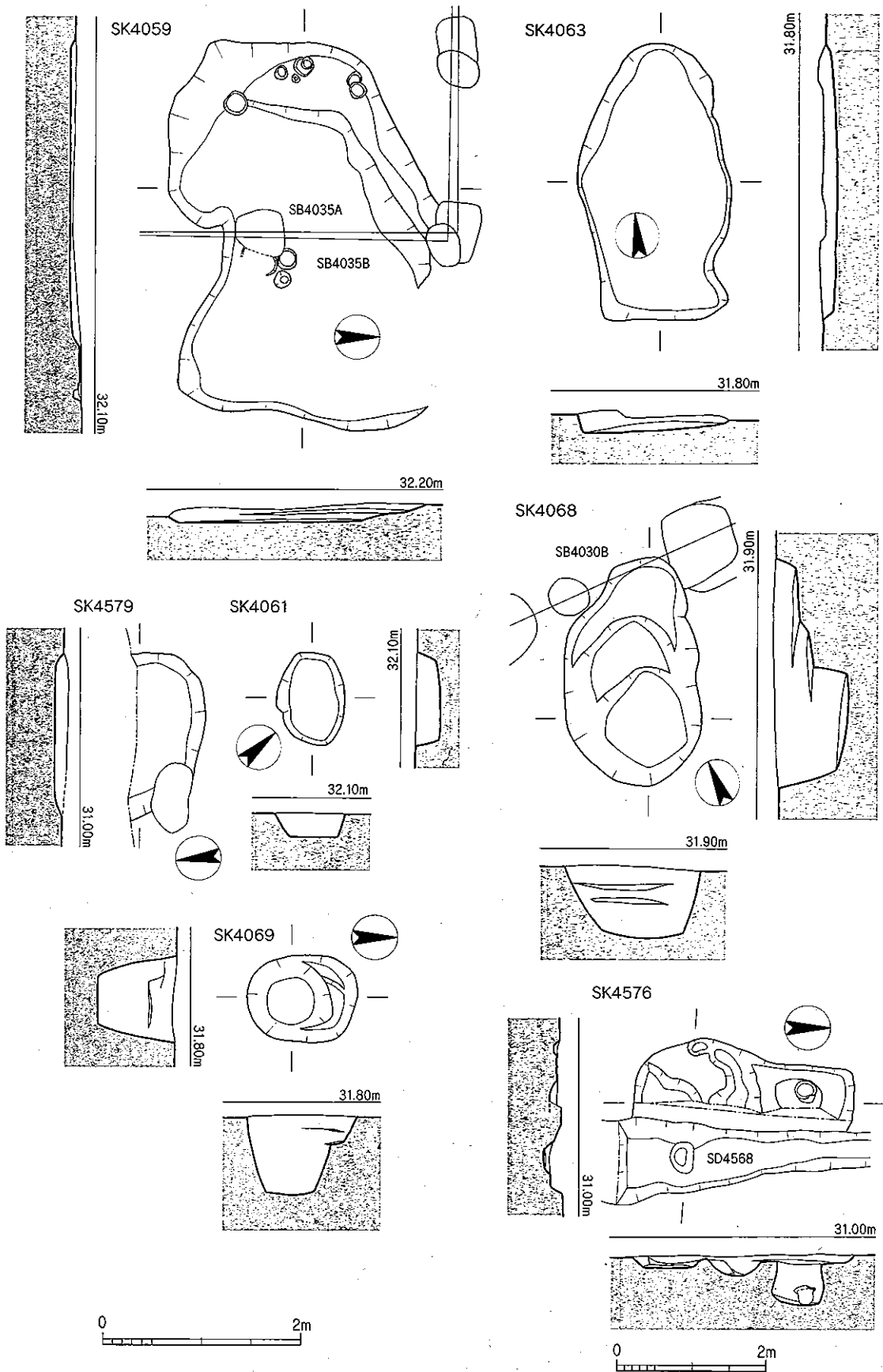
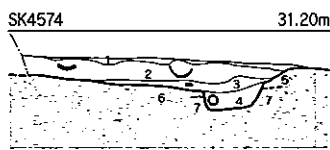
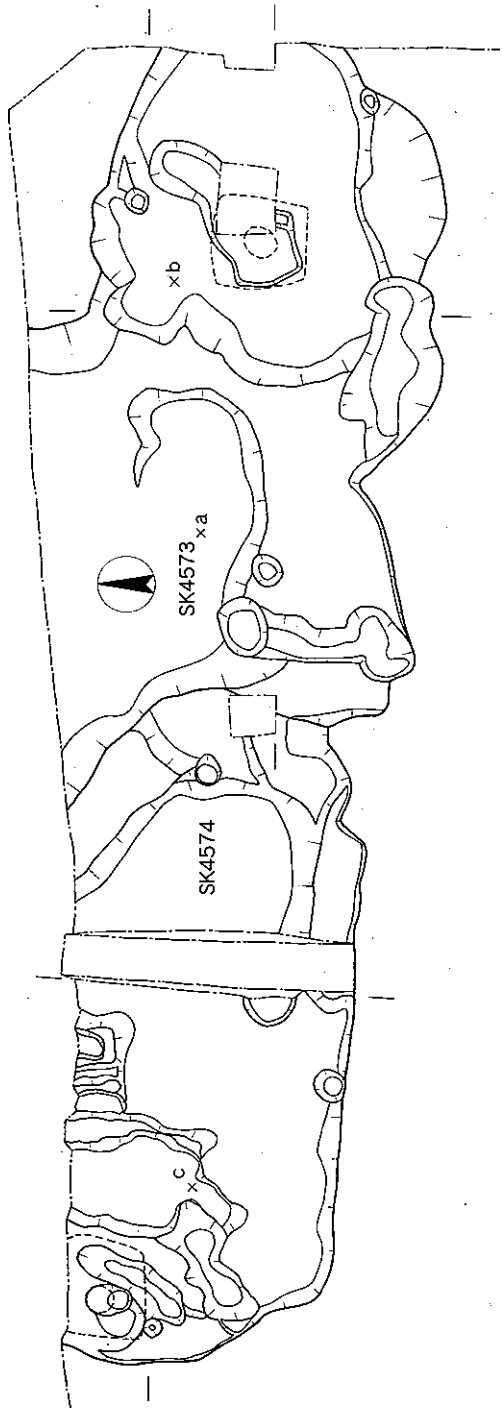
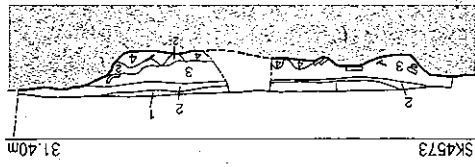
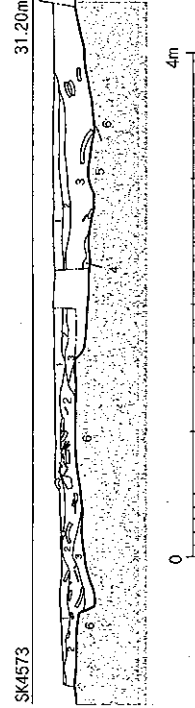
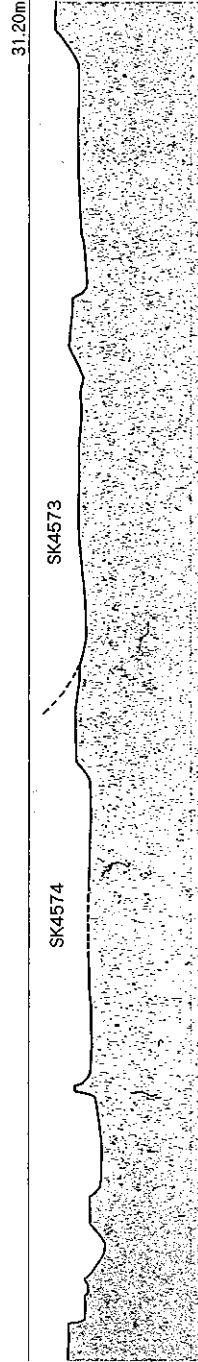


Fig.87 土坑実測図(8) (1/60・1/80)



- 1 黄茶褐色整地層
- 2 黒褐色土
- 3 炭多く混じる黒色土
- 4 暗灰色土(ピット内埋土)
- 5 黄色粘質土
- 6 黄~白色粘土 } 地山
- 7 砂層(粗砂)



- 1 黄茶色土(旧水田の床土が若干混じるので黄色がかる)
- 2 黒色土(やや砂質) } 土器・瓦大塚包含層
- 3 暗褐色土(粘質土)
- 4 白灰色粘土と茶色土混
- 5 白灰~茶色粘土 } この遺構に対する地山
- 6 白茶色砂質土(真砂の二次堆積)

Fig.88 土坑実測図(9)(1/60)

る小土坑である。長径0.94m、短径0.68m、深さ0.24mを測る倒卵形を呈し、軸は西に傾く。

S K 4063 (Fig.87)

147次調査区の中央やや東寄りに位置し、主軸を概ね南北にとる。長さ2.77m、幅1.54m、深さ0.17mを測る、歪な楕円形を呈する。

S K 4068 (Fig.87)

147次調査区の北西部に位置し、SB4030Bの柱穴をわずかながら切っている。軸が少し東に振れ、長径2.29m、短径1.37m、深さ0.83mを測る楕円形を呈する。北側が階段状をなし、南側が最も深くなる。

S K 4069 (Fig.87)

147次調査区の西部に位置する小土坑である。長径1.10m、短径0.86m、深さ0.9mを測る略円筒状を呈し、北側に段を設けている。

S K 4573 (Fig.88, PL.49)

187次調査区の北東隅に位置し、水田の床土の直下で検出した。SB4562・SD4566・SK4574を切る浅く大きな廃棄土坑で、数度にわたる掘り直しが行われている。最終埋没時には上層埋土である黒色土がかぶっている。長さ6.4m以上、幅3.3m以上、深さ0.35mで、東側が深くなる。層位的には東半部に下層の暗褐色粘質土が厚く堆積し、西半部には上層である黒色土の方がより厚く堆積している。全体に極めて多量の出土遺物が得られたが、特に西半部は土師器坏類と瓦をはじめとする遺物が土の量よりも多いほど、詰まった状態であった。特筆すべきは、図示した位置から淡青色ガラス容器片(図中a)や長沙窯黄釉褐彩水注の把手片(図中b)が出土したことで、その他銅製銚帯、縄目一枚作り平瓦完形品なども出土した。

ガラス容器片の出土

S K 4574 (Fig.88, PL.49)

187次調査区の北西部に位置し、SK4573の西側に位置する浅く大きな廃棄土坑である。既述のとおり、東端ではSK4573の黒色土がかぶり、最終埋没はこちらが古い。最上層には薄く黄茶色の整地層がみられ、SB3815段階のものと考えられる。東西5.4m、南北2.3m以上、深さ0.4mで、底面は数度の掘り直しがあつたと思われる。SB4561を切っており、先述のSK4573に切られる。出土遺物は多量であるが、SK4573ほどではない。注目されるのは、西寄りの最上層から出土した長沙窯黄釉褐彩水注の下半部と貼花印文部(図中(c))で、特に後者は精緻な草花文メダイオンで約100m北にある第98次調査区で出土した上半部の破片と接合した。また、中央の土層ベルトにかかった柱穴からは、須恵器長頸壺頸部と土師器高坏が出土し、柱穴廃棄祭祀を想起させる。

長沙窯の水注の出土

S K 4576 (Fig.87)

187次調査区の中央部に位置し、SB4560とSB4577に挟まれた間にある。東側はSD4568に切られる。南北2.2m、東西0.9m以上を測り、深さは南半部で0.19mを測る。北側は長軸0.49m、深さ0.52mほどの掘り込みがあり、床上からは完形に近い土師器小甕が出土した。埋土は黒色土で、炭・灰・焼土が入るものの遺構の性格は不明である。

S K 4579 (Fig.87)

187次調査区の中央北端に位置し、一部SB3815に切られる。調査区外にも広がるため規模は明確でないが、東西1.67m、南北0.68m以上、深さ0.13mを測り、楕円形を呈する。埋土

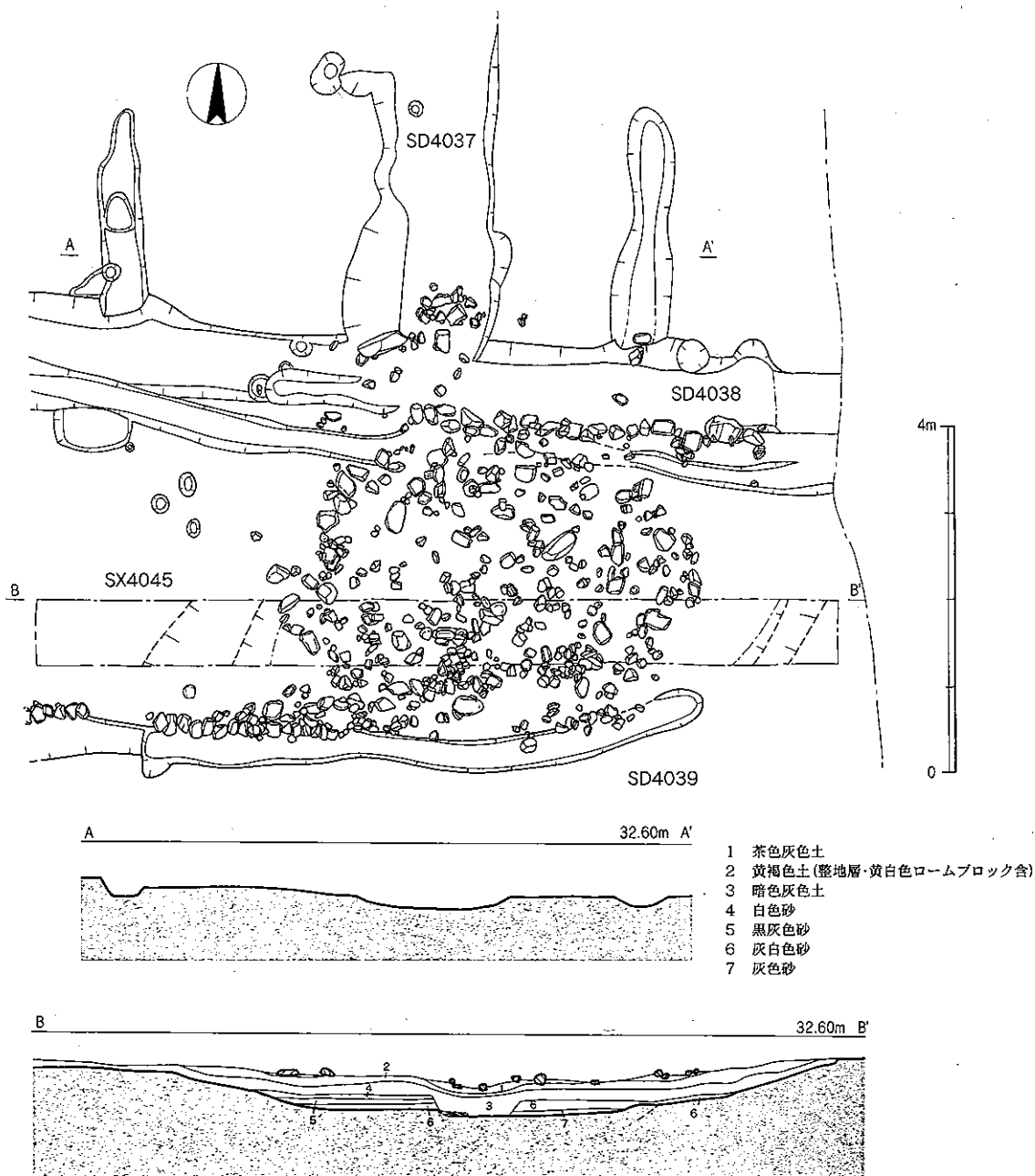


Fig.89 磔敷遺構S X 4045 実測図 (1) (1/80)

は暗褐色土で、炭が多く混じる。

(6) その他の遺構

1) 磔敷遺構

S X 4045 (Fig.89・90, PL.50・51)

147次調査区南側で検出した東西方向に磔を敷き詰めた遺構である。道路、または築地の基礎部分にあたると思われる。磔敷きは、北から南へ流れる谷地形の谷部を塞ぐように敷かれ、築地の基礎 敷かれている。東西溝SD4038とSD4039が、南北に並走している。この両溝と平行する南北の端部には、人頭大の磔を使用した石列が配されている。石列は一段積みであり、端部の面はそろっていないが、直線的に並んでいる。南北石列間の幅は3.8～4.0mを測る。断割りによる

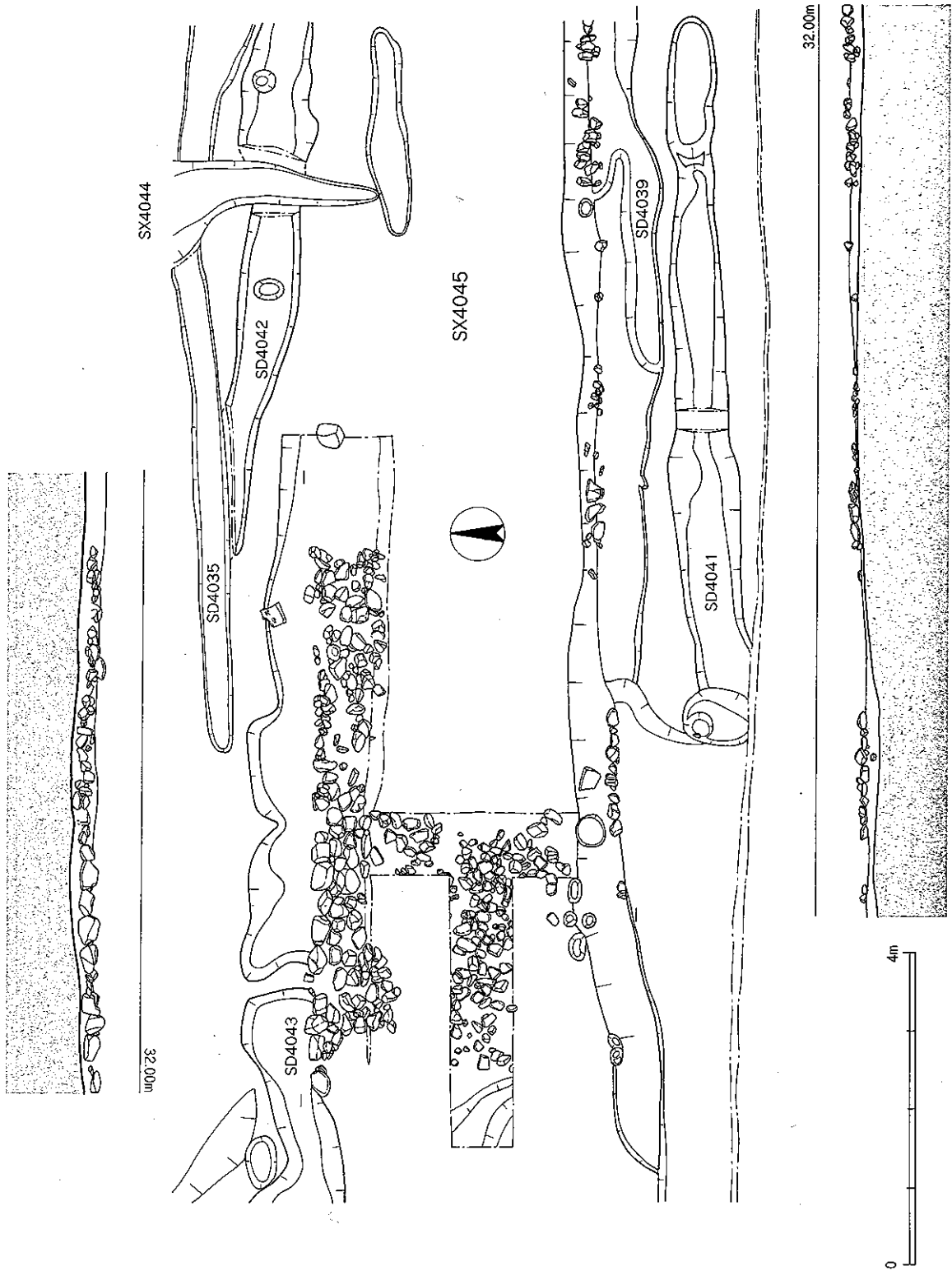


Fig.90 磔敷遺構S X 4045 実測図 (2) (1/80)

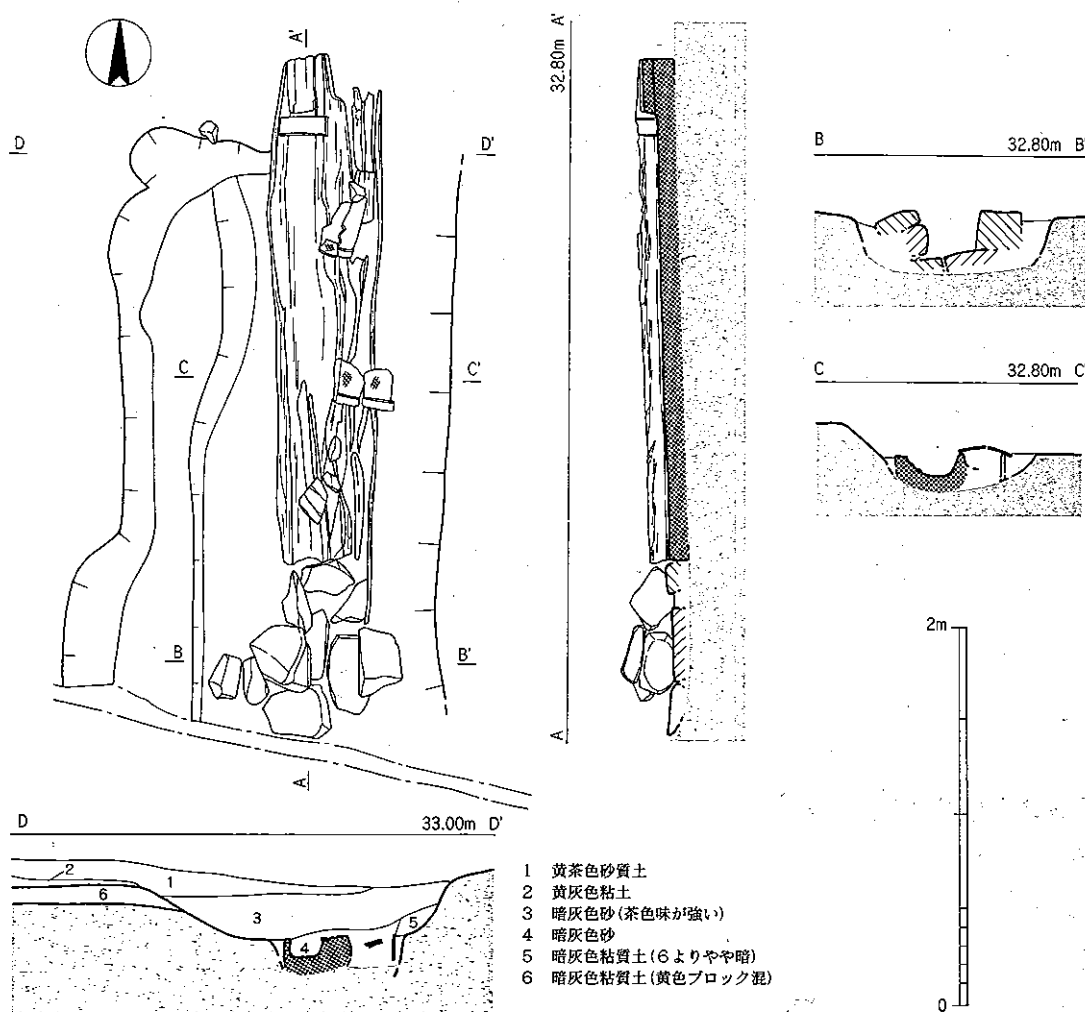


Fig.91 暗渠S X 2345 実測図 (1/40)

断面観察では、拳大から人頭大の花崗岩の角礫を無作為に配しており、その上を黄褐色粘質土で整地している。北側の溝SD4038は、東に隣接する85次調査区でも確認した石組の暗渠施設S X 2485へ伸びている。そのため、両遺構は一連の施設の可能性がある。現状では、基礎部分のみが残る状況であり、上部構造を復元することは難しいが、不丁地区官衙の区画に関わるものであることは間違いないであろう。

2) 暗 渠

S X 2345 (Fig.91)

83次調査区で検出した、木樋を使用する暗渠施設である。南北溝SD2340の上位となる石組 木樋暗渠溝SD2335の南端近くの東側、約30cm低い所に埋設されている。木樋は、長さ2.7m、径0.6mの丸太材を半裁して、凹面に削り抜いている。削り抜き部の幅は、0.25m、深さ0.10mだが、北端部は幅0.1mで削り抜かずに残されており、水が流れない止水構造となる。これに対し、木樋の南側では、石組みの溝が連続する形で造られており、長さ0.9m分を検出した。南側の84次調査では、この暗渠施設の延長部を確認できないことから、この南端部付近で終わると考えられる。

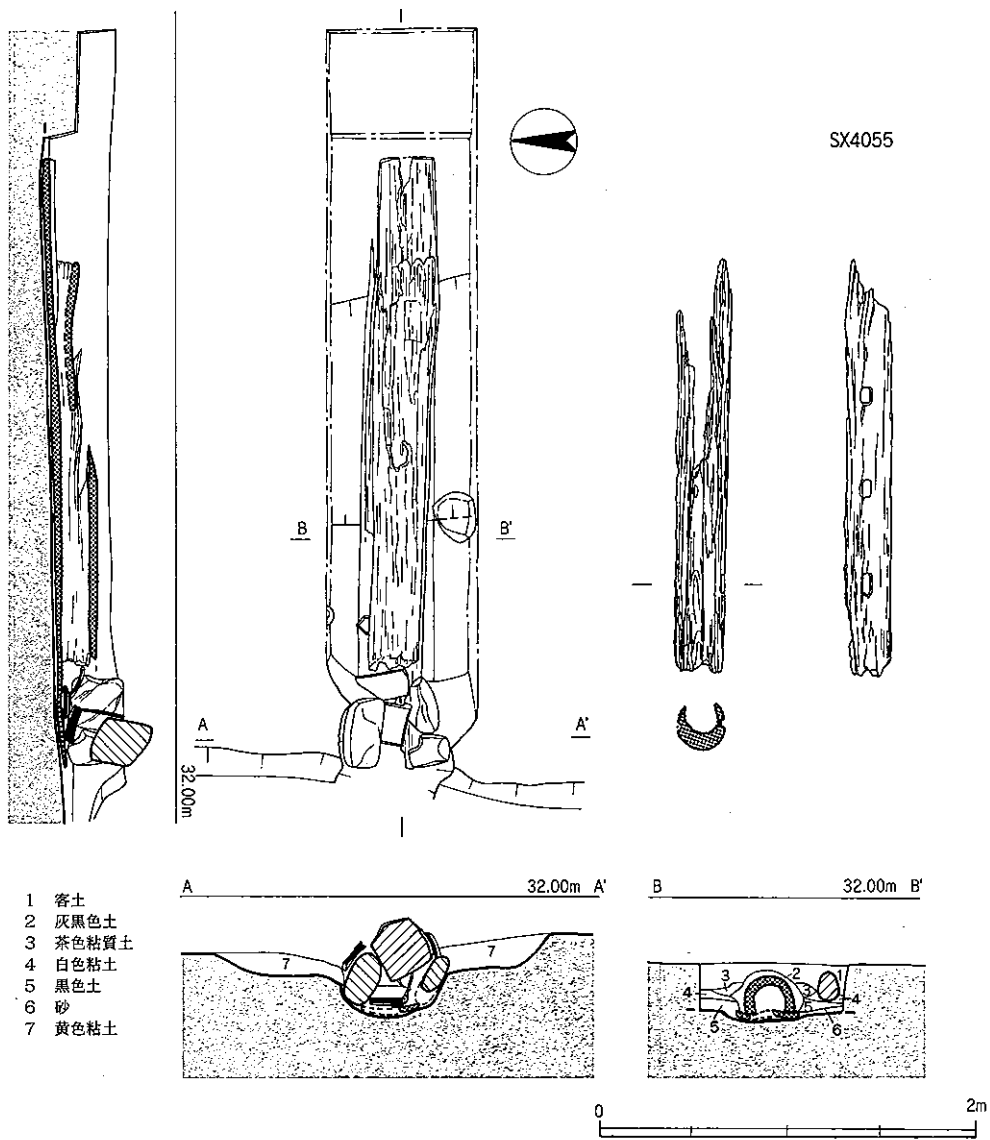


Fig.92 暗渠S X 4055 実測図 (1/40)

S X 2485 (Fig.65, PL.52)

85次調査で検出した南北溝S D2340の上位に構築された石組の暗渠施設である。南北に2.7m分を確認した。石組は乱石積みであり、西側の残りの良い所で3段積んでおり、高さは約0.4m程度になる。東側の大半は崩壊していたが、溝の内幅は約0.4mを測る。石組を設置した際の掘方の幅は約2.4mである。この石列は北端で西に折れており、少なくとも4個を確認できる。この石列の西側延長部にはS D2471があり、南側の肩筋を併せて、同時期に存在した区画に関する溝と考えられる。この石組暗渠は、83・87次調査で検出した石組溝S D2335との関連が考えられる。

S X 4055 (Fig.92, PL.53)

147次調査区東端で検出した木樋を使用して東西方向に埋設された暗渠施設である。西側で溝S D4054に接続する。溝と暗渠が接する部には、北側に一つ、南側に二つ花崗岩の自然礫を配しており、水口を造っている。ただしこの水口の床面には、水路を塞ぐように軒平瓦が置かれていた。木樋は、長さ2.18m、径0.27mの丸太材を半裁して、凹形に削り抜いて作られており、底板の上に蓋のように伏せて配置している。底板は、長さ3.20m、幅0.35mで、厚

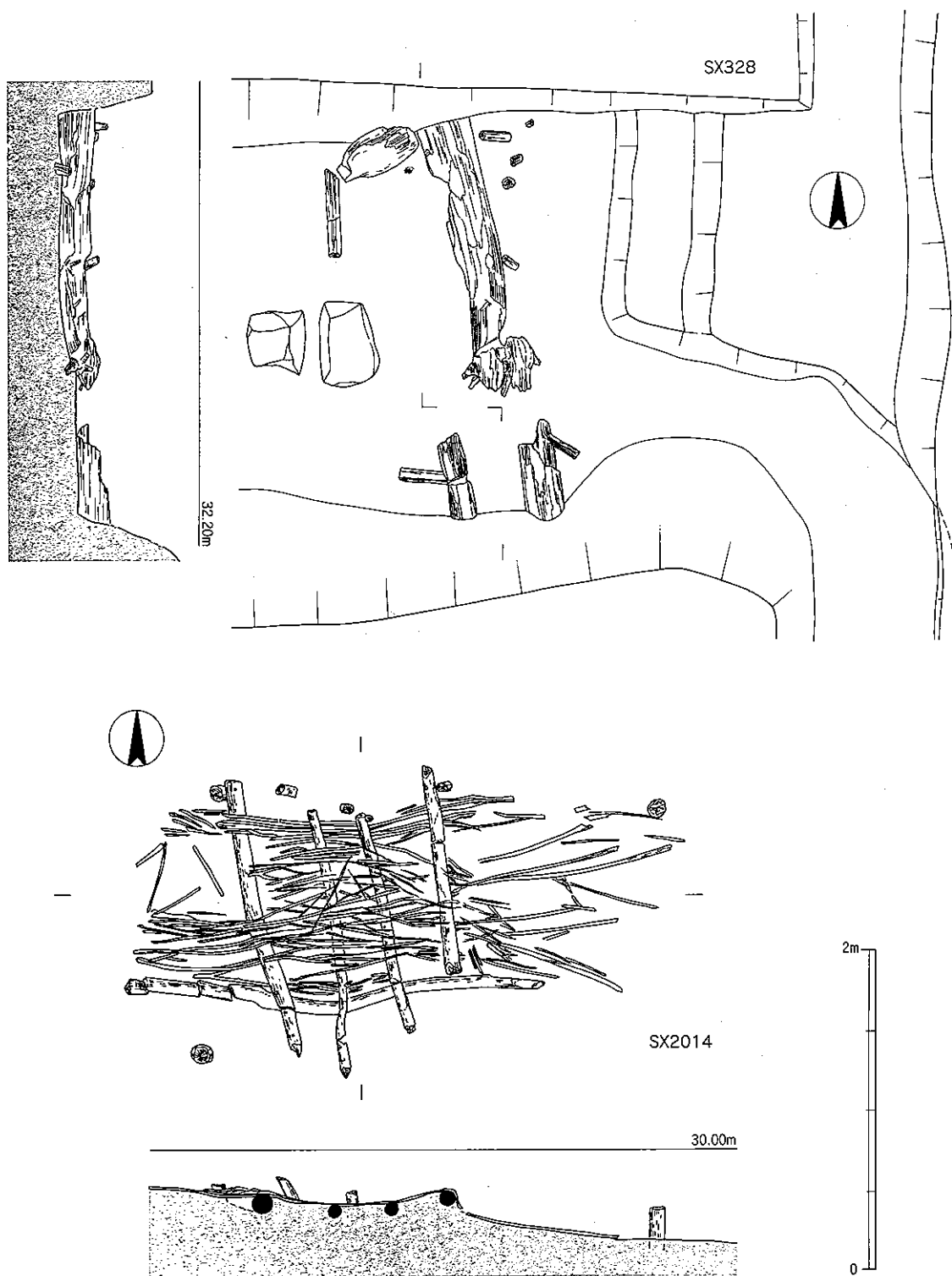


Fig.93 護岸遺構S X 328, 筏状遺構S X 2014 実測図 (1/40)

さは3~5.5cmの板材である。板材は水口の石組下部にまで及んでいる。木樋を設置する際の明確な掘方は認められず、流路S X 4050の腐植土上に置かれているのに対し、石組部においては幅1.8mの掘方がみられ、黄色粘土で裏込めする。そのため流路が完全に埋没する以前に造られたと考えられる。西側水口には、蛇行して二股に分かれる溝S D 4054が接続している。

3) 護岸遺構

S X 328 (Fig. 93, PL.54)

14次調査区で検出した。S D320の東壁面に築かれた護岸遺構である。14次・同補足調査を含めて7.2m分確認した。径8cm程度の丸く加工した杭を溝底の幅60cmの間に並列させて20～40cmの間隔で打ち込んでおり、その間に自然木を溝と平行して設置している。護岸に見られる通常のシガラミとは異なり規模は大きい。既に自然木は崩壊しており、護岸の高さがどの程度あったのかは不明である。

S X 2013 (Fig76, PL.54)

76次調査区の東北隅部で検出した。溝の底部付近に杭を打って自然木の枝によるシガラミを組んでいる。おそらく14次調査で確認したS X 328に繋がるものと考えられる。このシガラミに直交する形で、径20cm程度の自然木の丸太材を置いて両端を杭で固定している。この丸太材の下に人頭大の自然礫を置いて支えている。護岸維持に関わる遺構であろう。

4) 筏状遺構

S X 2014 (Fig.93, PL.54)

軟弱地盤を
補強

76次調査区の溝S D320内で確認した。S D320埋没後、整地を行う際に軟弱地盤を補強するため埋設されたとみられる。幅1.1mの範囲に裁断した小枝や枝材をレール状に並べ、直交する形で杭を置いている。さらに、その上には、枝を敷き詰めている。レール状に敷いた枝の外側には、ズレ防止のためか、40～50cm間隔で杭を打ち込んでいた。縦（南北）1.8m、横（東西）3.2mの範囲に溝に直交する形で広がっている。このような筏状遺構は、政庁周辺官衙では、正面広場、蔵司地区などでも確認されている。

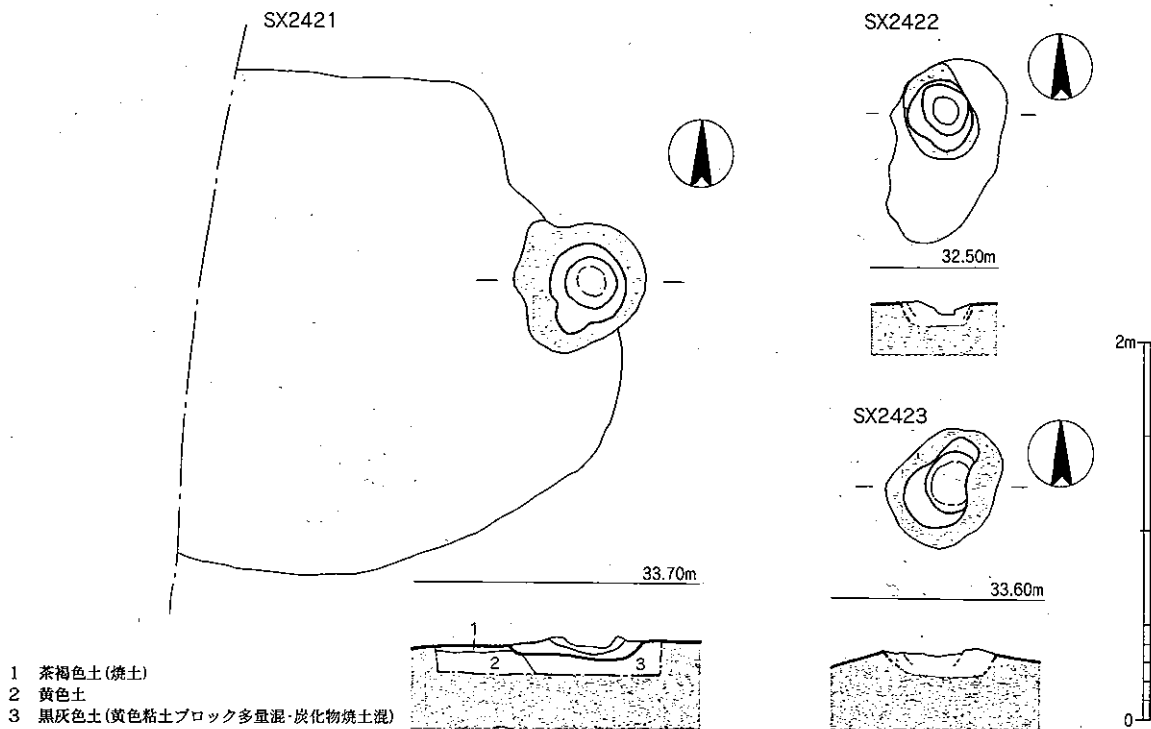


Fig.94 保土穴 S X 2421 ~ 2423 実測図 (1/40)

5) 鑄造関連遺構

保土穴

S X 2421 (Fig.94, PL.55)

84次調査区中央付近，S D 2419の埋土上面で確認した。炉の範囲は，径14cm，深さ3cm程度で，断面形は挿鉢状を呈している。壁は厚さ2cm前後の範囲まで焼けて硬化し，その周囲には径35cmに亘って被熱により赤変している。さらに周辺部にも，1m以上の範囲に焼土面が広がっている。この保土穴付近では，多量の焼土と共に鉄滓が出土したことから一時期，集中的な鍛冶が行われたとみられる。

S X 2422 (Fig.94, PL.55)

84次調査区の南端となるS X 2421の南側で検出した。断面形は，挿鉢状を呈している。保土穴の基部が残っており，径13cm，深さ3cmを測る。壁は厚さ3cm程度が焼けており，特に外側の厚さ2cmが赤化している。周辺には，30cm程度の範囲に焼土が広がっていた。

S X 2423 (Fig.94)

84次調査区中央北側で検出した。径16cm，深さ1cmを測る。壁が4cm程度の厚さで焼けて硬くなっており，その周辺部の5～8cmの範囲が熱を受けて赤化している。

6) 瓦組遺構

S X 2501 (Fig.95, PL.55)

76次調査区で検出した瓦組の土坑状の遺構である。S D 320の西端付近に位置する。径80cmの円形の掘方の底に，一木を挟った桶様のものを据え，その上に縦にした瓦を円形に並べて組み合わせて井筒状に組んでいる。桶様の大きさは，内径40cm，深さ45cm程度である。一部確認できた口縁部は2cm前後の厚さであり，下位に向かって肥厚している。上部の瓦組は下部の桶様の口縁に沿って平瓦を縦位（一部横位）に2段ないし，3段に並べて組んでいる。最上段の内径は約30cmで，桶様とほぼ同じ大きさである。また，最上端部からの深さは約85cmであり，検出時に瓦が倒れた状態で出土したことから，本来は2段ないし，3段に組まれていたと考えられる。

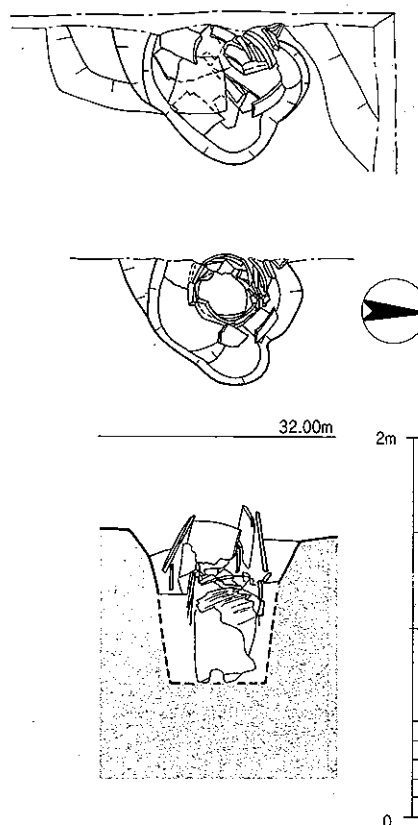


Fig.95 瓦組遺構S X 2501 実測図 (1/40)

7) 瓦敷遺構

S X 2523 (Fig.96, PL.56)

87次調査区で検出した。石組溝S D 2335の廃絶後に築かれた瓦敷遺構である。南北約5m，東西約4mの範囲に広がっており，破碎した丸瓦や平瓦を面的に敷き詰めている。中には，丸・平瓦が並列した状態で検出された。縄目・格子目の叩きが見られ，「平井瓦」「佐瓦」「賀茂瓦」「筑前

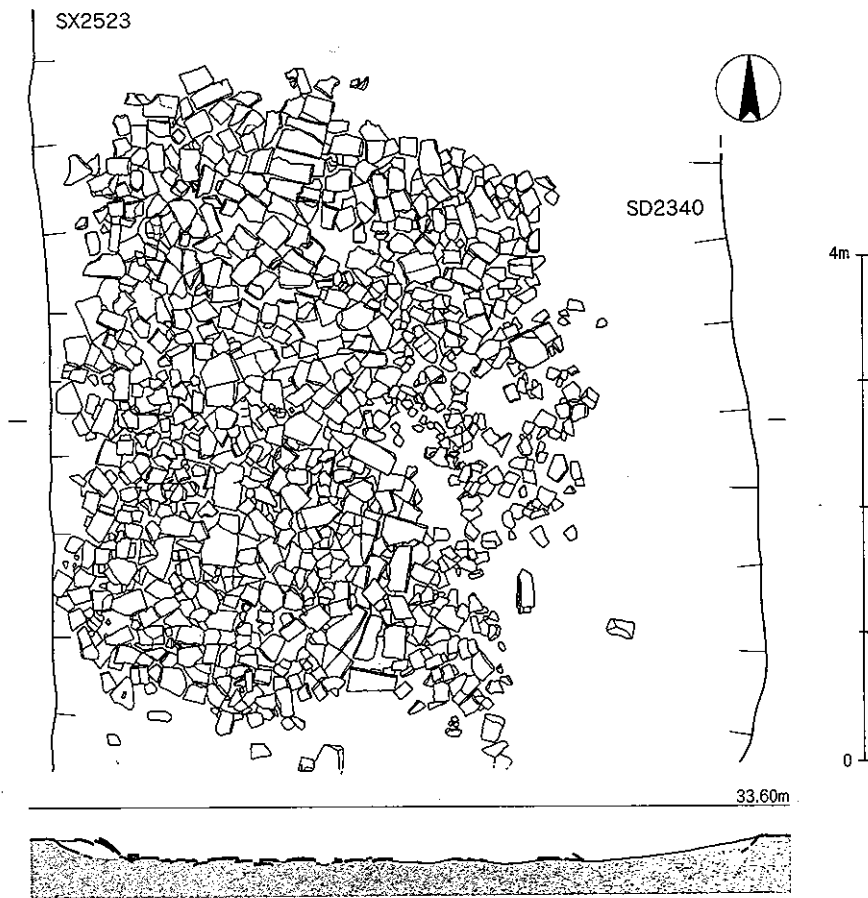


Fig.96 瓦敷遺構S X 2523 実測図 (1/60)

などの文字瓦を使用しており、他に無文罫も出土している。

8) 土壇状遺構

S X 2487 (Fig.76・付図)

85次調査区で検出した。暗渠S X 2485北側となる東西方向の石列に平行する、幅3.0mの土壇状の高まりである。高まりの西側延長には、溝SD2471、礫敷遺構S X 4045があり、一連の構築物とみられる。現状では、S X 2485と共存する可能性が高いことから、SD2340埋没後の時期に比定され、S X 4045と同じ機能を持つ構築物の基礎部分の可能性が考えられる。

9) 粘土採掘遺構

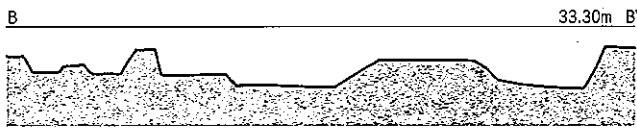
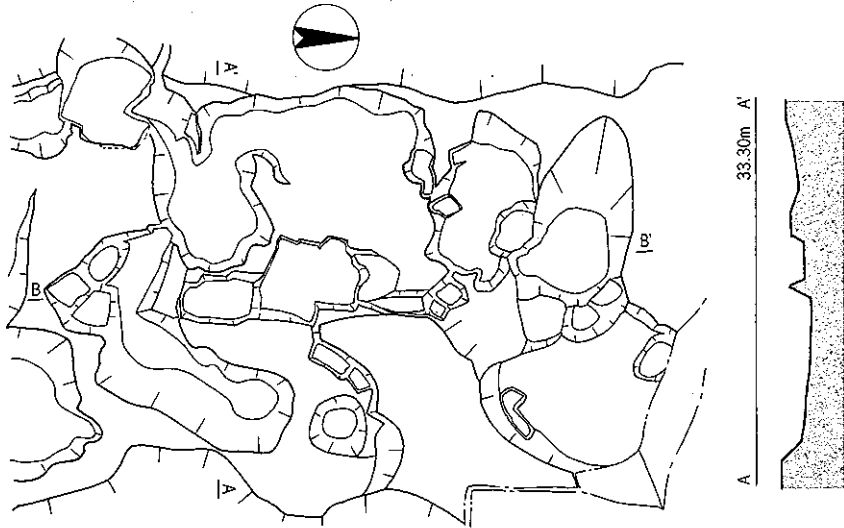
不丁地区では、自然堆積層中に暗紫色粘土が広がっている。調査では、この粘土層まで掘削した連続する不整形の土坑状の遺構が数多くみられ、暗紫色粘土を意図的に採掘した粘土採掘遺構と考えられる。83・84・87・90次調査において確認した。

S X 2339 (Fig.97)

83次調査区東側で検出した。南北約10.0m、東西約4.5mの範囲に広がっている不整形の土坑群である。平面は正方形や長方形を呈するが、大きさは0.3×0.4m～2.0×2.6mあり、立ち上がる壁の高さも一様でない。中には壁隅が鋭く検出できるものもある。

暗紫色粘土
の採掘

SX2339



SK2342

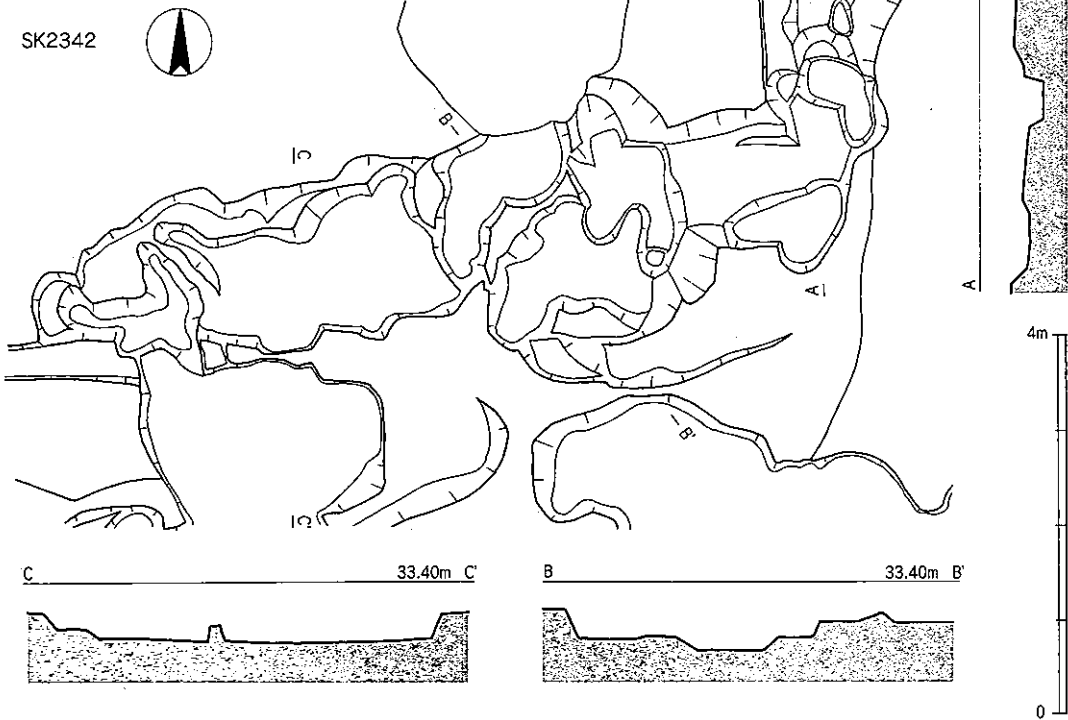


Fig.97 粘土採掘遺構 SX2339・2342 実測図 (1/80)

SX2342 (Fig.97)

83次調査区中央付近で検出した。南北から東西に約12m, 幅2.8mの範囲に連続的に広がる不整形の土坑群である。深く方形の掘り込みを持つものは、一辺40cm程度ものから長軸2.9mを超えるものもある。

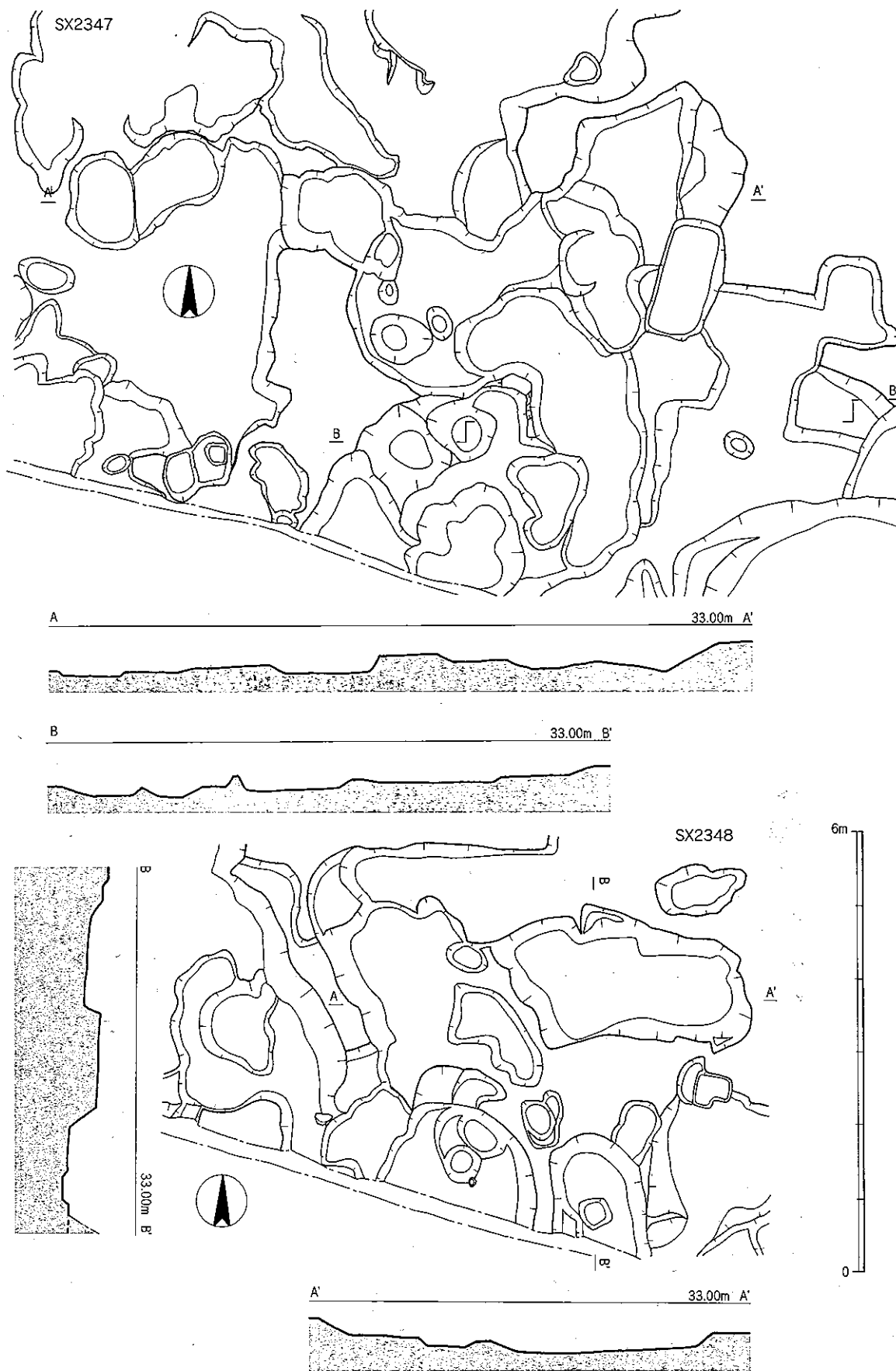


Fig.98 粘土採掘遺構 SX2347・2348 実測図 (1/80)

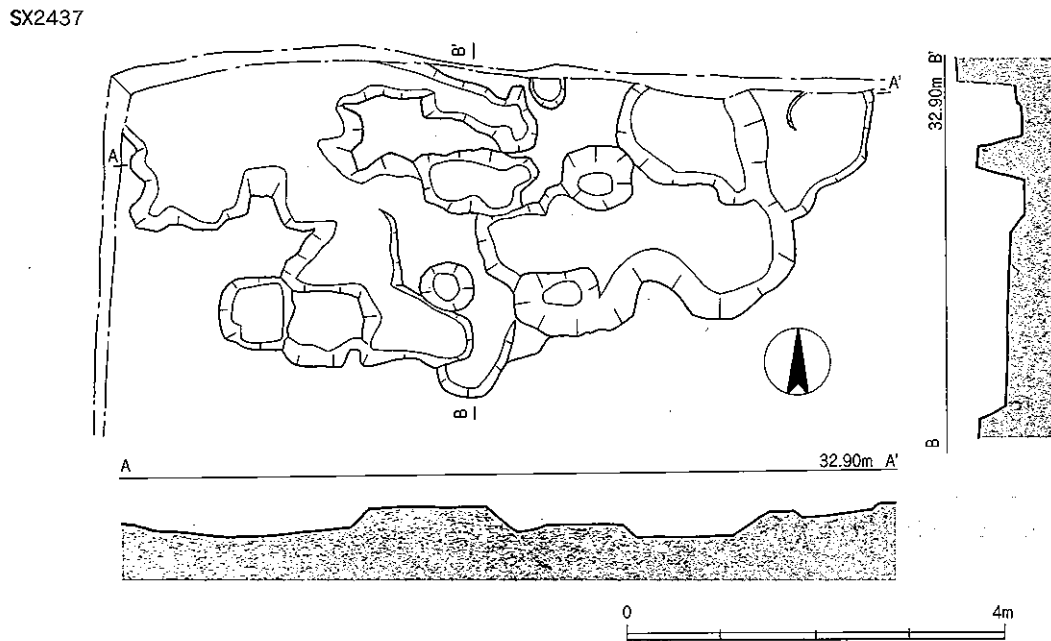
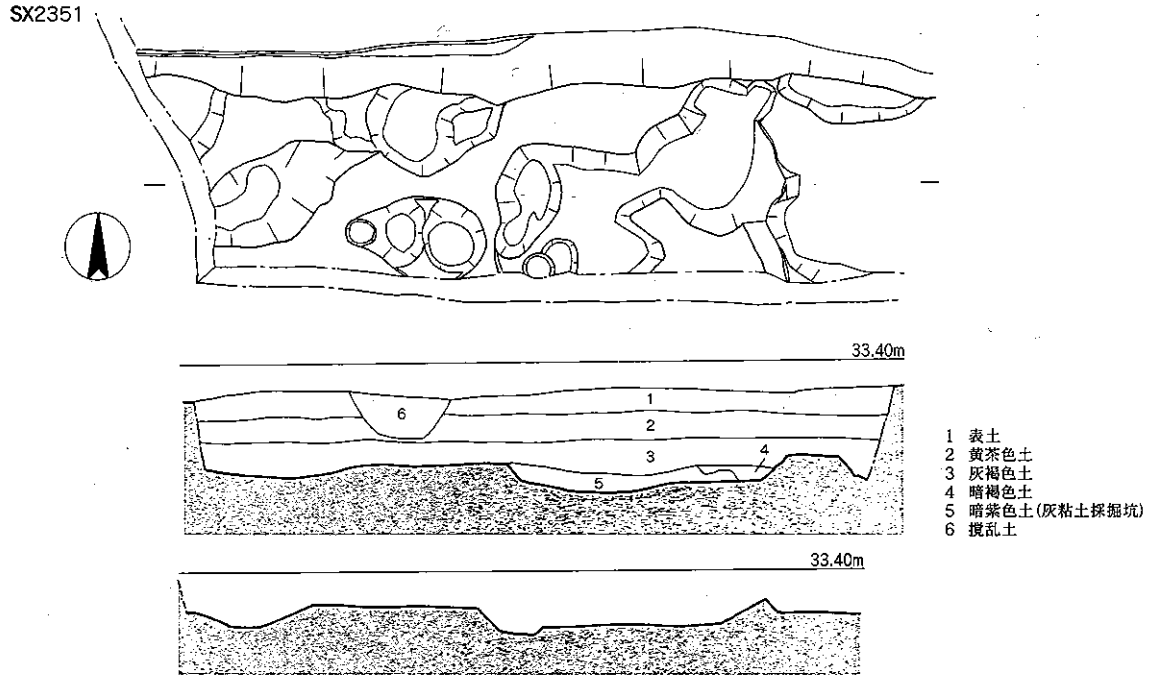


Fig.99 粘土採掘遺構 SX2351・2437 実測図 (1/80)

S X 2347 (Fig.98)

83次調査区中央付近で検出した、北東から南東に広がる不整形の土坑群である。その中でも、東側で東西約9m、南北約6mの範囲にまとまりを認識できる。中心部付近での掘方は0.8×1.0m程度の大きさだが、壁面は切合いによってほとんど失われており、底面付近で僅かに確認できる。さらに西側では、径約5×5mの範囲のまとまりがある。こうした分布上の粗密は、掘削の単位を示す可能性が高い。

S X 2348 (Fig.76・付図)

83次調査区で検出した不整形の土坑である。S X 2347の西側にあたる。底面は一定してお

SX2438

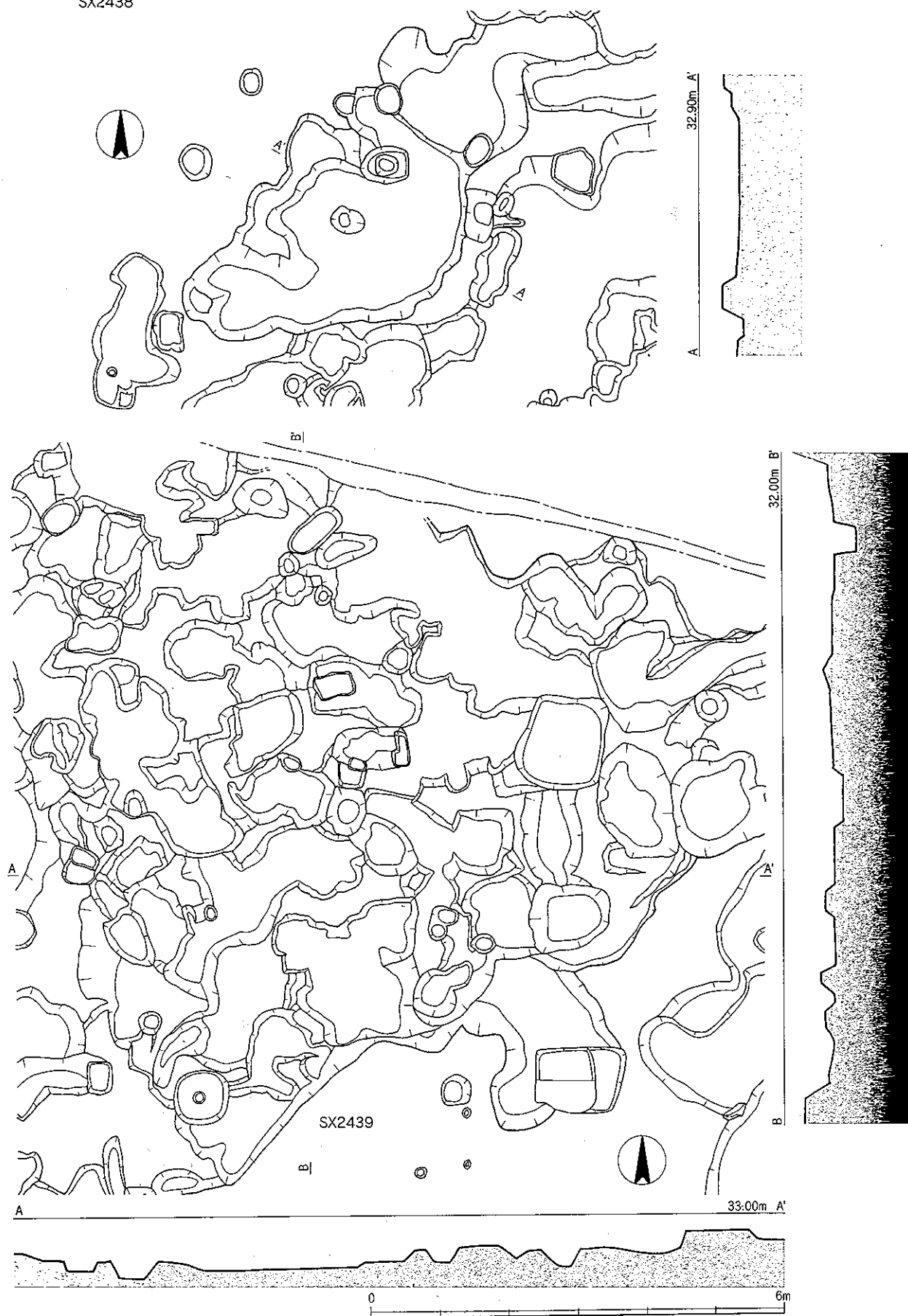


Fig.100 粘土採掘遺構 SX2438・2439 実測図 (1/80)

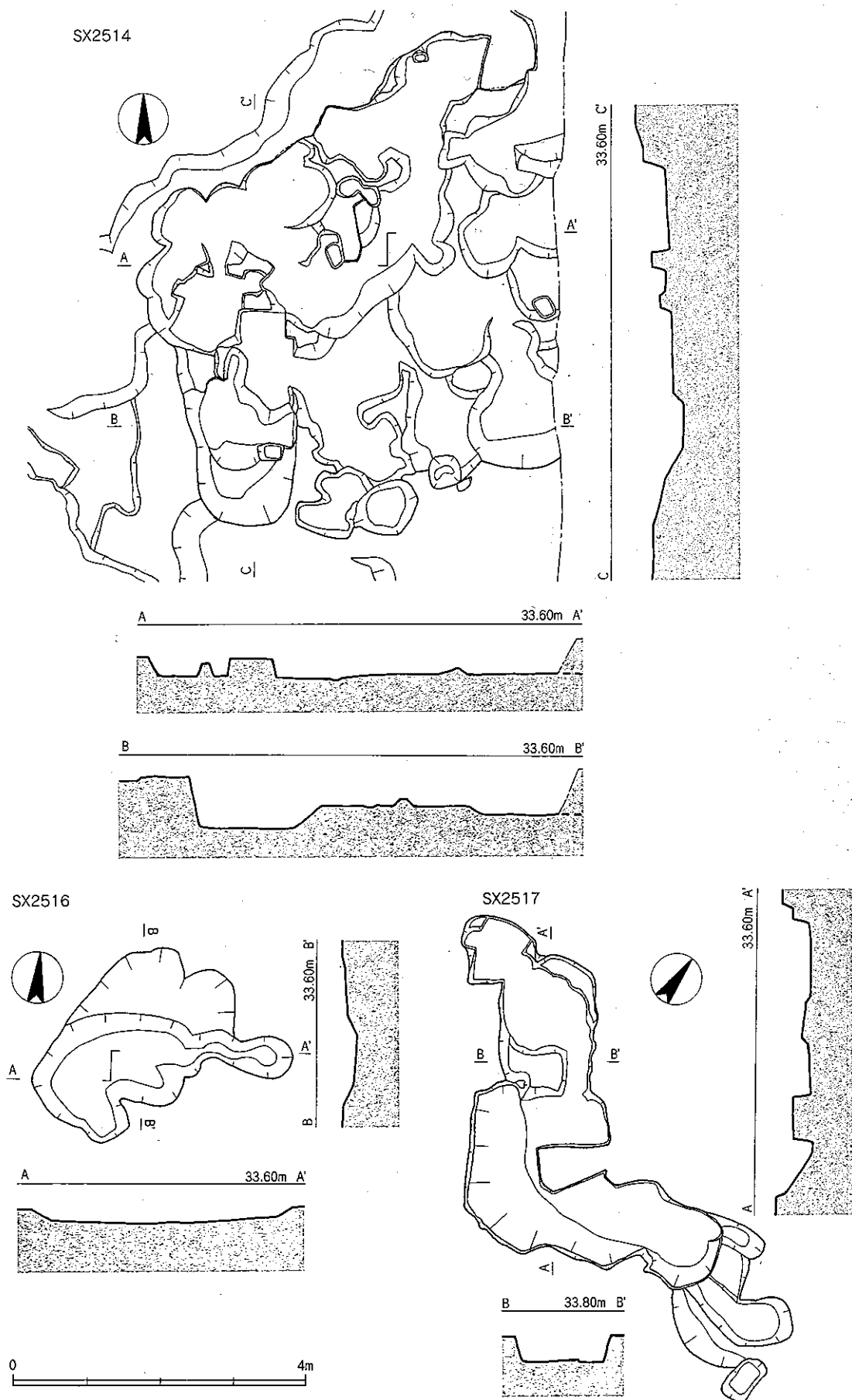


Fig.101 粘土探掘遺構 SX2514・2516・2517 実測図 (1/80)

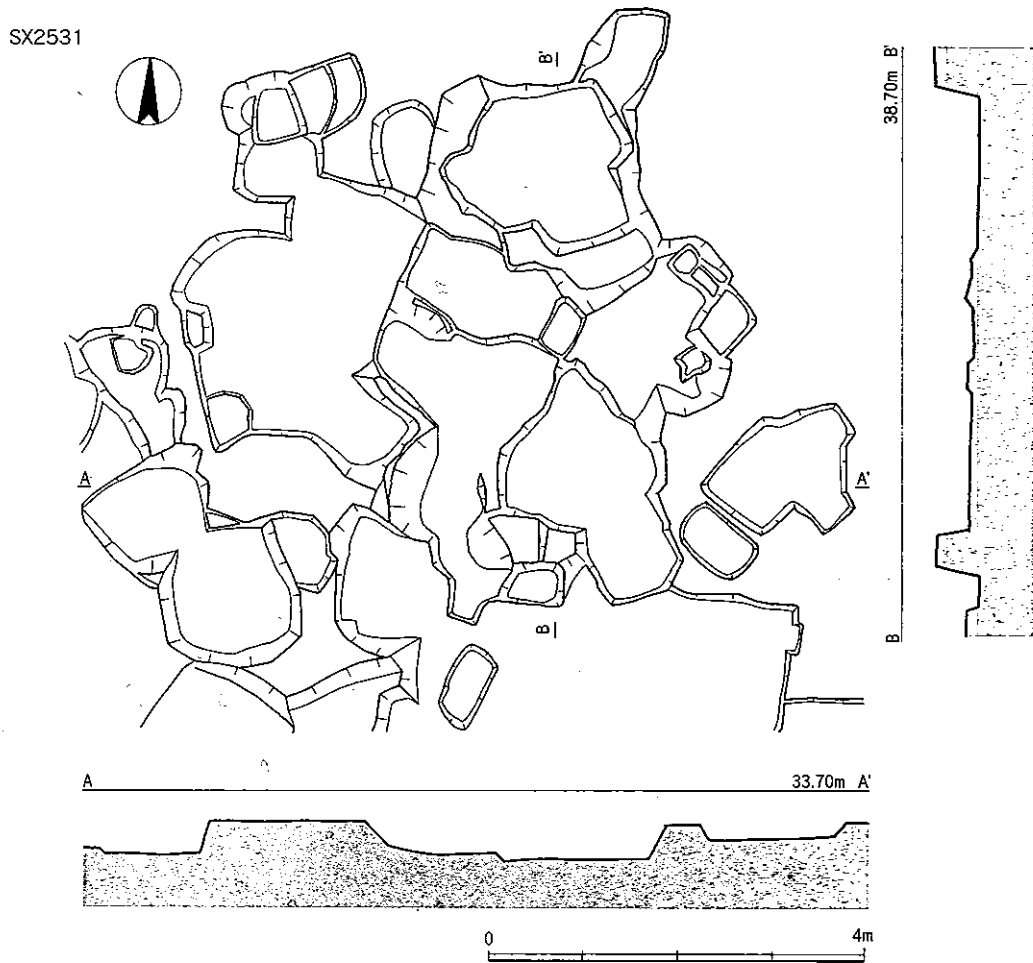


Fig.102 粘土採掘遺構 SX2531 実測図 (1/80)

らず、凹凸が著しい。掘り込みが方形で、壁が直に立ち上がるものもある。

S X 2351 (Fig.99)

83次調査区西端で検出した。南側の84次調査で検出したS X 2437と一連の採掘遺構と考えられる。現状では東西幅約8mの範囲に広がっている。灰褐色土の下位で確認でき、埋土には暗紫色土がブロック状に混じっていた。

S X 2437 (Fig. 99, PL.56)

84次調査区で検出した。調査区畔を挟んで北側のS X 2351に隣接する。東西7.9m,南北3.5mの範囲に広がっている。隅丸方形や長方形を呈するものがあるが、底面から壁面の高さは、残りの良いもので約0.25m,悪いもので約0.18m程度である。

S X 2438 (Fig.100, PL.56)

84次調査区で検出した。S X 2439の西側で検出した南北約15m,東西約10mの範囲に広がっている不整形の土坑群である。最大で4.2×2.8m,深さ0.2m程度の不整形を呈したものがある。南側では、楕円形や不整形のプランを呈するものが多い。

S X 2439 (Fig. 100, PL.56)

84次調査区西側で検出した。東西約10m,南北約9mの範囲に広がっている。乱雑に掘り込まれているが、中には正方形で壁を垂直に掘ったものもある。採掘遺構は、西側のS X

2438に接している。この採掘によって多くの遺構が破壊されたとみられる。

S X2442 (Fig.76, PL.56)

84次調査区西端で検出した。南北約8m, 東西約11mの範囲に広がっており, S B2405やS B2410の柱掘方を切っている。

S X2514 (Fig.101)

87次調査区のS D2340東側で検出した。南北約8m, 東西約6mの範囲に広がっている。中央部付近の大きな掘方は, 約2×1m程度の不整形を呈するものがある。

S X2516 (Fig.101)

87次調査区東側で検出した。S X2514の北側に位置する。平面形は不整形で切合いが少ないが, 他の遺構との位置関係から粘土採掘遺構と認識した。長軸3.5m, 短軸2.4mを測る。

S X2517 (Fig.101)

87次調査区で検出した。S X2516の北側に位置する。長軸4.5m, 短軸3.3m, 幅0.8～1.0mで, 平面はL字形を呈する。掘削箇所の隅はいずれも直角であり, 最小単位としては, 幅0.3m程度である。壁面の高さは残りの良いところで0.2mを測る。

S X2531 (Fig.102)

87次調査区南側で検出した。南北12.0m, 東西8.0mの範囲に展開しており, S B2520を切る。0.2×0.3mの方形を呈する掘方から, 東西2.3m, 南北2.7m程度の大きさのものまで様々である。壁高は, 残りの良いところで0.5mを測る。南端部は不明瞭である。

S X2532 (PL.56)

87次調査区西側で検出した。S B2520を切る。大きく二つ, 不整形を呈する土坑状の掘方に分かれる。大きなものは, 東西幅4.0m, 南北幅3.5mの掘方である。

10) 流路・溜まり・落ち込み

不丁地区は, 南の御笠川に向かって地形が傾斜しており, 調査区内では南北方向に流れる幾つかの流路が整地によって埋められている。また, 鞍部を埋めた整地層や遺構面の侵蝕部の堆積が, 溜まりや落ち込みとして認識できる。ここでは, 調査時に確認したものを報告する。

流路

S X2480 (Fig.22・76・103・付図, PL.57)

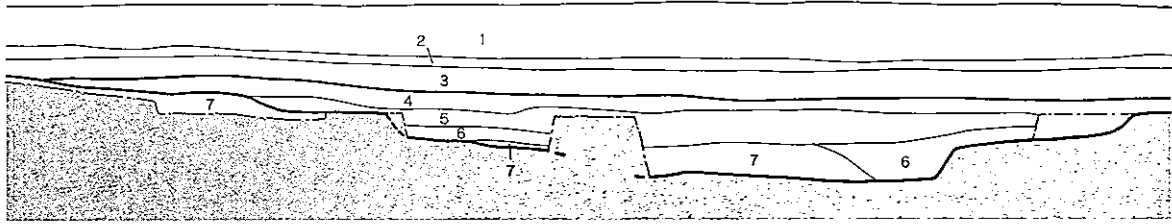
85・98次調査で検出した。ちょうど, 98次と85次調査区を跨ぐように, 北東から南西に広がる不整形の流路である。整地層で埋められた後, 東限の南北溝であるS D2340に切られている。また, 付近の建物は, この流路を整地した上に築かれている。85次調査区北側では, 幅約13.0m, 南側で約6.0mとなる。最も深いところで, 約0.6mである。98次調査区付近では, 最下層に灰黒色砂があり, その上に黄褐色粘質土や黒色粘質土, 灰茶褐色砂質土が互層となり, 最上位を炭化物や焼土を含む粘質土によって整地している。この上層の炭化物を含む層より, 炭化物と多量の土器

S X4050 (Fig.76・103・付図)

147次調査区で検出した。調査区の東北から南西に延びる, 幅約10mの流路状の遺構である。最下層は灰褐色の自然堆積層であり, その上部は暗褐色粘質土で整地されている。北端では深

SX 2480

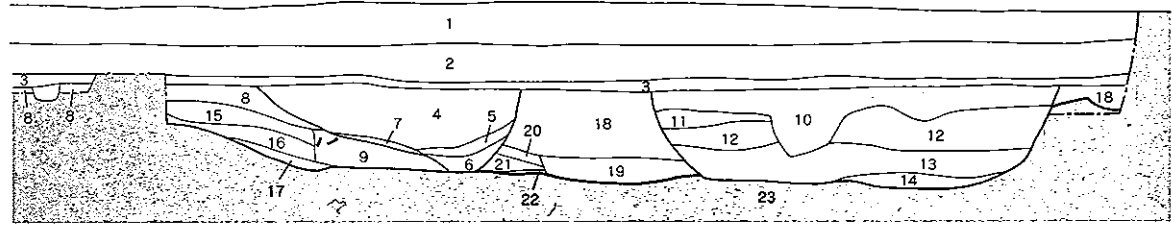
32.40m



- | | |
|-----------------------------|----------------------|
| 1 表土(畦) | 5 茶褐色粘質土(SX2480 堆積土) |
| 2 黄灰色土(床土) | 6 暗灰色粘質土(SX2480 堆積土) |
| 3 灰褐色土 | 7 黄紫色粘土 |
| 4 暗褐色土
(焼土・炭化物混北の茶褐色の下層) | |

SX 4050

33.40m



- | | | |
|------------|---------------------|----------------------|
| 1 真砂土(盛土) | 9 黄褐色粘質ブロック+茶灰色土 | 17 暗灰色粘質土 |
| 2 黄褐色粘質土 | 10 暗灰色土 | 18 暗褐色土 |
| 3 茶灰色土 | 11 黒茶色土(黄褐色ブロック含) | 19 黒茶色土 |
| 4 暗褐色土 | 12 暗褐色土 | 20 茶灰色土 |
| 5 茶灰色土(炭混) | 13 黒茶色砂質土(黄褐色ブロック混) | 21 黄褐色粘質ブロック+暗茶灰色シルト |
| 6 暗灰色粘質土 | 14 灰色粗砂+暗灰土 | 22 腐植土(黒色土) |
| 7 茶灰色シルト | 15 黄褐色粘質土 | 23 明灰色粗砂(地山) |
| 8 暗灰色砂質土 | 16 茶灰色土 | |

Fig.103 自然流路S X 2480・4050 土層図 (1/60)

き0.5mになる。この上位には、遺物包含層である茶褐色粘質土が堆積している。

溜まり・落ち込み

S X 2336 (Fig.76・付図, PL.57)

83次から84次調査区にかけて検出した。S D 2340の東側に位置しており、平面形は方形状を呈した落ち込みである。南北約18.3m, 東西約9.5mの範囲に広がっている。遺構の性格は不明である。

S X 2342 (Fig.76・付図)

83次調査区で検出した。S K 2344の北側に位置する土坑状の落ち込みである。土坑を掘り上げた時の痕跡の可能性もある。

S X 2416 (Fig.76)

84次調査区北側で検出した不整形の落ち込みである。東西約11.6m, 南北約4.0mの範囲に広がっている。

S X 2417 (Fig.76, PL.57)

84次調査区で検出した不整形の落ち込みである。東側のS X 2416, 北側のS X 2342などに関連するとみられるが、性格は不明。

S X 2443 (Fig.76)

84次調査区で検出した。S B 2415・2420を切る不整形の落ち込みである。径6m程度の大

きさである。

S X2477 (Fig.76・付図)

85次補足調査区西南隅部で検出した。長軸3.8m, 短軸1.7m以上の方形状の落ち込みである。比較的浅い。

S X2506 (Fig.76・付図)

14次補足調査区東南隅部で検出した浅い土坑状の落ち込みである。明確なプランとして確認できず、不整形で深さは5cm程度である。

S X2507 (Fig.76・付図)

14次補足調査区で検出した。S X2506の南に近接する土坑状の落ち込みで、プランは不整形である。深さ0.5mを測る。

S X2544 (Fig.76・付図)

90次調査区で検出した。S B2535を切る浅い落ち込みであり、平面形は不整形を呈している。長軸の長さは約4.8mになる。

S X2887 (Fig.76・付図)

98次調査区北端で検出した。幅9.8m不整形の落ち込みだが、大半は調査区外へ伸びており、形状は不明である。

S X2888 (Fig.76・付図)

98次調査区北端で検出した。ちょうどS X2887の南側に位置する不整形の土坑状の落ち込みである。長軸1.5m程度の大きさになる。

S X3053 (Fig.76・付図)

104次調査区東北隅付近で検出した。不整形落ち込みであり、S D3052に切られる。大きさは、長軸2.4m程度である。

S X3813 (Fig.76・付図)

129次調査区東南隅で検出した。不整形の落ち込みで、S B3815を切る。径4×5mの範囲に広がっているが、一部は調査区外へ伸びる。

S X3830 (Fig.76・104)

129次調査区で検出した。S D3825とS D3835の間に位置する小礫群である。明瞭なプランとして確認できていないが、径3.0mの範囲に亘る小礫であり、それに混じって瓦・土器片が集中して出土した。また、これらの小礫を除去した後は、浅く長楕円形の土坑状の窪みを確認した。長軸1.80m, 短軸1.00m, 深さ0.17mを測る。整地による窪みなどの可能性が考えられる。

S X3831 (Fig.76・付図)

129次調査区で検出した。S D3835の西側に広がる不整形の落ち込みである。長軸7m, 短軸4mの範囲となる。

S X3833 (Fig.76・104)

129次調査区北端隅で確認した、やや蛇行気味の溝状の落ち込みである。長軸3.00m, 短軸0.60m, 深さ0.18mを測る。

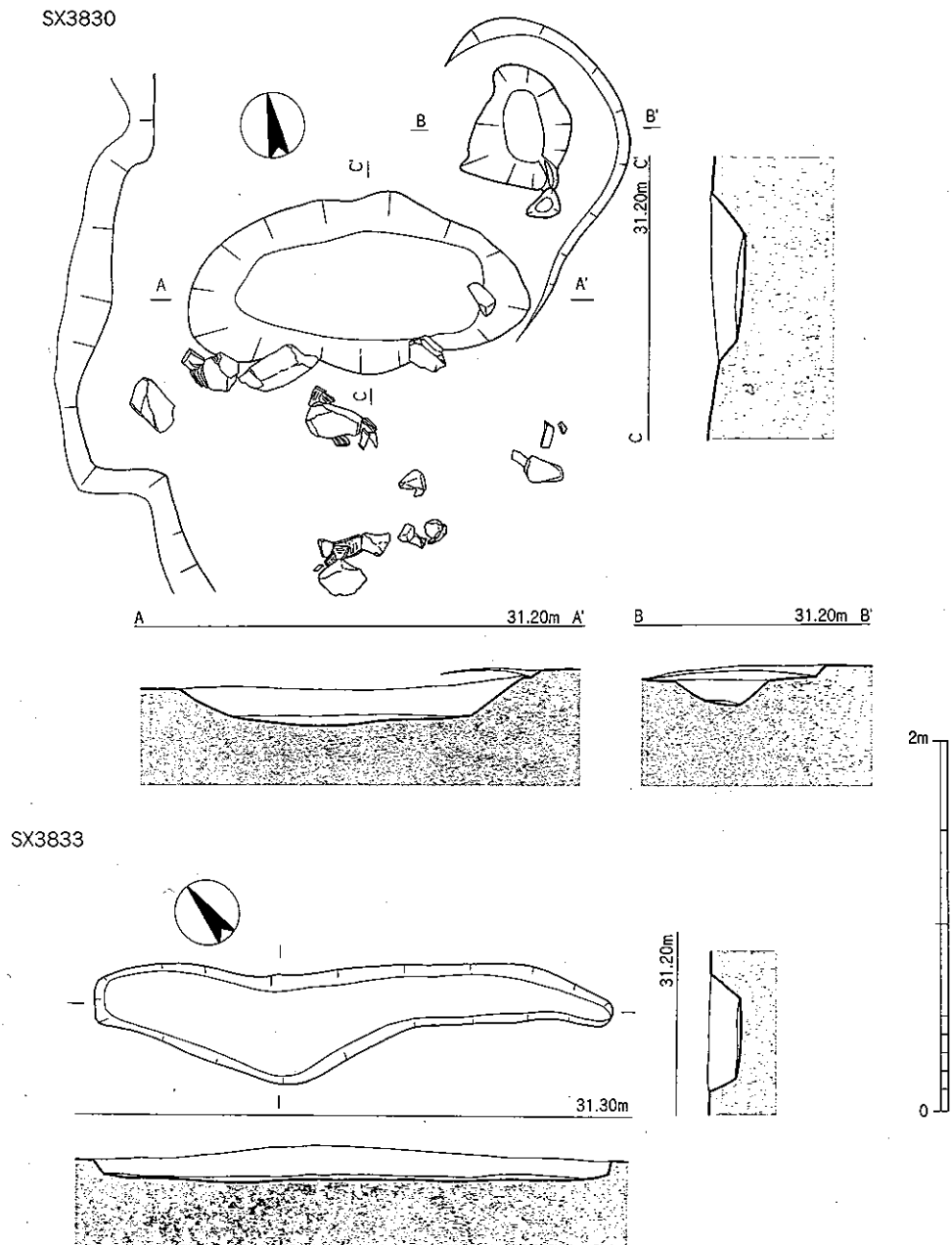


Fig.104 溜まりS X 3830・落ち込みS X 3833実測図 (1/40)

S X 3838 (Fig.76・付図)

129次調査で検出した。S D 3825とS D 3835との間で、炭化物と共に多量の土器が出土した。明確な遺構は確認できていないが、一括廃棄の状況であり、整地地業に関わる可能性がある。

S X 4060 (Fig.76・付図)

147次調査区南西部で検出した。幅2.7～4.0mの溝状の遺構で、調査区外に伸びている。炭化物を含む暗茶褐色土の埋土である。

S X 4065 (Fig.76・付図)

147次調査区西南部で確認した不整形の落ち込みである。埋土は黒褐色土で羽口や鉄滓などが出土した。

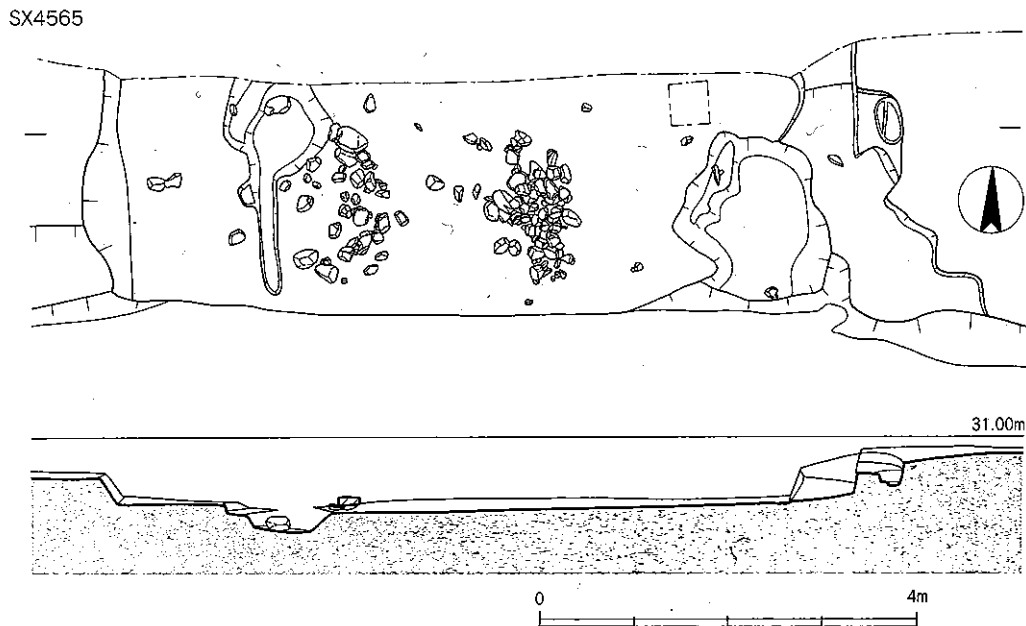


Fig.105 落ち込みS X 4565 (1/80)

S X 4066 (Fig.76・付図)

147次調査区東で検出した不整形の落ち込みである。暗褐色土や黄褐色土で埋められており、埋土中より「御坏日」銘の墨書土師器が出土した。周辺に広がる暗褐色土の整地層に一部繋がる可能性が高い。

S X 4067 (Fig.76・付図)

147次調査区東側で検出した。ちょうどS X 4066の東側にあたる不整形の浅い落ち込みである。暗褐色土と黄褐色土の埋土からなり、S X 4066と一連の整地層になるとみられる。

S X 4565 (Fig.105)

187次調査区で検出した。幅7.3～9.7m、深さ0.7mの暗灰色砂の落ち込みである。北側の129次調査区に繋がる状況はなく、この付近にのみ認められる。底面には2箇所集石があるが、人工的なものでは無かった。近世の段落ち際の崩壊部分に砂が溜まったものと考えられる。

11) ピット・その他**S X 2352** (Fig.76)

83次調査区中央付近、建物が広がらない空閑地で検出した東西方向に蛇行する溝状の遺構である。長さ10.9m、幅1.0m程度の規模である。性格は不明である。

S X 2459 (付図)

84次調査区中央南側で検出した柱穴である。下層遺構確認のために設定したトレンチで確認した。掘方は方形にやや近い、長楕円形である。掘立柱建物の柱掘方と考えられるが、東西南北どのように広がるのかは不明である。

第Ⅳ章 総 括

(1) はじめに

本報告書は、大宰府政庁周辺官衙跡の不丁地区で検出された遺構・遺物を網羅的に報告する正式報告書であるが、不丁地区は周辺官衙の中でもとりわけ建物群が密集し、土器・瓦類の出土量も膨大であり、かつ天平6・8年の紀年銘木簡や紫草に関する木簡、南島支配に関する木簡等豊富な木簡が発見され、大宰府研究を行う上で極めて重要な地区であり、遺構の性格付け及び時期決定を行うに際しては、十分な検討を要する地域である。

従って、単年度で遺構・遺物を吟味し、詳細な検討を加えた正式報告書を刊行するには時間的・体制的にも無理があることから、不丁地区官衙の報告にあたっては、遺構編・遺物編の二分冊とし、当年度で遺構編を刊行し、考察を含めた遺物編は次年度の刊行予定とした。よって、今回の報告書では遺構の時期についてはふれておらず、遺物編において改めて記すこととしたい。本章では、不丁地区における発掘調査によって得られた成果を主要な遺構ごとにまとめ、総括とする。

(2) 不丁官衙の四至

調査により判明した不丁官衙の四至は、東縁が第83・84・85・87・90・98・124次調査で検出され、延長約141mを確認した幅約6mの南北溝SD2340によって政庁前面広場とは画される。しかし、SD2340の埋没は早く、8世紀半ばには既にある程度は埋没していたとみられ、SD2340に替わる区画施設が存在が想定された。これについては、後にふれることとしたい。

次に西縁であるが、第14・76・104・110次調査で検出され、延長約156mを確認した幅約17mの南北溝SD320によって大楠官衙と不丁官衙とは画される。SD320は平安末の溝SD2010に切られており、11世紀後半代には完全に埋没したとみられ、大宰府政庁の終焉とほぼ軌を一にする。

また、昭和57年、御笠川の河川改修の際には、河床から巨大な礎石が発見され、朱雀門礎と考えられている。この近辺に府庁域と条坊域とを画する築地等の区画施設が存在が考えられ、府庁域の南端はその区画施設まで及んでいたと考えられる。ちなみに朱雀門礎出土地点から東西方向に延長した線は、第187次調査南端で検出したSB4564と重複する。また、大楠地区第88次調査で検出した四面廂建物SB2560とも重複することから、区画施設はもう少し南側に存在していた可能性が考えられよう。北縁は蔵司地区と接するため蔵司官衙南端の築地SA1410が不丁地区との境をなすものとみられる。

数値的には、東西幅がSD2340とSD320の心々距離で約87m（令大尺244尺・令小尺295尺）、溝肩部までだと76m（令大尺213尺・令小尺256尺）となる。南北長は府庁域と条坊域を画す施設の位置が定かでないため不詳であるが、蔵司官衙南端の築地SA1410から朱雀門礎出土地点を東西方向に延長した線までは約220mの距離を測るが、前述した如く南北長はもう少し長くなるであろう。

(3) 検出遺構

不丁地区においては、建物64棟、柵21列、築地基礎1基、区画溝5条、井戸15基、溝61条、土坑46基、落込、粘土採掘遺構、瓦敷遺構、鋳造遺構等を検出した。なお、建物・柵・溝等の前後関係についても出土遺物を検討した上で遺物編の中で報告したい。

1) 建物

不丁地区では64棟の建物を検出した。その中には礎石建物が1棟含まれるが³、政庁前面域官衙において確実に礎石建物といえるのはこのS B 370の1棟のみであり、建物の性格を含め検討を要しよう。掘立柱建物の内訳は、四面廂建物1棟(S B 2420)、両面廂建物1棟(S B 2355)、片廂建物7棟(S B 2390・2400・2415B・2460A・3815・4035B・4577)、総柱建物2棟(S B 2370・3832)、側柱建物47棟、小型建物(S B 386・2461・2902・4046・4047・4048)6棟である。

次に梁行の規模でみると、梁行3間の大規模建物はS B 2355(桁行7間)・2366(桁行不明)・2435(桁行8間)・2445(桁行7間以上)・2525(桁行9間以上)・2530(桁行8間以上)・2540(桁行1間以上)・2900(桁行4間以上)の8棟が存在し、日吉地区の9棟に次ぐ数であり、周辺官衙域においては際立っている点が指摘できる。

建物群の配列に関しては、今回は多くを述べることは出来ないが³、不丁官衙は東西溝及び築地基礎とみられる遺構(S X 4045)により上・中・下群に三分されている。上群が東西溝S D 2350以北の一群で、礎石建物S B 370が中央に位置し、その南に東西棟建物3棟が配列する。S B 2525・2530は桁行10間とみられ、S D 2340寄りに位置する。中群がS D 2350とS X 4045との間に存在する一群で、比較的切り合っている。四面廂建物S B 2420は両区画施設の間中に位置している。下群がS X 4045以南に存在する一群で、上記二群に比して建物規模は小さめで、切合いも割に少ない。なお、不丁官衙は、S D 2340から紫草に関する木簡が数多く出土したことにより、大宰府の所司の一つである「貢上染物所」の可能性が指摘されてきた。しかし、S D 2340の存続期間は短く、官衙の性格付けに関しては、建物群の配列、存続時期、変遷、出土遺物等を詳細に検討した上で述べることにしたい。

2) 区画施設

区画施設としては溝、柵、築地基礎とみられる遺構がある。区画溝としては、不丁官衙と政庁前面広場とを画する南北溝S D 2340、不丁官衙と大楠官衙とを画する南北溝S D 320がある。また、不丁官衙の内部は、東西溝S D 2015・2350・2470、S X 4045によって大きく三分割されており、その中に建物群が展開している。また、S D 2340は8世紀半ばまでの存続であり、その後の役割は柵が担ったものと考えられる。

不丁官衙を画する柵にはS A 2451・2452があり、S A 2451は門建物S B 2450に接続し、不丁官衙の中でも重要な役割を果たす柵とみられる。また、S A 2452と門建物としたS B 2388とは接続が判然としないものの、S A 2451に替わる柵と考えられる。注目されるのが、S A 2451・2452の東延長部にあたるS D 2340上面には、S D 2340埋没後の溝であるS D 2335と暗渠S X 2345が存在し、柵が溝を跨ぐ延長線上に暗渠S X 2345があり、柵の構造に関連する施設と考えられる。このことは、南北溝S D 2340の後に柵S A 2451・2452がその役割を担った証左となる。

3) 採土遺構

政庁前面域には、黒色粘土が広がっているが、その黒色粘土を採掘した土取り穴である。不丁地区では第83・84・87・90次調査で確認されており、採掘時期は9世紀代を上限に14世紀代を下限とする。採土目的は瓦製作用の粘土として黒色粘土を用いるために掘削を行ったと考えられるが、政庁前面広場地区の第134次調査では11世紀後半代の白磁片、同じく56次調査では12世紀前半の青磁碗片が出土しており、大宰府関連官衙としての機能が終焉した後の掘削とみられる。

4) その他の遺構

その他に注目される遺構としては、漆が付着した土器45固体が廃棄された土坑S K388があり、建物群の一面に漆製品を製作した工房の存在が推測される。

(4) おわりに

土地区画整理事業に伴う緊急調査の進展により、従来、鏡山猛が想定した方2町の県道を南限とする府庁域が県道以南にも広がっていることが明らかとなった。次に大宰府政庁中心線の南延長線上に想定される朱雀大路の実態解明が課題として上がった。土地区画整理事業地内における緊急調査では、必ずしも意図した箇所に調査区が設定できるわけではないが、朱雀大路推定箇所にあたる第58・73次調査の結果では、朱雀大路ばかりか建物さえも存在しておらず、朱雀大路自体は御笠川以南から始まるものと予測され、古代において政庁前面部は広場などの空閑地であったと考えられた。また、大宰府政庁周辺官衙跡の調査では、官衙域どおしを区切る築地・柵・南北溝等が発見され、官衙の性格・用途によって区分されていることも判明した。しかし、それらの官衙が、大宰府関連所司の何れに該当するかは未だ明らかではなく、大きな課題として横たわっている。

今回、大宰府政庁周辺官衙跡Ⅲとして不丁官衙の遺構編の報告を行ったが、とりわけ、礎石建物S B370及び四面廂建物S B2420、桁行10間規模となる側柱建物S B2525・2530の意義、三群に分けられたそれぞれの建物群の変遷・機能、また先に報告した日吉官衙との相違点などについては遺物編の中で改めて考察したいと考えているが、もちろん不丁官衙のみの検討では不十分であり、大宰府政庁及び他の周辺官衙、条坊遺構等を含めたところでの総合的な検討が必要であることは言うまでもない。しかし、今はまだその段階にはなく、官衙地区ごとの報告・検討が中心となるが、その点に関しては周辺官衙跡の最終本報告時点で総括的に考察を行う予定であることを記しておきたい。

最後に、大宰府政庁周辺官衙跡の正式報告書の刊行は、ようやく軌道に乗り始めたが、周辺官衙跡全ての本報告となると向こう7年程の年数を要する。現在は住宅地となっている政庁跡前面域の地下には、長らく保存されてきた大宰府関連の重要な遺構が存在しているという事実を、正式報告書の刊行及び九州歴史資料館での資料展示、九歴講座、現地説明会、ホームページ等による情報発信を広く行い、地権者及び地域住民に周知し、遺構が将来にわたり保存されていくよう理解・協力を求めていく必要がある。そのためにも正式報告書の刊行を着実に進めることが我々に課せられた大きな責務と言えよう。

Administrative structures surrounding Kyushu's government headquarters
In the *Dazaifu*(大宰府)complex III
— the *Fuchyou* (不丁) area —

Contents

Chapter I Preface

- (1) A special historic site, the Dazaifu complex
- (2) Excavation progress
- (3) Excavation organisation

Chapter II Excavation outline

- (1) Excavation outline
- (2) Stratigraphy

Chapter III Features discovered

- (1) Post-built structures
- (2) Palisades
- (3) Ditches and gullies
- (4) Wells
- (5) Pits
- (6) Other features

Chapter IV Summary

- (1) Introduction
- (2) the Fuchyou area
- (3) Features discovered
- (4) Conclusion

Summary

This volume is the official excavation report of the government office in the Fuchyou (不丁) area in the west front of the main government office of Dazaifu (大宰府). This includes 16 trenches excavated by the Kyushu Historical Museum which has undertaken work since 1971, and mainly deals with features discovered.

The excavations unveiled various features, such as buildings, palisades, division ditches, foundations for tamped-earth walls with roofs, wells, pits, casting-related structural remains. The excavations also allowed us to identify the east-west length (about 84 m) of the government office by two ditches running north-south. There were densely post-built structures in the front area where one single building constructed on base stones was revealed. In terms of finds, vast amounts of ceramics and roof tiles were recovered from the site, and ditches produced a large number of wooden writing tablets. Some of the tablets represented dates like Tenpyou 6, 8 (A.D. 734, 738) and the information on lithospermum erythrorhizon and the government's rule on the southern Japanese islands.

It seems that there were important facilities notably in the Fuchyou area, compared with the other Dazaifu's government offices. The office in the Fuchyou area was probably used mainly from the 8th to the 9th century and until about the 11th century. The volume of finds explains the detail of sizes, structures and developments of various facilities, including a group of buildings.

P L A T E S



大宰府政庁と不丁地区官衙（昭和40年頃）



(1) 政庁周辺官衙跡 不丁地区遠景
(昭和40年頃 北から)



(2) 政庁周辺官衙跡 不丁地区官衙跡遠景
(昭和40年頃 西から)



(1) 政庁周辺官衙跡
不丁地区調査遠景
(84次 南から)



(2) 政庁周辺官衙跡
不丁地区調査遠景
(147次 西から)



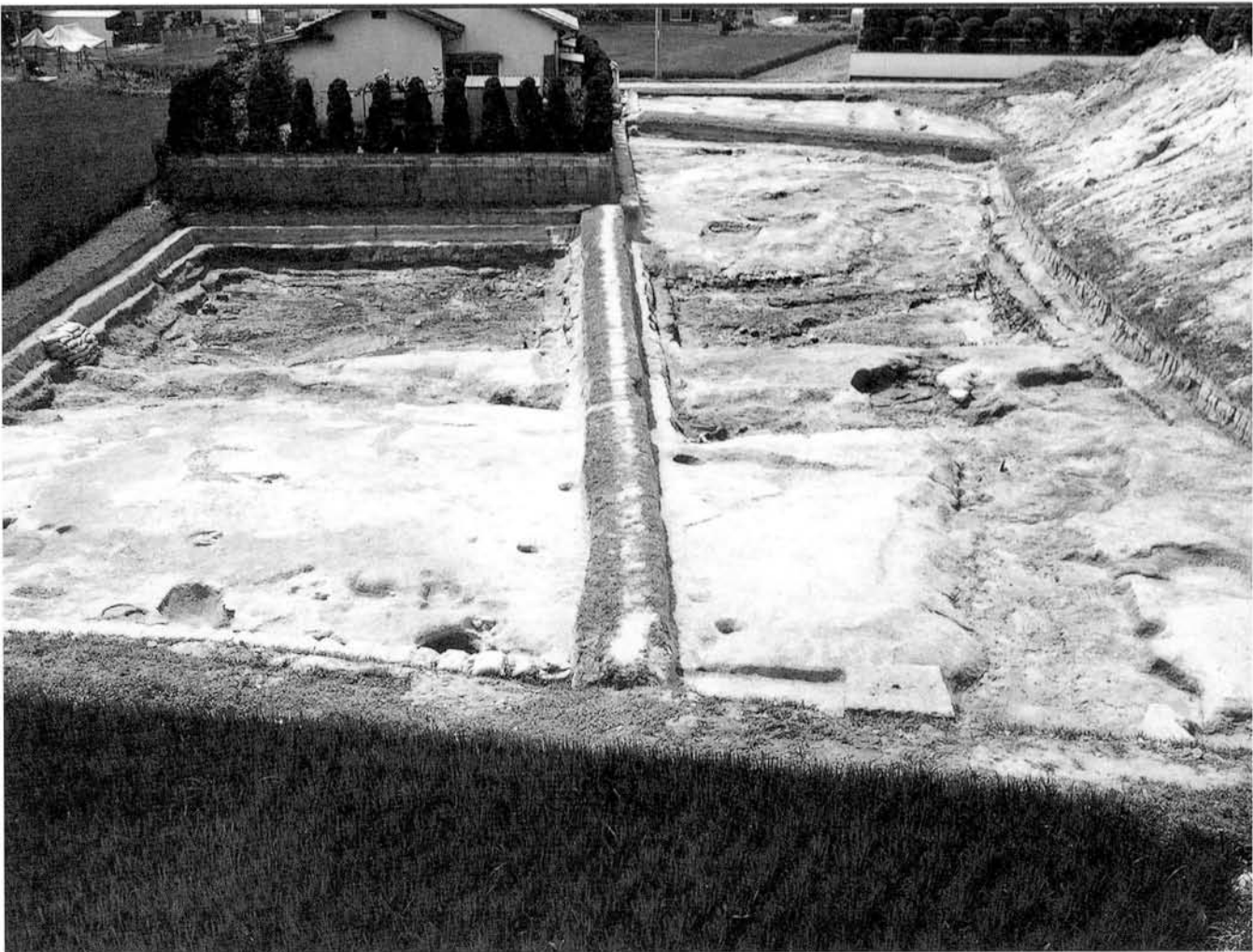
(1) 14次調査区全景 (東から)



(2) 14次補足調査区全景 (東から)



(1) 17次調査区全景 (東から)



(2) 76次調査区全景 (東から)



(1) 83次調査区全景 (西から)



(2) 84次調査区全景 (東から)



(1) 85次調査区全景 (南から)



(2) 87次調査区全景 (東から)



(1) 90次調査区全景 (南から)



(2) 98次調査区全景 (東から)



(1) 104次調査区全景 (東から)



(2) 110次調査区全景 (東から)



(1) 124次調査区全景 (東から)



(2) 129次調査区全景 (西から)



(1) 147次調査区全景 (北から)



(2) 147-2次調査区全景 (東から)



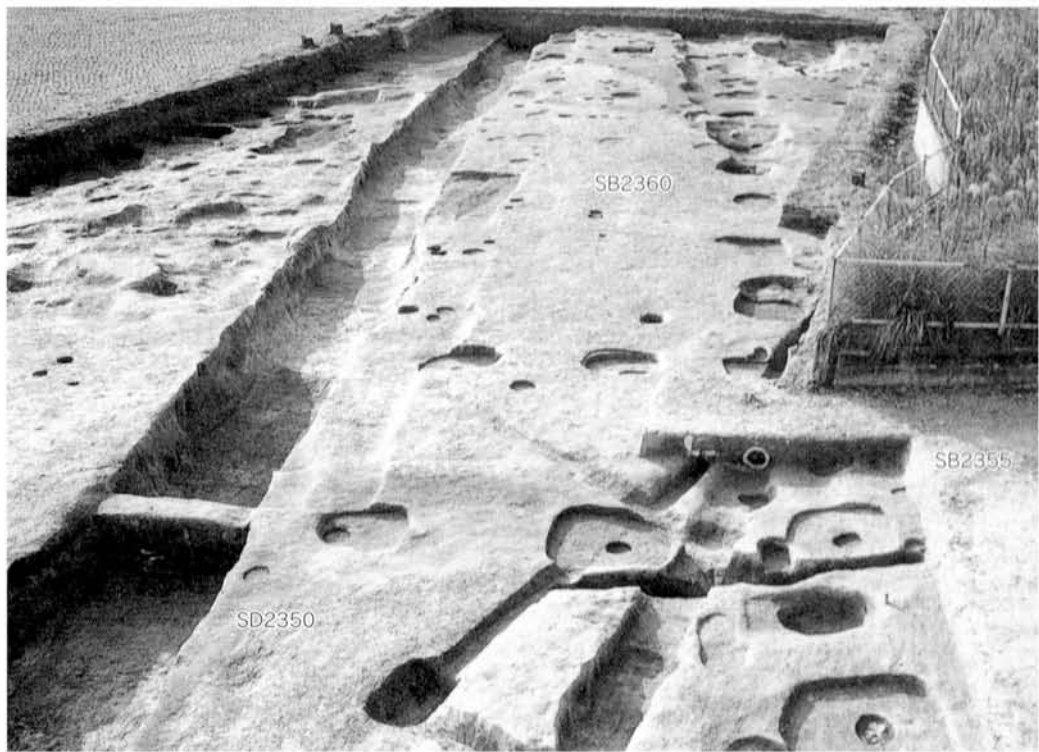
(1) 187次調査区全景 (西から)



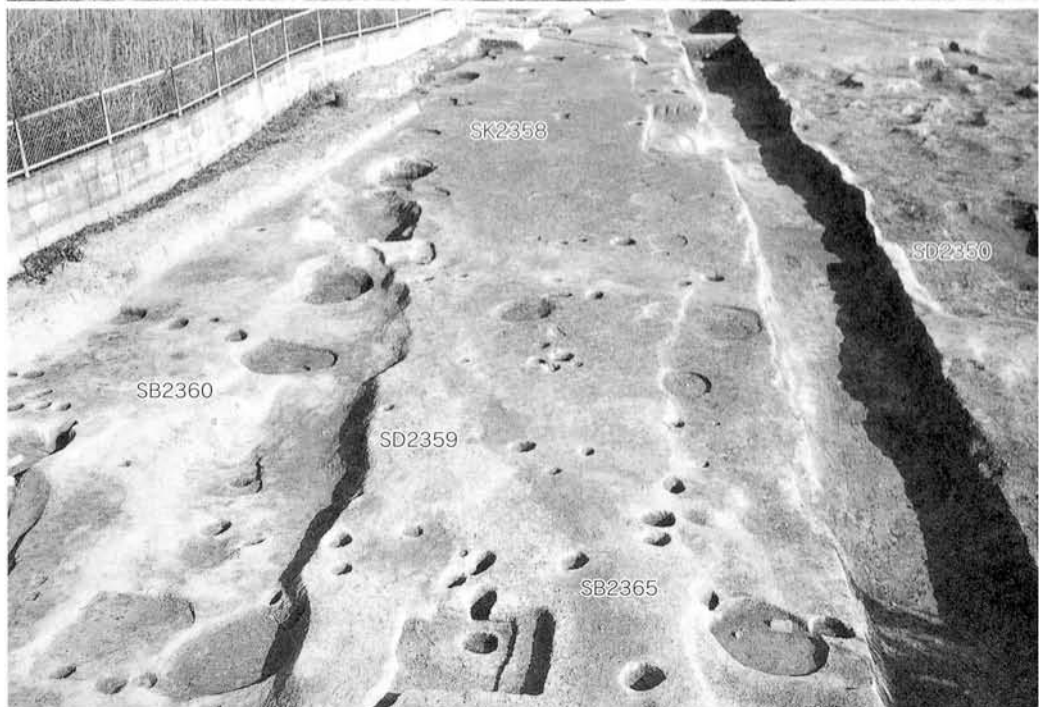
(2) 192次調査区全景 (東から)



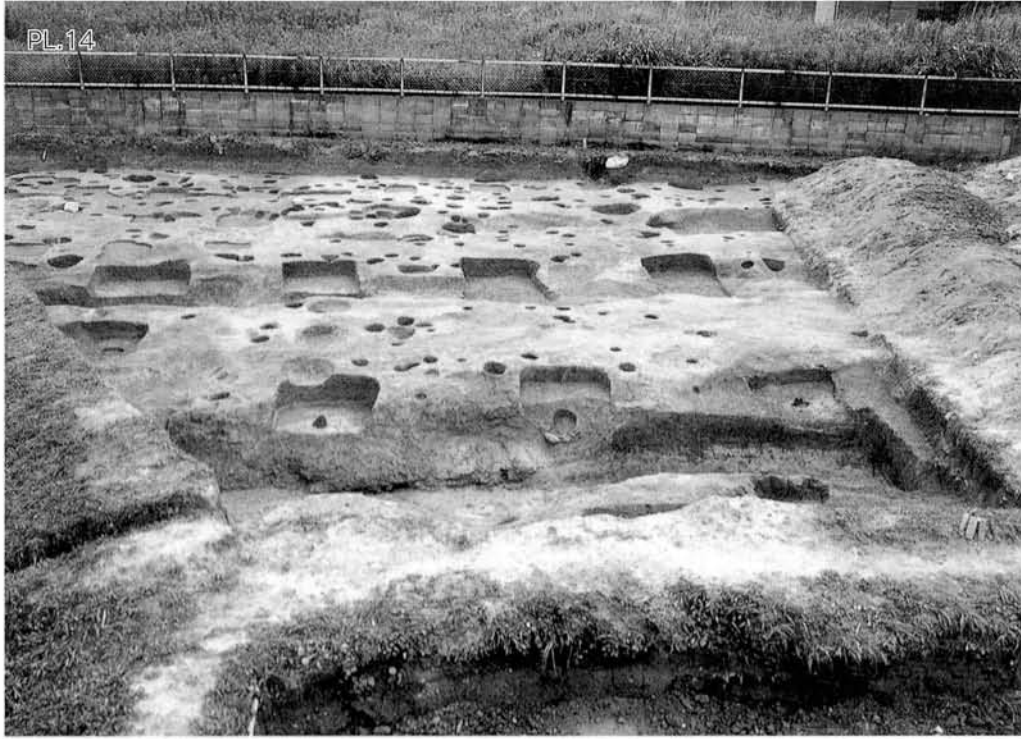
(1) 礎石建物S B370 (北から)



(2) 掘立柱建物S B2355,
溝S D2350 (東から)



(3) 掘立柱建物S B2360・2365,
溝S D2350・2359 (西から)



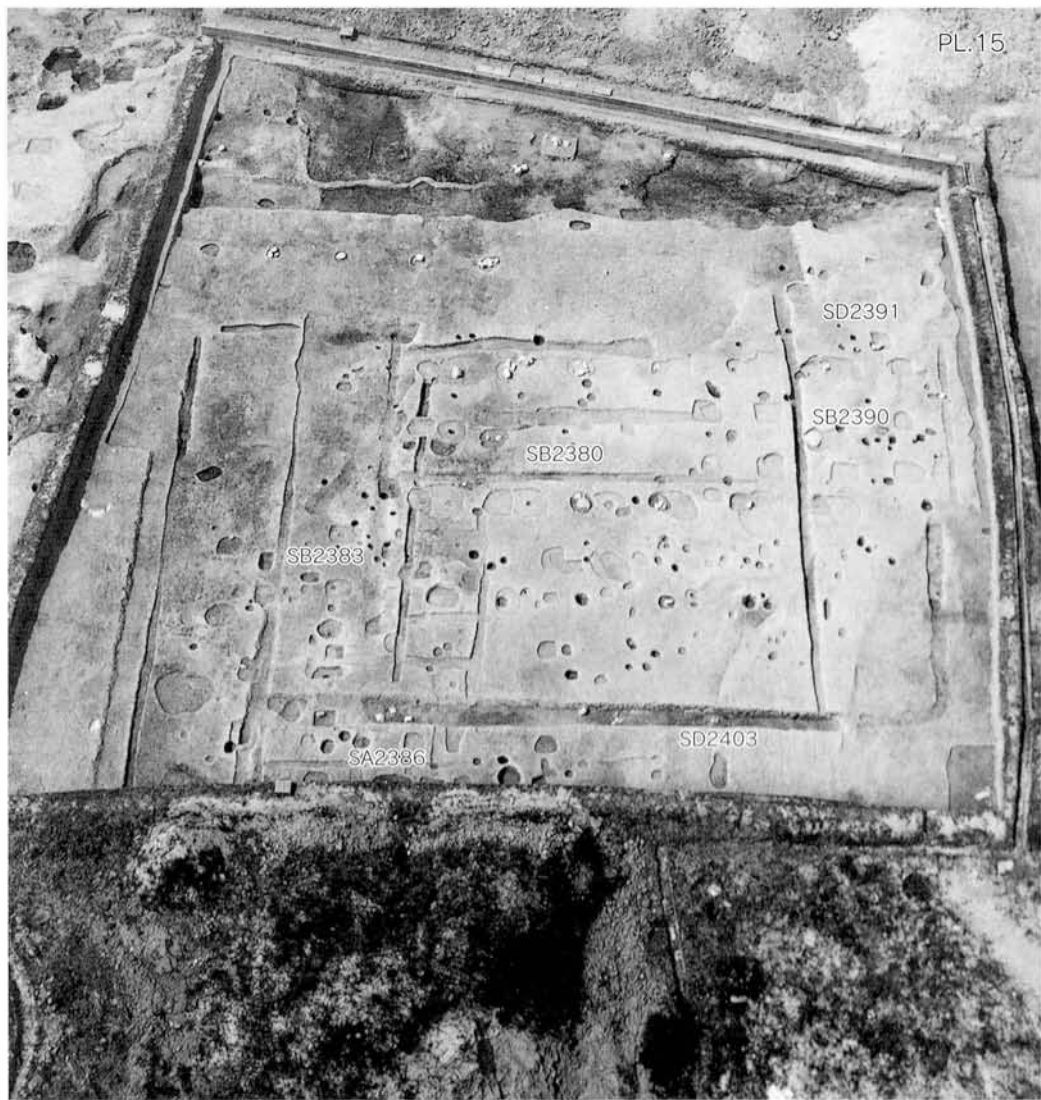
(1) 掘立柱建物 S B2365 (南から)



(2) 掘立柱建物 S B2365 (東から)



(3) 掘立柱建物 S B2370 (東から)



(1) 掘立柱建物 S B2380・2390,
 柵 S A2386, 溝 S D2391・
 2403 (南から)



(2) 掘立柱建物 S B2395・2400・
 2405・2410・2415・2420他,
 溝 S D2419 (南から)



(1) 掘立柱建物 S B 2380,
溝 S D 2398・2399・2401
(西から)



(2) 掘立柱建物 S B 2390 (南から)



(3) 掘立柱建物 S B 2395・2400他
(東から)



(1) 掘立柱建物S B2400(北から)



(2) 掘立柱建物S B2405・2401
(東から)



(3) 掘立柱建物S B2410・2420・
2425(北から)



(1) 掘立柱建物 S B2415 (東から)



(2) 掘立柱建物 S B2430 (北から)



(3) 掘立柱建物 S B2460・2486 (南から)



(1) 掘立柱建物 S B2460・2486,
落ち込み S X2477 (東から)



(2) 掘立柱建物 S B2515・2520,
柵 S A2522 (西から)



(3) 掘立柱建物 S B2520 (東から)



(1) 掘立柱建物 S B2525 · 2530 南半
(北から)



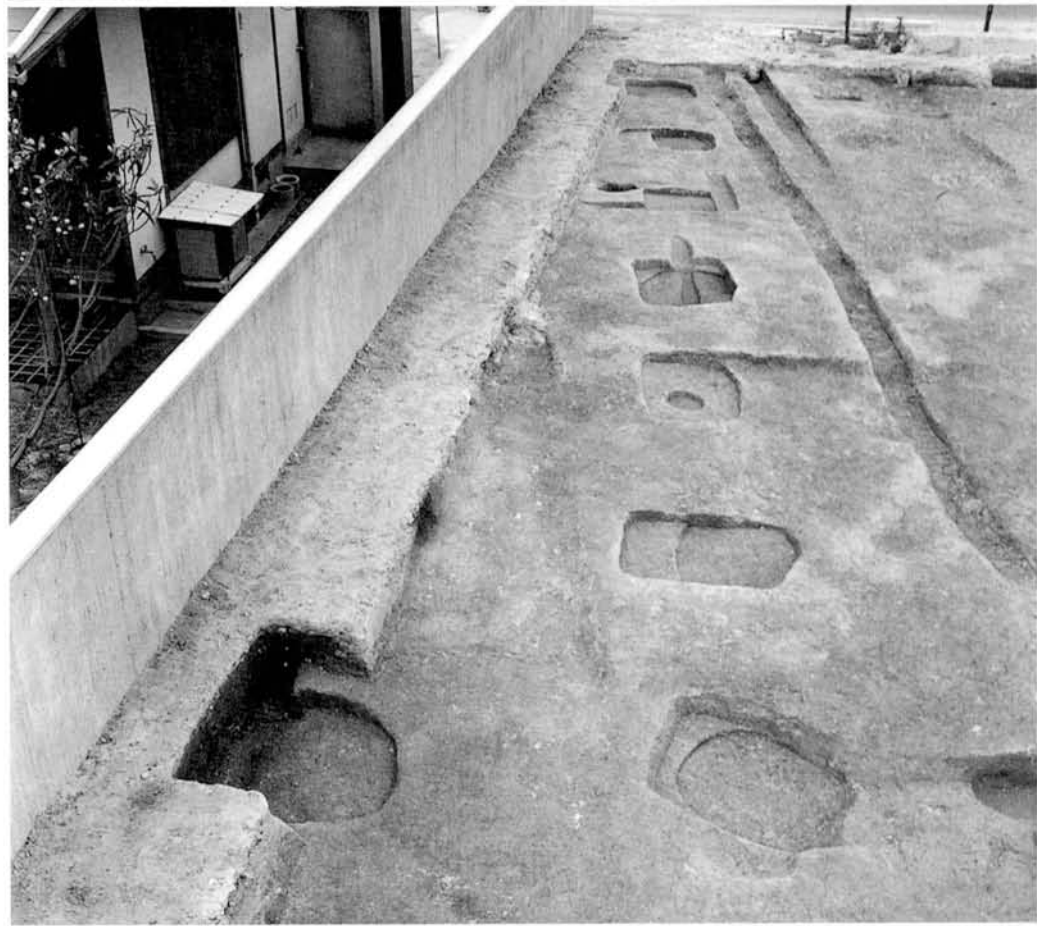
(2) 掘立柱建物 S B2525 · 2530 南半
(東から)



(3) 掘立柱建物 S 2525 · 2530
(東から)



(1) 掘立柱建物2525・2530
(東から)



(2) 掘立柱建物S B2535 (南から)



(3) 掘立柱建物S B2540 (南から)



(1) 掘立柱建物 S B 2885 (南から)



(2) 掘立柱建物 S B 2900,
流路 S X 2480 (南から)



(3) 掘立柱建物 S B 3815 (北から)

(1) 掘立柱建物 S B 3815・3820
(北から)



(2) 掘立柱建物 S B 3820 (西から)



(3) 掘立柱建物 S B 3832・2005
(南から)





(1) 掘立柱建物 S B4030・2435
(北から)



(2) 掘立柱建物 S B4030・4070
(西から)



(3) 掘立柱建物 S B4030・2435,
柵 S A4036 (西から)



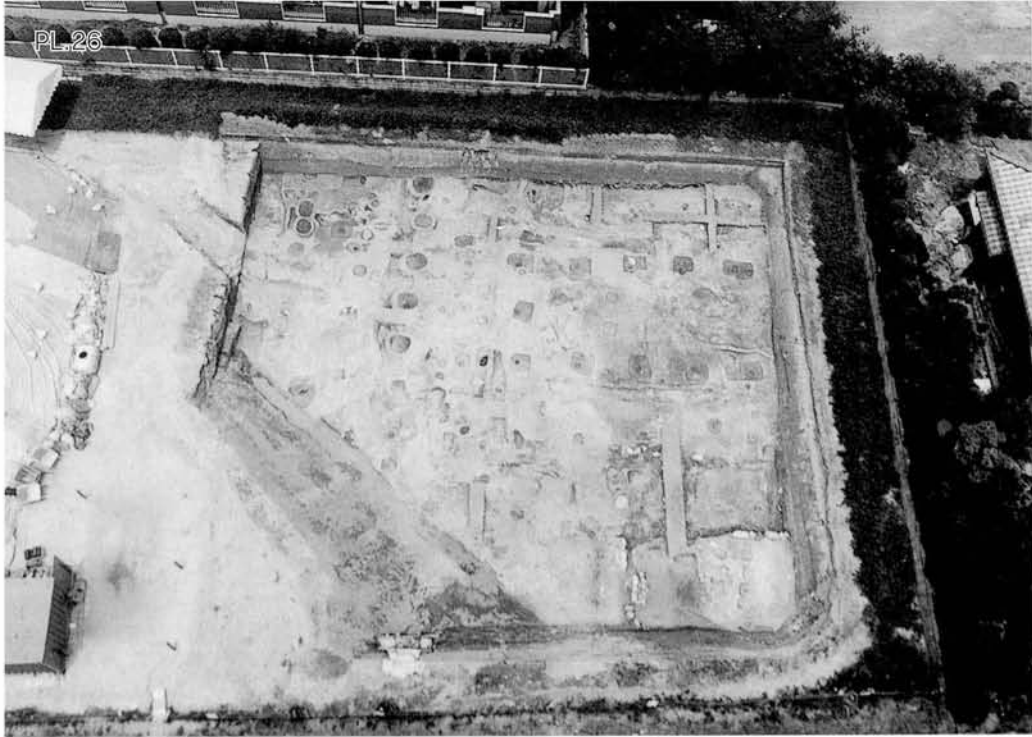
(1) 掘立柱建物S B4035 (西から)



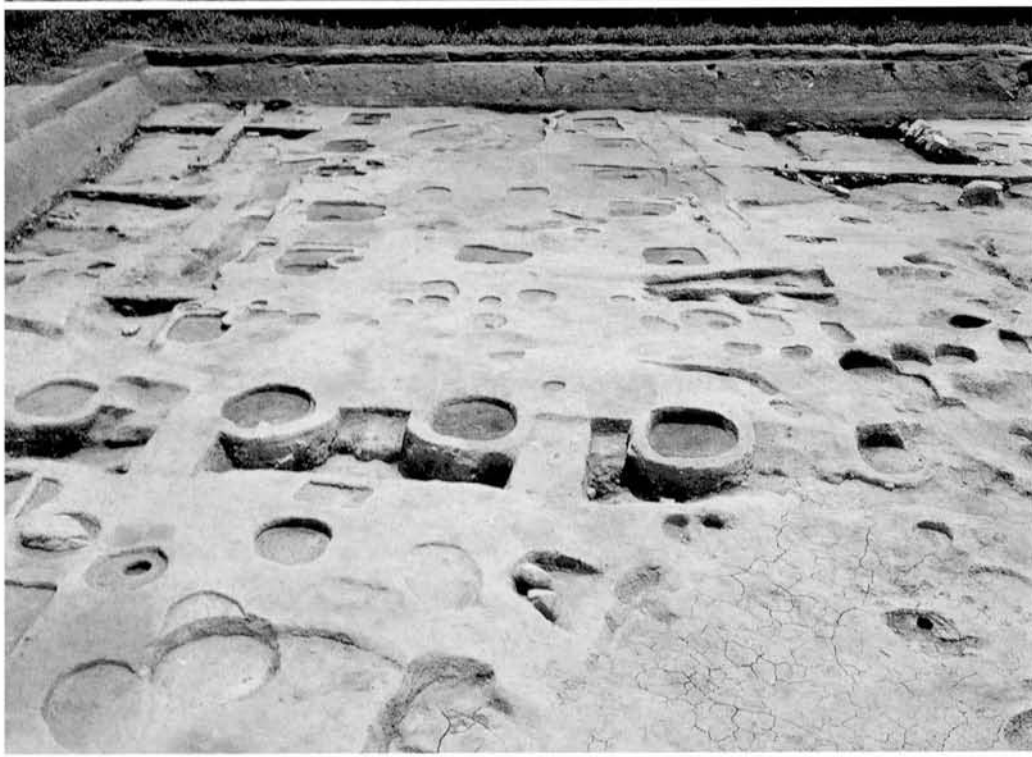
(2) 掘立柱建物S B4040 (東から)



(3) 掘立柱建物S B4035・4048
(西から)



(1) 掘立柱建物 S B4560～
4564, 溝 S D4570～
4572 (南から)



(2) 掘立柱建物 S B4560・4563
(西から)



(3) 掘立柱建物 S B4563 (南から)



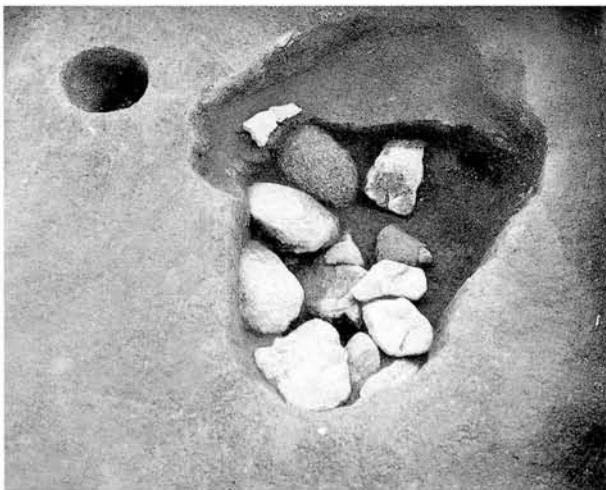
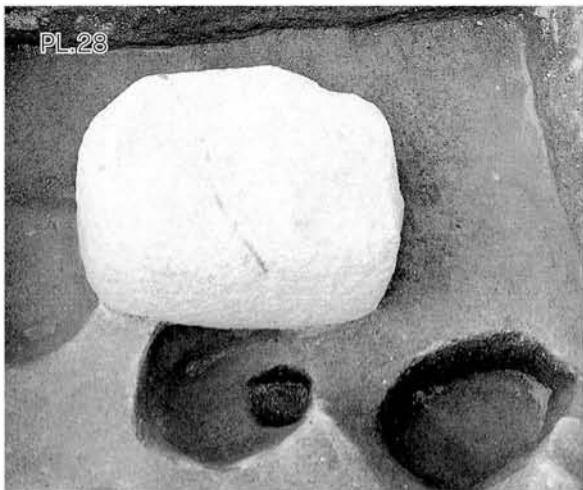
(1) 柵 S A2382 (東から)



(2) 柵 S A2408 (南から)



(3) 柵 S A2429 (北から)



(1) 礎石建物 S B370
礎石・根石



(2) 掘立柱建物
S B2005柱掘方



(3) 掘立柱建物
S B2355柱掘方(左)
2370柱掘方(右)



(4) 掘立柱建物
S B2365柱掘方

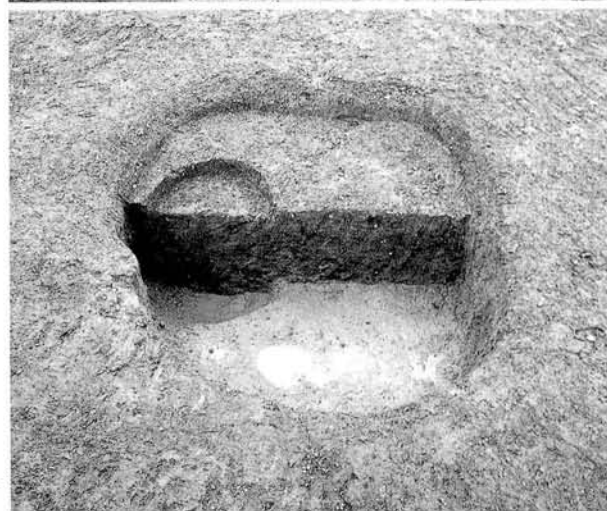
(1) 掘立柱建物
S B2380柱掘方



(2) 掘立柱建物
S B2460柱掘方

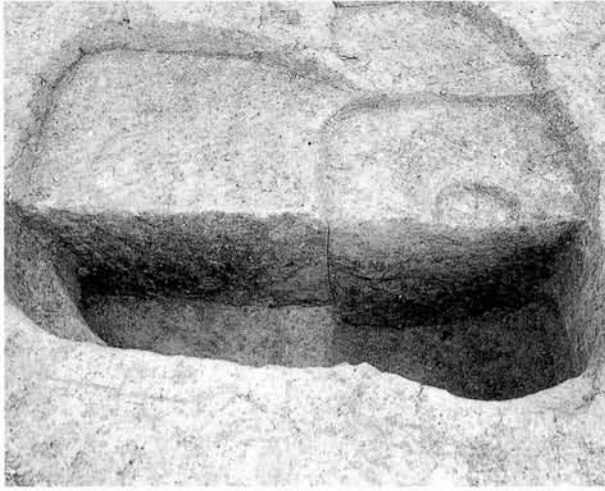


(3) 掘立柱建物
S B2415柱掘方



(4) 掘立柱建物
S B2415柱掘方

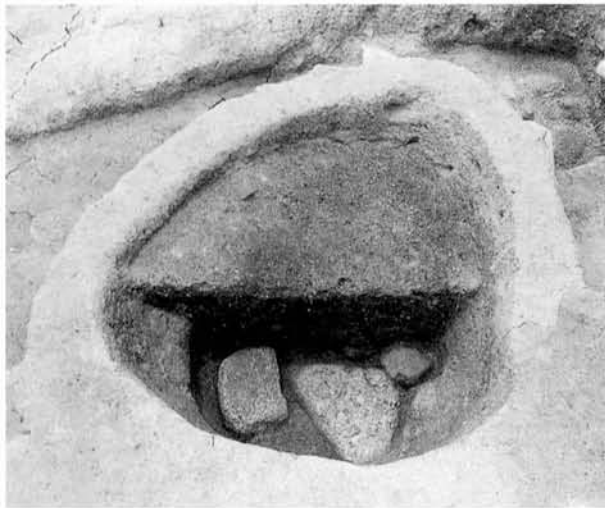




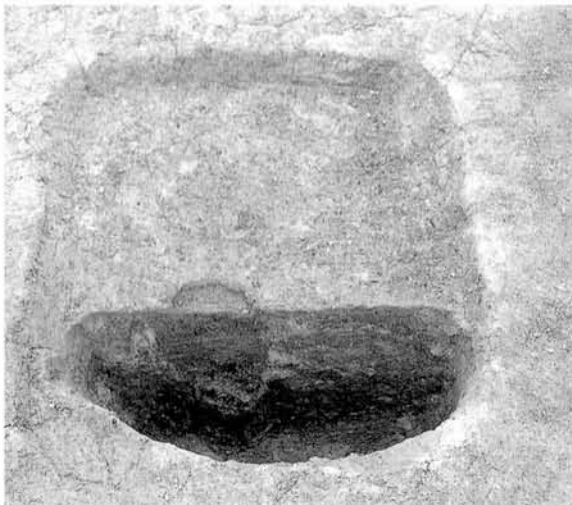
(1) 掘立柱建物
S B 2420柱掘方(左)
2425柱掘方(右)



(2) 掘立柱建物
S B 2900柱掘方

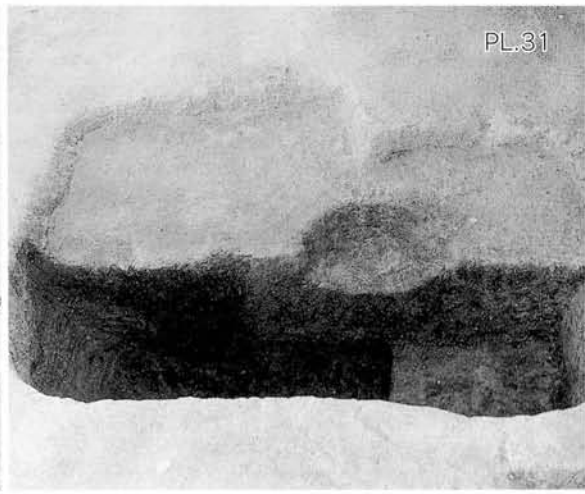
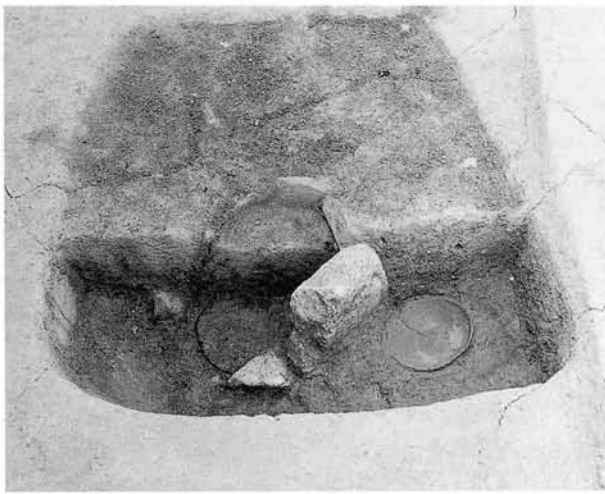


(3) 掘立柱建物
S B 3815柱掘方



(4) 掘立柱建物
S B 4030柱掘方

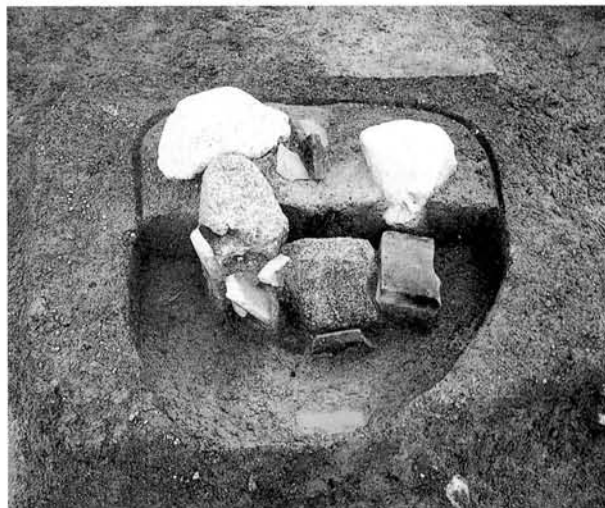
(1) 掘立柱建物 S B
4560柱掘方(左)・
4562柱掘方(右)



(2) 掘立柱建物 S B
4561柱掘方(左)・
4563柱掘方(右)



(3) 柵 S A 2382
柱掘方



(4) 柵 S A 2985柱掘
方(左)・4036柱
掘方(右)

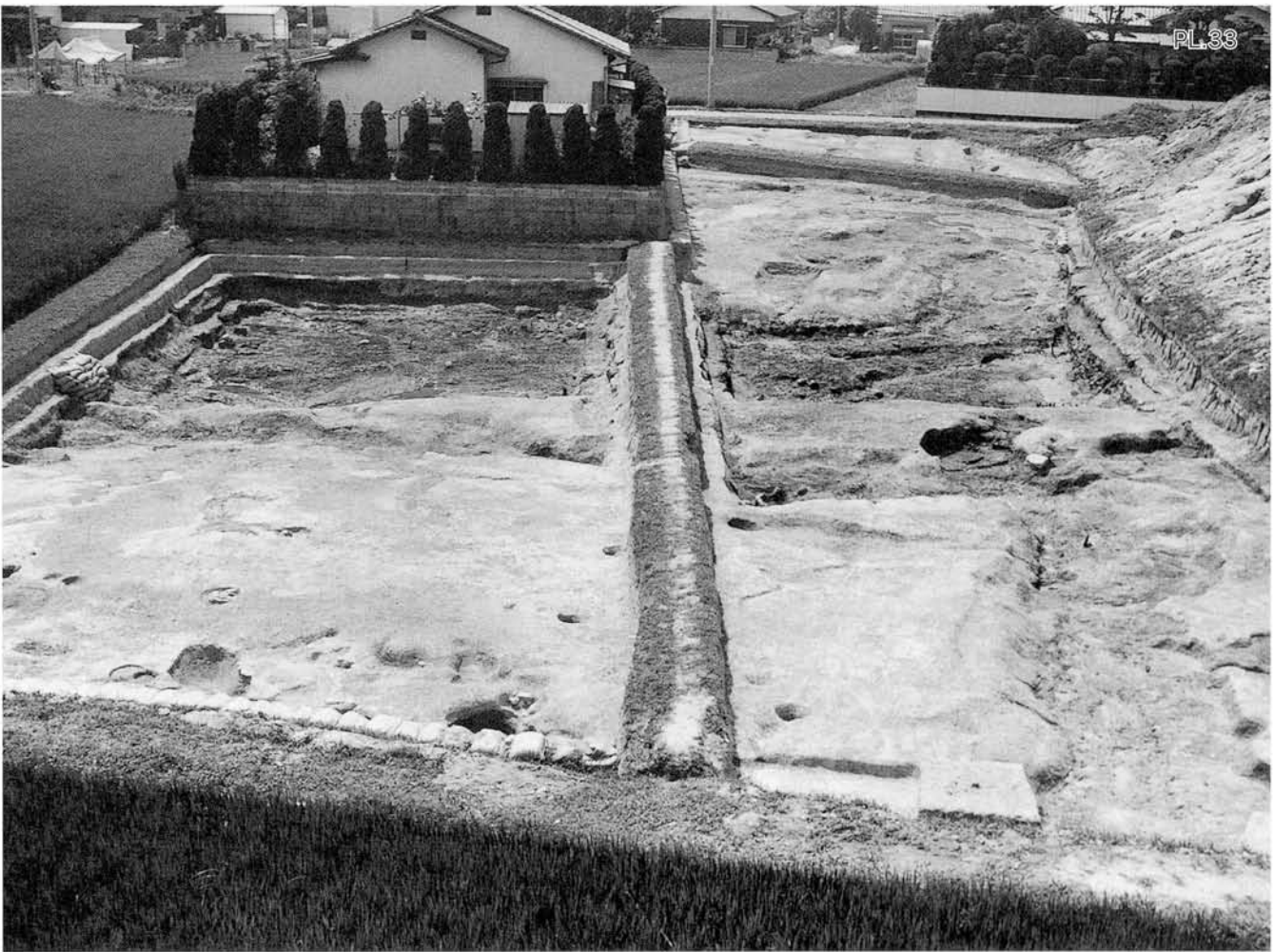




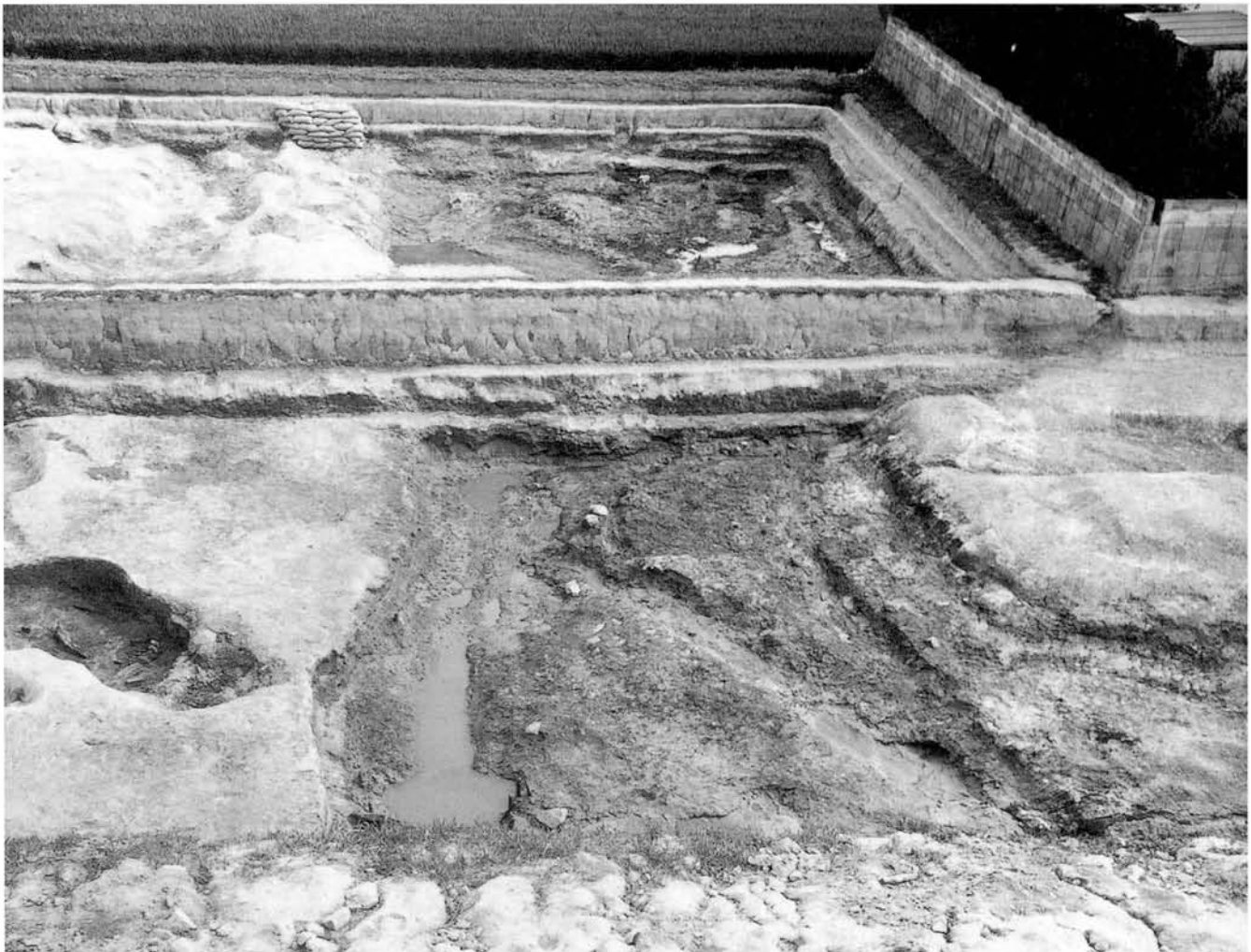
(1) 溝SD320 (14次 南から)



(2) 溝SD320土層 (14次 北から)



(1) 溝SD320・2010・2015 (76次 東から)



(2) 溝SD320・2010 (76次 北から)



(1) 溝S D2340 (90次 南から)



(2) 溝S D2340 (98次 北から)



(1) 溝S D2340 (90次 東から)



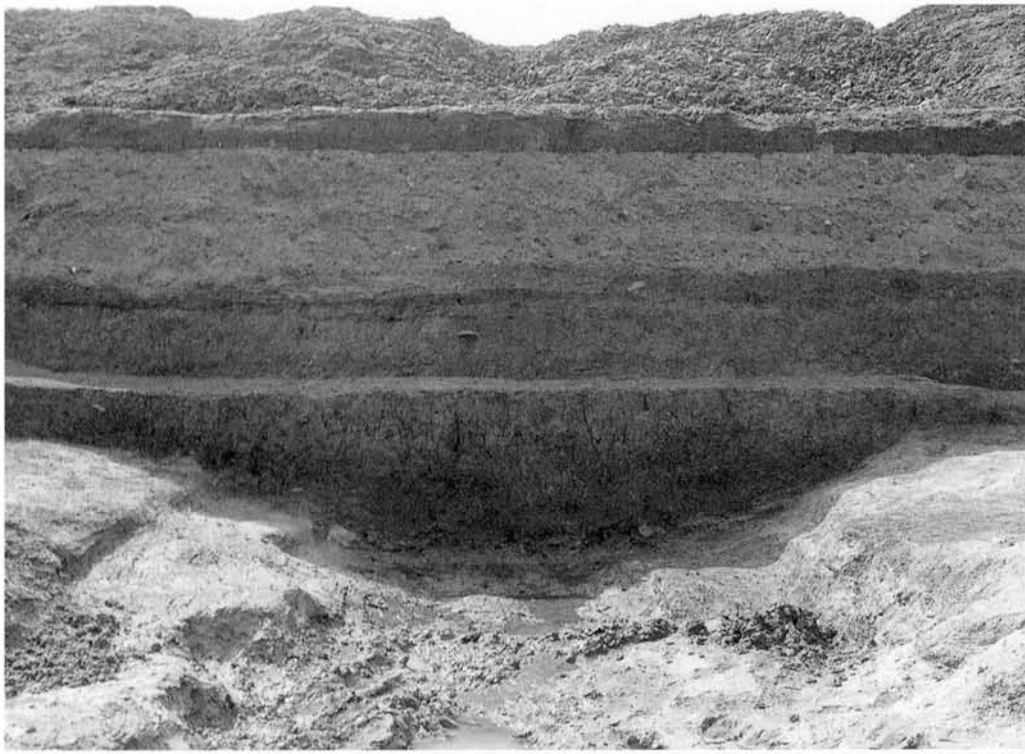
(2) 溝S D2340 (85次 南から)



(3) 溝S D2340・2485 (南から)



(1) 溝 S D2340土層
(90次 南から)



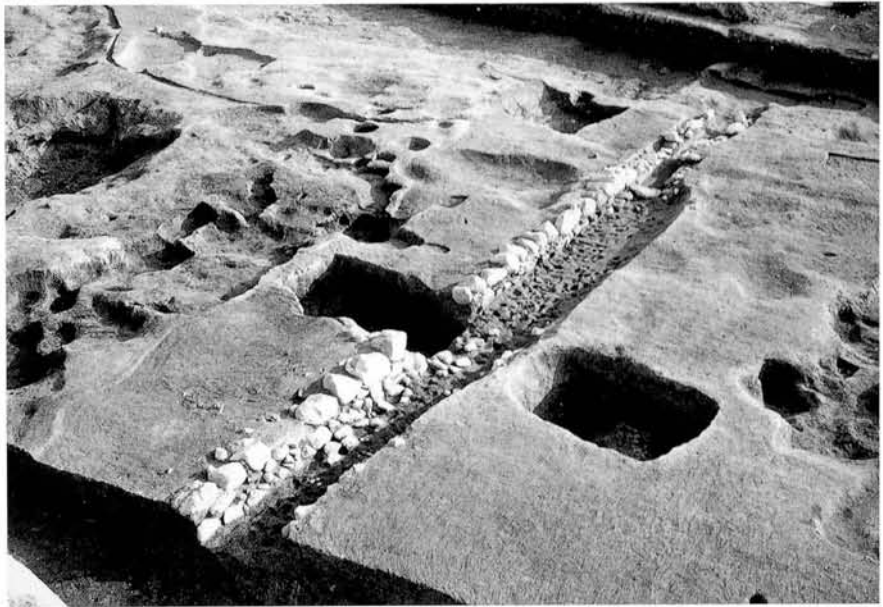
(2) 溝 S D2340土層
(98次 北から)



(3) 溝 S D2340木簡出土状況
(85次)



(1) 石組溝 S D2335 (83次 南から)



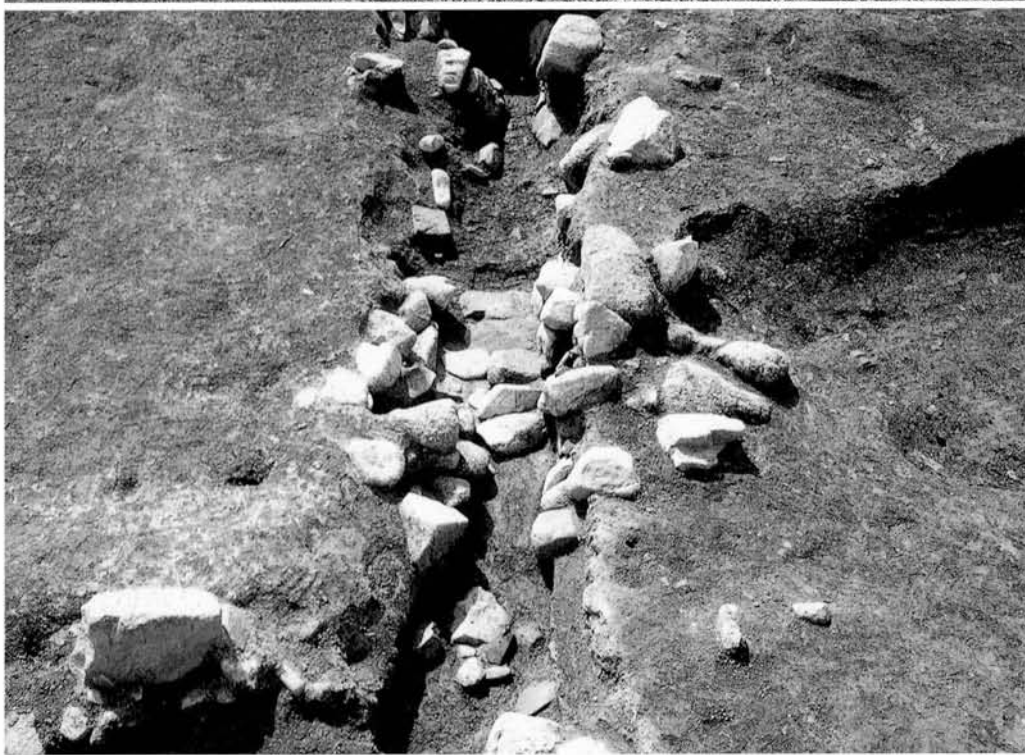
(2) 石組溝 S D2335 (83次 北から)



(3) S D2335石組状況 (西から)



(1) 石組溝 S D 2335
(87次 南から)



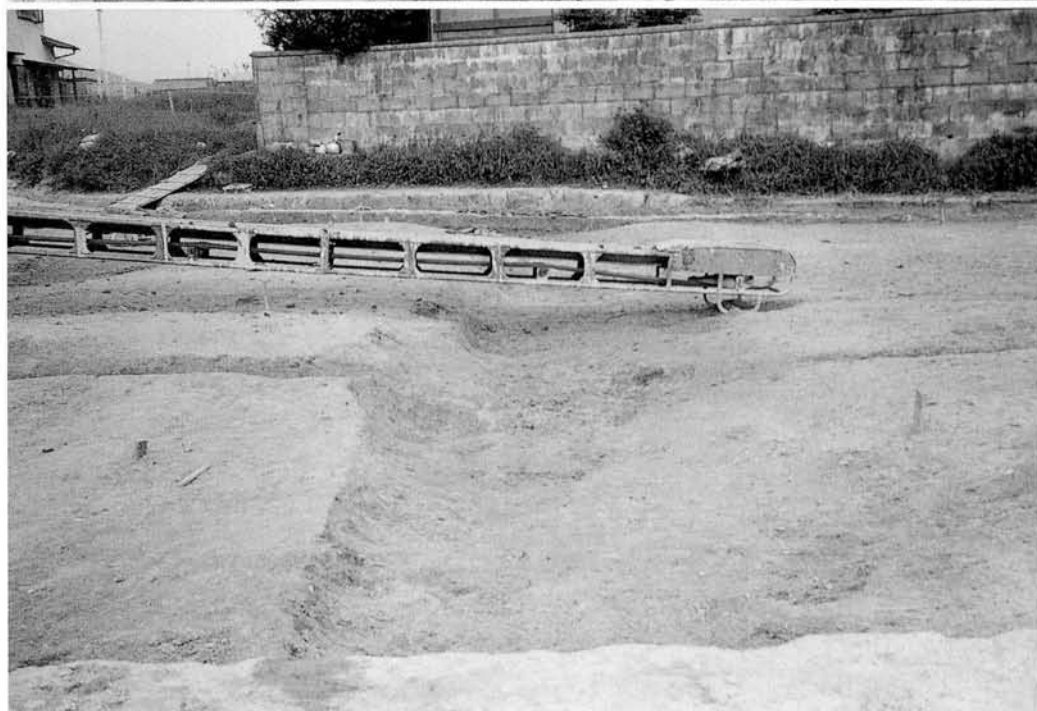
(2) S D 2335石組状況
(87次 北から)



(3) S D 2335石組状況
(87次 南から)



(1) 溝SD2015 (76次 西から)



(2) 溝SD2470 (85次 西から)



(3) 溝SD2015・2470
(85次 西から)



(1) 溝S D4570～4572(南から)



(2) 溝S D4571・4572(東から)



(3) 溝S D4570土層(西から)



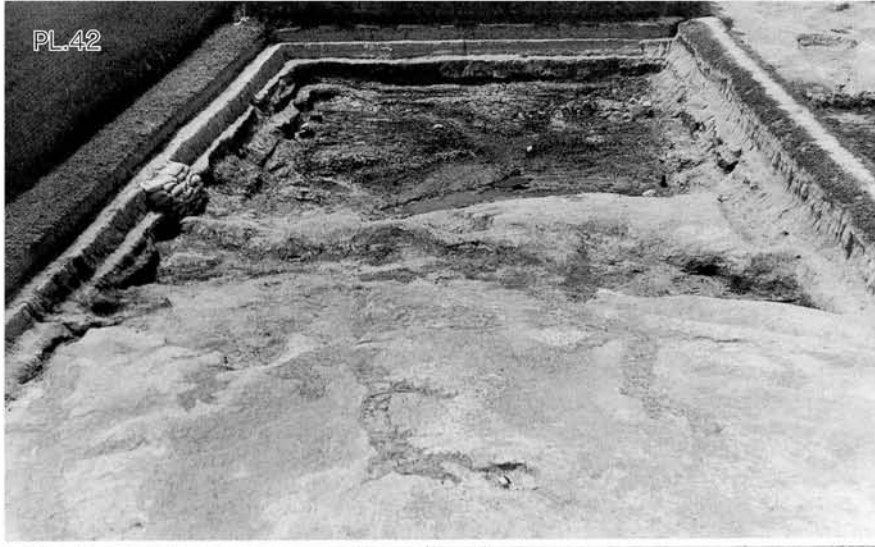
(1) 溝 S D2350 (東から)



(2) 溝 S D2350土層 1 (西から)



(3) 溝 S D2350土層 2 (西から)



(1) 溝SD2010・320 (東から)



(2) 溝SD2010土層 (南から)



(3) 溝SD3825 (北から)



(1) 溝 S D4037 (西から)



(2) 溝 S D4566 (南から)



(3) 溝 S D4569 (北から)



(1) 井戸 S E 2346 (83次)



(2) 井戸 S E 2357 (83次)



(3) 井戸 S E 2414 (84次)



(1) 井戸SE2434 (84次)



(2) 井戸SE2436 (84次)



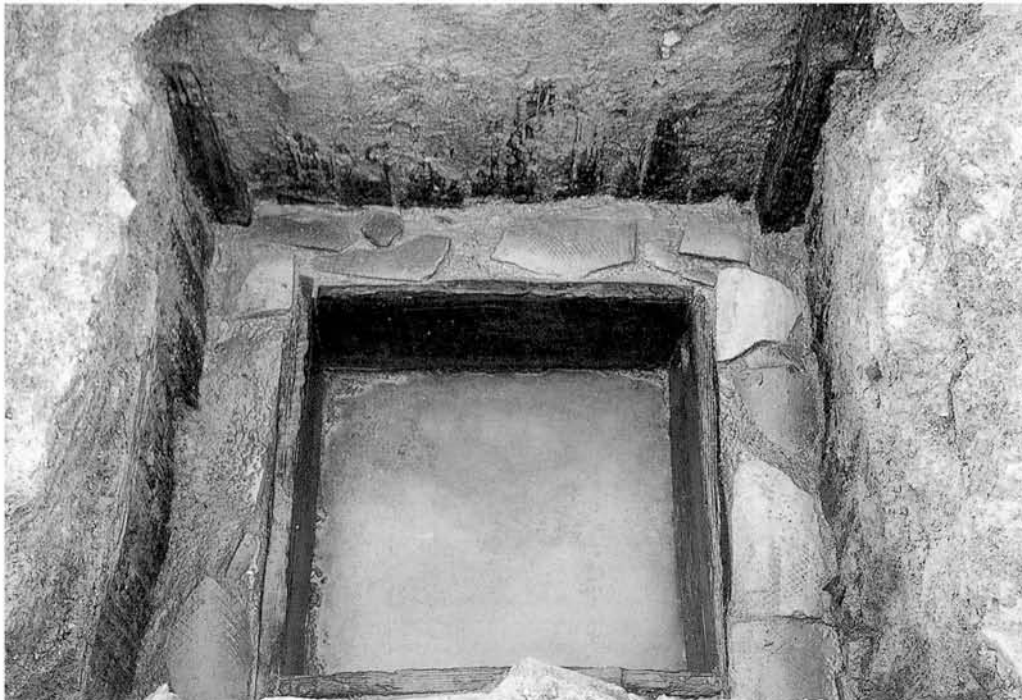
(3) 井戸SE2502 (14次補足)



(1) 井戸SE2503 (14次補足)



(2) 井戸SE2504 (14次補足)



(3) 井戸SE2510 (87次)



(1) 井戸SE2890 (98次)



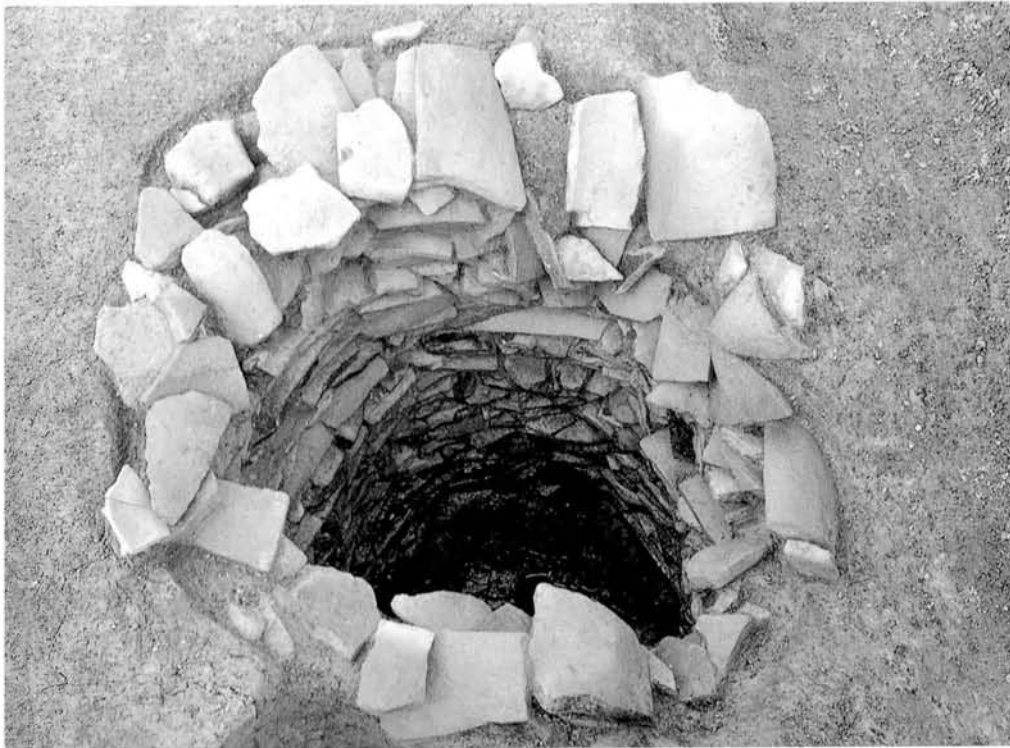
(2) 井戸SE4031 (147次)



(3) 井戸SE4031・4032 (147次)



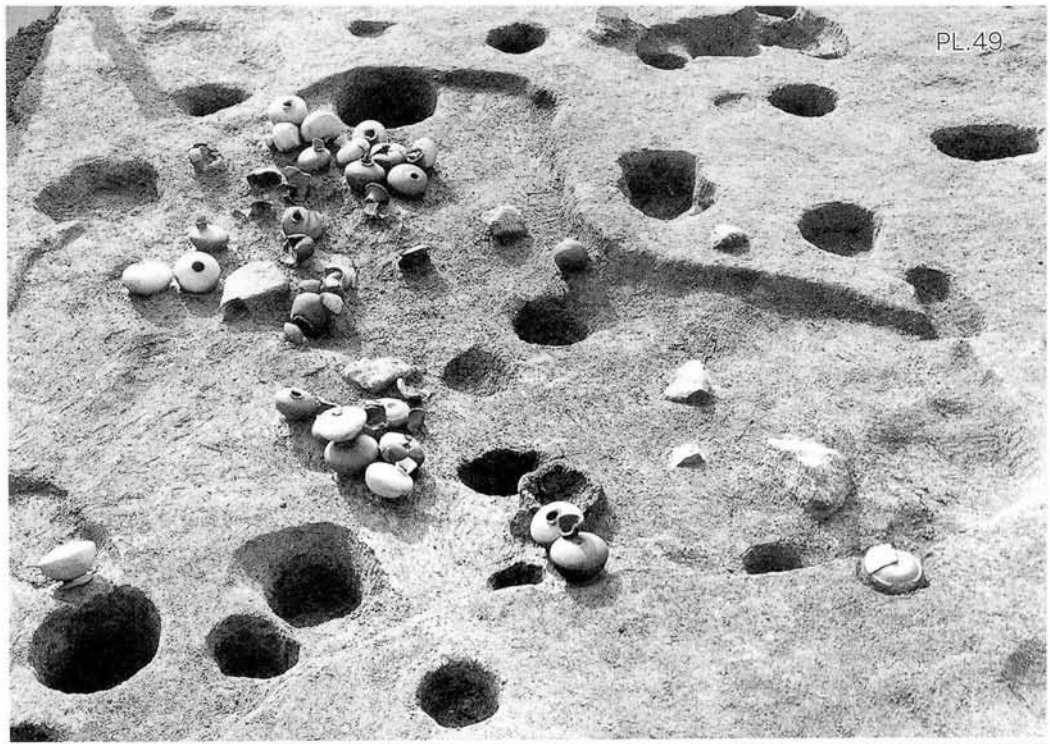
(1) 井戸SE4033 (147次)



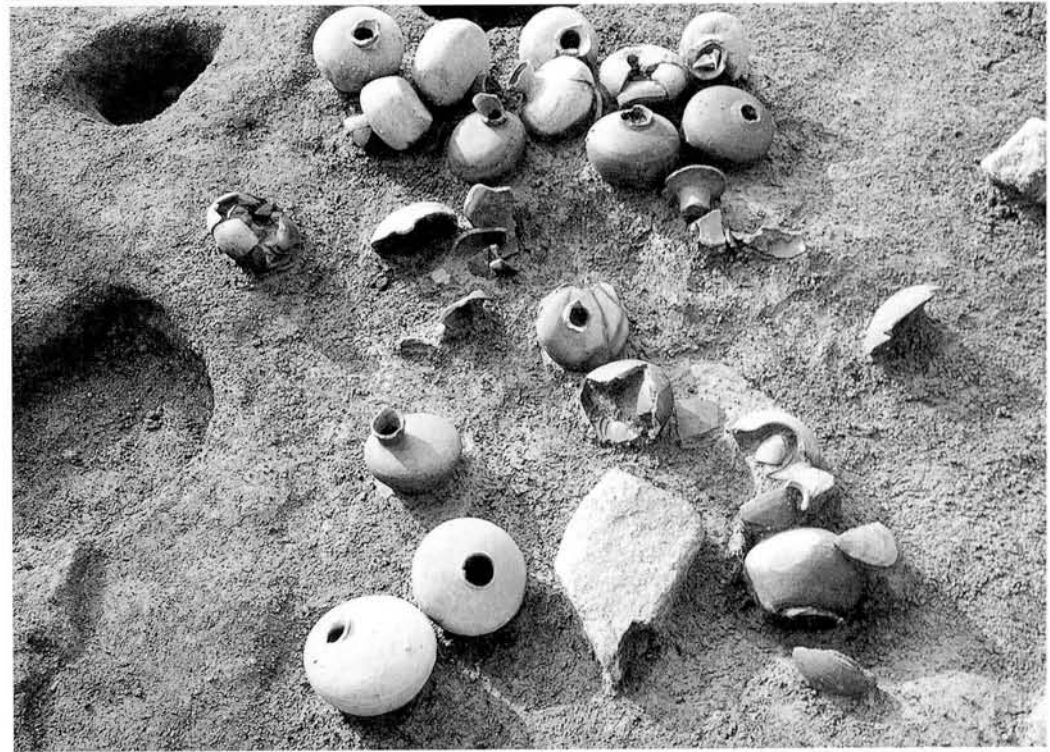
(2) 井戸SE4051 (147次)



(3) 井戸SE4052 (147次)



(1) 土坑S K 388 (17次)



(2) S K 388土器出土状況



(3) 土坑S K 4573 (187次)



(1) 礎敷遺構 S X4045
(南から)



(2) 礎敷遺構 S X4045
(南から)



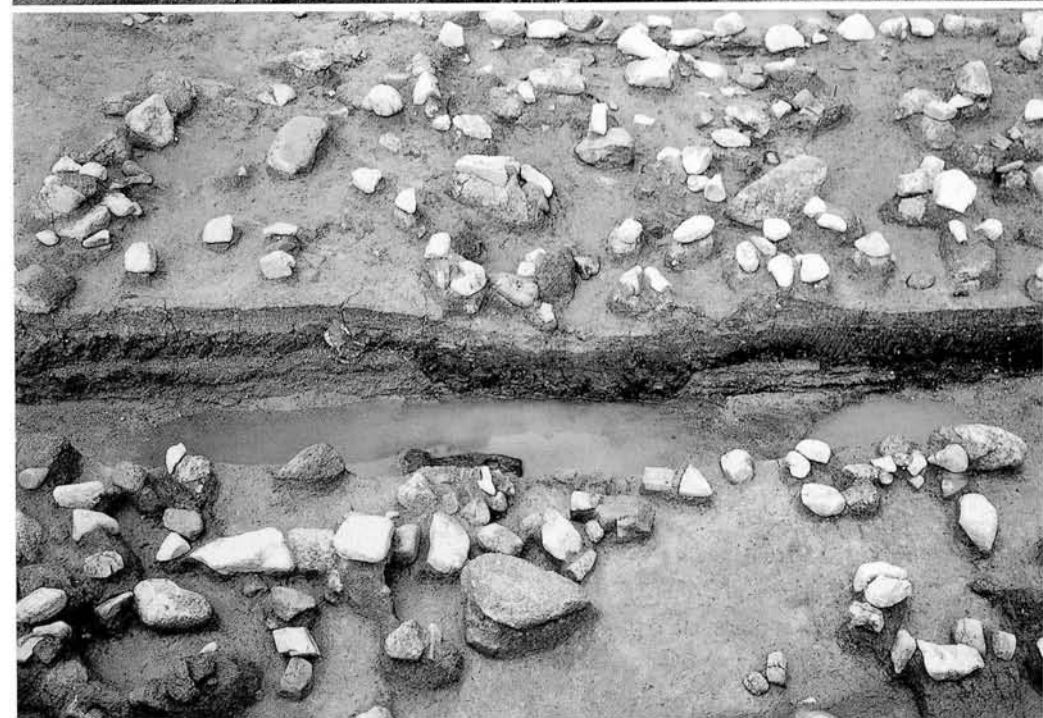
(3) 礎敷遺構 S X4045
(東から)



(1) 磔敷遺構 S X 4045
(東から)



(2) S X 4045 磔面 (南から)



(3) S X 4045 断割り状況
(東から)



(1) 暗渠 S X2485 (北から)



(2) 暗渠 S X2485 (南から)



(3) 暗渠 S X2485 (東から)



(1) 暗渠 S X4055 (西から)



(2) S X4055排水口
(西から)



(3) S X4055木樋埋設状況
(西から)



(1) 護岸遺構 S X 328
(17次 東から)

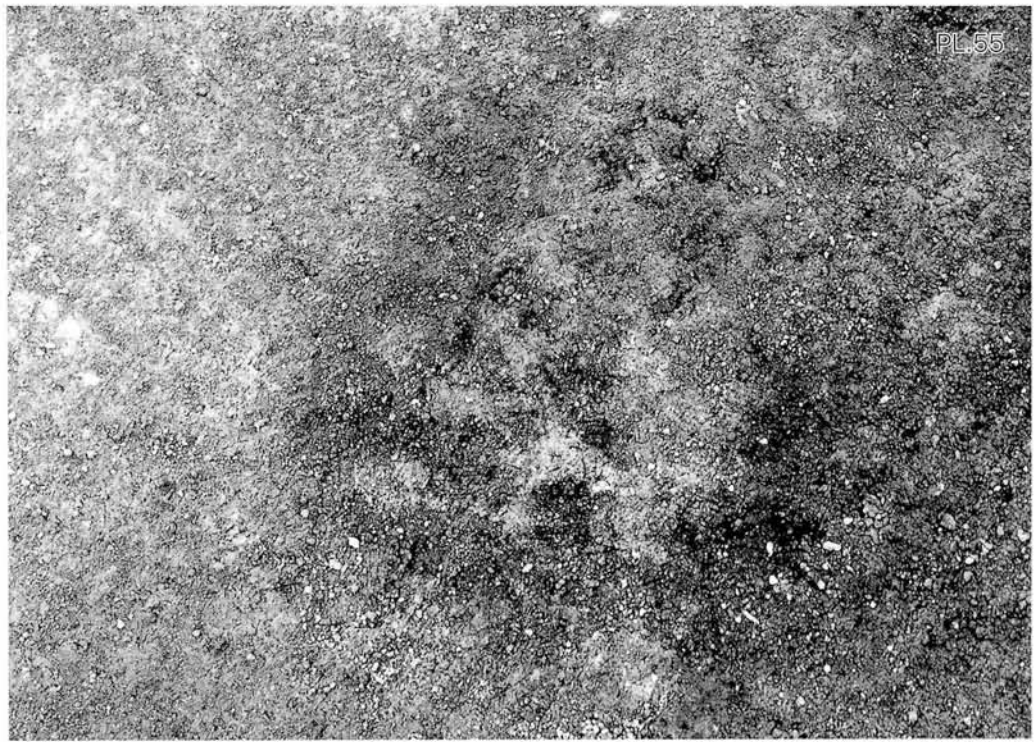


(2) 護岸遺構 S X 2013
(76次 南から)

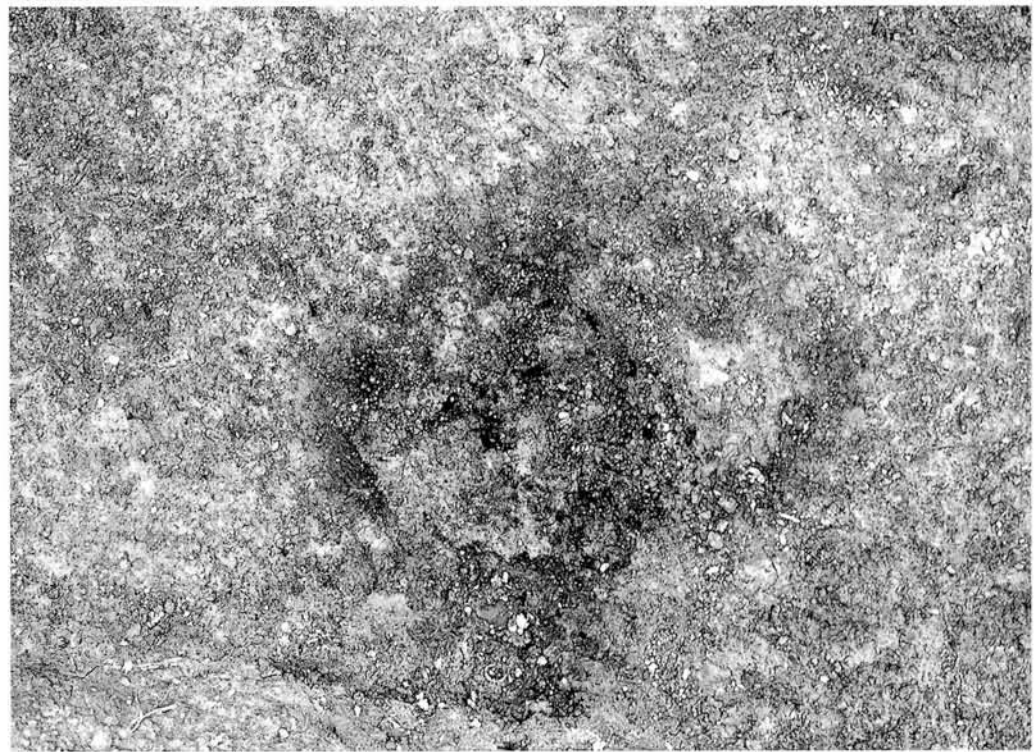


(3) 筏状遺構 S X 2014 (南から)

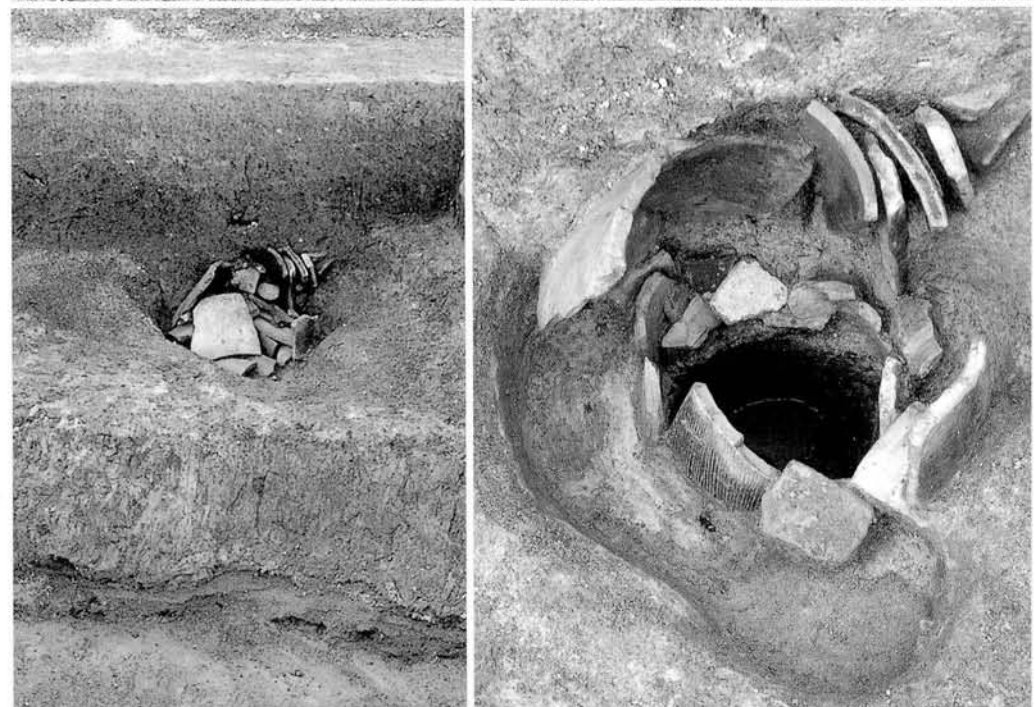
(1) 保土穴 S X2421



(2) 保土穴 S X2422



(3) 瓦組遺構 S X2501(東から)





(1) 瓦敷遺構 S X2523 (北から)

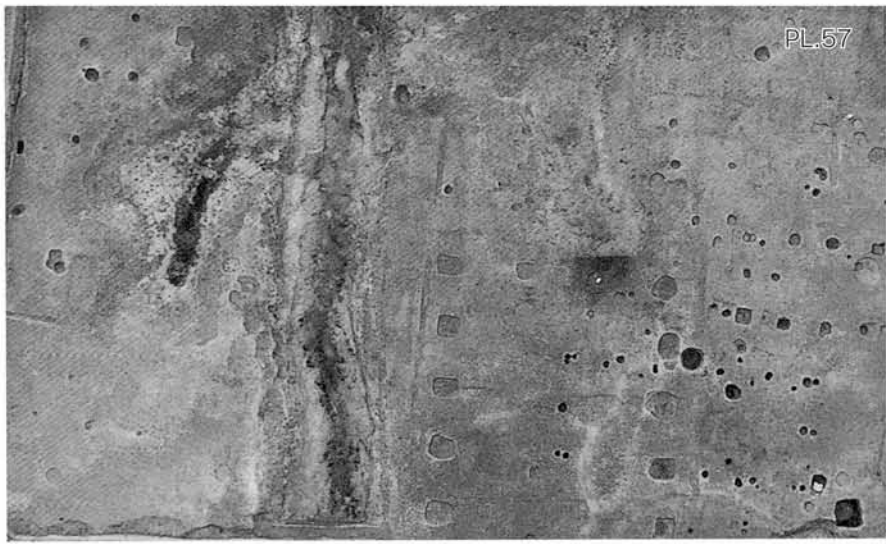


(2) 粘土採掘遺構 S X2438・
2439周辺 (84次 北から)

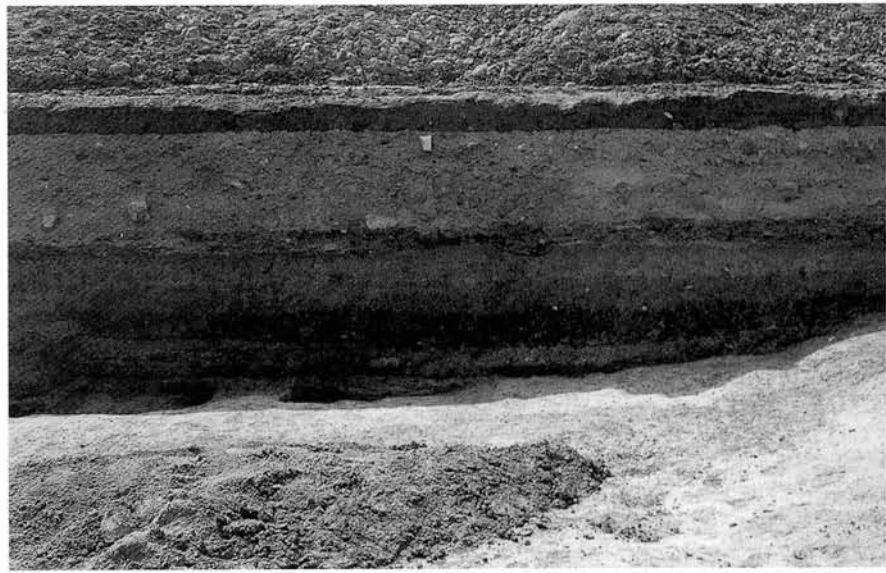


(3) 粘土採掘遺構 S X2532
(87次)

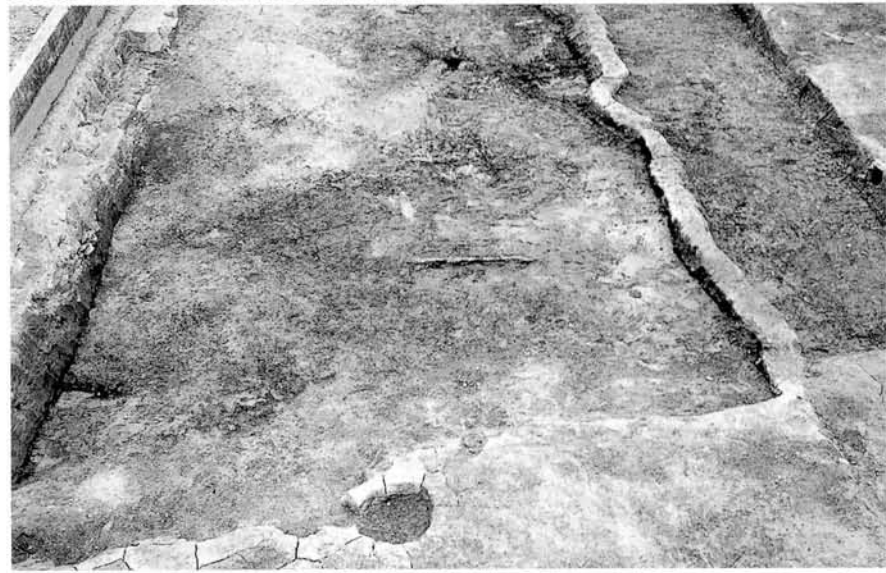
(1) 溝SD2340, 流路SX2480
(98次 北上空から)



(2) 流路SX2480土層 (北から)



(3) 落ち込みSX2417, 溝SD2418
(西から)



(4) 落ち込みSX2336(84次 北から)



報告書抄録

ふりがな	だざいふせいちょうしゅうへんかんがあと							
書名	大宰府政庁周辺官衙跡Ⅲ							
副書名	不丁地区 遺構編							
巻次	Ⅲ							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	小田和利・杉原敏之(編集)・下原幸裕・小嶋 篤							
編集機関	九州歴史資料館							
所在地	〒838-0106 福岡県小郡市三沢5208-3 Tel. 0942-75-9575							
発行年月日	2012年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
だざいふせいちょうしゅうへんかんがあと(ふちょうちく)	ふくおかけんだざいふしかんせおんじ							
大宰府政庁周辺官衙跡(不丁地区)	福岡県太宰府市観世音寺2丁目7番地 他	40221	210316	33°30'45"	130°30'46"	1971.08.20 ～ 2004.12.17	12,944	学術調査 住宅建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
大宰府政庁周辺官衙跡(不丁地区)	官衙	奈良 ～平安時代	礎石建物・掘立柱建物・柵・溝・井戸・土坑・石組溝・暗渠		土器・陶磁器・瓦類・硯・製塩土器・土製品・石製品・木製品・鉄滓・木簡		・SB370は前面官衙域で唯一の礎石建物 ・SD320・2340により東西規模が確定し、木簡も多数出土	
		中世	土坑・粘土採掘遺構		土器・陶磁器			
要約	<p>本報告書は、昭和46年度から九州歴史資料館が進めてきた大宰府史跡の発掘調査の中で、大宰府政庁の周辺に広がる官衙地区のうち、不丁地区の正式報告書である。</p> <p>調査では、前面広場地区との境となる東限溝SD2340、大楠地区との境となる西限溝SD320を発見し、当地区の東西規模が判明した。この両溝からは多くの木簡が出土している。また、その区画内から64棟の建物跡を確認したが、うちSB370のみ礎石建物である点は注目される。この他、漆が付着した土器45個体が廃棄されていた土坑SK388からは、この地区の一面に漆を用いる工房が存在していた可能性が推測される。</p> <p>また、中世期には粘土採掘遺構なども多数発見されており、官衙の廃絶後における当地区の様相についても明らかになってきた。</p>							

福岡県行政資料	
分類番号 JH	所属コード 2117104
登録年度 23	登録番号 0012

大宰府政庁周辺官衙跡Ⅲ

一不丁地区 遺構編一

平成24年3月31日

発行 九州歴史資料館
福岡県小郡市三沢5208番3号

印刷 株式会社 三光
福岡市博多区山王1丁目14-4

